
ぼくらは死んだ

川上彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらは死んだ

【Nコード】

N7976C

【作者名】

川上彩

【あらすじ】

岩本祐一は、突然自分がどこかの湖の上空に『浮かんで』いることに気がついた。彼の前に現れた幸平と名乗る少年は、この湖のある町には死んだ人間がユーレイになって集まってくるという。自分が死んでユーレイになったことにショックを受けながら、案内されるまま町の商店に行くと、そこにはなんと戦時中の兵士の幽霊が。しかもその兵士は岩本に向かって「生きている気配がする」という……。

第一章 1

湖には今日も遊覧船がただよっている。正確に言う可就航している。でも、速度がなさすぎて止まっているように見える。僕と藤沢幸平はその遊覧船をぼんやりと眺めている。

ただし、岸からではなく、上空からだ。僕らは空中に浮かんでいる。

「今日ね、掃除をサボってた」

「は？」幸平は唐突にわけのわからないことを言う「何それ？」

「何って、遊覧船の掃除係のおばさんだよ。いつも朝掃除してるのに今日いなかったじゃない」

「だから？」

「家を覗いたらさ、見慣れない男と一緒に寝てたよ。観光客かな？」

「家、覗いたの？」

「気になるじゃない。一人で死んでたら困るし」

「そう簡単に死ぬかよ」

「自分は簡単に死んだくせに」

「好きでこうなったわけじゃないぞ！」

誰が予測できるもんか。いつも通りに高校に行こうと道を歩いていたら、スリッパした車が自分に向かって突っ込んでくるなんて。

いや、それだけならいい。

気がついたら、行ったこともない見知らぬ町の湖の上空に『浮かんでた』なんて、誰が予測できる？

「岩本君さ、いいかげん町に目を向けなよ。小さい地味な町だけど、家の中はけっこう修羅場で面白いんだから」

幸平が、声変わりしてない少年ボイスで笑う。ちよつと昔風のガラン姿の幸平は、ジャニーズみたいな顔と髪型をしていて、中学生にしてはとても幼く見える。

十四歳で交通事故にあった。気がついたらこの町にいて、ふわふ

わと空中をさまよっている。

「覗きなんて嫌だね。だいいち何なんだよこの町は！死人が集まってくるなんてよっぽど変な町なんだろうが！」

「集まるって、五人しかないじゃない」

「そんだけいりや十分だろうが！」

自分の声が悲鳴のようになってるのがわかる。自分が死んだなんて認めたくないし、幽霊の存在なんて信じていなかった。

でも、認めざるを得ないのだろうな。

なんせ今空中に浮かんでいる。こういう状態になってから何日たったかもわからない。昼間は湖とその周辺をうろろして、夜は湖に近い商店の中に入る、そんな日々が続いている。幽霊だから夜うろろしてもよさそうなものだけど、実際になってみるととてもそんな気にはなれないんだな。商店の主は一人暮らしのおばあさん。自分の家が幽霊のたまり場になっているなんてことにはもちろん気づいていない。何も知らずに商売を営んでいる。

「まあ、そんなにいやならいいけどさ、そのうち絶対神経おかしくなるよ。生きている人の近くにいないとき。一人で考え込むのはよくないよ」

幸平はそういい残すと、町並みが見える方向へ飛んでいつて見えなくなった。

死んだのに神経もなにもあったもんじゃない！と言いたくなるが、実際には、自分が恐ろしいくらい不安に駆られているのがよくわかっていた。少しずつ高度を下げて、湖の水面に近づく。生きている人間だったらここに僕の姿が映るはずだ。でも僕の姿は水面にはない。自分の手を目の前にかざしてみる。自分の手は見える。体も見える。事故にあったときと同じ、高校の制服のままだ。この目ではつきりと手や足が見える。なのに、水の中に手をつっ込んで感触がない。冷たいのはわかる。なぜか温度はわかる。なのに水の、あの濡れる感触がないし、揺れている水面の波の感触もしない。

訳がわからなかった。死んだということは、肉体はとうの昔にな

くなっているはずだ、手も足も、全部。なのに僕は水面が見える。小さい町の建物が小さく並んでいる景色が見える。山も空も見える。遊覧船からは時々ブォーという音がする。町へ戻れば人の話し声や車のエンジンの音、風にそよぐ木の葉の音が聞こえる。

なのに、感触だけが失われている。本当にわけがわからない。

また頭が真っ白になる。ここに来てから何回目だろう？死んでいくはずなのにめまいがする。頭は真っ白になる。手は震える。感触がないのに見てわかるくらい振動している。

商店に戻る。

僕は岸を目指して飛んだ。飛ぶには特にコツはいらないらしい。気がついたら思うように飛びまわれるようになっていた。でもちっともうれしくない。

商店が見えるとなぜか少しだけ安心する。くやしけど。幸平の言うとおり、一人で考え込むのはよくないだろう。少なくとも今の僕にとっては。

商店。朝早いのに、観光客がちらちらと見える。店の壁にかかっている、年季の入った壁掛け時計は七時十二分。商店の梶村フデ（たぶん八十歳以上）は、いつも六時起床、十時就寝だ。

カウンターに座っているフデさんの横を通過して、奥の居間へ入る。誰もいない。

幸平はまた町で人間観察でもしてるんだろうか？奥の部屋へ行くと、隅に金庫が置かれていて、その上に座っている男が一人。

「なんだ、もう帰ってきたのか」

妙に固い、昔風の声が響いた……といっても、僕にしか聞こえないだろうが。

「やることないんです」

「町に出ろ、どうせこの町からは出られんのだろう？だったらあちこち見て回ったらどうだ？」

男は日本軍の軍服を着て、銃を持っている。

僕が『死んで』この町になぜか飛ばされてしまったとき、最初に会ったのはさきほどの幸平だ。湖の上で前後不覚になっていた僕の目の前にいきなり現れて、顔を覗き込んだ。

「君さ、死んだんだよね。名前は？」

ストリートすぎて何を言われているかわからなかった。幸平のほうも『あたらしい人』が来るのは珍しいから興奮していたらしい、あとで聞いた。

「あのね、君、浮かんでるよね。わかってる？これは夢じゃないんだ。ここは天国ではない。実在している北海道の町の湖の上空だよ。上空。つまりね、君は死んでユーレイになってここに来ちゃったわけだ、間違いないよ。生きてる人間が浮かぶわけないもんね。ちなみに僕は藤沢幸平っていうんだ。札幌に住んでただけ、車道を渡るときにダンプに吹っ飛ばされちゃった。気がついたらここにいた。アハハ」

幸平は興奮気味に一気にしゃべった。でも、僕自身は自分が浮かんでることは棚に上げて、目の前に人が飛んできたことに衝撃を受けていて、何も言葉を返せなかった。

いったい何が起こしたか？僕は必死で、その日の朝からの自分の行動を思い出していた。

いつも通り八時には起きた。朝食を食べずに学校へ向かっていたはずだ。そしたら赤い車が突然視界に飛び込んできて……。

そのあとの記憶がなかった。

まさか、そんな。

「ねえ、聞こえてる？もしかして僕が見えてない？」
「いや」

それだけ口にするのが精一杯だった。

「あ、しゃべった。大丈夫だね」

何が大丈夫だ！と思ったが声は出なかった。

「とにかく、ついてきて。ここにじっとしてるのも嫌でしょう？」

言つとおりにすることにした。何も考えられなかった。幸平が僕のシャツのすそをつかんで、岸まで引つ張つていった。つかまれている感触も、引つ張られている感触もしないことに気がついて、僕はますます頭が混乱した。

そうしてたどりついた先が『梶村商店』だった。湖に一番近い家なんだ、と幸平が言っていたような気がするが、よく覚えていない。店は閉まっていたが、裏の窓が開いていて、そこから入った。

「窓閉まってもすり抜けられるんだけどね、一応閉まったら遠慮することにしてるんだ。ま、どこも開いてなかったら容赦なく抜けるけど」

『すり抜けられる』あまり聞きたくない言葉だ。

「梶村さん、新しい人見つけた」

そこは畳の部屋で、隅に人影があつた。椅子に座っているらしい（ほんとに椅子じゃなくて金庫だったんだけど）その人物は、歴史の教科書で見た写真のような軍服姿だった。手にはなぜか長い銃、服の襟には赤い丸、たぶん日の丸だ。ゴーグルのようなものがついた帽子をかぶっていて、顔つきは若いけど、目がキツと細くて、いかにも軍人ですって感じだった。

やな予感。

「新しい人？死人か？」

低い声が響く。『死人』って幸平よりストレートな言い方だ。耳に刺さった。

「うん、僕より年上だと思うよ。ほら」

幸平がまた僕の服のすそをつかんで、男の前に引っぱり出した。男は細い目をますます平たくして、じっと僕を観察しているようだった。怖くて動けなかった。

と、男が軍人らしく、手を額の辺りにかざした、あれは何て言うんだろう？敬礼？

「兵士、梶村二等だ。以後よろしく」

きりつとした青年の声が僕の耳に響いた。僕はどうしていいのかわからなかった。ただ呆然と目の前の『兵士』を見ていた。

「へいし……」

思わず口からもれた。どうやら自分は大変なことになっているらしい、と、そのときになってようやくそのときに実感しはじめたわけだ。だって、兵士だぞ？ 自衛隊じゃないんだぞ。戦争中の人間が目の前にいるんだぞ。

「梶村さんはこの辺で一番『長い人』だよ。第二次世界大戦で兵士やって、戦死……と言いたいところだけど、実はシベリアに抑留されてそこで亡くなったんだって」

幸平は内容に合わないはいだ声で言った。

「へい……」

何か言いたくてもそれしか口から出てこない。頭がぐるぐる回転するみたいだった。

「悪かったな、兵士が自殺じゃなくて」幸平に向かって意義を唱えると、『兵士』は僕に迫ってきた「君はどうした？ 新手の奇襲か？ 手榴弾か？ 空中放火？ 反乱か？」

兵士梶村が鬼のような形相で顔を覗き込んできたので、僕は思わず数歩後退した。

「それとも今話題の……」

「ち、違います、違いますって！」僕は叫んだ「ただの交通事故です！」

「なんだ、それなら幸平とたいして変わらん」

つまらなさそうな顔をして、梶村さんはもといいた金庫の上に座りなおした。

「よかった。まともにしゃべれるようになってきたみたいだね」幸平が僕の前に出てきた「君、名前は？」

「岩本、岩本祐一」

「岩本……ん？」梶村さんが首をかしげたかと思うと、僕の前の幸平を押しつけて顔をぐつと僕に近づけて、目をまっすぐ睨んできた。

殺されるかと思った（もう死んでるのに）

「な、何です、か？」

「幸平、この男、本当に死んだのか？」

梶村さんが僕から離れて幸平のほうを向いた。

「へ？だって、ユーレイになってるじゃない？湖の上空に浮かんでたんだから。間違いない」

「生きている気配がするぞ！」

「え？」

「は？」

今度は僕だけじゃなくて幸平もびつくりだ。『君死んだ』の次は早くも『生きている気配がする』だぞ？わけがわからない。

「何言ってるの梶村さん。実際鏡に映ってないじゃない、この人」

幸平が部屋にある鏡台を指差した。いかにもおばあちゃんの持ち物という感じの、木目が美しい古い鏡台の鏡、そこには、金庫しか映っていなかった。梶村さんも幸平も僕も映っていなかった。

ぞっとした、鏡に映らない。僕は自分の手を見た。自分の手はちゃんと見えるのに。

「いや、間違いないぞ」梶村が興奮した口調で言った「キャリア六十年の生死の勘が訴えておる。君はまた生きているぞ」

「じゃ、なんで僕らみたいになってんのさ？」

幸平が不満げな口調で言った。僕にはもう何がなんだかわけがわからない。

「けがでもして体のほうの意識がないだけじゃないのか？戦争中にはよくあったことだ。一度きちんと確認しろ」

梶村は金庫に座って、深いため息をついたように見えた。死んでいるから息の音は聞こえなかったけど、疲れているように見えた。

そのあとどうなったか。

幸平と一緒に隣町との境目の上空まで飛んだら、見えない壁にぶち当たった。つまり、僕は町から出られないというわけだ。

「この壁がねえ、何でできてるのかわからないんだけど」幸平が見えない壁に両手のひらを当てながら、地平線のほうへ目をやった「この湖の町から出られないんだよね。僕ら死んだ人間は」

見えないガラスの壁のようなものが町を覆っているらしい。冗談じゃない。それから僕らは毎日毎日、何回も何回も、場所を変えて隣町との境目に行き、壁をすり抜けることができないか試した。でもダメだった。強化ガラスでもはまってるみたいに、進もうとするたびに行く手を遮られてしまう。

もがいてる僕の横で、鳥や車がふつうに通過していくのを何度も見た。町の生きた人間たちには僕らが見えないようだ。もし見えていても、見えない壁と格闘してる僕たちの姿は、へたくそなパントマイムにしか見えなかっただろう。ガラスにぶち当たってもだえてるパントマイム、面白くもなんともない。

僕らはこの見えない壁によって、町というでっかい檻に監禁されているわけだ。

「やだなあ。監禁なんて人間きの悪い」

幸平はそう文句を言っていたが、ほかに言いようがないじゃないか。

そして今日。何もする気がせず、かといって町に行く気もせず、商店の奥の居間でぼんやりしている。梶村さんは、人には外へ出ろと言うくせに、家からはめったに出ないんだそうだ。まるで自縛霊だ。

居間の窓からは湖が見える。昼間にしては人が少ない。朝見かけた観光客はどこだろう？遊覧船に乗ったのだろうか？それとももう帰ったのか、どっちでもいい。

黙ってぼんやりしていると深刻に考え込んでしまう。どうして僕はここにいるんだ？どうして車が突っ込んできたんだ？どうして死ななきゃいけないんだ？本当に死んだのか？『生きている気配』ってどういう気配だ。ずーっと未来永劫この町を漂ってなきゃいけない

いのか？

気が変になりそうだ。もつとどうでもいいことを考えよう。このまえ梶村さんが『それとも話題の……と言いかけてやめた死因は何だろう？考えてみる。本人には聞かない。聞いてしまうと時間つぶしにならないからだ。

「ミサイルとか、原子爆弾かな、戦後話題になったはずだし……」
独り言をつぶやく。外はいい天気だ。日当たりがいいのが妙に空しい。

第一章 2 サミ

外はすっかり暗くなった。梶村商店の奥の居間。フデさんがテレビをつけてお茶をすすっている。梶村さんはこんどは居間の金庫（金庫が二つもあるんだよ、この家には）に座っている。いつも背筋がぴんと張っている。昔の軍人はみんなこうだったんだろうか。

梶村さんとフデさんは夫婦だった。梶村さんは死んで、フデさんは生き延びた。だから、奥さんであるフデさんが白髪のおばさんになっても、梶村さんは青年のままなのだ。

フデさんがテレビをつけているときは、幸平も梶村さんも、当然僕もこの居間に集まる。テレビがついているのがこんなにありがたかったことはない。ゲームも本もないし、あったとしても僕はものに触ることができなかった。触ろうとしたものはことごとくすり抜けてしまう。時間をつぶす方法がない。なぜか床や地面だけは平気だけ。

「湖の中には入れるけど、地面にはもぐれないんだよね。不思議」
と幸平が言っていた。確かに不思議だ。できたらマントルを抜けて地球の核をこの目で見てみたいもんだ、なんてくだらないことを考える。

うちの家族はどうしているだろう。やっぱり同じようにテレビを見たり、仕事してるんだろうか？それとも今頃葬式とか四十九日の真っ只中か？町から出られないので見に行くことができない。同じ北海道だが、僕が住んでいたのは釧路だ。

それにしても、どうして一度も行ったことのない町に飛ばされてしまったんだろう？

「幸平は、この町に来たことある？生きていたところに」

「ないよ。不思議だよな」

「どうしてこの町なのかな」

「さあ、不思議だなあ」

幸平は何でも不思議で済ませてしまおうようだ。深く考えているようには見えない。もしかしたら『深く考えない』っていうのがここでのユーレイのすごい方なのかもしれない。でないと、一度考え事にはまったら延々と抜けられなくなるからだ。

幸平はテレビを無表情で見ているが、時々によつと口元をゆがませて笑う。梶村さんは眉ひとつ動かさない。見張りでもしてるみたいな硬い表情だ。そしてこの建物とテレビの主であるフデさんは、こんな物騒な居候の存在に気がつかずに、羊羹をうまそうにぱくついている。たしか昨日は三色団子だった。

食べ物を見るのが嫌いになった。ユーレイはものを食べる必要はないらしい。死んでるから。死ぬと食欲からは開放されるらしいが、それでも他人がうまそうに何か食べてるのを見ると不愉快だ。失ったものは意外と大きいかもしれない。

手を目の前に広げてじつと見つめる。最近の癖だ。生きているのと変わらない手が見える。死んだのに、意識はあるし、自分の体は見えている。

「岩本、しっかりしろよ」梶村さんが突然話しかけてきたので思わずのけぞった。「あまりくよくよ考え込むと狂ってしまうぞ。生きている人間は狂っても死ねば終わりだが、我々が狂ったら、永遠に狂ったままさまようことになるかもしれないぞ」

そんな怖いことを突然言われても。僕はまったく声が出なくて、うなずくのが精一杯だった。急に不安になる。

僕らには生きている人たちが見えるが、生きている人たちには僕らが見えない。ものが見えるのに触ることができない。

こんな状態がいつまで続くんだろう。一生？一生ついていても、本当に僕が死んだなら、一生はとくに終わってることになる。

永遠にこの状態が続くとしたら？

底なしに暗い何かが胸の奥から見え隠れした。はつきりとそれを見てしまったらきつと来るってしまうに違いない。僕は考えるのをやめた。

夜中と呼んでいい時刻になった。フデさんがテレビを消してふと
んをひきはじめるころ、僕と幸平はもう一人の仲間に会うために湖
へ向かう。

町には電灯がほとんどついていない。だから、湖の真ん中あたり
まで飛ぶと、周りがおそろしいほど真っ暗で怖い。

「そろそろ出てくると思うんだけどな」

幸平が水面近くまで降りていって、湖を覗いている。

「どうして昼間は出て来れないのかな？」

「不思議だね」

また不思議か！僕が言い返そうとしたとき、水面に波が立った。
幸平があわてて上空へ昇る。

波はどんどん大きくなっていって、その中心から船の先端部分が
つき上がってきた。一瞬でにして、静かな湖の上に遊覧船の黒い陰
が浮かぶ。こんなに大きなものが出てきたのに物音はまったくしな
い。ミュートがかかったように無音。

幽霊船の登場だ。

僕らはゆつくりと、上空から船の甲板に降りた。船にはへんな丸
い貝や、なんだかよくわからない帯状のものが付着していた。全体
に変色していて、昼間就航している遊覧船と同じ種類の船だとは思
えないほどだ。ずいぶん長い間沈んでいたんだろう。

初めて見たときは不気味で近寄りがたい感じがしたけど、今では
秘密基地に入る子供のような気分になる、人間はなんでも慣れると
言ったのは誰だったかな？あれは本当らしい。幽霊船にもユーレイ
にも慣れてしまった。

「今日は何かあった？」

高い声とともに現れたのは、サミだ。古風なおかつぱ頭の少女。
高校生に見える。白いブラウスにチェックのスカートだが、どんな
色なのか暗くてよくわからない。顔は……普通。

「何もないけど、遊覧船の掃除係が浮気してるみたい。ダンナが出

稼ぎ中だから」

幸平の言葉にサミが顔をしかめた。

「そういう話題しかないの？」

「学校でボヤ騒ぎがあった。犯人は校長」

「何それ？」

僕も初めて聞く話だった。

「タバコの火を消すのを忘れたんだよ。書類に燃え移った、机が焼けただけ」

幸平がクククと笑う。僕とサミは同じようにあきれた顔をした。

「あなた、ずっと校長室を見張っていたの？」

「だって、最近顔色悪いんだもん、あの校長。ぜったい何かやらかしてくれそうじゃない？」

幸平はいつもこうだ。町民の生活を見張っていて、何かおもしろいことがあるとサミに報告しに来る。そしていつも愉快そうだ。町民はいい迷惑だ。気づいてないだろうけど。

「それよりサミ、字室君見なかった？」

「最近見ない。梶村隊長のところじゃないの？」

「隊長なんだ」

「気分が変わるわよ。階級は私が決めるの」

サミが僕に向かってえらそうに笑った。こういう顔はけっこうかわいい。

サミは乗っていた遊覧船が沈んで、亡くなったらしい。ただし、この町の湖ではなく、本州のもっと大きな湖だったそうだ。やはりこの町にいる理由はわからないそうだ。

「全国的に有名な事件なんだよ。僕聞いたことあるな。ただ、四十年は前の事件だね」

「……てことは、サミって生きてたら今いくつ？」

「失礼ね！」

初めて会ったときはこれで会話が終わった。ふてくされて船ごと

湖に沈んでしまつて、その日はもう出てこなかった。

湖で死んだから、船で死んだから、そこから離れることができない。サミの場合は僕や幸平より、ここにいる理由が理解しやすい気がする。漫画的によくありそうな話だろ？（現実的にはどうか知らないが）

「字室君ってどんな人？」

僕はまだ彼に会ったことがなかった。五人目のユーレイに。

「なんていうかなあ」幸平がめずらしく不愉快そうな顔をした「エリートになりそこなつてひねくれた人」

「はあ？」

「殺人犯よ！殺人犯！」サミが興奮したような声で叫んだ「お母さんを殺したの、そのあと自分も自殺したのよ。」

「マジ？」

「ま、そうだね」幸平がどうしてもよさそうな間の抜けた声で言った「東京の高校生だったんだけど、かなりレベルの高い学校にいたらしいよ。すごく態度がでかい」

「あんまり会いたくないなあ。でも、東京の人までこの町に来てるわけ？」

「サミは金沢だもんね」

幸平がそう言つてサミに笑いかけた、サミは少しさびしそうな顔でうなずいた。

「岩本君どこの人？」

「釧路」

「釧路。北海道だ。僕と一緒にだ。梶村さんは長野県の人だけど、妻のフデさんが北海道の人だから、ここにいることは別におかしくないよね。長野、東京、金沢、札幌、釧路……」

何かを考え始めたらしい。幸平が甲板にすわりこんでぶつぶつ言い始めた。

「ああ、また始まつたわ」サミがいやそうな顔で上を向いた「出身

地なんて何度考えたって、私たちがここに理由なんかわからないわよ」

「何か心当たりあるの、サミには」

「あるわけないでしょっ！岩本はあるの？心当たり」

「ありません」

素直に認めざるを得ない。僕はこの町とは何の関係もない。そして目の前のサミは怖い。

「そうよ。理由なんてきつとないんだわ。あるとしたらこの湖よ。変じゃない。昼間出られないなんて。きつと何かあるのよ」

「あ、そう」

僕は何て答えて言いかわからないので、てきとくに相槌を打った。サミが僕らに背を向けて、甲板を歩きながら何かメロディをくちずさみはじめた。昔の歌謡曲みたいな、ダサい……いや、古風なメロディだ。

「あれ何の曲かな」

「『虹色の湖』」幸平が急に顔を上げてにやにや笑い出した「歌詞まちがって覚えてるけど、教えちゃだめだよ。ふてくされてまたもぐつちゃうから」

「そんな歌知らないから教えられないよ」

「でもさ、間違ってるって聞くと教えたくない？」

「いや……」

「教えたいでしょ？そうでしょ？」

幸平が妙にはしゃいだ声を出した。顔はニヤニヤしたままだ。なるほど。僕が我慢できなくなってサミに『歌詞間違ってるらしいよ』と言ってしまふことを期待しているんだな？悪いけどその手には乗らない。

と、歌が聞こえなくなった。サミのほうを見ると、船の先端に立って月を見上げている。丸いのをちよつとだけ削ったような形の白い物体が、はるか上空で白い光を放っていた。

「月を見るくらいしか楽しみがないのよね。夜の湖なんて」サミが

つぶやいた「四十年、四十年もこうやってここにひとりぼっちでいたのよ……我ながらよく狂わないでいられたなっと思っわ」

「幸平が来たのはいつ？」

僕はあわてて質問した、なぜあわてたかって？四十年もこんな暗い湖の中にいるってことがどういうことか、想像したくなかったからだ。

「つい最近のような気がする。幸平、あんた来てから何年たってるの？」

「もう忘れちゃったよ」

「うそをおっしゃい。町に住んでるのだから日付の感覚はあるのでしょうか？」

「僕は永遠に十四歳」

「そういうことを聞いてるんじゃないやありません！」

「まあ、いいよ、幸平のことは」

怒りだしたサミをなだめる。僕も空を見上げて月を見る。ほかに星は見えない。

明け方、商店の屋根の上でぼんやり朝焼けを眺めた。隣の幸平は眠っている。ユーレイも眠らないといけないということに僕は未だに納得できずにいる。だって脳ないだろ？眠る必要があるのか？死んでるのに。おかしいだろうが。

でも、眠気は確実に襲ってくるんだ。サミにつきあっていつも徹夜するはめになる。幸平は明け方の数時間と、午後三時ごろに眠っているらしい（が、昼間眠っている幸平を見たことがない、きっと住民のプライバシーを暴くのが楽しくて寝る暇もないんだろうよ！）僕も明け方に眠りたいのだが、眠気が強い割によく寝付けない。

幸平をゆすって起こそうとしたが、寝ているくせにさつと僕の手をかわして、そのまま寝返りをうつてそっぽを向いた。どういう神経してるんだ？（いや、もう死んでるから神経がないのか）大声を出してもぜんぜん起きる気配がない。起こすのはあきらめて一人

で湖へ飛んでいくことにした。

僕は毎日、自分が初めてこの町で目覚めた地点、湖の真ん中の上空へ向かう。そこに行けば元に戻るんじゃないかと考えたのだけど、当然のように何も起こらない。

暇つぶしに湖にもぐる。服が濡れる心配はない。ただ冷たいと感じるだけ。湖の底が見えるが、すごく汚い。ヘドロのようなものが渦を巻いている。ところどころに空き缶や弁当ガラが散らばっている。観光客が捨てたものだろうな。そして、どう調理しても食べられないさそうなぶさいくな魚が二匹。

気味が悪いのですぐに空中に飛び出した。全身を覆っていた冷たさが瞬時に消えた。空気や水の温度がそのまま体感温度になっているらしい。変温動物になった気分だ。人間だったら体温ってものがあるし、湖から出ても水に濡れているからまだ寒いはずだ。

もしかしたら、死んだんじゃないかって、別な生物に変化してしまっただけかもしれない。

でも、誰の目にも見えない生物なんてありか？

第一章3 乗り移った？

幸平の案内で、町の図書館まで行くことになった。小さい町にしては立派な建物だ。おそらく新築なんだろうな。きれいだけれどこれといって特徴がない、同じような建物が北海道じゅうにありそうだ。中に入ると、幸平はすぐ奥のほうへ飛んでいった。あわてて追いかける。中にはほとんど人がいない。午前中だからか？やっと思つたためがねをかけたおばさんは、僕が呼んでいる本の前に手をかざして邪魔しても気がつかない。黙々と文字を目で追っていた。

やっぱり僕の姿は見えないんだな。悲しくなってくる。

やっと思つた幸平は、いちばん奥の、新聞の縮刷版がずらりと並んでいる本棚の前にいた。

「幸平」

「なに？」

「幸平は辛くないの？こういう状態で長いことすごして」

「慣れちゃった」まったく表情を変えずに幸平が言った「もともと人と一緒にいたいと思うタイプじゃないからね。一人でいるのが好きっていうのかな？」

幸平がさらに奥へすーっと平行移動していった。あわてて追いかける。

「なあ、ここで何する気？人間観察？」

「何言ってるの？図書館なんだから本読むに決まってる」

「だってものに触れないだろうが」

「ああ、言っただけ」幸平が周りを見回した「誰もいないね？」

幸平が暗い色彩の本棚に向かって立つ。

と、棚の真ん中から、ぶ厚い本が飛び出してきた！

「うわっ！」

本は幸平の目の前に浮かんだまま開いた。ぱらぱらとページがめくれる音がする。

「驚いた？ 僕の特特殊技能」

幸平はそう言いながらめくっていくページを見つめていた。本に気をとられて、僕が驚いているかどうかはどうでもいいみたいに見える。

「ずげえ！」

僕は自分の目が信じられなかった。でも本は実際に浮かんでいる。しかも幸平はまったく手を動かしていない。幸平の手は両側にさがつたまま、目だけが忙しそうに文字を追って動いている。

「どうやんの？ どうやんの？ それ」

「残念だけど僕だけだと思っよ、できるの。字室君はものには触れないけど人を殴れる。サミは船をあやつれるけどものは触れない。」

梶村さんもダメ」

納得がいかないので、しばらく向きになって手で本を触ろうとしたり（ことごとくすり抜けた）じーっとぶ厚い本だらけの本棚を睨んだりしてみたが、無駄だった。

がっかりだ。

「あのさ、見たい本あったら僕に言ったほうが早いと思っよ」

幸平は冷たくそう言い放つと、別の本棚のほうへ移動していった。

それからしばらく『特殊技能探し』と称して、いろいろ試してみた。

手で触れないなら足はどうかと思っ岩を蹴ってみたがみごとに空振りだった。それから、湖のほとりでキャッチボールをしている子供を見かけたので、ボールをじっと目で追っ、動かせないかなあと思ったがこれもダメだ。人の考えが読めないかなあと思いついて、フデさんをじーっと観察していたら、梶村さんに不振がられて銃を向けられたあげく「お前は今流行のストオ力アか？」と言われた。おばあさんなんかストーカーじゃないって！

そのうち、あきらめた。無気力状態に陥ってしまった。

どうせもう人生終わってるじゃないか。やる気なんて出ようはずがない。何かをする必要もない、誰も期待していない、誰にも僕の存在は見えない。

そんな感じで数日間どん底にいた。そのうち立ち直りそうになると、また暇になって、余計なことをやりたくなる。

そんな状態で迎えたある日、昼になって現れた幸平がどこかに飛んでいくのが見えたので、ついていくことにした。

こっそりあとをつけていく予定だったのに、すぐばれてしまった。「岩本君のほうが年上なんだろうけど、ここでは僕のほうがベテランなんだからね」

永遠の十四歳が無表情でそう言った。あれ、はしゃいでバカにしてくると思ってたのに、起源が悪いのか？

二人で町の上空を飛ぶ。一応今は春だけど、まだまだ気温が低い体がないから、寒い夜に野外にいてもぜんぜん風邪ひいたりしないんだけど、寒さは感じるから不愉快だ。

「今日寒いな。日が照ってるのに」

そうつぶやいたら、前を飛んでいた幸平がいきなり止まって振り返った。

「へ？」なんだか驚いたような顔をしている「今、寒いって言った？」

「言っただけ何？」

「岩本君、今、寒いのか？ 気温感じるの？」

「感じるけど何？」

「僕は感じない。ほかの三人も温度なんてわからないよ。真冬でも屋根の上で寝てるんだから」

「そうなの？」

「そうだよ！」幸平が興奮気味に叫んだ「岩本君、あるじゃん！ 特殊技能！ 温度を感じるなんていいなあ、生きてるみたいだ。やっぱり梶村さんが言ったとおり、まだどこかで本当に生きているのかも」

しないよ」

幸平はこの発見で急に機嫌がよくなったらしく、妙な鼻歌を歌いながら機嫌よく空を飛びはじめたが、僕はあまりうれしくなかった。温度を感じたから何だっただけじゃないか！ものを動かすとか人の考えを読むとか、もつとかつこいい能力がほしかった。

幸平のあとを追ってたどり着いたのは町の中学校だった。

三階の窓から中を覗く。ガクランとセーラー服がたくさんいる。

「なかなか面白いよ、観察してると。たとえばね……」

幸平が窓際の女の子に近寄った。もちろんこの女の子にも、ほかの生徒にもぼくらは見えていない。授業中だ。黙々とノートに板書してるのかと思ったら、ノート一面に漫画が描かれていた。しかも内容が……。

「これは、何ていうのかな、女の子限定もの？最近の流行？」

幸平がニヤニヤしながら言った。

「ホモマンガじゃねえか、うわ、キモっ！」

「最近の中学生って進んでるねえ」

「幸平、面白がるなよこんなのを！」

ニヤニヤしている幸平はエロオヤジのようだ。僕は具合が悪くなったので、すぐ後ろのせ生徒のほうを覗いた。こちらは男で、ふつうに板書しているが、眠いのか、ときどきカクツと首が落ちる。

黒板を見た。中年のやせた教師が数式を書きながら何か説明している。ごくごく簡単な式。生徒はみんなやる気なさそうだ。ぼーっとしてるか半分寝てるか。ま、よほどの進学校でない限り、学校なんてどこもそうなのかもしれない。

「中に入れるんだよ、岩本君」

幸平がそう言うと、閉まっている窓をすり抜けて！教室の中からこっちに手を振った。

「入ってきなよ」

入って来いって言われても、どうも壁をすり抜けるのは嫌だった。すり抜けられるっていう事実が嫌だ。

そーっと窓に手を当ててみる、指先がふつとガラスのなかに入
た。あわてて手を引っ込めた。

「何やってんのさ。早く」

思い切って全身で体当たりした。僕の全身はあっさりガラス窓を
すり抜けて、教室の真ん中まで勢いで飛んでいた。

真ん中へんの席の男と目が合った。いや、向こうには僕が見えて
ないはずなんだけど、なんとなく居心地が悪いので、幸平が立って
いる教室後方まで移動。

「何ビクビクしてんのさ。どうせ誰にも見えないんだから、僕らは」
幸平が愉快そうにケラケラ笑った。

そう、見えないはずだ。現にこのクラスの生徒たちは、誰一人と
して窓から入ってきた僕らに反応していない。ただ、さっき目が合
った男が後ろをふりかえってこちらを見ている。また目が合いそう
になった、男があわてて前を向きなおした。何だろう？

「このクラス、氣力がないんだよね。僕が見た感じだと一学年一ク
ラスしかないんだけどさ」

「氣力がないのはどこだって同じだと思うけど」

僕は自分が通っていた高校を思い出した。本当なら今ごろ、僕だ
って普通に教室で居眠り……じゃなくって、まじめに勉強してい
たはずだったのに。きっと僕の机には花が飾られてるんだろう。そし
て授業は何もなかったように平然と進められていくのだろう。

想像しただけで嫌になる。

「岩本君。緊張しすぎ。先生に立たされてるような姿勢になってる
よ」

「しょうがないだろ、慣れてないんだよ！」

幸平は心底愉快そうにケタケタと笑い声をあげた。もしかして、
僕をからかうためにここに来たんじゃないだろうなあ。幸平なら十
分やりそうな気がするぞ。

僕はさっき目があつた男のところへ行つて、ノートを覗いた。
ノートには、汚い字で黒板どおりの数式が写してあつた。まあ、

まじめなほうだな。顔を見ると、地味な上にそばかすだらけの顔。暗そうだ。いかにも友達いないぞって顔。

下を向いていた男が顔を上げた。黒板を見るのかと思ったら、僕を見た。勘違いかと思ったが、間違いない。こいつは僕を見ている！目が合ったまま離れない。そばかすだらけの顔は僕を凝視していた。ものすごく驚いた顔で。

「岩本君？」

幸平の声が聞こえたような気がする。でも僕は動くことができなかった。視線を外せない。強靱な力でおさえつけられたみたいに、動けない。

そして、少しずつ目の前の景色がかすれていった。意識が途切れ、気がついたときには、教室の真ん中の席に座っていた。何が起きたんだ？

気を取り直して立ち上がろうとすると、黒板に向かっていて先生がこちらを向いた。

「スダ、どうした？」

「へ？」

誰にも見えないはずなのに、先生は明らかに僕に向かってしゃべっていた。それだけじゃなく、教室中の生徒がこつちを見ている。

「岩本君！どこ！？」

幸平の叫び声でしたので後ろを向くと、教室の天井あたりを飛び回りながらきよきよと首を動かしていた。僕を探しているんだ！

「幸平……」

「スダ！質問がないなら座れ！」

先生がかなりきつい声で怒鳴った。僕は反射的に椅子に腰を下ろした。木の板が体に当たる感触がした。背もたれか。額から汗が流れているのも感じる。手で額を触る。やわらかい皮膚と指先の感触、手を見ると汗で濡れている。これはユーレイの、僕の手ではない！手を握り締めてみる。簡単にできた。手のひらに爪が食い込む感触がする。

「スダ君の体だけど、中身は岩本君なんだよね。筆談で質問に答えてくれる？」

幸平が僕が座ってる席の横にしゃがんでこちらをのぞき見ていた。僕は机の上の鉛筆を手にとった、手が震える。汗が流れて落ちてくるのをいちいち感じる。鉛筆自体から冷たい気配を感じる。こんなふうにものを恐る恐るつかんだのは始めてだ。

『どうなってるの？』

ノートになぐり書きした。

「こつちが聞きたいよ。乗り移ったのかな、スダ君に」
乗り移った？さっきのそばかすだらけの暗そうな男にか？冗談じゃない！

「抜けられないかどうか試してみて。精神集中してさ、ずっと抜けられない？」

僕は目を閉じて集中しようとした、しかし、

「スダ！授業中だぞ！寝るな！」

先生に怒られた。

「すみません」

自分のものとは思えない高い声が口から出た。のどが震えたのがわかった。何かが変だ。

『どうしよう？』

またノートに書いた。

「うーん。どうしようもないか」幸平がなんでもないことのようにのんきに言った「せつかくだからそのまま生き返ってしまうという手もあるよね。スダ君として」

「冗談じゃない！」

僕は思わず叫びながら立ち上がってしまった。教室がシーンとして、先生がこちらを『テメエ、殺す』という顔でにらみつけているのがわかった。

「……廊下に立ってろ」

生まれて初めて（死んで初めて？）僕は学校の廊下に立たされた。

「災難だったねえ。岩本君、あ、今はスダ君か」

廊下に出てきた幸平はとても楽しそうだった。

「笑ってる場合か！」

「まあ、怒らない怒らない。あんまり騒ぐとまた先生に聞こえるよ」
両手のひらを突き出してまあまあのポーズをした「こんなこと始めてだよ。岩本君、才能あるのかもね」

「こんな才能いるか！どうやってもとに戻るんだよ！？」

「だから、僕にもわからないんだって。初めて見たもんこんなの。

しばらくスダ君やってるしかないんじゃない？」

「じょーだんじゃねえええええ！」

「うるさいってば！とにかくここは落ち着いて、今日は六時限目まで黙って授業受けなよ。そのあとまた話そう。じゃあね」

「え？おい、ちよつと待てって！幸平！」

幸平はなんと、僕を置いて廊下の窓から外へ飛んでいってしまった。後を追いかけてようにも、生きている体を抱えていれば窓をすり抜けられないし、当然飛べない。

僕は途方に暮れてため息をついた、すると息が肺から出て行く感触がした。出たり入ったりのを空気が通過していく感触、肺がうごめいているような感じがする。

廊下に立たされている間、うまく息ができなかった。今まで意識したことがなかった。息のしかたを忘れていたのかもしれない。

誰もいない寒い廊下を見つめて荒い息をしながら、考えた。今僕は生きているわけだ。他人の体を使って。背中にはもたれている壁の感触、腕を動かすと空気がスーッと横をすりぬけているような冷たさを感じる。みんな初めて経験するみたいだった。体の奥からあついものが沸き起こってくる、これは感動だ！僕はそう思った。

でも、これは僕の体じゃない。他人の体を取ってしまったことになる。

それだけに、この新しいような感触が、怖かった。

第二章 1 スダ君

ある木造の一軒家の前で、僕はもう長いこと立ちつくしている。家には一応粗末な表札がかかっていて、『須田』って書いてある。今僕が取り付いている（好きでこうなったんじゃないぞ！）スダの家であるらしい。

「いつまで迷ってんの？自分の家だと思ってとっと入っちゃいなよ」

後ろから幸平の声。そう言われても、僕にとっては他人の家なんだ。気軽に入る気にはなれない。

「何て言えばいい？入ったら」

「ただいまーって無愛想に言って、二階の自分の部屋へ直行。それがいつものパターンだよ。スダ君の」

「何でそんなこと知ってるんだよ」

「この町の家庭の事情は知り尽くしてるもん、僕。ほら早く早く！」僕は恐る恐る入り口の引き戸に手をかけた。鍵はかかっていなかった。どうやら軽い木材でできている戸らしいが、なぜかとても重く感じる。中を覗くと、外観からなんとなく想像してたのと同じような、暗い、板張りの廊下が見えた。その奥に階段がある。

「ただいまー」

声がうまく出ない。廊下を歩く、と、いきなり横の戸（廊下に戸があることにそのとき初めて気がついた）がいきなり開いて、中年のオヤジが出てきた。

「お、お父さん？」

反射的に叫んでしまった。

「お、とうさん？んー」妙に赤黒い肌のオヤジが首をかしげた「おまえにそんなご丁寧に呼ばれるのは何年ぶりかなあ、アハハハハ」わざとらしく笑いながら『お父さん』はもとの戸の中に引っ込んだ。

僕は全速力で廊下を走り、階段を駆け上がった。二回にはドアがひとつあるだけだ。部屋に飛び込んで思い切りドアを閉めた。全身から冷や汗が出た。

「忘れてた」声がしたので驚いて振り返ると、部屋の窓辺に幸平が立っていた。ニヤニヤしている「親の呼び方ね、『親父』『お袋』『ばあさん』だからね。権限がないけど一応『じいさん』も存在してるよ。スダ君は家族とはあまりしゃべらないんだよね」

「もつと早く言ってくれよ！」

息を切らしながら思った。つまり僕はこれから、他人の家族と家族しなきゃいけないってことなのか？自分の家族とだってめったに話さないのに？

『親父』と対面したせいで、事の重大さによやく気がついた。

「ここの親って何してる？いつつも家にいるんじゃないだろうなあ」

「いや、さっきの親父さんは公務員だよ。でもいつつも五時前には帰ってくるね」

「何で帰ってくんだよ、うつとおしいなあ……。何であんなに日に焼けてんの？」

「生まれつきじゃない？そういうえば、岩本くん家はどんな家族だったの？」

「うちは平和な核家族だ！」

そうとしか言いようがない。親は二人とも仕事が生きがいた。めったに帰ってこない。姉貴は一応学生だけど、彼氏の影響で変なオカルト宗教にハマっている。お互いの行動には一切干渉しないのがうちのルールだ。ただ、父は姉の宗教好きが気に入らないらしく、時々注意して口論になる。たぶん今ごろいつもと変わらず、父と母は仕事して、姉はへんてこりんな祈祷と称して奇声を上げているに違いない。

ああ、僕が死んでも、家族が悲しんでる姿なんて想像もできない。悲しまなくていいから、あの姉貴に変な供養をされるのだけは勘弁してほしい。なんせ真夜中に髪振り乱して絶叫するんだから。

家族のことを思い出したら悲しくなるだろうと思つたら、姉が暴走族みたいな格好で祈禱して絶叫してる映像しか頭に浮かばない。現実とはこんなものなのだ。

まさか、あの祈祷のせいでこんなアホな状況になつたんじゃないだろうな？

「どうしたの、黙り込んでやって」

「何でもない。うちのアホな家族を思い出した」

気を取り直して、スダの部屋を物色することにした。でも机とベツトしかない。いや、本棚もあるんだけど、学校の教科書しか入ってない。本どころかマンガすら入ってない。どういう生活してるんだ？机の引き出しを開けると、使っていない新しいノートと、削られてない鉛筆、そしてシャーペンの芯（おい、肝心のシャーペン本体がないぞ！）それしか入ってない。かばんも調べたが、教科書と手垢がついてぼろぼろになった汚いノートと、黒い布製のペンケースしか入ってない。ペンケースの中には鉛筆数本、消しゴム、鉛筆削り。

「こ、こいつ、現代の中学生の癖に三種の神器をひとつも持ってない……」

「三種の神器？冷蔵庫？」

「アホか！」幸平、頭が古すぎるぞ「パソコン、携帯、ゲームだよ！」

「ええっ？」幸平が大げさに驚いた「それ何？今ってそう言うの？」幸平はほつといて、押入れを開けてみた。何も入ってない。なのにかび臭い。ベッドがあるから布団はないってことだな。それにしてもこの部屋、ものがなさ過ぎるんじゃないか？学校に持っていくもの以外ほとんど置いてないじゃないか。

「ふーざけんなあああー」

ベッドに倒れこんだ。全身に弾力を感じた。どうやら僕は生きているらしいが、ぜんぜん嬉しくない。

「これからどうやって時間つぶせばいいんだよ？」

「岩本君」

「何？」

「三種の神器さあ、あんまり必要ないような気がするんだけど」

「それは大昔の人間の発想だろ！」

「……わかったよ」幸平の声が突然不機嫌に低くなったので、僕はあわてて起き上がった。「僕帰るから、がんばってね、スダ君！」

「え？おい、一人にするなって！おい！幸平！」

幸平はふてくされた顔で窓から飛んでいってしまった。何をいきなり怒り出したんだ？

僕は再びベッドに倒れこむ。久しぶりのやわらかい布の感触だ。そういや今まではフデさんの家の屋根で寝てたんだっけ。感触も何もないから平気だったんだ。

シーツを手でつかんでもんでみる。手のひら全体から布の感触がした。ひどく懐かしい。自分でも不思議なくらい、このやわらかさに安心してしまった。こんなものがありがたく感じられたことは今までなかった。

この家は、最も過酷でありきたりな問題を抱えている。

夕食でのことだ。なぜか和食と洋食が同時に出てくるんだよ。しかもどっちもフルコースに近い量だ。和食はご飯、味噌汁、つけもの、おひたし、魚の煮物。そして洋食はパン、紅茶、ハンバーグに見たことがないへんな形の野菜を煮たようなもの。家族の好みでどっちかを食べるのかと思ったが、違う。ちゃんと全員分、両方出るんだよ。テーブルの上は料理でいっぱいだ。何かのパーティーかと思うくらいだ。

そして、食事中はだれもしゃべらない。黙々と料理を口に運んでる。そのうち、じいさんも親父も、和食と洋食を残らず平らげてしまった。つまり二人分の夕食を平らげていた。じいさんは今にも息絶えそうなほど細くて、頬がげっそりとやせているのに、いったいどこにこの料理が入ったんだろう？

僕は何がなんだかわからないのでばーつとしていた。そしたら、向かいに座っているおばさん（スダの『おふくろ』だ）がすさまじい形相でこちらを睨んでいる。あわててハンバーグを口に運んだら、今度は隣のばあさんがこっちを睨む。

ケンカか？ いったいどうなっているんだ？

「ご、ごちそうさま」

息苦しくなってきたし、これ以上食べられそうにないので、食事を半分残して（それでも一人前はちゃんと食ったんだぞ！）部屋に退散しようと思ったなら、だれかに足を引っ掛けられて、思いつきり板の間に倒れた。

「こら！ 私の煮物が食べないってのかい！？」

犯人はババアか！ むかついた。振り向くと、なぜかおふくろさんが満足げに笑っているのが目に入った。勝利の笑いだ。親父とじいさんはこちらを無視してお茶をすすっている。

結局席に戻されて、二人分を強制的に食わされる羽目になった。吐き気を抑えるために腹と口を交互に押さえながら部屋に戻る。そして思った。これはおふくろさんとババアのケンカだろうな、と。実際はケンカどころの騒ぎじゃなかったんだけど。

三日が経過した。スダとして体験したこの生活でわかったのは、スダの一日は嫁姑のケンカに始まり、同じくケンカで終わるということだった。朝起きると、朝ごはんの采配をめぐって口論をしている母とババアの金切り声が聞こえる。二人を無視して、じいさんと親父はトーストを食い、逃げるように家を出て行く。幸平によるとスダもこの二人と同じで、朝早くに家を出て学校へ行くらしい。僕もそれにならうことにした。

学校では誰とも話さず（みごとに誰にも話しかけられなかったぞ！）帰りは家に直行。

「帰りたくないらしいけど、行くところもないみたいだね」
と幸平が言った。悲しすぎるぞ、スダ。

夕飯になると采配争いは過激さを増していく。母とババアが別々に作った夕食を、男たちは黙って平らげるはめになる。二人分を毎日だ！スダが学校では何も食べないのはこの夕食のせいなのだ。そのあと、テレビを見たければ、居間でずっと座っている母親の苛烈な愚痴を聞かされる（ババアの悪口だけじゃない、夫と息子も気に入らないらしく、どうしてお前はそんなに頭が悪いんだ、やはり父親に似たか、と言われる。いったいどのホームドラマだ、これは？）

一週間が経過するころには、この家で生活する唯一の方法がわかった。

できるだけ自分の部屋から出ないことだ。精神的に落ち着いているにはそれしかない。

「どう、慣れた？楽しい？中学生」

窓から幸平が現れた。笑顔が妙に腹立たしい。

「楽しいわけないだろうが！とんでもない家だぞ？自分の部屋がなかったら今ごろ神経症だ！」

今日はじめてまともにしゃべった。自分の声でない声で。未だに慣れることができない。はじめは歩くのもぎこちないくらいだったんだ。しばらく空を飛ぶ生活をしていたからかもしれないし、単に自分の体じゃないからかもしれない。足をどう動かしていいかわからなくてガタガタだったのだ。さすがに今は歩けるけど。

「前から凄いなーとは思ってたんだけどね。ここのおばあさん」

「ババアもひどいけど母親もひどい」

「たぶんおばあさんのせいだと思うよ。昔は優しいお母さんだったんだよ」

「そんなことより、いつまでここでスダユウイチやってりゃいいんだよ？」

「やはり抜けられないの？体からは」

目を閉じて精神集中してみる。毎晩試しているが、ダメだ。

「何年か辛抱したら学校卒業できるから、家出すれば？」

「簡単に言つなよ。僕の体じゃないんだぞ？だいいち、こんな変なやつになるくらいなら新でやる！」

「死んでるよりはいいと思うけどな……」

幸平がうらやましそうな目でじつと僕を見た、そういえばユーレイなんだっけ、幸平は。

「ごめん。でもさ、僕がこの体使ってるってことは、本物のスダはどこへ行つたわけ」

「抜けてどっかいつちやつたんじゃない？生き霊みたいになさ」

最初に学校に来たときのことを思い出す。スダはたしかこつちを見ていた。確かに僕が見えていた。目が合ったんだ。あのときのスダはどこへ行つたんだ？

「まさか死んだんじゃないだろうな」

「わからない。不思議だなあ」幸平はまたいつもの口癖を発した。「もしかしたら眠ってるだけなのかもしれないしね。岩本君の特殊技能ってことでいいんじゃない？とりあえず」

一回取り付いたら抜けられない特殊技能……なんて迷惑な。

「一応梶村さんとサミに聞いてみようかな。たぶん心当たりないと思うけどね。サミにはもう事情説明したんだけど、なんか機嫌悪いんだよね、最近」

「何で？」

「岩本君が来ないからじゃない？字室君も行方不明だから話す人が減るでしょう？」

「へーえ」

ユーレイたちの紅一点、サミは、どうやら人が来なくなると不機嫌になるらしい。女王様だなあ。

幸平が帰ったあと、僕は英語の宿題を片付けることにした。中学生の宿題なんてすぐに終わるさ……たぶん。

第二章 2

次の日。いつもどおり誰とも話さずに家に帰つてくると、例のやせこけたじいさんが家の周りの草をむしっていた。右手で草を持ち、左手でときどき腰をさすっている。

あんなに夕食食つてるくせに、どうしてこんなに痩せているんだろうなあ。

僕はじいさんのとなりにしゃがんで、一緒に草を抜いた。細い草のつるつるした感触、植物の匂い。はじめて感じるような気がする。「なあんだあ？ユウイチは、機嫌のいい顔をしているなあ」

やけにのんびりした声でじいさんが笑った。お年寄り特有の体臭がする。痩せた顔が、笑うと余計に骨と皮だけに見える。少し迷ったが、言ってみることにした。

「じいさん、最近痩せてきてない？」

「あーあ？やせたか？」爺さんは自分の手を見た「そうさなあ、どうも最近胃腸がおかしいからな、年のせいかもしれん」

年じゃなくて夕食のせいだろうが！とつつこみたかったが、やめた。

「じいさんいくつ……だっけ、忘れちゃった」

「七十二、いや、八十三だったかな、忘れた」

おい、自分の年を忘れるなよ。これはボケの初期症状じゃないか？

「ここの草抜いてどうすんの？なんか植えるの？」

「いや、若いやつにはわからんだろうが、草ぼうぼうの家は栄えないんだな」

「あ、そう」

田舎町の迷信だろうか？聞いたことがないなあ。じいさんには悪いが、草を抜いてもこの家が栄えるとは思えない。でかい地震でも来ればいいんだ、このボロ家ごとみんな死んでしまったほうがよっぽどすっきりする……いや、それは言いすぎか。僕はこの家の人間

じゃないし。

「あらやだ！おじいさん！」

後ろからまたあの甲高い声。スダのおふくろさんだ。すっかり目が釣りあがってるが、中学生の母親にしては若い顔だ。ピンクのスイツを着ている。田舎町に立っていると目立つ。

「草むしりだったら一人でやってください！ユウイチが勉強があるんですからね！」

「今日は宿題ないよ」僕はできるだけ穏やかな声で言った「自発的に手伝ってるんだからいいじゃん」

おふくろさんがびつくりしたように目を丸くすると、頬をふくませながら家に入り、派手に音を立てて引き戸を閉めた。子供っぽい怒り方だなあ。しかし何が気に入らないんだろ？

「ユウイチ、今日はずいぶんよくしゃべるじゃーないか」

じいさんが不思議そうな顔でこちらを見ていた。

そういえば、スダは家族としゃべらない奴だったつけ。

僕はそれからなるべく無愛想に草むしりすることにした。草はどこまでも、家の周りを囲うように生えていた。じいさんが、

「そろそろいいだろう、入ろうか」

と言うところには、あたりは真っ暗になっていた。

「そーか！二人ともユウイチっていうんだね。なるほどなるほど」

夜。様子を見にやってきた幸平が、感心したように何度もうなずいた。

「何かなるほどだよ」

幸平に言われて気がついたが、確かにスダは僕と同じユウイチという名前なのだ。どうりでじいさんに名前を呼ばれたときにまるで違和感を感じなかったわけだ。

「同じ名前だと乗り移れるんじゃない。僕、コウヘイって人探そう」

「あのさあ、まじめに元に戻る方法考えてくれない？」

吐き気を抑えながら文句を言った。幸平の奴、どう見てもおもし

るがっているとしか思えない。見ているとむかつく。でも、今のところはほかに味方がいないから強く文句は言えない。

「梶村さんが言ってたんだけど、岩本君がまだ生きているから、乗り移れたんじゃないかと」

「生きてるから？」

「うん。だから、生きている生身の体を動かすことができる。あくまで勝手な想像だつて言つてたけど」

「そんな能力あつてもありがたくないなあ」

仮に僕がまだ生きているなら、どうしてもとの自分の体に戻れないんだ？僕の体はいつたいていどうなっているんだ？

「そこで問題なのが、スダ君がどこへ行ってしまったのかつてことだよ。どこかへ飛んでいったのか、単に眠ってるだけなのか」

「眠ってるだけなら起こせばいいんだよな」

「そう簡単にはいかないと思うけどね……」

幸平はサミのところへ行くと言つて飛んでいった。結局のところ、たいした解決策はないわけだ。

生きているからこうなつた。

なんだか嫌な話だな。ここ数日、胃腸がおかしいからかもしれないし、いやみな他人の家族に囲まれてるからかもしれないが、気分が落ち込んでしょうがない。確かに今僕は生きているが、これは他人の体だし、たいしていいこととは思えないな、生きてるのは。

ババアとおふくろさんの戦争のせいで、この家はひどく居心地が悪い。学校にも友達がいない。スダも哀れな奴だな。

僕はまた、最初に学校に行ったときのスダの顔を思い出した。どこにいったんだ？お前は。

時計を見る。夜十時を回っていた。家族はだいたい寝ているようだ（早すぎるぞ）から、こっそり外に出て夜風に当たろうかな。湖の岸まで歩いたら、幸平かサミが気づくだろう。

僕は静かにドアを開けて、廊下に出た。階段を一步下りようとし

たそのときだ。

『だめ！』

頭に強烈に響く声。誰の声かは一発でわかった。

「スダか！？」

僕はあたりを見回したが、何も見えない。

『外に出るな。怒られる』

明らかにおびえたような声が、頭にガンガン響く。大音量のスピーカーみたいだ。

部屋に戻ってドアを閉めた。

「スデュウイチだな！戻ってきたのか？」

声に出して尋ねてみた。でも、返ってきたのはもつと弱気な声だった。

『戻りたくない！』

弱気だが、頭に刺さるような声だ。僕はベッドに倒れた。

「何で戻りたくないんだよ！こっちが迷惑だっつの！」
返事がない。

「おい！聞いてんのか！スダ！」

思い切り怒鳴ったが返答はなかった。代わりに、廊下からドストスという足音と振動が響いてきたかと思うと、バン！と乱暴に部屋のドアが開いた。

「夜中に騒ぐんじゃないわよっ！うるさいわね！」

おふくろさんだった。鬼のような形相で怒鳴ると、ドアを乱暴にバン！と閉めた。ドストスという足音が遠ざかっていくのが聞こえた。そのまま遠くに行つて二度と帰つてこなければいいのに、と思つた。

……戻りたくないよな、そりゃあ。

僕は深くスダに同情した。でも、代わりに人生背負つてやる気にはなれない！

どうしたらスダは戻りたいと思うだろうか？この家に、この人生に。

はつきり言つて、これは高校入試より難問だと思う。

その夜は眠れなかった。必死で何か方法がないか考えたが、ちつともいい案なんて浮かばない。ただ、ひとつだけわかつていることがある。

あのババアとおふくろさんだ。あの二人をなんとかしないとスダは絶対帰つてこない。

本人に聞いたわけじゃないが、僕はここ最近の『スダユウイチ』体験で、そう確信した。

学校にて。あいかわらず誰ともしやべらない生活。

授業はてきとうに聞いてりやいい（なんせこっちは高校生だからな！）ここの教師ときたら、揃いも揃つてつまない授業してんだよ。この前の数学の教師だけ気をつければ、居眠りしても怒られない。先生もやる気ないな、この学校。

よつぽど『お前の授業はつまんねえんじゃああああ！』とか絶叫しながら机投げてやるうかと思つたが、実行には移さなかった。そういうば、僕が岩本としてちゃんと生きて学校に行つてたときも、同じことをしよつちゅう思つたもんだよ。やっぱり本当に生きている間に、やつておくべきだったのかもしれないな。でも、今だつて他人の体とはいえ生きているのに、何もやる気がしない。生きた体というのは、僕の予想以上に融通がきかない。すぐ疲れる。

結局のところ、どうなつても何もしない人間だつたんだなあ、僕は。

ま、ほとんどの授業は机に向かつてボーっとしてればやり過ごせる。問題は体育だ。このスダという奴の体が運動向きじゃないのか、自分の体じゃないから僕がうまく動かせてないのか、ただ走ったりボールを投げたりするだけの動作がひどくギクシャクしてうまくいかない。変になるんだ、動きが。

極めつけ。バスケットボールでドリブルしようとしたら、床に跳ね返ったボールが手の横をそれで、顔面直撃。まわりの生徒が大笑

いだ。何度も試したけど、どうしてもドリブルにならないんだよ。どうも、ボールを扱う才能がないらしい。何だ？何かの障害か？

「あいつさ、ロボットみてえじゃん？」

クラスの連中の笑い声が絶え間なく聞こえてくる。ああ、ほんとの僕はこんなじゃない。ドリブルなんて普通に決まってるし。百メートル走だってほんとうは十一秒を切るのが当然じゃないか、なのに。

「スダ、十六秒六だ」

無愛想な体育教師が読み上げたタイムは、人間とは思えない遅さだ。

間抜けすぎる。肩で息をしながら唇を噛んだ。またクラスの連中が笑っていた気がするが、顔をみたわけじゃないから気のせいかもしれない。そういえば、高校にもいたっけな、どうしてもバレーのサーブができない間抜けが。何度やろうとしても腕がボールに当たらない。さんざん笑いものにしてやったが、今思えばむごいことをしたかもしれないな。

季節は春だ。五月の桜が散り始めている。真夏のように汗が出る。半分冷や汗かもしれないけどな。手の甲で額の汗をぬぐうと、びちやびちやと派手な音が目の上から聞こえる。気分が悪い。太陽は容赦なく照っている。その場にぶっ倒れてしまいたかった。ひきずるようにして教室に戻る。

ほんとにさ、ひきずっていったんだよ。他人の体を。こいつ身長は低いし、痩せてるのに、体が重い。重すぎる。教室に戻ったって友達はいない。一人で授業をもくもくと聞いているだけだ。

つまんねえ、つまんねえよなあ。何しに生き返ったんだかわかんないなあ。こんな生活。

授業が終わった。いつものようにとぼとぼと家路を進む。せつかくだから町を見て回ろうと思って、知らない道に入ったのが間違이었다。

全く見覚えのない新しい住宅街に出た。田舎町とは思えないくらい小綺麗な建物ばかりだ。ちょっと違和感を覚えながら進んでいった。そのうち、どこをどう行ったらもとの田舎道に戻れるかわからなくなつた。つまり、道に迷つた。

道を聞こうにも、人の姿が見えない。昼間だからみんな仕事に行つたんだろうなあ。田舎つて、もつとおばあさんとか子供が歩き回つてるイメージがあつたが、人影どころか洗濯物すら見られない。本当に人が住んでるのか？ここ？ゴーストタウンに一人ぼっちの気分だ。

……やばい、町民が町で迷子になつたら話にならないぞ。

適当に大きな通りを選んで進んでみたが、一向に見覚えのある道にたどり着かない。それどころか、だんだん山の中に入っていくような気がする。振り返つてもときた道を眺める。かなり高いところまで登つていたらしい。遠く、下方に湖が見えた。

そうか、湖に向かつて歩けばいいんだな。

もときた道をたどる。湖には小さく白い船が見える。あいかわらず人影は見えない。

「あー？ユウイチじゃねえか」

低い声が聞こえた、振り返ると、そこにはスダの色黒の親父が立っていた。黒いスーツがぜんぜん似合つてない。

「な、なんでここに親父？」

「何でもなにも、仕事帰りに決まつてるがな」

「あ、そう」

にしては早すぎる気がするが……。仕事場が近いのか？

一緒に歩くことになった。ななめ前を歩く親父をじつと観察する。色黒で、やくざみたいな顔と声してるのに、あのおふくろさんたちには一切文句を言わない。というより、一切口をきかないようにしているらしかった。いったい何を考えながら暮らしているのか、まるでわからない。

「あのさ、おと、えーと、親父」

なんだか呼ぶのが気恥ずかしい、なぜだろう？

「何だ？」

「うちのおばあちゃんとお袋のことなんだけどき、いつからあな
つちやつたんだっけ？」

親父が立ち止まって振り返った。顔つきが明らかに不愉快そうだ。

「何だ急に」

「いや、あのさ」僕は慌てた「いいかげん頭に来ない？っていうか
変じゃない？あの夕食とか」

「しょうがないさ、みんな精一杯だ」

精一杯？何が精一杯だ？無理やり家族に二人分食わすのが精一杯
か？毎日口げんかしてる家族をほっとくのが精一杯か？家の草抜く
のが精一杯か？（何か話が違う気がするが、思い出したから一応入
れといた）

「俺は嫌だね。あんな家でこれからずっと過ごすのは」

ひとりごとのつもりだったが聞こえていたらしい。親父が大声で
叫んだ。

「そんなことを言うんじゃない！」

ぜんぜん迫力がない。前を早足で歩いていく親父を追いかけるが
ら、うちの父のことを思い出した。インテリの医者で、ひよろひよ
ろメガネだ。でも、絶対に怒らせたらスダの親父より怖い。姉とケ
ンカしたときも、女相手だからって容赦せずに怒鳴り散らして殴り
倒すんだから（ただし、最終的には姉が勝つんだな）

無性に腹が立つ。親父を早足で追い越した。道はもうわかるとこ
ろまで来ていた。走って家に戻ったが、親父は追ってこなかった。

第二章3 抜けられた？

梶村商店の横を通って（なぜかすごく緊張した）湖のほとりまで歩く。一ヶ所だけ、海の砂浜みたいに波打つてるところがあつて、そこに座って湖を眺めることにした。ちやうど遊覧船がこちらに帰ってくるころらしい。少しずつ近づいてきた。

「あー、こんなところに珍しい」

横を向くと、いつの間にか幸平が隣に座っていた。驚いて飛び上がりそうになった。

「生き返ってから初めて来るでしょ、湖」

「別に生き返ったわけじゃないぞ」

「いいじゃない。今のうちに砂に触ってみなよ。僕わからないけどさ、きつときめ細かいんだろうね、湖の浜の砂」

幸平が下を向いて、足元の砂をなでる動作をする。そんなことしても感覚はないはずだ。僕まねして手を砂にはわせてみる。思ったより荒い粒だったけど、さわり心地のいい砂だった。

「どう？」

幸平が好奇心いっぱい顔で僕を見た。その顔つきがあまりにも子供っぽいから僕は笑ってしまった。

「けっこういい感じだよ。思ったよりざらざらするけどね」

僕は指を砂にぐつと差し込んで強く握った。手の中に入った砂は、僕が手を少し持ち上げると、指の間をさらさらと落ちていく。まるでどこかに行ってしまった、僕らが本当に生きていたころの時間みたいだ。そういえば、今日は風が程よく吹いている。全身で感じることができる。今までそんなこと気にしたことなかったのに。

「今日は風が気持ちいいんだよ、幸平」

「そう。風かあ」幸平は少し寂しそうな顔をした。「最後に風を感じたのはいつだったかなあ。もう思い出せないや」

そうなんだ。死ぬってのはそういうことなんだ。何も感じなくな

るんだ。でも、もしそうなら、今の幸平の寂しげな顔は何だろう？
僕が湖の上空で感じた不安は何だったんだろう。

おい、スダ、いいのか？このまま僕に体を取られたままでいいのか？こんなに今日は気持ちのいい日なんだぞ。ここがお前の町なんだぞ。なあ、いいのか？このまま一度も風を感じないで消えていつても？なあ？

僕は心の中でスダに語りかけたが、反応はない。

「そうだ、スダの声が聞こえたんだよ、昨日」

「スダ君の声？」

僕は夜に起こったことを幸平に話した。

「つまり、家族を怖がってるんだね、スダ君は」

「やっぱそうなるのかな」

「だと思っよ」

やっぱりあの家をどうにかしなきゃいけないのか。頭痛がしてきた。ああ、頭が痛い。これも初めてのような気がするな。悩んでるっていう意味じゃない。ほんとうにガンガン痛むんだ。

家に帰るころにはすっかり日が暮れていた。玄関を開けていつも通りに自分の部屋へ行こうとすると、いきなり横から出てきたお袋さんに腕をつかまれ、居間に引っぱりこまれた。

「な、なにするんだ！」

見ると、居間には家族全員が揃っていた。いや、それだけなら別に夕食前だからいいんだけど、食卓の上に何ものつてない。何より、部屋を覆っているこの険悪な空気は何だ？親父と爺さんは並んで正座してこつちを不安げに見ている。ばあさんが薄い目でこつちを睨んでいる。僕は腕をつかまれたまま、お袋さんの顔を見た。どうやらかなり機嫌が悪そうだ。目が釣りあがって今にも怒鳴りだしそうな顔だった。

「あなた、この家にいるのが嫌って、本当？」

おふくろさんが僕の腕を握ったまま、低い声で言った。

親父を見ると、ごめんな、って感じに手を立てた。

……つまり、僕が帰りに話したことをしゃべったんだな！

「どうなんだい？何が嫌だってんだい？」

「ばあさんまで責め口調だ。どうしようか。素直に認めるべきか？それとも『そんなことないよ』とでも言ってごまかすか？」

「全く、これもあなたがなつてないからですよ」ばあさんがお袋さんに文句を言い出した「あなたがもっと勉強も面倒もちゃんと見てたらね、子供がそんなこと言うはずがないんですからね」

「なんですって！？」お袋さんが叫んだ「そういうお母さんこそどうなんです？口うるさく人の悪口ばかり言つて。家の中が暗くなるのはあなたのせいでしょう？」

「何？あなた、何でも私のせいにするのはおよしよ！これだから都会で遊んでた女は」

「何ですって！」

二人のいつもの言い合いが始まってしまった。

「今日は飯、ないのかなあ」

じいさんがのんきな声でつぶやいた。残念そうというより嬉しそうだった。

二人のぎゃあぎゃあ声を聞きながら僕は考えた。ごまかしておけば、今まで通りの生活がまた始まるんだろう。朝はケンカの声から逃げるように家を出て、昼は食べないで夕食が二人前だ。

もし、はつきり嫌だと表明したらどうなるんだろう。想像がつかない。あつさり態度を改善してくれるとは思えないなあ。この二人仲悪いし。

いろいろ考えた末、僕は芝居（といってもほとんど本音だ）をうつことにした。なんせこれは僕の人生じゃないしな！どうなるうと知ったことじゃない！

僕は言い争つて二人の間に入って、両手で二人をおもいきり引き離れた。お袋さんが驚いた顔でこちらを見た。僕は部屋にいる全員を見回して睨んだ。

「……もうっんざりなんだよ！あんたたちには！」ありったけの大声で叫んだ。こうなったら派手にわめいてやれ！「嫁姑のケンカだか何だか知らないけどな、毎日ギヤーギヤーギヤハギヤー低レベルなわめき声聞かされてるこっちはたまんねえんだよ！夕飯も一人分で十分だろ！どうしても作りたきや自分の分だけ作ってる！」

座卓を思い切り蹴った。何も上にのつてなくてよかった。今の大人四人は、ポカーンとした顔でこっちを見ていた。驚きのあまり何も言えないって感じ。ますます腹が立つてきた。勝手に口が動いた。怒りが体の奥から流れ出すみたいに。

「それに、親父とじいさんもなさけねえよ。びしつと『夕飯は一人分にしろ、けんかするな』って言えば済むことだろうが！じいさんなんかあのヘビーな夕食のせいで胃が変になってるだろ？そういうことはきちんと言わないとダメなんだよ。おい、親父もなんとか言えよ！」

僕は正面きつて親父の顔を見た。たのむからしつかりしてくれ。そして気づいてくれよ、僕はあんたの息子じゃない。本物の息子はこの家が嫌になって自分の体から出て行ってしまったんだぞ？今ここにいるのはただのユーレイだぞ！

沈黙が数分続いた。みんながお互いの動きを伺っているようだった。みんなの視線は少しずつ、僕から親父のほうへ移っていった。

「……かあさん、良子、話があるから一緒に奥に来てくれ」

親父がとうとう重い口を開いた。

「何の話ですか？ここで話せば済むじゃないですか」

「あんた、嫁の分際で夫にそんな口をきくのかい」

「いいから来るんだ！」

親父が一喝した、すげえでかい声だったので空気が震えて、みんながびくつと動いた。何だよ、ちゃんと怒れるんじゃないかこの親父も。

お袋さんとばあさんは、大人しく親父のあとを追って奥の部屋に消えた。あとに残されたじいさんは、ぼんやりした目で三人を見送

ったあと、こちらを振り返った。こちらの様子を伺っているようだ。あまりにあっさりことが運んだので、僕は急に頭が冷えた、そして猛烈に恥ずかしくなってきた。顔に熱を感じる。きつと真っ赤になっ
てるんだろくな。

「じいさん。今日はもう寝な。俺もそうする」

僕は逃げるように廊下に出ると、部屋に続く階段をかけ上がった。

部屋に入ると、窓の前に誰かがいた。幸平だ。

「聞こえたよースダ君の声。近所に丸聞こえ。まずいと思うなあ」
「俺だつて今後悔してるんだから、ほつといてくれない？」

ベッドに体を投げ出す。スプリングの反動で体が浮いた。妙にや
わらかい感触が背中に伝わる。この体は生きているんだ。

「前から思ってたけどさ、岩本君って」

「何だよ」

「けっこう性格きついよね」

「は？」僕は起き上がった。幸平に抗議した。「どこがだよ。こんなに
友好的でおとなしい学生いないぞ、今時」

「でもさっきの怒りかたも、いつもの話し方も、どっか嫌味だよ。
スダ君だつたらぜったいああいう言い方はしないね。絶対みんな何
かがおかしいと思ってるよ」

「そんなこと言われても、俺は実際スダじゃねえんだよ！」

「あれ、一人称が『俺』になってる。岩本君、いつ変えたの」

「あ」今初めて気がついた。「今まで何て言ってた？僕？」

「僕ちゃんだった。ま、どっちだっていいよ。梶村さんの前でだけ
僕って言うてくれれば。あの人けっこううるさいからね、そういう
の」

「へえ」

今ごろ下で、大人三人は、どんな話をしているんだろう。うまく
仲良くなってくれないだろうか。ま、そんなのは無理だろうから期
待しないでおこう。

それにして、スダ本人はいつになったら戻って来るんだ？

次の朝。いつもならケンカの声が聞こえてくるはずなのに、静かだ。おふくろさんとばあさんが見当たらない。どうやらまだ寝ているらしい。親父とじいさんがトーストを細々と食っている。何故か僕の分まで焼いて皿の上に乗せてあった。いつもは自分でやるんだけど。

「あの二人は？まだ寝てんの？」

「話が夜遅かったからな」

親父はそう言ったきり、一言もしゃべらずに出勤していった。じいさんも無言だ。ただ、いつもより顔色がよさそうなのは気のせいだろうか？

僕はというと、昨日の自分の行動を思い出して、やっぱり後悔していた。

学校へ、いつも通り誰ともしゃべらないまま昼休みまで過ごした。いつも昼を抜いて図書室へ向かう。読めるうちに本を読んでおこうと思って。ま、ていてい幸平が遊びに来て、しゃべるだけで終わるんだけど。誰にも見られてないことを祈る。でないと、何も無い空中に向かってぶつぶつしゃべってる変な生徒になってしまうからな。ただでさえ友達いないのに。

図書室内を見回す。今日は幸平が見あたらない。てきとうに本を選ぼうと思って、本棚が並んでいる奥のほうへ入る、すると、本棚の影から出てきた女の子にぶつかった。

「あーごめん！」

「い、いえ、こちらこそ……」

ぱつと顔を赤く染めると、その女の子は足早にカウンターに向かって走っていった。きれいな子だな。足も細いし、ショートカットがあんなに似合う女の子を初めて見た。

「岩本くん。何をボケーっとしているのかなあ？」

真横にいきなり幸平が出現してにつこりと微笑んだ。びつくりして本棚に倒れかかるところだった。

「脅かすなって！」

「いやあ、楽しそうだなあと思って」去っていった女の子のほうを見て、幸平がニヤニヤした「ああいう子、タイプ？」

「違うつて、ちょっとかわいいなと思っただけ。それよりこれから僕はどうしたらいいと思う？」

「あれ、また僕に戻ったの、俺じゃないの？」

「どうでもいいだろうが！……こいつはすこし強気になったほうがいいんだよ」

「ふーん。よくわかんないなあ。家のほうがこじれちゃって、ますます戻りにくくなっちゃったんじゃない？ スダ君」

「別にこじれてないだろうが！」

「いちいち怒らないでよ！」

そういえば、今日の夕飯はどうなるんだろう。また二人分出たら落ち込みそうだ。でも、どっちも作ってくれなかったらそれはそれで僕の責任か？

「ちなみにスダ君、さっきの子は葛西アイカさんといって、同じクラスが一番後ろの席にいるよ。たぶんこの町で一番の美人だけど、一年上の陰悪なグループに目の敵にされてるよ」

「そんな情報はどうでもいい……それも覗きか？」

「うん、つきあってる男もないけど、どうですか？」

「アホか！」

幸平はほつといて教室に戻ることにした。図書室を出るとき、近くの葛西アイカがちらっとこっちを見ていたような気がする。顔が赤くなるのが自分でわかった。ああ、そんなこと気にしてる場合じゃないのに。

家に帰ると、お袋さんが居間に寝転んで雑誌を見ていた。そんなにリラックスしている様子は見たことがなかった。妙に機嫌が良さ

そうだ。

「あら、ただいまくらい言いなさいよ。早かったわね」

お袋さんが笑って言った。確かにこう見ると優しそうなお母さんだ。

「ババ……いや、ばあさんは？」

「おじいさんと二人で旅行に行ったわよ」

「は？」

いきなりの話で僕はビックリした。旅行？何を突然？

「どこに？」

「さあ、定山溪だか札幌だったか、一週間くらい帰ってこないわよ。それより、夕飯何が食べたい？」

「何でもいいから一人前だけお願いします」

反射的に口から出たのはこんな言葉だ。確かに僕はちよつと皮肉っぽくてきつい性格だ。

「当たり前でしょう。私じゃないんだから」おふくろさんが雑誌を置いて立ち上がった。台所へ向かうときに僕の横を通ったが、そのとき、小さな声で『ごめんね』とつぶやく声が聞こえたような気がした。

僕は何だか体の力が抜けてしまつて、よろよろと階段を上がった。かばんから数学のノートを取り出した。宿題が出るんだ。スタはノートだけはまじめに書いていたらしい（ただ、字が汚いからとこるどころ解読不能なんだよな）ノートをてきとうにめくっていたら、マイナスの計算の間違いを見つけた。訂正しておく。

机に向かいながらため息をつく。昔読んだ本にあったなあ、他人の体で生き返ったと思ってたのに、実はそれは自分自身だったって話だ。でも僕は明らかにスタじゃない。

少なくとも、この家の夕食のメニューを決める権限なんて僕にはないはずなんだ。

夕飯は普通に一人前のカレーだった。お袋さんと親父と僕の三人

「今ごろ二人はどうしてるかなあ」

親父がぼつりとつぶやいた。帰ってきてからずっと無表情のままだ。ほんとにどうしてるか気にしてるわけじゃなくて、話題がないからとりあえず言ってみましたって感じ。

「温泉でも入ってるんじゃない？」

お袋さんもどうでもよさそうな返答をした。僕は何をしゃべっていいのかわからなかった。黙ってカレーを口に運ぶ。(久しぶりでおいしさを感じたのはいいんだけど、どうしてにんじんしか入っていないんだろう……?)僕はもともとこの一家とは何の関係もないし、ここ数日の暮らしからじゃ、この二人とスダが何を話して生活してきたのかさっぱりわからない。

「ユウイチはどうだ、学校」

「へ?あ、普通」いきなり話しかけられて、口からカレーを吹き出しそうになった「とりあえず真面目にノートはとってるよ。頭に入ってるけど」

ま、これが事実だろうな。

「それじゃ意味ないな」

親父がひょうきんな顔つきをして呆れた。おや、こういう一面もあるのか。お袋さんも笑っている。今日は平和なようだ。やっぱりあのババア……いや、おばあさまが原因だったのかな?この家の災厄の。

部屋に戻る。ベッドに座って目を閉じて、ひたすら念じてみる。

戻って来い。スダ。一週間は平和だぞ。

返答がない。

戻って来い。僕はいいかげん嫌になってきたよ。他人の体で、他人の家族と暮らすのは。

やはり返答なし。

だめか。じゃしょうがない。今日こそ湖まで散歩するぞ。夜に。立ち上がって部屋を出ようとすると、強烈な頭痛が。

『ダメだつて言ってるだろ！』

来た！スダだ！

「だったら戻って来い！」めいっばいの大声で叫ぶ「今日は意地でも出かけるぞ！真夜中に湖に行くぞ！いいか！湖には幽霊がたくさ
んいるんだ！仲間を探してるんだぞ！このまま行ったらお前だつて
殺されて引き込まれるぞ！」

もちろん殺される云々はウソだ。でも、脅かすにはこれが一番だ
ろ？

『……あんた、幽霊なの？』

おい、今まで人をなんだと思つてたんだ？今ごろ気づいてどうす
んだよ！

「その通りだ。交通事故で死んだ高校生だよ。名前は岩本祐一。こ
のまま取られたくないだろ？人生を。戻って来いよ！僕はお前の人
生なんか奪う気はなかったんだから」

『ろくな人生じゃないからね』

「そういう問題じゃねえ！」

そういう意味じゃないんだよ。確かにスダ、お前の人生は最低だ
よ。つまんねえよ。家はこうだし、友達もいないし、運動神経もね
えし。頭も悪そうだ（たぶん）

「いいのか、行くぞ、湖の底だぞ。いいのか？」

スダの返答がない。

僕は部屋のドアを開けた、暗い階段。ゆっくり降りていく。どう
すればいいかさっぱりわからない。でも今は湖に向かうしかないよ
な。たぶん誰かに見つかる心配もないだろう。

暗くて足元がおぼつかない。一段ずつ階段を下りる……と、下で
ガタガタ、と音がした。親父が部屋から出てきたのだ。気を取られ
て足を滑らせた僕は、階段から転げ落ちた。天井が視界に入った瞬
間、鈍い衝撃が背中と頭に走って、目の前が真っ暗になった。

「おい、大丈夫か？起きろ！こら！」

僕が目を覚ましたのは、スダの親父の声でだった。ただ、床に倒れているスダと、スダを抱えて叫んでいる親父の姿が、『下に』見えただけのこと。

つまり、僕はスダの家の廊下の天井にくっつくように浮かんで、下を見下ろしていたのだった。体からは、肉体が感じているはずの空気の感触や、感覚がことごとく消えていた。

浮かんだまま自分の手を見る。手は見える。でも、握っても何の感触もない。

…… 抜けられた！

下に下りる。目を覚ましたスダ本人が、薄目を開けて周りを見回している。

「お前はドジくさいなあ。どうせトイレにでも行く途中で足踏み外したんだろ？」

親父が安心したような、あきれてるような声で言った。スダはしばらく、何が起きたのかわからないという表情をしていたが、親父のうしろにいる僕を見つけて目を丸くした。

「…… あんたが？」

「は？何だ？」

親父は自分に向けられた言葉だと思っただけらしい。

「なんでも、ないよ」

スダはゆっくりと力なく立ち上がると、よろける足で階段を登り、部屋に戻っていった。僕も後を追ってみる。どうやらスダには僕が見えただけらしいから。

部屋のドアをすり抜けた（ああ、できてもちっともうれしくない！）ベッドの上に座っていたスダが反射的に立ち上がった。そばかすだらけのかっこ悪い顔が緊張している。

こんなやつになってたんだなあ、と思うと、自分がほほえましいというか、情けないというか、微妙だ。

「どう？生まれ変わった気分は？」

おお、自分の声を久しぶりに聞いたぞ。ちよつとからかうつもりで言ってみた。

「別に何も変わらない」

ききなれた声が返ってきた。だろうな。別に劇的な変化ってないもんな。

「そ、じゃ、せいぜい長生きすればいいよ。僕はこれ以上つきまとう気ないから。あ、そうそう、誤解されたら困るけど、好きであなたに乗り移ったわけじゃないからな!」

語句は窓から外に出た。もうこの家にいるのはごめんだ。カレーはにんじんしか入ってないし（別にどうでもいいけど、気になるんだよ!）

「ちよつと待つて! 岩本さん!」

振り返ると、窓を開けてスダが叫んでいた。

「さんとか言うな! 気持ち悪い! あとは自分で何とかしろ! 自分のことはな!」

僕はそれだけ叫んで、湖まで一気に飛んだ。久しぶりに空を飛んだんだから、気持ちがよくてもいいはずなのに、なぜか寂しい。きつと風を感じないからだ。感覚がなくなったからだ。もう図書室でかわいい女の子にぶつかることもないからだ……つて、何を考えてるんだ僕は?

それにしても、なんでこんなにあつさり抜けられたんだろう。今まで何をやってもダメだったのに。

「おかえりなさい! 災難だったわね。それとも楽しかった?」

久しぶりの、夜の幽霊船。サミが満面の笑みで迎えてくれた。満月の日だからか、機嫌がいいらしい。

「楽しくないよ。ほんとにとろい奴だったから。これからどうやって生きてくんだろうなあ」

「とろくたつていいのよ、未来があるのだから」

サミが寂しげにそう言った。月を見上げている顔が青白く見える。

ほんとに死人みたいだ、あ、実際もう死んでるんだっけ。

そうだ、僕らには未来がもうないんだ。少なくとも『生きている』未来は。

これからここで過ごす時間は何だろう？未来とは呼べないんだろうか？

「あーいた！いた！岩本君！」上空から大声、幸平だ「戻れたんならまず商店に来てよね！」

「あら、私のところじゃいけないっていうの？」

「そういう意味じゃないよ。梶村さんだって心配してるんだからね！」

僕と幸平は船を離れて商店に向かった。サミにはすぐに戻るからと言って納得してもらった。

「それにしてもよく戻れたね、何かあったの？」

「階段から転げ落ちた」

「死んだの？スダ君」

「だれが死ぬか！……それだけだよ」

「転げ落ちただけ？」

「そう」

「もつと劇的なことかと思っただのになあ。おばあさんとおかあさんが仲なおりするとか、逆にどっちかが死ぬとか。いきなりスダ君が秀才になるとか」

「最後のは不可能だ……自分でも不思議だよ」

「不思議だね。でも、もしかしたら理由もなくこういう現象って起こるのかもね。僕たちがここでさまよってるみたいに、理由もなく」

「そうだね」
理由はない、か。なんか納得がいかないけど、一番納得がいかないのは今の自分の境遇だから、あまり考えないほうがいいのかもしない。

商店の明かりを上空から眺める。久しぶりだ。こんなことができず自分がなぜか悲しい。スダの家の廊下、飛べないから普通に歩く

しかなかった通学路や学校、急に懐かしくなった。

あとでわかったのだが、スダの祖父母夫婦は札幌にアパートを丸ごと持っていて、そちらに引っ越すことにしたらしい（家がボロいから貧乏なのかと思っていた）前から別居の話はあったという。だったらとつとそつちに住めよな。

「どうもさ、俺が学校出るまではこっちにいろって言い張ってたらしいよ、ばあさんが。教育が気になるとか言って。そんなのどうでもいいのにさ」

と言ってスダが笑った。こいつ、なぜか僕だけ見えるようになってしまったらしい。たまに様子を見に行くと、めざとく見つけ出して声をかけてくる。理科室のパソコンが放課後自由に使えるということも教えてもらった。まあ、教えてもらっても僕は使えないが。

「一緒に来ればいいんだ。教えてくれれば俺がやるからさ」

「そういうじれたいのは好きじゃないんだけどなあ、教えるのめんどくさいし」

と言いつつ、僕はたまにこいつに付き合っつて初級パソコン講座をする羽目になった。まあ、暇だからいいんだけどさ、生きてたら時給二千円は取りたいところだな。

第三章 1 字室

夏も近いある日のことだ。商店に戻って居間に入ると、フデさんは団子をつまみながらテレビを見ていて。梶村さんはいつも通り金庫の上に座っていて、こっちに気がつくと、手を額にかざした。軍体調の敬礼っていうのかな？こっちもまねして手を額にかざしてみる。

よく見ると、梶村さんの隣に見慣れない男が座っていた。髪が妙に短くて、顔は凄く意地悪そうな感じ。特徴的なのは服装だ。トレーナーにジーパンなのだが、デザインがすごく古臭い。かなり昔に死んだんだな、と思った。

「帰ってきてたのかあ」僕とほぼ同時に入ってきた幸平が嫌そうに言った「岩本君、この人が字室君だよ」

幸平が男を指差した。

「久しぶりだなあ幸平。相変わらず平和主義か？顔がますますボケてきてるぞ」

クククと字室が笑いながら顔をゆがませた。これはかなり性格悪いぞ。

「そういう字室君はますます凶悪顔になってるよねー」

幸平も険しい顔で言い返した。幸平がこんな顔するのを始めて見た。

「この二人は仲が悪いぞ、気をつけろ」

梶村さんが小声で僕に教えてくれたが、気をつけろって言われても。

「で、そっちは誰？」

字室が僕のほうを見た。うわ、これは完全に見下した態度だ！

「岩本です」

「ふーん」字室がばかにしたような目で僕をじろじろと見た「頭軽そうだね」

「は？」

「岩本君、字室君が口が悪いのはいつものことだから」

今度は笑顔で幸平が言った。でも言葉にはどこか、いつもはないとげがある。

「じゃ俺、サミに挨拶してくるから。一緒に来る？」

「僕昨日行ったからやめとく」

「岩本は？」

「遠慮します」

「あつそ」

字室が窓から飛んでいった。スピードがひどく早いのに驚いた。あつという間に見えなくなった。

「ねえ、何なのあれは、失礼すぎない？」

「だから言ったでしょ。口が悪いのはいつものことなんだって」幸平が不愉快そうにつぶやいた「まいったなあ、たぶんすぐ戻ってくるよ。サミは全員呼ばないと気がすまないんだから」

「私も行こうか」

梶村さんが銃をかまえた。いったい何をする気ですか？その銃で

「いや、大丈夫。梶村さんはフデさんを見てないよね」

幸平はそういい残して窓から出た。僕は慌てて追いかける。

「どこ行くの？」

「サミのところ！字室君と一緒に行きたくなかったんだ」

……ほんとに仲が悪いらしい。大丈夫なんだろうか、一緒にあの船の上にいて。僕にはケンカの仲裁をする自信がない。サミとこの二人でどんな会話するんだろう？

湖に行くともう船が出ていた。暗い湖面にもっと暗い、さびついた幽霊船が浮かんでいる。甲板で二人で並んでいるサミと字室が見えた。

あれ、顔見合わせて二人で笑ってるぞ、なんかかなりいい感じに見えるが。

「あの二人さ、性格きついのがよく似てるんだよね……」

幸平が心底嫌そうにつぶやいた。やきもちやいてるように聞こえるぞ。

「サミはそんなにきつくないんじゃない？わがままかもしれないけど。機嫌よさそうでいいじゃないか」

「機嫌がよければいいってもんじゃないよ。二人してこっちの悪口言い始めてみなよ。もう最悪」

「なるほど」

僕らは船に降りずに、しばらく上空から二人を観察していた。

「あー！あんたたち！来てるんだつたら早く声かけなさいよ！」

サミに見つかったようだ。しょうがないので、ゆっくりと甲板に降りる。

「ずいぶん楽しそうだったけど、何の話してたの？」

「今までどこに行ってたのって聞いてたの。教えてくれないのよ」

サミが不満げに、でも楽しそうに僕に笑いかけた。

「別にどうでもいいだろうがそんなことは。いやだねえ凡人は。すぐ人のプライベートを聞きたがる」

「たしかにそうね」

「そういつつもりで聞いたんじゃないよ」

僕はそう言いながら、幽霊のプライベートって何だろう？って思った。

「あーやだやだ。その言い草が嫌なんだって。自分で気がついてねえんだよ。そういうえはお前、髪茶色いな」

字室の言う通り、僕は暗めの茶髪だ。いまだき珍しくもないだろうに。

「だったら何？」

「いやあ、頭悪そうだと思っただけ」

「は？」

「字室君。言いすぎだよ」黙っていた幸平が言葉を発した「そこそ凡人の思考じゃないの？見た目で判断っていう」

字室がとたんに怒りを顔に浮かべて幸平を睨んだ。

「ごめん、あたしもちよっと思つてた」

サミが僕に向かって謝つた。すまなさそうに笑う。字室に言われるよりグサツと来た。きつとこの二人、茶髪つてという言葉が存在しない時代の人間なんだな。サミが死んだのは四十年前だし、字室もそのあたりの人間っぽい。格好が。

そういえば、字室は殺人犯じゃなかったっけ？

僕は字室を、目が合わないように気をつけながら見た。機嫌が悪いらしく、口をひんまげながらサミを見ている。サミはいつも通り月を見上げて、今日はいつもより黄色っぽいなんて言ってる。

おかしいのは幸平だ。いつもの余裕と言うか、優しさが感じられない。船の端っこで、無表情で暗い湖面を見つめている。サミと字室が視界に入らないようにしているみたいだ。

「幸平、なんか見える？」

「月が水面に映つて揺れてるよ」

「あら、ほんと」

月、という単語に惹かれたのか、サミが幸平の近くに移動した。

「でもずいぶんゆがんで見えるわね」

「それはそれできれいなんじゃない？」

「お前ら、月なんか見て楽しいのかよ。全く」字室が僕のほうに近づいてきた「なあ、あんたいつかからここにいる？」

「えーと、はねられたのは四月だ」

声が上がった。なんとなく怖い。

「事故か、そりゃ災難だったね。ま、どうせ不注意だろ？」

「車が歩道に突っ込んできたんだよ！不注意も何もないだろうが！」

「お、お前、案外弱気じゃねえな」

字室が感心したようにニヤリと笑った。完全に人を見下している笑いだつた。腹が立つがこれ以上何も言い返す気にならない。こんな奴でも貴重な仲間なんだ、今は。

……つまり、こいつと長いこと付き合う羽目になるのか？考えた

だけで憂鬱だ。

「それより、面白い話があるんだ。おい！幸平！」

手下でも呼ぶような声で字室が叫ぶ。

「何さ、人が月見してるのに」

あからさまに深い顔でふりかえる幸平。これはかなり嫌ってるな。

「アホ。テレビ局がこの町に来るんだ。心霊写真を撮りに。来週な」

「ああ、洞窟ね」幸平は不愉快な声のままだ「でも、そんな情報どこから手に入れたのさ」

「役場。お前だって本当は知ってたんじゃないの？秘密が多いからなあ、幸平は」

「字室君みたいな悪正直よりましでしょ？」

二人の言い合いをボケーッと眺めていたら、サミが僕に近寄ってきて、いたずらっぽい笑いを浮かべながらささやいた。

「あの二人、ほんとには仲良しなの。少なくとも字室はそう思ってるのよ」

……そうか？

第三章 2 霊能ババア

そして、今僕ら（僕と幸平と字室）は、変な蛍光ピンクの和服を着たババア（霊能者だって！）と、その後ろを仰々しく機材をかついでついていくテレビ局スタッフを上空から眺めている。彼らは町外れにある洞窟に向かっていて。幸平の話では、幽霊がよく目撃される場所として有名で、自殺の名所でもあるそう。その話を聞いたサミが、

「わざわざ死のうとする奴なんてただのバカじゃないの！」
と怒っていた。

「でもねえ、肝心の僕らが見えた人は今まで一人もいないんだよね。勝手に雰囲気怯えて、頭の中で幽霊を作っちゃったんだと思えない」

幸平の口調は不満げだったが、顔は笑っている。機嫌がいいらしい。

「ちょっとは期待してたんだけどね。誰かが来るたびに、こんどこそ僕らが見えないかなってさ。ま、何年たっても来ないからもうあきらめたけどね」

霊脳ババアの前に字室が立ちはだかって

「おい！ババア！」

と怒鳴った。全く反応なし。ババアは字室をすり抜けて、淡々と道を歩いていく。その顔つきがすぐくえらそう。NHKの大河ドラマに出てくる大奥のこわい人みたいだ。

「ケツ！ババアは嫌いなんだよ！」

字室がはき捨てるように言うと、幸平も、

「あの人も詐欺だねえ。少なくとも僕らにとっては」

と言った。それでも僕らは、暇つぶしに彼らに密着することにしたのだ。なんせ世界一暇なユーレイだから。本当に、時間だけはいくらでもあるんだ。でも暇つぶしの手段がない。こういう客は利用

しない手はないってわけ。

と、長いマイクみたいなのを持っている金髪の男がふっとこつち（上空）を見た。僕らが浮かんでいるあたりをじっと見つめているようだ。顔は無表情。驚いている様子はない。日本人離れした細くて青白い顔だ。なんかの映画に出てた俳優に似てる。

「おい！音声！早く来い！」

上役らしい、ひげ面のでっぷりした男が怒鳴った。その声で我に返ったんだろう。音声と呼ばれた男もあわてて前方のスタッフを追いかけていった。

「今の人。僕を見てたよ」

幸平はぼんやりとした目つきをしていた。

「お前は自意識過剰なんだよ。ただ空を見ただけじゃねえの？」

「いや、目が合った」

「ありえねえって」

「二人とも、言い合ってるうちにあいっら行っちゃうって」

僕が叫ぶと、二人がそろってこつちを睨んだ。怖いので無視してスタッフを追いかけることにする。こういう仲介役は苦手なんだよ。やっぱ字室いないほうが気楽でよかったなあ。

「ここが究極の心霊スポットといわれる洞窟です。見るからにあやしい雰囲気がありますね。うわさでは美女の幽霊が出るという噂ですが……」

洞窟前。熱っぽい口調でしゃべるレポーターをカメラマンが撮影している。僕ら三人がカメラの前で間抜けなピースサインをしていることにも気づかずに。

「へへっ。これが全国ネットで流れたら、一人くらい俺らが見えてもおかしくないよな」

字室がテレビカメラのレンズを覗き込む。

「あんまり期待しないほうがいいと思うけど。案外この人のほうが感覚強そうだけど」

幸平が金髪の音声さんの肩を触った。音声の肩がびくつと震えて、機材が落ちそうになる。

「おい、ちゃんと持ってる」

上役が小声で怒った。かわいそうに、音声。

どうやらこの番組のスタッフ（霊能ババアも含めて）の中には、僕らが見える人はいないようだった。心靈写真も霊能者も大したことはない。要は詐欺ってことか。

こうなったら徹底的に邪魔してやろう！……と言っても、できることがないな。

幸平と字室はすでに嫌がらせを始めていた。まず幸平がその辺にある石をてきとくにころころと転がす。坂でもないのに勝手に転がる石。ああ怖い。

「うわっ！」転がる石に気がついたらしい。上役が叫んだ「カメラ！撮ってるか！」

「撮ってまーす」
でかいテレビカメラを持った男がのんきな声で応じた。上役ほど驚いてないらしい。

字室はそのカメラマンの腕をつかんで、思い切り引っ張った。カメラが地面に落ちてカメラマンも倒れた。

「おい、どうした？」

「わ、わかんない。誰かに腕を引っぱられた」

「たたりじゃあ！」ピンクの霊能ババアが仰々しい声で叫んだ「たたりじゃあ！女が怒り狂ってる」

……あのう、字室は男なんですけど。

字室のほうを見ると、ものすごく不機嫌な顔だ。眉間にしわがよってる。

「ババアは嫌いだ」

と言うが早いか、字室は霊能ババアの髪をつかみ、思い切り引っぱった。そういえば、字室は人に触れるんだったかなあ、と思っていたら、ババアの髪はカツラだったらしい。ボロツと頭から取れて

「何言つてんだよ？こんなおもしれえことめつたにないだろうが」

「そうそう、遊べる人ではとことん遊ばないと、ねえ字室君」

なるほど、字室と幸平はこういうときだけ仲がいいらしい。

旅館の部屋を一つ一つ覗いてスタッフを探す。霊能ババアはすぐに見つかった。旅館の中でいちばん広くてきれいな部屋にいた。疲れたのか、ベッドで寝ていた。顔はビツクリするくらい汚いしわしわのおばあさんで、カツラは何故か元通り装着していた。

「寝るときこそ外せばいいのにねえ」

幸平がつぶやいた。同感。それにしてもこのババア、フデさんと同じくらいの年なのだろうか？ずいぶん違うよなあ。フデさんはいかにも田舎のおばあさんだけど、いつでも身綺麗していて、顔の色も明るい。メガネをかけているせいか学者然として見えることもあるくらいだ。それに比べると、霊能ババアは顔に悪霊が取り付いているように見える。

インチキとはいえ、一応霊能者を名乗ってるんだから、何かおもしろいアイテムでもないかなあと思って、三人で部屋を物色した（ただし、ものが動かせるのは幸平だけだから、僕は黙って見てただけ）けど、出てきたのは異常な量の化粧品が入ったバッグだけだ。

「どんだけ塗りたくつてんだよ。どっちにしても汚ねえのに」

「まあまあ字室君。ほかのスタッフ探しに行こうよ」

はりきっている幸平を先頭に、僕は隣の部屋へ直行（壁をすりぬけたってこと！）

そこにはスタッフで一番えらそうな、あのひげ面の男がいた。座卓に向かって台本を読みながら、赤ペンで何か書き込んでいる。

『洞窟の女の祟り……カツラが飛ぶ』

そう書いたが、すぐに『カツラ』の部分を二重線で消して眉間にしわをよせ、腕を組んで

考え込んでしまった。

「アハハ、アクシデントがあって困ってるんだね。ほんととはあそこで写真とババアのコメントだけ撮る予定だったんだ」

幸平が台本を覗いて笑った。要するに最初から作られてるんだな、心霊スポット。心霊写真とかよくテレビで見られるけど、インチキなんだろうなあ。ユーレイが言うのも変だけど。

「さっき撮ってた映像さ、どうなってるだろうね」

字室に聞いてみた。

「一人くらい映ってんじゃねえの？」

「カメラマン探してみようか」

幸平に同意して、僕らはまた隣の部屋に移動した。

そこにいたのはカメラマン……ではなくて、さっきの色白の音声さんだった。ベッドの上で大の字になって寝ていた。部屋に入るなり倒れましたって感じた。

「きつとこの人、重いもの持つの慣れてないんだと思うな。体が以上に細いよ」

幸平が音声さんの腕を指差して、顔を覗いたと、音声さんはいきなりベッドから跳ね起きて、慌てた様子で部屋をきよるきよると見回した。ものすごい汗をかいていて、怯えているようにも見える。部屋を見回したあと、またベッドに倒れこんだ。そして一瞬で眠ってしまった。

「……何だ、今の」

字室が呆然とした顔でつぶやいた。僕ら三人ともびっくりして動きが止まっていた。特に幸平。ベッドがあるのとは反対側の壁にくっついて、目を見開いている。

「僕、近づかないほうがよさそうだね。余計に疲れさせちゃうみたいだ」

「でも、何でこいつ幸平だけ感じ取るんだ？」

字室が不満げな顔で言った。

「知り合いじゃないの？」

「全然知らない」

「カメラマン探そうぜ。こいつ大した荷物持ってねえよ」

字室の言葉に従って、またまた隣へ直行……女子便所だった。お

ばさんがスカートをめくる瞬間……三人とも瞬時に音声さんの部屋へ後退。

「あ、危なかった……」

安全策として廊下を経由することにした。要するに、普通にドアから入ること。

第三章3 スタッフたち。

カメラマンとその他スタッフは、一番端の部屋にいた。みんな疲れているようで、ある人は雑誌を読み、ある人はたたみの上でだらしなく寝転んで……要するに各人勝手に休んでいた。

「ねえ、何で音声さんだけ一人部屋なんだろうね」

幸平がそう言いながら首をかしげた。ものすごく子供っぽい顔をして。

「お前それやめろよ、ガキ」

字室がそんな幸平のしぐさを見て嫌そうになじった。ああ、こいつ以上に『なじる』って単語が似合う奴は見たことがない。きっと生まれてから死ぬまで人をなじってたんだろう。

「悪かったね！それよりおかしくない、上役ならともかくさ、ほかのスタッフが相部屋なのに音声さんだけ別の部屋って」

「それもそうだね」

僕は幸平に同意した。

「仲悪いんじゃないの？なんか一人だけ浮いてるように見えたぞ、金髪だし」

「髪は関係ないだろ」

前に字室が言ってた『茶髪頭悪い説』以来、僕は髪の話に敏感になつてしまう。

「ちよつと脅かしてみる？」

幸平がにやりと意地悪く笑うと同時に、部屋の掛け軸がカタカタと音を立てて揺れたした。

部屋にいた四人がいつせいに掛け軸を見る。何の変哲もない水墨画の掛け軸が、地震でも起きているみたいにカタカタと揺れて続ける。

誰も声をあげずに、ただ揺れる掛け軸を見つめていた。

「反応薄いなあ。やーめた」

幸平の言葉と共に掛け軸の動きは止まった。

でも、四人は掛け軸から目を離そうとしない。メガネをかけた年長の男が、意を決したような硬い表情で立ち上がり、掛け軸に近づいた。顔を水墨画に近づけた瞬間、こんどは字室が男の頭を思いきり殴った。ひつ、と男が悲鳴をあげて床に倒れた。顔面を床で打つたらしい。顔を抑えて悶えている。

「どうしました？」

「誰か！今俺を殴っただろ！？」

ほとんど泣き声だ。

「誰も動いてないっすよ」

三人が立ち上がって年長に駆け寄った。よせばいいのに字室の奴、右から順番に全員的高等部をリズムカルに殴った。まるで打楽器でも叩くみたいに。そして全員倒れた。字室は満足げににっこりと笑い、幸平もキヤハハハハと、女子高生のような甲高い笑い声をあげた。

そんな楽しそうな二人とは裏腹に、何もやることがない僕は、人間って死ぬとこんなに残酷になれるんだなあと思った。と同時に、人を殴るとか、物を動かすっていう特殊能力がないのが残念だった。僕ができることは、この部屋がクーラーのききすぎで寒いってことを感じるだけだ。何て役に立たない能力だろう。

「この部屋寒いよ、出よう」

「なんだ、早く言つてよ」

幸平が視線をクーラーの操作盤に走らせると、空調がぴたりと止まった。……いや、そういうことを言いたかったんじゃないくて、もうやめて帰ろうって意味だったんだけど。

殴った、殴らないで口げんかをしていた四人が、静かになった。

「誰かクーラー止めたか？」

「いいえ」

「やっぱりこの町には何かあるんじゃないですか？」

オールバックの髪のスタッフが頭を押さえながら言った。

「いや、ありえないですよ、ねえ？」

この中では一番頭のよさそうなワイシャツ姿の男が、隣の年長に同意を求めた。

「何がありえないだよ。さっきの見ただろ？ だいいちお前、冷や汗かいてるじゃねえか」

見ると、ワイシャツが汗で肌にくっつきついているのがわかった。まあ、クーラー止めたしね、今日異常に暑いしね……字室がこっちを見て、拳をぐっと握って振って見せた。『やるじゃん』という意味らしい（あとで幸平に聞いた）

「なあ、なんでみんな殴られたんだ？ 病気になったりしないか、ハゲるとか」

年長が変なことを言い出した。人間の想像力恐るべし。

「へ、変なこと言わないでください。だいいち殴られたわけじゃないでしょう？ みんながいつせいに頭に衝撃を感じただけですよ」

ワイシャツの声は完全に怯えている。

「でも、そんなことが科学的にありえるのか？」

「みんな疲れてただけじゃないですか？ それで同じ症状が同時に出了と」

「じゃさっきの掛け軸は何だよ、お前、ちょっと調べてみる」

「嫌です！」

オールバックが悲鳴を上げた。

そのあと、大の大人四人が、掛け軸を調べる調べないで延々と口論し、騒ぎを聞きつけた上役がやつてきて、四人のほとんど支離滅裂な説明を聞いた。

そのあと彼が出した結論はこうだ。

「何で掛け軸が揺れてるうちに撮影しないんだ？ バカ！ 番組に使えるじゃないか。撮るぞ、ユウキとばあさんと呼んで来い！」

ワイシャツが部屋を飛び出した。

「あの音声さん、ユウキって言うんだね」幸平がさきほどはうつて変わって、同情してる顔をした「せつかく寝てたのに、かわいそ

うだなあ」

そんな申し訳なさそうな幸平を、字室は『バーカ』と言いたそう
な、軽蔑しきつた顔で睨んだ。僕は、音声さんより、この部屋にい
た四人のほうがかわいそうに思えた。みんな撮影には気が進まない
様子だ。機材の準備をしている動作がなんとなく怠慢に、疲れて見
える。

「おかしいよな。大スクープが取れるかもしれないんだろ、これか
ら。なんでこいつらこんななやる気ねえんだよ。なさけねえなあ、
最近のおっさんは」

字室はあきれたようにそう言った。自分がやったことはもう忘れ
ているようだ。

旅館の狭い一室にある安物っぽい水墨画。その前に並ぶ、機材を
抱えて不安げな顔をしている男たち。未だに眠そうな音声、ユウキ
さん。台本をめくって、また何か書き足しているプロデューサー。
クーラーは入れなおされて部屋はまた寒くなった。

彼らは霊能ババアを待っている。もう三十分待っている。でもま
だ来ない。

「遅いなあ、ばあさん」

プロデューサーがぶつぶつとつぶやいている。

「化粧に時間がかかっているんじゃないですか」

ユウキさんがそう言うと、幸平が真横に移動して彼の耳元で、

「大当たりー」

と言った。ユウキさんの肩がびくつと揺れた。なんとなくわかるん
だな、幸平の存在。

「あああああー気持ちわりい！化け物だぜ！あれは！」

ばあさんの部屋を覗きに行った字室が帰ってきた。ババアが嫌い
なら見にいかなきやいいのに、わからない奴だ。

「そついやユウキ、あの婆さんとどこで知り合った？」

カメラマンがにやけ顔をした。

「知り合ってますんよ。向こうが勝手に僕の顔を覚えてただけです」
「ほんとかあ？何かあるんじゃないかねえのかあ？これもんが」

いつの間にか戻ってきたワイシャツが、親指と人差し指で丸を作った。お金もらってないかってことなんだろうか？

「冗談じゃないですよ」

心底嫌そうにユウキさんが目を下にそらせた。

ババアはその数分後にやってきた。派手なピンク色の着物と化粧。手には変なひらひらのついた棒（神社にありそうなやつ、名前は知らない）を持っている。

「これなんです。この掛け軸が動いたんです」ワイシャツが説明した。「地震のように揺れたんですよ！誰もさわってないのに」

「ふむ」ババアが掛け軸に近寄って顔を水墨画に近づけた。と、掛け軸が上にめくれ上がって、ババアのおごにくっついた。幸平だ！

また叫びだすんじゃないかと思ったが。ババアは顔を水墨画にくっつけたまま、しばらく、うん、そうかい、ふんふん、と相槌を打っているような声を出していた。

「そうかいそうかい、それはつらかったねえ、うんうん」

そんなことをずーっとつぶやき続けている。そして、カメラはそんなババアをずっととらえて離さない。

「大した演技だよな。ばかくせえ！」

字室がババアに近づいた。殴る気か？

「なあ、いくら何でもお年寄りの後頭部はまずいと思う……」

僕の言葉を無視して、字室は霊能ババアの髪をつかんだ。ああ、カツラをまたもぎ取る気だなと思った。でも今回はそう簡単にはいかない。

なぜって？ババアが両手で頭をおさえたからさ！

「ギヤアッ！何をするかこの罰当たりめ！」

「罰当たりはてめえだ！」

霊能ババアVS字室、カツラ攻防戦が始まった。

僕と幸平には字室が見えるから、ただ大笑いしてりゃいいんだけ

ど、問題はスタッフだ。生きている人間から見れば、今のババアは、いきなり体全体をエビのようにそらせて、頭を押さえながらぴよんぴよん跳ね回ってるようにしか見えない。ある意味お化けより不気味だ。それに、すさまじい大声で叫んでる。これは人が集まってくるんじゃないか？

「なあ、やめろって！」僕は急に笑う気がしなくなった「幸平！止めろよ！」

「アヒヤヒヤヒヤ！いいんだって、クーラー止めまーす！」

だめだ、完全に面白がつてる。幸平は言葉とは反対に、クーラーの温度を十四度まで下げた（そんなに下がるとは思わなかった）ゴーというクーラーの回転音が響く。

ワイシャツがクーラーを見上げた。操作盤へ走る。

「離さんかああああー水墨画の分際でええええ！」

「うるせえババア！観念しろ！」

攻防戦は続いている。カメラマンはずっとそんな二人？を撮り続けている。ワイシャツはクーラーの操作盤をいじっている。普通の温度に戻そうとしているんだけど、すぐまた幸平が十四度に戻してしまう。

「どうしたんだあ？壊れてんのか？」

カメラマンがババアからワイシャツのほうへ向きを変えた。ワイシャツはあせてボタンをめちやくちゃに押している。しまいには操作盤を拳でバンバン殴り始めた。

「何だよ！何だよ！やめてくれよおお！」

泣き出したぞワイシャツ。男が泣いてる顔って久しぶりに見たなあ。

騒ぎを聞きつけたのか、旅館の職員さんがやってきた。しかし、部屋に入って、のけぞって叫びながらぴよんぴよんはねてるババアを見るなり、悲鳴を上げながら廊下を走り去った。

数分後、なぜか警察と救急車がやってきた。病気でのだ打ち回つてると思われたらしい。プロデューサーが、番組の撮影中だからほ

つといてほしいと無情な要求をしたが、当然聞き入れられなかった。霊脳ババアは救急隊と警察に取り押さえられ、救急車に放り込まれた。

字室のやつ、一緒に乗り込んでいったんだぞ。いつまでカツラ攻防戦続ける気なんだよ？

「ああー。どうする？ スタッフ一緒に乗ってくみたいけど、追いかける？」

「いいよ別に。字室君はほつところ」幸平はやっぱり楽しそうに笑っていた「どうせ夜になったらしゃべりに来るよ」

幸平と僕は旅館の部屋に戻った。スタッフがいないうちに荷物を拝見させてもらおうと思ったんだ。でも、面白いものはなかった。番組の台本に『湖に身を投げた少女の悲劇。親に虐待され、自殺したものの成仏できず洞窟に云々』と書いてあるのを見ただけだ。

「あほらしい話だねえ。サミの幽霊船のほうが面白いのにな。あれ、映らないのかな、カメラには。試してほしかったんだけどなあ」

幸平はそう言って、アハハと笑いながら、台本を床に放り投げた。

第三章 4 その後

夜になった。いつも通り商店で、フデさんと一緒にテレビを見る。字室はまだ帰ってこない。幸平は梶村さんに今日のイタズラの報告をしていた。

「あまり不道德なことはやめておけ。相手がもっと不道德だった場合とは別だがな」

梶村さんはそう言ってため息をついた。意外と怒らない人なんだな。もっと厳格な人なのかと思ってた。そういえば、僕はこの人とじっくり話をしたことがない。僕の話し相手はいつも幸平かサミだ（最近スダも加わったが、あまり生きている人間と話すのはよくないのかもしれない）

思い出したついでにスダの家に行った。時間的には夕飯が終わったころだ。あのスダユウイチ体験以来、たまにこの家の様子を見に行くことにしているんだ、気になるから。

二階の窓の前でスダを呼んでみる。窓が開いた。開けなくても入れるのに。

「夕飯は普通？」

「またその質問かよ」スダがあきれたように伸びをしながら言った「大丈夫だって、一人前ハンバーグでしたって。いつまでうちの夕食の心配してんだよ」

そばかす男が笑った。

「あのさ、町のはずれの心霊スポットって知ってる？」

「洞窟？あれ、もしかしてあそこにいる幽霊が岩本？」

「アホか。あそこに幽霊なんていない」

「えー困るよ。この町の貴重な観光資源なのに。幽霊グッズ売ろうって話があるんだ」

「はあ？」

「真面目な話、親父が言ってたよ。ほら、観光物産店ていうの？け

っこう今売り上げ厳しいから、町としても何かアピールがほしいわけ。できればもう少し騒いでほしいって仲間に言っというてよ」

「なんだとおおおお！？」

……カッラ争奪戦の話をしてやろうかと思ったがやめた。どうせテレビで放送されたらわかることだし、そのときまで話題はとっておこう。

それにしても、幽霊話に頼らなきゃやっていけないほど、この町は不況なのか？いや、北海道はともダメなのかもしれないけど。スダとはよく『どうして僕が取り付くことになったのか』っていうことを議論するんだが、いつもたどり着く結論は同じだ。

「現実逃避したいところに、偶然岩本が来たんじゃないの？それでほんとに逃げちゃったんだと思う」

でも僕はそれだけじゃ納得できないんだよな。

湖に向かう。黒っぽい船の影がすでに湖面に浮かんていた。サミが一人で空を見上げている。曇ってるから何も見えないのに。

「雲が嫌いな」僕の顔を見るなりサミがつぶやいた「私の友達を隠しちゃうのよ。ほかに見るものがないのに」

「いいじゃない、僕もいるし。幸平もそろそろ来るよ」

「字室はどこに行ったのかな」

「字室……」やっぱりあいつのことが気になるのか、サミは「霊能ババアと格闘して、車でどっか行っちゃった」

「霊能ババア？」

僕は昼間の心霊スポットと、霊能ババアのことを話した。

「洞窟か。行ってみたいけど私は無理ね。山側にあるでしょう、あそこは」

サミは湖から出ることができない。町が見えてるのに行けないって嫌だろっな、すごく。

「女の幽霊なんてあそこにはいないんだけどね、観光資源にしたいらしいよ、町が」

スダに聞いた話をする。サミはこの町の経済について初めて知ったようだ。

「だったら湖にもつと人を呼んでほしいな。私が化けて出てやればいいのよね」サミが楽しそうにそう言ったけど、すぐにその笑いは消えた「でも誰にも見えないのよね、私たちは」

「そうだね」

二人で船の甲板に座る。目の前は真っ暗だ。遠くに町の明かりが見えるけど、数が少ないし、なんだか物寂しげな感じがした。

誰も僕らに気づかない。誰にも僕らが見えない。

ああ、ほんとに僕らは死んでるんだな。体はもちろん、社会的にも。精神らしきものはここにちゃんと残っているのに、誰にも知ってもらえない。

その日は結局、幸平も字室も湖に現れず、サミもほとんどしゃべろうとしなかった。

「昨日は二宮有希が出てるドラマがあつたんだ。二時間スペシャルで」

翌日、船に来なかった理由を、幸平はそんなふうにした。見終わってから来ればいいじゃないか。

「サミには言っておいたんだけどね。怒ってた？」

「怒ってないけどさ、字室も来ないから、ずっと黙ってた」

「字室君は梶村さんと話しこんでたよ。岩本君が出て行ったすぐあとで」

「どうやら入れ違いになつたらしい。でもあの二人で何を話すんだ？」

「あの二人の話は抽象的ですから僕には理解できません」

ふてくされた早口で幸平が言ったが、なんだか否定的な響きのする声だった。

「あ、そう」仲がいいのか悪いのかよくわかんないなあ、幸平と字室「二宮有希、好きなの？」

「好きだよ」幸平がにたにたと笑った「僕にとっては、由希以上の

女性はいないんだ」

「ふーん」

ちよつと意外だった。見た目が幼いからか、女の人には興味がないのかと思っていた。しかも二宮有希は若い女優じゃない。三十代後半くらいかな？まあ年寄りでもないけど。ユーレイは暇で、いつもテレビ見てるから、芸能人には詳しいのかもしれないな。

「旅館見に行かない？あの人たち今日も収録するのかな？」

「もう帰るんじゃない？あれだけ奇行を撮影できたら十分番組作れるだろ」

一応幸平と二人で旅館へ見に行くことにした。旅館の入り口にスタッフの車が見える。カメラマンが荷物を運び込んでいた。移動するのか？

「おう、お前らも来たか」

車の陰から字室が現れた。

「どこ行つてたんだよ」

「いいだろそんなことは。それより、あいつら次のスポットに移るらしいぜ、懲りねえなあ」

「次？どこ？」

「さあ、青森県って言つてたけど……あ」

字室が言葉を切つて遠くを驚きの目で見たのでなんだろうと思つたら、旅館から霊能ババアとユウキさんが出てきた。二人は腕を組んで歩いてきた……というより、ババアが一方的にくっついて嬉々としているという感じだ。ユウキさんは顔は笑っているが、口元がひきつっている。

「かわいそーだなあ。昨日からあなんだぜ」

字室が初めて優しくそんな声で発言した。目が本当に同情しているような感じ。幸平は一瞬意味がわからなかったらしく、二人をじつと見えて目をしばたかせた。僕は……やっぱり、かわいそう。それにもかかわらず、ユウキさんだけ部屋が個室だった理由は……想像したくない。

ユウキさんが車の後部座席のドアを開け、ババアを中に入れた。プロデューサーがユウキさんに近寄ってきて、耳打ちする。

「悪いけど、もう少し機嫌とっててくれや。ホントに悪いけど。金は弾むからさ」

「わかってますよ」

プロデューサーが前の席に乗り込む。ほかのスタッフも青い顔で中に入り込む。ユウキさんが窓を開けた。そして、空を、ちょうど幸平が浮かんでるあたりを見上げた。幸平もまっすぐユウキさんを見下ろしている。

「……もう悪いことすんなよ」

ユウキさんがつぶやいた。

僕ら三人がその言葉に硬直しているうちに、車が走り出した。そして、どう考えてもスピード違反にしか見えない速さで、地平線のはるか向こうに消えてしまった。

第四章 ミカちゃん 1

夏真つ盛り（といつてもあんまり暑くないんだ。北海道だし、冷夏だったから）の町の商店に、けたたましい昔風の黒い電話のベルが鳴る。たぶん隣のあっちゃん（フデさんの長電話友達だ）と思つたら、違つた。

「ああ、あさつて来るんだね。わかつた。気をつけるんだよ。最近
は物騒だからねえ。何か食べたいものはあるかい？ うん、そうだね
ミカちゃんはアイスクリームがないとダメなものねえ。うん。ちゃ
んと用意するよ。じゃあね」

フデさんが楽しそうに、頬を赤らめながら受話器を置いた。そして、カレンダーのあさつての欄に筆ペンで『娘夫婦来る』と書き込み、店先へ戻つていった。そしたら今度は梶村さんが金庫から立ち上がり、カレンダーの前まで行つて、顔をその文字に近づけてじつと見て、

「……フハハハハハハハハハハ！」

と、大声で笑い始めた。僕は世界征服でもたくらんでいるのかと、その姿を見て思った。だって、軍人なんだぞ、格好が。それがカレンダー見て高笑いしてるんだぞ。敵地上陸目前つて感じじゃないか。

「ああ、災難が来る……」

隣から情けない、消え入りそうな声がした。幸平がしゃがみこんで頭を抱えていた。いつの間に現れたんだ？

「災難つて何？ 死んだ兵士がいつせいに帰つてくるとか？」

僕が恐る恐る尋ねると、今度は別方向からバカにしたような声が。「何言つてんだよ、死んだ奴が電話なんかしてくるかって、バーカ」
相変わらず字室は偉そうな態度で、腕を組んでこつちを睨んでいる。

「じゃ何だよ？」

「ミカが来るぞおおおおお！」

梶村さんがこつちを振り返って、両手を広げて大声で叫んだ。歓喜の表情だ。舞台のパフォーマンズみたい。人格変わってませんか？「孫が来るんだよ、伍長の孫が」

字室が笑う。今日は伍長なのか。どうもその階級ごっこは乗り気になれない。

「孫……あ、そうか、フデさんの孫か」

なるほど、フデさんがうれしそうなわけだ。それにしても、どうしても梶村さんの孫っていう発想になれない。きっと若いからだよね、見た目が。

「ジジイバカのがまま孫娘ってやつだよ。僕逃げるからね。知らないからね」

幸平がぶつぶつ言っている。

「毎年ああ言って、一番つきまとわれてるんだぜ、幸平は」字室がせせら笑うように言った。

「つきまとわれる？幸平が見えるの？そのミカって人には」「ミカには全員見える」梶村さんが誇らしげに笑った「幸平、ぶつぶつ言わないでちゃんと心の準備をしておけ」

「悪いけど、今度こそ逃げ切るからね！」

幸平が窓から飛び出していった。僕は好奇心に駆られてその後を追った。なんであんなに嫌がってるんだろう？僕らが見える人が来る！こんな面白いことはないと思うけど。

……僕だけ見えなかったらどうしようか。心配だ。

幸平は見つからなかった。本当に逃げてしまったらしい。夕方までかかって町を一回りしたのに、どこにもいなかった。諦めて帰ると、梶村さんはいつも通り金庫の上に座っていた。いつもより機嫌がよさそうだった。字室とフデさんはテレビを見ている。

「ねえ、幸平見なかった？」

「知らねえよ」字室がテレビから目を離さずに答えた「九時半には帰ってくるんじゃないの？二宮有希が出るからな」

「はあ」

テレビなんてほかの家でも見れると思うけど。いつもより早いが、商店を出て湖へ飛んでみる。まだサミも船も出ていなかった。明るいうちは出てこないんだ、忘れてた。

日が長くなると起きている時間が短くなるってサミは言っていた。普通逆だよな。

その日はすぐにやってきた。駅まで娘一家を迎えに行くフデさんのあとを、僕と字室でついていく。幸平は行方不明だ。夜はたしか戻ってきたと思ったが、朝になって目を覚ましたらもういなくなっていた。

駅に到着して数分後、古臭いローカル線から出てきたのは、フデさんを若くしたような、地味だけど頭のよさそうなおばさん。メガネをかけたいかにも性格の暗そうな、でっぷりしたおじさん。そして、頭がまぶしい金色の女の子。

……ちよつと待て、まさかあれが例の孫なのか？

僕は彼女を一目見て呆然としてしまった。これはどう見てもぐれてるぞ。中学生って聞いてたけど。あの頭、あの顔つき。上はセーラー服を真似たようなシャツ、下が迷彩柄のパンツ。おしりがはみ出そうなくらい短いやつだ。顔は……はつきり言ってかわいくない。幼くて生意気そうな顔だ。目が細い。大きな口はにんまりと口角が上がっている。

「おばあちゃん、久しぶり」

駆け寄ってフデさんに抱きつくミカちゃん。なんだかわざとくさい動きだ。いまどきこんな孫いるかななんて思ってたら、ミカちゃんもフデさんの肩越しにこちらを見て、ふざけたような笑いを浮かべながらペロツと舌を出した。

「久しぶりだなあ、あ、こいつ新入りだから」

字室が楽しそうに笑う。僕は何と言っていていいかわからず、反射的に頭を軽く下げた。すると、ミカちゃんは右手を上げ、親指だけ立

てて見せた。後ろの両親はそんなミカちゃんを困った顔で見ている。案外かわいい子なのかもしれないな。

ミカちゃんの金髪は今に始まったことではないらしく、梶村さんは驚かなかった。しかも、

「確か去年は桜色だった。群青色だったこともある」

とまで言い出した、ちゃんと注意してくださいよ。一応保護者なんだから。

ミカちゃんは金庫の前に正座して、梶村さんと話している（というより、一方的に、学校のむかつく連中のことをしゃべり続けている）親二人とフデさんは困った顔でそんなミカちゃんを見ている。

彼らに見えているのは、金庫と会話している『変な子』だ。

「大きくなったら治ると思っていたのに」

お母さん（フデさんの娘だ）がため息をついた。どうやらここに来るたびに金庫に話しかけている娘が心配らしい。お父さんのほうは無関心を装って（ホントに関心がないのかもしれないけど）気難しい顔でお茶をすすっていた。ミカちゃんはそんな親の態度は完全無視で、こんどは楽しそうに自分の服の襟を手でひらひらさせながら、海軍カイグーンなんてふざけて笑っていた。

もつと変なのは梶村さんだ。ミカちゃんがしゃべってる間ずーつとニヤニヤしている。いつもの貫禄が台無しだ。エロビデオ見てるオヤジじゃあるまいし。かなりかつこ悪い。

「隊長はミカに甘いからな。いいか、絶対泣かすなよ。撃ち殺されるぞ」

字室が耳打ちしてきた。今日は隊長か。それにしても撃ち殺すって何だよ。もう僕らは死んでるのに。

しかも、前に幸平に聞いた話では、この娘さんはフデさんが戦後、別な男性と作った子供である。その男とは結婚しなかったらしいが。つまり、ミカちゃんと梶村さんには血のつながりがないんだ。（ちなみに、ちゃんと二人の間に生まれた息子も一人だけいるらしい）

それなのにこんなにうれしそうなのはなぜだろう？いくら自分が死んでるからって、奥さんがほかの男とくっついてうれしいわけがないと思うんだけど。どうなんだろうなあ。そんなことは超越してしまうのかなあ。死んで何年もたつと。

ミカちゃんは外に遊びに行くと言い出した。梶村さんが僕らに、「ついていってやれ。幸平も見つけられるだろうからな、ミカなら」と言った。意味がわからないので字室のほうを見ると、いつになくニヤニヤと楽しそうに笑っている。こいつがニヤニヤしているとホントに凶悪犯に見えるな。

湖のほとり。砂浜と遊覧船乗り場の間にある波止場みたいなところに出る。観光シーズンだけど、ここは人がほとんどいない。

「字室、ゲンキだった？」

「見ての通り」

「で、そっちはダレ？」

「岩本祐一です」僕は丁寧に挨拶した「おじいさんにはお世話になってます」

「ふうん。イワモトかあ」

ミカちゃんは波止場の一番端、あと一步で湖に落ちるようなぎりのところまで歩くと、湖面に向かって大声で怒鳴った。

「キサマはカンゼンにホーイされているうっうっうっ！出て来い！幸平！」

僕は驚いてミカちゃんに近寄り、湖面を覗いた。と、水面から幸平の顔がにゅっと出てきた。ものすごく機嫌が悪そうだ。何やってんだ一体？

「アハハハハハ！それで隠れたつもりだったのか？バカじゃねえのお前！アハハハハ！」

字室が思い切り大声で笑い転げた。幸平は水面から、きつい目で字室とミカちゃんを睨んでいる。

ミカちゃんが迷彩のポケットから携帯電話を取り出した。

「幸平は映るんだよね、これには」

ミカちゃんが左手で、僕に向かって『見て』のジェスチャーをした。携帯電話の画面を覗くと、幸平の頭が湖面に浮かんでいるように、はつきりと映っている。驚いた！テレビカメラにも映らなかったのに！

「えーとイワモトはあ」ミカちゃんがカメラを僕に向けた「映らないね」

ミカちゃんが『つまんないの』というような声で言った。僕も残念だ。ちなみに、映るのは幸平だけらしい。どうして幸平なんだろう？前に洞窟前で取られた映像には、だれも映っていなかった（放送で確認した。その後も何も報道されないから、あの洞窟の写真に僕らを見た人間はいなかったんだろ。ガッカリだ。

ま、僕の姿がミカちゃんに見えただけ幸運だ。

ミカちゃんは幸平を追いかけまわしてキャツキャツと騒いでいる。それを見て字室がけけら笑っている。僕はどう反応していいかわからず、三人を黙って見守っている。店のほうを見ると、梶村さんが珍しく外に出てこつちを見ているのがわかる（あまり家から離れようとしなんだよな）

幸平だって、いやなら飛んで湖の向こうにでも逃げればいいのに、律儀に地面のあたりを『走って』逃げているんだから、一応気を使ってるんだろ。ミカちゃんにつかまったらどうなるんだろ？そもそも、ユーレイをつかまえられるのか？ミカちゃんって。

これが二人とも生きている中学生だったらなあ。美しい海岸（いや、湖岸か）で青春日記なんだけどなあ。中学生日記に使えそうじゃないか。そういえば僕らって、青春真っ盛りで死んでるんだなあ。あまり実感がわかない。悲しいが、生きていても女の子においかけるとは思えない。そもそも青春なんて言葉が死語だよな、もう。

僕は不意に、スダに乗り移ってるときに会った女の子を思い出した。たしかアイカって言う名前の、きれいな足の女の子。スダと同

じクラスだから今でもよく見かける。ああ、僕が生きてたらなあ……って、わざわざ釧路からここまで来ないよな。生きてても。だいたい存在を知らなかったよな、彼女の。

「もう！いいかげんにして！こっちだっている用事があるんだから！」

「どんなヨウジだ！言えるものなら言ってみろつての！」

追いかけて回しごっこは続いている。ミカちゃんは漢字語の発音が変で、ときどきカタカナに聞こえる。

「ねえ、あれ、何が楽しいの？」

字室に聞いてみる。

「はたで見てる俺らが楽しいんだよ。いいじゃねえか。たまには幸平も人に翻弄されたほうがいいんだよ。人生経験が足りないんだよあいつは」

人生経験と追いかけて回しごっこがどう結びつくのか、僕にはわからない。

「問題はあれだな」

字室が商店のほうにあごをしゃくつた。見ると、梶村さんだけじゃなく、ミカちゃんのお父さんが外に出ていて、こちらを見ていた。遠いからはっきり見たわけじゃないが、苦い表情のようだ。

「あのオヤジにはミカしか見えてねえんだ。どういふことかわかるか？」

「一人で走り回ってキヤーキヤー言ってる頭のおかしい娘？」

「そう。そんな奴はつきり言って精神障害だろ？」

梶村さんはきっとニヤニヤしながらこっちを見ているだろう。はつきり見たわけじゃないが、お父さんとの表情はきつと対照的だろうなあ。

第四章 ミカちゃん2 アルバム

夜、孫が来た商店の食卓は、四人で食べるには多すぎるんじゃないかってくらい、いろいろなご馳走が並んだ。食べ物に縁がない僕らにとってはちょっと辛い光景だ。そのせいか、幸平も字室も食卓のある部屋に近づかない。隣の部屋で待機だ。

二人が物陰でゴネている。

「僕湖に行きたい」

「あとでミカを連れてくんだから、それまで我慢しろ」

「いや、一人で行きたい」

「どうせあとで合流するんだから同じだろうが！」

「合流しない方法ってない？」

「そんなに嫌だったら一人で町にでも出てる！」

幸平はむすつとしたまま黙り込んでしまった。嫌だ嫌だと言いなから逃げないんだな、幸平。

「湖に行くって、サミのところに？」

僕が聞くと、字室がえらそうな声を出した。

「海岸線ぎりぎりのところまで来るはずだ。ミカが来ることは話してあるからな」

「あんなでかい船が近寄れるの？」

「話ができる距離には来れる」

「へえ」

ふすまが開いて光が漏れた。ミカちゃんがこちらの部屋を覗いていた。

「イワモトってさ、けっこう最近の人？チャパツだし」

「死んだのは今年の四月」

「わあ、シンジン」ミカちゃんが手を叩いた「なんか思い残したことはない？好きな人にコクハクしそびれたとか。このミカさまが代わりに言っただけよう」

「そんな人いないから大丈夫」

そんなにかわいい子は高校にはいなかったよ。僕はそう言おうとしたけど、やめた。そもそも僕は生きているときそんなに他人をよく見てただろうか、絶対見てなかった。

「なんだよーつまんないー」

「ミカちゃん、好きな人いるの」

「いるけど、教えない」

口をとんがらせてすねた顔をした。これは何かあるな。

「何でさ、教えてよ。家に帰る前でいいからさ」

「考えとく」

ふすまが閉まった。

「ほんとにいなかったの？好きな人」

後ろから幸平の声がした。見ると、手を上にかざしていて、その手のちよつと上に、どこから拾ってきたのか、白い貝殻が浮かんでいた。もてあそんでいるみたいに上下に揺れている。

「いないって、あんまり人に興味がなかったんだよ」

「そうだねえ。三種の神器が恋人って感じたもんねえ」

…… 事実だ。事実すぎて反論できない。

「何の話だよ？」

「何でもない」 字室に説明しなくなかった「字室は好きな人いなかったの」

「女は嫌いだ」

会話終了。

隣の部屋から、フデさんとミカちゃんのお母さんがしゃべっているのが聞こえる。お父さんとミカちゃんはほとんどしゃべらない。梶村さんは隣で何をしているんだろう。じつと観察しているだけだろうか。悲しくないのかなあ、自分だけ見えない状態で一家団欒されるの。

「でもミカちゃん、もう中学生なんだねえ。時間がたつのは早いもんだ。このまえまでこんなに小さかったのに」

たぶん手でもかざして、このくらい小さかったっていうジェスチャーでもしたんだろうな。すぐにミカちゃんの抗議の声がした。

「おばあちゃん、そんなに小さかったのはだいぶ前だよ」

「ほんとなら私立の中学に入れたかったんだがな」

せつかく和やかな雰囲気で会話が進んでたのに、お父さんの陰険な声で食卓は静まり返った。

「お父さん、札幌は公立のほうがレベルが高いのよ」

お母さんが慰めるように言ったが、お父さんがさらに反論する。

「それは北海道の話だろう。もともとろい奴が多いんだから当たり前だ。全国区で言ったらな、やっぱり中学から私立に行くのがまっとうな進路ってもんだろう」

自分も札幌に住んでるくせにそんなことを言うお父さん。

「そんなことを今いわなくなたっていいじゃないの!」

お母さんが怒り出した。

「そうですよ。子供は元気なのが一番です」

フデさんがお年寄りらしい意見を言った。

「……札幌の人間は使えないって聞いたことない? 岩本君」

幸平が話しかけてきた。妙に深刻な顔つきで。

「何それ?」

「支店経済」もてあそんでいた貝が床に落ちた。「大会社の支店とか子会社ばかり集まってるんだ、札幌は。マニュアル通りにしか動けない人間ばかりになる。そうすると、いざ転勤、転職だつてほかの都市に行くでしょ、ほかの市町村はたたきあげの人間が多い。札幌のマニュアル人間はついていけない。それでよく『札幌の人間は使えない』って言われてたんだ」

そんな経済の話をいきなりされても、僕は何と答えていいかわからない。

「確かに幸平はトコいよなあ」

字室が笑う。

「悪かったね。だからさ、ミカちゃんのお父さんの言い分も間違っ

てはいないんだよ。中学校も高校もほとんど公立に行くじゃない。北海道の人は。で。たいがいまともに勉強しなくても卒業していくじゃない？」

「まあ、そうかもね」

「当然、社会に出てから急に困難にぶつかるわけだ。道内にいたって企業の競争つてのは全国区だからね。そのせいで銀行までつぶしたとは言わないけどさ、いつまでたっても不況で、それでいてのんびりと危機感が抜けない、それが今の北海道じゃないかな」

「……幸平、そういう情報はどっから持ってくるの」

「本とか、いろいろ。長年世の中を『よそから』見てるから、いろいろ考えちゃうんだよ」

「そんなこと考えたってどうにもならないだろうが、死んでるんだからよ」

字室が呆れている。僕は幸平が世の中を気にしているのが以外だった。ただ他人のプライバシーを覗いておもしろがっているだけだと思っていた。

ふすまの向こうからは何も話し声がしない。四人とも黙り込んでしまったみたいだ。

家族の機嫌が悪いまま、就寝時間になった。みんなが寝静まったのを見計らって、ミカちゃんもそもそと起き出した。

「行くぞミカ。クソオヤジに見つからないうちによ」

字室が起きかけのミカちゃんを乱暴にゆすった。

「ちよっと待つてよ、おじいちゃんと遊んでから」

遊ぶって何ですか？手の甲で目をこすってぼんやりしているミカちゃんを見ながら、思わず変な空想をしてしまう。

「知らねえぞ。見つかって叩かれてもよ」

字室が窓から飛んでいってしまった。幸平はとつくの昔に姿を消していた。たぶんサミのところの先に行ったんだと思うけど。僕が梶村さんとミカちゃんが何をするのか見たかったので、残ることに

した。

ミカちゃんが部屋を出て廊下を歩き出す。廊下にすでに梶村さんが立っていた。暗い廊下に軍服が立っているとかなり怖い。梶村さんがこちらに背を向けて歩き出す。ミカちゃんもそのあとを追って、忍び足で、家の二階へ続く階段を登る。たしか、この二階で物置みたい古いものがたくさん積んであったと思うんだけど。詳しくは見たことがない。今まであんなに暇だったのに何で見る気にならなかったんだろうなあ。

二回の部屋の電気をつける。本好きの幸平でさえ手をつけてなさそうな、埃をかぶった古い本の山が暗闇に浮かび上がった。いまだき裸電球が天井からぶらさがってるなんて、居酒屋じゃあるまいし、しかも梶村さんが軍服だから、この部屋だけ戦前に戻ったんじゃないかという気すらしてくる。

でもなあ、ミカちゃんのけばけばしい金髪を見ると、瞬時に現代に呼び戻されるんだな。まさかアメリカ人にも見えないし。

「えーと、ええーと？」ミカちゃんが古い本の山を乱暴に倒し始めた。「うーん、あ、あった！これこれ」

ミカちゃんを取り出した茶色い表紙の本を広げた。セピア色の写真が紙面にじかにはりつけてあった。古いアルバムのようだ。

「よくも毎年見たがるもんだなあ、同じものを」

梶村さんが優しい声で笑った。

「だって年に一回しか見れないじゃん。イワモト、これ見て！」

「開かれたアルバムを覗くと、そこには、今目の前にいるのと全く同じ顔で、服装がちよっと違う（けど軍服には変わりないな、これは）梶村さんと、その隣に若い着物を着た女の人が座っている写真だった。つまりこれは……」

「フデさん？」

「そうだ。六十年は前になるかな」

思わず梶村さんの顔を見てしまっ、すごく照れた顔してる。こんな顔は初めて見た。

「結婚シャシンー！」

ミカちゃんが、ロボット対戦の決めゼリフみたいな叫び声をあげた。結婚写真といっても、晴れ姿というのではなかった。さっきの写真のほうがいい服着てたんじゃないかと思うくらい、二人とも着物姿ではあったけど、どこかみすばらしい印象を受けた。でも、顔つきだけはこちらの写真のほうが大人びて見える。

僕はそのセピア色の写真をじっと見つめた。別に信じてなかったわけじゃないけど、梶村さんは本当に昔の人だったんだということを、初めて確認した気分だ。

「おばあちゃん、ビジンでしょ？」

「まあ、そうだね」

現代の基準で見てもはいけないのだろうが、僕はあまりきれいだとは思わない、ただ、いかにも古風な女の人で、写真写りはいいほうなんだと思う。

「あとこつちがねえ、じいちゃんの大好きな女学校の制服……」

「ミカ！余計なことを言うんじゃない！」

「女学校ですか……」

写真の中のフデさんは、こんどはセーラー服を着ている。背景がないから何かの記念に撮影したものだろう。僕は思わずにやけてしまった。きつとこの姿を見て好きになったんだろうなあ、梶村さんこの写真のフデさんはきれいだ。昔のアイドルみたいな顔してる、さっきの結婚写真とずいぶん違う気がするけど。

「勘違いするなよ岩本、自分に変な趣味はないぞ」

「わかってますって。何を慌ててるんですか」

「あとこつちがねえ」慌てる『おじいさん』を無視してミカちゃんがページをめくる「おじさんを抱くおばあちゃん。このころはもうじいちゃんは戦争だよな」

さきほどのお嫁さんが、もっと地味でぼろぼろの服を着て、子供を抱いて立っていた。どうやら外で撮った写真らしい、背景に廃墟のような建物が見える。よくこんな写真撮影できたな、戦争中に。

「昔つて、写真撮るの大変だったんじゃないですか？」

「いや、別に大変でもない」

「戦争中也映画見てたんだもんね。たしか、長野の県庁の人はタダ見できたんだよね、おばあちゃんが言ってたよ」

「映画をタダ見？」

耳を疑った。

「ミカ、それはあまりいいふらしてほしくないな」

梶村さんが額に手を当てて顔をしかめている。

「いいじゃん！ジコウジコウ！じいちゃんイマでいう県庁の人だったから、おばあちゃんとエイガ見に行っても顔パスだったんだって」

「顔パス……」

ますます戦争中らしくない話になってきた。

「違う、そうじゃない。ちゃんと証明書を見せた。だいいち見ている間に空襲警報が鳴ったからな。サイレンと共に画面は消えた。最後まで見れなかった」

「映画の最中にサイレンですか。嫌ですね」

「ああ」

「タカラズカも戦前からあるもんね、確か、えーっと」

次の写真を見ることはできなかった。廊下からドスドスと階段をあがる足音が聞こえてきたからだ。

「ミカ！こんなところで夜中に何をしているんだ！」

やっぱりお父さんだった。顔が真っ赤になって目が釣りあがっている。怒ってるぞこれは。

第四章3 湖へ

「写真見てただけでしょ！」とたんに険悪な顔になってミカちゃんがお父さんを睨んだ。「お父さんこそ夜中にオーゴエ出さないでよね！」

「お前こそ早く寝ろ！」

「いいじゃん少しくらい、めったに見に來れないんだからさあ」

「親に向かつてその口のきき方は何だ！」

親子喧嘩がはじまった。

「この男、昔から氣に食わない」

梶村さんが静かな声で言ったかと思うと、銃を構えた……って、何をする氣ですか！？

「ダメですって撃っちゃ！」

「バカ。ほんとに撃つわけがないだろう。撃つても大したことは起こらん。この銃も死んでいるからな」

「とにかく銃は下ろして下さいって、怖いから」

ミカちゃんが会談を駆け下りていく。お父さんがなにやら怒鳴り散らしながら追いかけていく。階段の下からぎゃあぎゃあ言い合いの聲が聞こえてくる。

「あ、写真出しっぱなしだ。どうしよう」

「明日にでも片付けさせればいい。それより岩本、ミカの後を追ってくれ」

「後を追う？下でケンカしてんじゃないですか？」

「外に飛び出して行った」

梶村さんが部屋の窓から外を覗いていた。置いてある本やがらくたを避けて窓まで飛んでいくと、暗闇の中をパジャマ姿で走っていくミカちゃんの姿が見えた。お父さんの姿は見えなかったから、外までは追いかけなかったんだろう。

僕は窓をすりぬけてミカちゃんのとを追って飛んだ。方向から

言つて湖に向かつているようだ。サミのところへ行くんだろう。みんないるだろうか？それにしても、飛び出すような大喧嘩だったか？今の。

ミカちゃんは湖に着くなり、だれのかわからないボートを勝手に水に向かつて押し出した。飛び乗つてオールを乱暴に水に突っ込む。

「何してんの？危ないよ！こんな暗いときに」

「いーじゃない気晴らしくらいしたって！」

ミカちゃんはめちゃくちゃにオールを漕いでいた。前にも乗ったことがあるんだろう。順調に沖に向かつて動いてはいくのだが、顔つきが怒りに満ちているというか、八つ当たりしてるみたいですごく怖いぞ、ミカちゃん。

「あんのクソオヤジいいいいいい！覚えてやがれっ」

大声でわめいている。どうやらかなりムカついているらしい。

「何話したの？お父さんと」

「高校は私立に行かつて！寝る前にするハナシかつつの！」

……確かに旅行先に、しかも夜中にする話ではないな。

「うちのお父さんインケンなんだよ！自分がワセダ出てるからつてそれが当たり前だと思つててさ、たままないっ！私はミュージシャンになつて男をたくさんカコつてやるんだ！」

がむしゃらにボートを漕いで息巻いてるミカちゃんには悪いが、その夢はやめたほうがいいと思う。

「あー！岩本君！止めなよ！何黙つて見てるのさ！」

「こんな夜中にデートかあ、お二人さんよ」

頭上から声がしたかと思つたら。幸平と字室だ。

「黙つて見てたわけじゃないよ。お父さんとケンカしたんだ」

「イワモト！よけいなことを言うなあ！」

ミカちゃんの振り上げたオールが僕の足をすり抜けた。生きてたら骨折間違いなし。

「あー、そういうことかあ」幸平が冷たい声で呆れた「いいかげんお父さんの言うことも真面目に検討したほうがいいんじゃない？少なくともミカちゃんよりは世の中知ってるよ」

「ム力つくー！世の中知らないうちに死んだやつに言われたくない！」

興奮したのか、ミカちゃんがオールを放り出して立ち上がった。幸平に手を伸ばしたが、自分がどこにいるかを忘れていたらしい、バランスが崩れて、ボートがひっくり返った。

「あ！」

「ミカちゃん！」

字室が水面に手を伸ばし、ミカちゃんの腕をつかんだ。そのまま上空へ浮かび上がる。危なかった。字室がいなかったら湖の底だ。

「ゲホッ、あれ、字室、いつのまに」

ずぶぬれのミカちゃんがとろんとした目つきで字室を見上げた。

「幸平と一緒に来てただろうが、見えてなかったのか？このバーカ」字室はあいかわらず口調がきつい。

「なにおー」

言い返す声には元気がない。いくら夏でも湖に落ちちゃ元気もなくなるよな。夜だから寒いし。

「幸平、岩本、このままミカを幽霊船につれていくぞ」

「え？」

「はあ？」幸平が露骨に嫌そうな声をあげた「幽霊しか乗れないに決まってるって、去年言い張ってたの字室君でしょ？」

「去年はもう過ぎ去ったんだよ、バカ。行くぞ」字室がミカちゃんをつかんだまま動き出した「だめだったらこのまま岸に戻ればいいんだ。試してみる」

「行く！やるやる！サミの船！」

ミカちゃんは急にゲンキを取り戻したらしい、超乗り気だ。

「そうだね。ちょっとやってみよう」

僕も興味がわいてきた。あのボロい幽霊船に生きた人間が乗って

るところを見てみたい気がする。

「でも……」

「いいからサミのところに行って、こっちに近づけて言ってい！」

字室が怒鳴ると、幸平はぶつぶつ文句を言いながら飛んでいった。字室はミカちゃんの腕をつかんだままで、湖の上をゆっくり移動していく。

「字室さあ、片手しか使っていないけど重くないの」

重さを感じるかどうか興味があつたので聞いてみた。字室が苦悶の表情で振り返ったのでびつくりした。

「重い」字室は顔をしかめたままミカちゃんを見下ろした「痩せろ」

「あー！ひどいー！少しは気をツカえよー！」

「暴れるなバカ！落とすぞ！」

空中に浮いたままケンカしている二人を眺めていたら、向こうから船が近づいてくるのが見えた。サミが甲板に立ってこちらを見ている。好奇心いっぱい目で。

「ハロー！」サミがぶんぶん手を振りながら叫んだ「ゲンキー？」

「ゲンキーー！！」

「暴れるなあああ！」

つかまれてないほうの手を乱暴に振るミカちゃんに向かって字室が悲鳴を上げる。

二人は今、甲板の真上に浮かんでいる。

「いいか、少しずつ下がるから」字室が急に真剣な表情になった「完全に足がついたと思うまで手を離すなよ、落ちるかもしれないからな」

「おっけー」

返事は軽いが、ミカちゃんの顔も真剣だ。

字室とミカちゃんが少しずつ高度を下げていく。サミと僕と幸平は、動かずにじっとそれを見守った。

コツ、と、足の先が何かに当たる音がした。ミカちゃんの足はち

やんと甲板に乗っていた。

字室が手を離れた。ミカちゃんはちゃんと船の上に、二本足で立っていた。

「うわあ……うわああ！」ミカちゃんのはしゃいで甲板の上を走りだした。サミもそれにくっついて飛び回る。二人で踊ってるみたいに見えた。うれしくてたまらないんだな、二人とも。

「幽霊船によこそ〜」

字室がおどけた。みんな笑っていたが、幸平だけ、少し上に浮かんだままむすつとしていた。何が気に食わないんだろう？

「もしかしたら、あのドアも開けられるかも、生きている人なら」ひとしきり騒いだあとで、サミが顔をほころばせながら言った。

「あのドア？」

初めて聞く話題だった。

「ああ、この船のずつと奥にドアあるんだけど、開かないんだよ」字室が甲板の奥、客席に続いていたのであるうドアを見ている。

「中に入れないんだよね、しかもこの船の壁はすり抜けられないし」そうなの？」

初めて聞いた。そもそもこの船の中に入ろうなんて思わなかったからな。ぜんぜん気にしていなかった。

「おもしろそう！トライしてみる！」

ミカちゃんが錆びたドアを蹴破った。驚く三人を無視して、さらに奥に入っていった。サミがあわてて後を追った。かんとんに倒れた錆びたドアにちらりと目線を向けながら。

「おいおいおい、過激すぎるだろ」

「ね、ねえ、いいの、字室君。奥まで入っていつちやったら」幸平がなぜか慌てている「何が出てくるかわからないよ？」

「何をビビってんだよ。何が出てきたってもういいだろ、死んでんだからよ。かえっておもしろえ」

字室がせせら笑った。

「そうだね。ちよつと興味あるな、中の構造」

「そういう問題じゃないって！」幸平が僕と字室を交互に睨んだ。「サミは遊覧船と一緒に沈んだんだよ？この事故で行方不明が二十人いるんだよ？死体があがってないんだよ？」

「でも、それはこの湖の事故じゃないだろ？」

字室が反論したが、もうせせら笑いは消えていた。

「でもサミと船は現にここにあって、生きているミカちゃんも中に入るんだよ。もしここの中に、二十人分の死体が残ってたら……」
二十人分の死体。それが水中を漂っている。その中の一人はサミだ。

僕ら三人はその光景をしばらく想像して固まり……大慌てで船の中に飛び込んだ。

第四章 4 船の中

幽霊船のドア。誰にも開けられないという内部のドア。幸平でも動かせなかった、貝殻や錆びに覆われたドアノブ。それをミカちゃん力が任せに引っぱっている。サミが天井に貼りつくようなかつこうで、期待でいっぱい顔をミカちゃんに向けている。

「くううううー」

目と口をきつく閉じた顔が見る間に真っ赤になった。手がドアノブからぱつと離れる。

「だめだあ」ミカちゃんが床に座り込んだ「デンドードリルとか、そういうのないとダメじゃん？」

「そんなもんあるわけないだろ、諦めろ」

字室がため息をついた。呆れているのではなくて、開けられたら困るからだ。もし行方不明者の遺体がまだ中にあつたら……考えただけで怖い。そんなもの中学生のミカちゃんが見たら、ストレス後なんとか障害になりかねない。僕も死体は見たくない。

「やっぱり開かないようになってるのかしら。沈没したときからそうだったし」

「え？ そうなの？ 沈没して錆びたから開かなくなったんじゃないの？」

僕がそう聞くと、サミが困った顔で笑った。

「私が死んだ直後から、もう船は錆びついていた」

そんなバカな。僕は幸平のほうを見た。

「もしかしたらこの船もユーレイなのかもね。昼間に僕たちが湖に潜つてもどこにも沈んでいないし、そもそも事故は別な湖で起きたわけだから。本体はないのかも」

幸平が無表情で分析した。そんな怖い話になるとは思わなかった。今日はいつもとは質の違う寒気がする。体ないのに。

「寒くなってきたから僕帰っていい？」

「岩本！逃げるなよ」

船から出ようとしたら字室に行く手を阻まれた。脱出は諦める。

「ああああーくやつしい！このこのこの！」

ミカちゃんがドアをガンガン蹴り始めた。さっき外のドアを蹴破ったしな。過激な性格だ。

「うらうらうら！……あ」

ごとつと音がしたので全員の視線がミカちゃんに集まる。さっき引っぱってもびくともしなかったドアノブが、はずれて床に落ちていた。

「また破壊したなお前」

字室が低い声でつぶやいた。

「いいじゃんもともとコワれてたよーなもんだし……あ、ノブのところ穴になってる」

ミカちゃんが穴を覗こうと身をかがめたが、字室が腕をつかんでドアから引き離れた。

「なにすんの！」

「俺が先に見る。へんなものがあつたら困るからな」

「なにそれ！ズリイツ！私がコワしたんだから私が見るー！」

字室が暴れるミカちゃんを押さえながら穴を覗いた。そして、大きく目を見開いたかと思うと、ドアの穴を隠すように背中をおしつけてたちはだかった。

「何が見えたの？」

サミが不審げな表情で字室を見た。まさか本当に死体がうようよしてるんじゃないだろうな。

「だめだ、覗くな、女が見るもんじゃない」

「何よそれ、差別だわ」

「そうだそうだー！」

怯えた顔の字室に向かって、女性二人が抗議した。

「そついう問題じゃない！」

「じゃ僕に見せてよ。僕が説明するから」

幸平がドアに近づいた。

「中学生はダメだ！」

字室が叫ぶ。わけのわからない話になってきた。

「じゃ、岩本君見てよ」

「えっ？」

困る。正直に言っていると、見たくなかった。字室が見て驚くものなんてろくなものじゃないに決まってる。いや、もっと正直に言おう、僕はホラーが大嫌いだ。死体はもっと嫌いだ。

いや、さらに正直に言っていると、つまり、怖いんだ、見るのが。

「私が見る！」ミカちゃんが手をあげて宣言した「何なの？ユーレイどもがこんなにオクビョーだとは思わなかった！どいて字室！」

「いいのか？どうなっても知らないぞ？」

脅迫するように睨みつけながら近寄ってくるミカちゃんの気迫に押されたのか、字室が動いた。ミカちゃんがドアノブの穴を覗く。僕らは固唾を吞んで（死んでるから飲めないけどな！）見守っていたが、ミカちゃん表情はぜんぜん変わらない。

「どう？何が見えるの？」

サミが興奮した様子でミカちゃんの背後に降りてきた。

「……あれ、ダレかなあ」

「誰って？人がいるの？」

「違うよ。ガイコツがある」

ただでさえ冷たい船内の空気が、ますます冷え込んだ。

それから、みんなで交互に穴を覗いた。僕もチラッと見たけど、もう二度と見たくない。骸骨って言っても、理科室によくあるような、白くてきれいな標本じゃない。いろいろこびりついていて汚い。腐りかけみたいだ。それが床にある。でも、四十年前の死体が腐りかけておかしいよな。船と同じで貝殻とかがこびりついてるだけかもしれないけど。

「なーにが『中学生はダメ』だったの。字室のヨウムシ！」

ミカちゃんが悪態をついた。

「そうよ、死人が驚くようなことじゃないでしょう？」

「驚くに決まってるだろ！お前らがおかしいんだよ！」

女子二人組みに責められた字室が悲鳴をあげた。僕も字室に賛成でも幸平はぜんぜん驚いていなかった。

「あのさあ、車にはねられた死体のほうがまだ怖いと思うよ。字室君？」

幸平が字室を見てにやつと笑う。今までの意地悪の仕返しなんだろうか？僕は自分や幸平のはねられた死体を想像して……怖くなつたからすぐ頭から振り払った。

でも、字室が怖がるのは確かに意外だ。だって殺人犯なんだろう？詳しくは教えてもらってないけれど。

「あれは誰かしら？」サミが穴を覗きながらつぶやいた「行方不明の誰かか、もしかしたら私かしら？嫌ねえ」

「サミ、怖いことを平然と言うなよ」

思いつきり平常心のサミに、字室が引きつった顔で意義を唱えた。「早く出してあげないと。砂浜に持っていったらダレかみつけるよ、私がケーサツに行ってもいいし。メンドーだけどお」

口調とは裏腹に、ミカちゃんの表情は真剣だ。どうしてもドアを開けたいらしく、またドアに蹴りを入れ始めた。

「行方不明者の名前、どこかに書いてあったかなあ。新聞で調べておけばよかった。学者だったら性別くらいはこれから判別できるのかな」

幸平の態度は至つてのんきだった。僕は……早く帰って寝たい。

「うらあ！」

ミカちゃんのかけ声つきの体当たりと共に、バコツという派手な音がした。ドアが外れて内側に倒れた。もうもうとほこりが舞う。

「やった！」

ミカちゃんが喜びに飛び跳ねながら中に入っていく。サミと幸平もあとを追っていった。

「俺、帰りたい」

「僕も、でももう逃げられないと思わない？」

僕と字室は恐る恐る中を覗いた。骸骨の前で三人が話しているのが聞こえた。

「えらの張った顔みたいだね。骨の形からすると」

幸平、冷静に分析するなよ。

「なんかホソくない？骨。普通こんなもんなのかなあ？」

「私じゃないわ。私はこんなに足が長くないですもの」

「足が長いなあ。痩せ型の男かもしれない。それにこれ」

幸平がしゃがんで、何か、腐ったマットレスのようなものをめくりあげ、空中に放り投げた。そうだ、ものを動かせるんだ、幸平は「時計だ！」

ミカちゃんが叫ぶ。僕と字室も中に入って幸平の前へ行ってみる。錆びついてはいるが、確かに腕時計の形をしたものが、床に落ちていた。針が一本だけ残っている。

「先生のだわ」サミが時計を見てすぐにそう口走った「時計をしている生徒なんていなかったもの」

「あるいは、学校以外から来た乗客のだね。それは確かめようがないよ」

「いいえ！先生のです！」サミがすごい大声で叫んだのでみんなビツクリして一歩後退「この時計は、知ってます。先生のです！先生の……！」

サミは腕時計をつかむように手を伸ばした。でも手は時計をすり抜けるだけだ。それなのにサミはずっと握る動作を繰り返している。しばらくその様子を見守っていた僕らは、サミの言う『先生』が漠然とした他人じゃなくて、どうやら特定の、大事な人物らしいということに気がついた。そして、サミがひどく動揺していることにも。

生きているミカちゃんが代わりに時計を手を取った。腐っていたのだろう、ベルトの部分がはらりと床に落ちた。

「どうしたらいいの、これ」

「私にちょうだい」サミがミカちゃんの目をまっすぐ見た「お願い」
「サミ、骨と一緒に外に出してあげよう。そしたら誰か供養してくれるよ、遺族がまだ生きているかもしれないし」

「嫌です！」

「でも」

「先生って誰？」

言い合っているサミと幸平に質問してみたが、無視された。

「とにかく時計はちょうだい。お願い」

ミカちゃんが困った顔で幸平を見た。幸平は無表情でうなずいた。
いいのか？

「骨は出したほうがいいぞ。怖すぎるからな」

字室がそう言ったとたん、骸骨がいきなり浮かび上がった！

「うわああああああ！」

「大声出さないでよ字室君。僕が運び出すから」幸平が軽蔑しきつた顔で字室を見ていた「骨はさすがにおいて置けないからね、わかった？サミ？」

サミが下を向いたままうなずいた。ミカちゃんは部屋の隅にある崩れた壁のくぼみに時計をはめ込むように押し込んだ。

「ここでもいい？部屋の真ん中においておくとウゴきそうじゃん？」
「いいわ」

サミはそのあと、一人にしてほしいと言ってその部屋にこもってしまった。僕と幸平は、骨と一緒に海岸まで飛んで、砂浜にてきとうにばらまいた。自然に流れ着いたようには：見えないか。

しばらくして、字室がまたミカちゃんを抱えて飛んできた。また『重い』と言ってケンカをしていたらしいが、砂浜の骨を見て二人とも黙り込んだ。

「こうなっちゃったら悲しいね、人って」ミカちゃんが本当に悲しそうにつぶやいた「ケーサツ呼ぼうか？」

「いや、別な人に発見してもらおう。そのほうが面倒がないし」幸平がミカちゃんのほうを向いた「もう帰ったほうがいいよ。もとも

とケンカして飛び出してきたんだし、梶村さんが心配して死にそうになってるかも」

そうだ、ミカちゃんって、お父さんとケンカして飛び出したんだっけ。

「忘れてたあ」

ミカちゃんがぺろつと舌を出して照れ笑いした「おじいちゃんにはちゃんとセツメーしとくね」

「じゃないと俺らが撃ち殺されるんだよ」

字室が文句を言った。だから、もう死んでるんだって、僕らは。

第四章 5 先生は…

次の日。ミカちゃんはお父さんと冷戦状態に入ったらしい、一言もしゃべらない。朝からフデさんと一緒に散歩に出かけてしまった。ついていこうと思つたら、幸平に止められた。

「骨、見つかったらしいよ。警察が砂浜に来てる。見に行こう」

「そんなのは警察に任しておけ」梶村さんは機嫌が悪い。「一体あの男はここに何をしに来たんだ？ 昼間からごろごろとけしからん」

ミカちゃんのお父さんはヒマそうに寝転んでテレビを見ている。夏休みなんだから、ごろごろするのは別にいいと思うけど。

「幸平さ、どうしてミカちゃんを避けてたの？」

「うつとおしいからに決まってるじゃない。しつこいたらない…」

「ダレがしつこいつてえ？」

いきなりミカちゃんが開いてる窓から顔を出した。どうやら帰ってきていたらしい。

「何だ、何も言ってないだろうが」

寝転んでいたお父さんが振り返った。

「お父さんには何も言ってません」

ミカちゃんは開いた窓に足をかけて、そのまま入ってきた。泥棒みたいだ。

「ミカ、玄関から入ってきなさい」

梶村さんが注意するとミカちゃんが笑った。

「いーのいーの。靴ちゃんと脱ぐから。……おじいちゃん」
「何だ」

「おじいちゃんは、ミカに大学に行つてほしい？」

「何だ急に。歌手になるんじゃないのか？」

ミカちゃんが金庫の前（梶村さんの前だ）に正座した。

「でも一応聞いと思うって」

「お父さんの言うこと聞けばいいじゃない」

「幸平はダメってる！」

ミカちゃんは真剣のようだ。僕は梶村さんを見た。ちょっと考え込んでいたようだったが、すぐにミカちゃんにまっすぐ顔を向けると、こう言った。

「学問は大事だ。大学に行けるなら行ったほうがいい。でも、最終的に決めるのはミカだ。人の意見は参考までにして、自分で考えなさい」

「はい」

ミカちゃんはちよつと不満げな顔をしていた。きつと別な答えを期待していたんだろうな。それにしても、ミカちゃんってまだ中学生だよな？先に高校のことを考えたほうがいいんじゃないか？大学のことを考えなきゃいけないのは僕のほう……いや、もう死んでから関係ないのか。

「大学かあ……」

思わず声に出してしまった。別に行きたかったわけじゃないけど、進路なんて真面目に考えていなかった。行きたいところもなかった。もう三年になってたのに。

「岩本、お前もまだ生きてるんだから考えておいたほうがいいぞ」

「えーマジ！生きてんのお！？」

ミカちゃんが大げさな驚きの声をあげた。

「私の勘だ。たぶん生きておる」

「おじいちゃんの勘なら当たるよね。行方不明者のニュース見て、死んでるか生きてるかすぐわかるんだよね」

「ほんと？」

「外れたことはないな」

梶村さんが自慢げに言った。幸平のほうを見ると……いなくなっていた。逃げたか。

「イワモト！もしかしてケータイ持ってない？」

「持ってるよ。当たり前だろ」

「番号教えて」ミカちゃんがパンツのポケットから携帯を取り出した「かけてみる」

……なるほど！その手があったか。何で今まで思いつかなかったんだろう？

僕は自分の携帯の番号をミカちゃんに教えた。ほぼ同時にミカちゃんも番号を打ち込み、携帯を耳に当てた。

息を呑んだ（いや、死んでるから飲めないけど、緊張したっていう意味ね）これでもし誰かが出たら、何より自分が出たら？そんなことはありえない。誰も出るわけがない、僕はここにいるんだから「電源切れてるか圏外だつて」

……がっかりだ。でも、契約は切れてないってことだよな。誰が使ってるんだ？だいいち、携帯の電源なんてめったに切らないのに「まだ持つてるといふことか、電話を」

「そうそう、死んでるんなら契約切つて『現在使われておりません』になつてはすだね。イワモト！生きてる可能性高い！よかったな！」

ミカちゃんが僕の肩をたたくまねをして、キャッキヤと笑い声をあげた。あまりうれしくなかった。

「番号はトーロクしておくね、たまにかけてやるからなあー」

かけても僕自身にはつながらないと思うが、まあ、うなずいておこう。それより、娘がずつと独り言（に見えてるはずだ、生きた人たちには）言ってるのに、お父さんもお母さんも無視してテレビを見てるが、いいのか？心配じゃないのか？

その後三日ほど、ミカちゃん一家はここに滞在していた。親子はほとんど会話はなく、ミカちゃんは梶村さんや僕らと話したり、幸平を追いかけまわしたり（嫌だと言いながらつきあつてやる幸平つて、優しいというか何というか……）字室といっしょにサミの船に行ったりしていた。

サミはあの時計についてなかなか話してくれなかった。海岸で発

見された骨はちゃんと身元がわかったらしいが、遺族はもう死んでしまってるし、どうして沈没現場じゃなく、はるか北の北海道の湖で発見されたのか？そもそも謎で、しばらくニュースが騒いでいた。「先生よ。学校の、音楽の」

サミはそうつぶやいたきり口をつぐんでいた。やっと聞き出せたのは、ミカちゃん滞在の最後の夜だった。

「サミはもうずーっとココにいるんだよね」

「そうよ。気が狂いそうなくらい長くね」

「私はその年月より長く生きなきゃいけないのかなあ」

ミカちゃんが独り言のようにつぶやいた。

「そうねえ。せつかく生きているのだから、楽しんで長生きしなさいな」

「でもさあ、シワシワになってまで長生きして幸せなのかな」

「それはお婆さんに失礼よ」

「お婆あちゃんはいいんだよ。シアワセそうだから」ミカちゃんが語気を荒げた。「今私十三歳じゃん。うまく生きたらあと六十年以上あるんだよ。きれいでいられるのは三十代くらいまでって感じしない？へたしたら二十代でオバハンにされちゃう。仕事しても偉くないし、結婚してもさあ、お母さん見てたらすっげー地味な暮らししかできないみたいだし。先行き暗いよう！」

子供っぽいわめき方をするミカちゃんを見てサミが寂しげに笑った。

「私もそう思ってた。少なくとも、男の人の言うことを聞くしか能がない女にはなりたくなかった。でも、私が生きていたころはまだ時代が古かったのかも」

「えーと、四十年前」

「女の子は大声を出して笑ってはいけません。男の人にむやみに話しかけてはいけません。つめの間にゴミをためてはいけません……」

なんて、雑誌に真面目に書いてあった時代よ」

「なんじゃそりゃあ」

ミカちゃんが、心底バカにしたような笑い方をした。

「つめにゴミって何だ？確かに嫌だけどね」

「イワモト、そこまで見てる男のほうが嫌じゃん」

「僕は別に気にしない」

人のそんな細かいところまでは見ていなかった、僕は。

「俺は嫌だなあ。つめにゴミためてる女」

字室はやはり古い世代の人間のようだ。

「とにかく」サミがまとめるように言う「年をとってしまったら行き場がなくなるような気がしていたわ。でも、死んでしまった今思えば」

サミが空を見上げる。きれいに月が出ている。照らされた顔は青白い。今気がついたが、つきの光はユーレイを照らすことができるらしい。辺りを見回す。字室も、いつのまにかやってきていた幸平の顔も、青白く見えた。

「永遠に若い死人よりは、しわしわでもおばさんでも生きているほうがいいのよ」

僕はサミの青白い顔を見ながら、スダに乗り移ったときのことを思い出していた。体で感じた砂や風の感覚。古い木材でできた家のおい。年を重ねても感じられるはずだ、生きてさえいれば。

「僕はそうは思わないんだけど……」

幸平が小さい声でつぶやいたのが聞こえた。でもそれ以上はなにも言葉が続かなかったし、誰も反論しなかった。しんみりとした空気が船の上に流れていた。

「あの時計の、先生ね」急にサミが話し始めたので全員が注目した。「私が学校から帰ろうと思ったとき、ピアノの音が聞こえたの。ちょうど進路のことを相談しようと思っていたから、音楽室に行った。そしたら、先生の姿が見えた。ピアノの陰に」

サミの顔に寂しげな、それでいて喜んでいるような、奇妙な表情が浮かんだ。

「その姿が、もちろん演奏も上手だったけど、夕日に照らされてい

とても綺麗で、それでいて、手を伸ばしても届かないくらい遠くの光景のような気がして、自分でも気がつかないうちに泣いていたらしいの、私。先生が気がついて『どうしたのですか。何かあったのですか』とおっしゃったから、私はただ『悲しいんです、悲しいみたいです、でも、どうしていいかわからない』って答えて、そのあと、学校のこと、家族のこと、進路のこと……一方的に話したのに、黙って聞いてくださったのよ」

サミはどこかうつとりとした表情になっていた。昔の思い出に浸っているのだろう。

「先生、死んでしまっていたのね。こんなに近くにいたのね。気がつかなかった」

船の中を、何か文学的な美しさが包み込んでいた。みんな黙ってその感触を味わっていた……のに、なのに。

「ウツヒヤー！ウツクシー話！」ミカちゃんがすつとんきような声で叫んだので、せつかくのいい雰囲気が出た。サミ、その先生好きだったんでしょ？そうでしょ？」

「そう、かも、しれない、わからない」

「どうして泣いたんだろうね。先生がきれいだったから？悩み事があったから？」

幸平がまっとうな質問をした。僕は、それは知らないままのほうがいい思い出になるような気がしたけど。

「さあねえ。もう四十年以上前の話だから」

覚えてないのか、言いたくないだけなのか、サミは笑って月を見上げていた。

「いいな、いいな、そんなセンサー。もっとオトメゴコロがわかるセンサーがいたらなあ。学校だって女の子の居心地がよくなるし、私だってもっとイオンナになるのにい」

ミカちゃんが軽い口調で言った。何かが間違っている気がする。

そのあと僕は、みんな黙り込んで甲板に座っていた。きつとそれぞれに、夕日の中でピアノを引く先生とやらを、勝手に想像して

いたんだと思う。でもなあ、よっぽどかっこいい先生じゃないと絵にならないよなあ、そういう場面って。

第四章 6 ミカちゃんの好きな人は

ミカちゃんが帰る日がやってきた。

お父さんとは結局冷戦状態のままらしい。みんなで心配していたのだが、

「お父さん？どうせ明日から仕事にしかキョーミなくなるから大丈夫」

と言っていた。それもどうかと思うが。

「お母さんは大事にきなさい。お父さんはほつといてもいいものだ」
梶村さんがそうミカちゃんに言って聞かせていた。それもあんまりだと思いますが。

荷物を持って玄関を出る一家を、フデさんと梶村さんが玄関に並んで見送る。ま、ミカちゃん以外にはフデさんしか見えてないだろうな。並んでも夫婦に見えないし。

「達者で暮らせよ！」

「わーってるって！また来るからっ！」

ミカちゃんが不良のような声で笑いながら手を振った。札幌でどいう生活してるんだろいうな。金髪の不良少女なのか、意外と真面目に生活してるのかな？

そつえば、ユーレイ話ばかりで、普段の生活についてあまり聞いてなかったな。

生きている人たちは、ミカちゃんのほうを怪訝な顔で見ている。ここにいる間、一人でぶつぶつ言いながら走り回ったことになってるんだから無理もない。

駅まで見送りに行くことにする。幸平も字室も今朝から行方不明だ。ミカちゃんが今日出発することは知っているはずなのに、どこへ行ったんだろ？

「わあ、イワモト、送ってくれるんだ。エライエライ。幸平なんか絶対来てくれないのにさ」

「ずいぶん幸平にこだわるね。毎日追いかけて回して」

「だって見てるとむかつかない？あいつ」

「ミカちゃん、いじめっ子でしょ」

「悪かったなあ」

「それよりさ、好きな人教えてくれるって話、覚えてる？」

「あ」ミカちゃんが悔しそうに顔をしかめた「くそう、忘れてると思ってたのに」

「教えて」

妙にわくわくするのはどうしてだろうなあ、こういう会話。

「あのね、その人は」ミカちゃんが僕の目をまっすぐ見た「もう死んでるの」

「へ？」

中学の同級生、というありきたりな言葉を予想していた僕は、固まってしまった。

「でね……その人は、私のケータイの写真に写ってる」

「ミカ！ぶつぶつ言っていないで早く来なさい！」

お父さんが怒鳴っている。いつのまにか駅に着いていた。改札を通った三人が列車に乗り込む。ミカちゃんは列車に乗る前に、振り返ってこちらにピースサインを出して、ちょっと照れたように微笑んだ。そして、駆け足で列車の中に消えていった。

僕は上空高くのぼって、走り出した列車の行方を目で追いながら考えた。

ミカちゃんのケータイに映ってる死んだ人って……。

梶村さんは知っているんだろうか、それより幸平、気づいてるんだろうか？だからいやいや追っかけまわされてたんだろうか。

それにしても、ミカちゃんはこれからどんな大人になるんだろう？ミカちゃんとあのお父さんが和解する日は来るんだろうか。もう冷め切ってるようにみえるけど。ま、本人たちが時間をかけて解決するしかないんだろうけどさ。

僕らって、ほとんど生きてる人間の役に立ってないんだなあ。た

だ存在して、ぼーっと生きている人を傍観しているだけなんだ。
悲しい、すごく。

第五章 葛西アイカ 1

いいか、僕は真面目な、そしてまともな人間なんだ。今でこそユーレイなんかになっっているけどな、それでもまともなんだ。少なくとも、字室みたいに暇つぶしにそこらへんの人を殴って遊んだりしないし、幸平みたいに、ブツブツ独り言を言いながら湖の上空でアクロバット飛行して悦に入ったりしない（すごく不気味な姿なんだ、これが）サミみたいに酒に酔ったわけじゃないのに酔っ払いのような赤い顔で歌や踊りをやって、船から落ちたついでに船ごと湖に沈んだりしないし、梶村さんみたいに、米軍がテレビに映るたびに銃を構えたり、情けない政治家が映るたびにけしからんと言っていきり立って怒鳴ったりしない。

僕は普通だ。狂ってない。狂いたくない。たとえ死んでいても永遠に過ごさなきゃいけないとしても絶対に狂いたくない。

しかし、しかしだ。最近妙に空中アクロバット飛行がやりたくてうずうずすることがある。いや、だめだ、それをやったら自分としてはおしまいだ。だから我慢している。そして、この先ずっとここにいなきゃいけないということに絶望する。自分が一番までもで健全だということだけにすがって何とか平静を保っている。なのに、なのに……。

「岩本ってさあ、ちょっと変わってない？」

理科室のパソコン画面を見ながらスダがつぶやいた一言に、僕は凍りついた。

「ど、どこが、どこがだ、こんなにまともな奴がどこにいるんだ！」「ど、どうしたのさ、詰め寄ってくるなよ！怖いって！」「スダが慌てて椅子ごと後ろにさがった」「自分でまともって普通言わないと思うけど」

「悪かったな！どうせユーレイだよ！」

「機嫌悪いなあ。なんかあったの？ユーレイどうしの戦争とか？」

突拍子もないことを言い出すスダ。でもそのほうがまともだな。

アクロバット飛行よりは。

「みんな変になってるんだよ。死んでからだいぶたつと」

「あつそ。俺が変わってるって言ったのは、最初に会ったときより元気がなくなつたって言いたかったただけなんだけど」

「元気がない？」

「ない。全然ない。疲れてるように見えるし、いきなり詰め寄ってくるし」

……シヨックだ。やっぱり死んでから長くたつとそうなるのか……

「岩本くん。最近変だよ」

砂浜で幸平に言われた。アクロバット飛行に言われたらおしまいだ！

「ど、どこが？」

「心ここにあらず。何か気になることでも？」

お前のアクロバット飛行のせいだ！と言いたかったがやめた。

「このままだと頭がおかしくなりそうで怖いんだよ。いつまでもここにいなきゃいけないと思うとさ。誰にも僕らは見えない。やることもない」

「わかる。わかるけど、そこは工夫して耐えるしかないよ。なんなら一緒に特殊飛行でもやらない？死んでないとできないことだよ」

ニヤリと笑う幸平。やめろ！僕を悪の道に勧誘するんじゃない！

「嫌だ！それだけは嫌だ！」

大声で叫ぶと、幸平が不満げな顔をした。

「そんなにきつく言わなくなつていいじゃない」

「しょうがないだろ！不気味なんだよ！お前のアクロバット飛行は！」

「あー！そこまで言う？」幸平が宙に浮かんだ「だったらせいぜい一人で悩んでなよ！」

そのまま湖の向こうへ飛んでいつてしまった。

「ちょっと待てって！悪かったって！……あー行っちゃった」

砂浜に一人取り残された僕は、湖を眺めて途方に暮れた。いつも通り遊覧船が就航している。そののんきな動きがとても気に障る。何が楽しくてあんなものに乗ってるんだろう、みんなは。そんな時間があつたらもっとやることがあるだろうに、まだ生きてるんだから。

そんなことを考えていると、隣に人の気配を感じた。見ると、女の子が一人、浜辺に立って湖を眺めている。

知っている顔だ。確か、中学の、葛西アイカだ。ショートカット、きれいな足。

こんなところで何を見ているんだろう？何か考え事でもしてるんだろうか？

僕はそーっと近寄って、彼女の横顔をじっと見つめた。きれいだった、何か僕らには見えないものでも見てみたいに、目がうつろに光っていた。胸が高鳴るのを感じた。いや、死んでるからそんな感じしないはずなんだけど、確かにそのとき、僕は動悸みたいなものを感じたんだ。

「さっき親子喧嘩を見つけてよ、話を聞いてたら、母親の言うことが支離滅裂なんだよな。すっげー腹立ってきてさ、ちょっと横っ面張り倒してやったんだ」

こんなことを嬉々としてしゃべってる奴は、もちろん字室だ。

「そしたらさ、ちょっと力入れすぎちゃったらしくて、母親が失神しちゃってさあ。さっきまで怒鳴り散らしてた息子が青くなつて『お母さん！しっかりして！』って泣いてやがんの」

「そりゃ驚くだろ、突然倒れたら」

「でもさあ、すっげえ情けない顔してんだぜ。かなり体格のいい男がさ、なんか俺バカバカしくなっちゃって、そのまま帰ってきた」

ああ、町内の人に警告したい。『不審な暴行、殴打事件があつたら、それは全部字室の仕業です』なんて、どっかに書いておくのは

どうだろう？でも、字室の姿は誰にも見えないから意味ないか。

実際問題になってるんだ。町内で通行人が頭を殴られる事件が多数起ってるって。犯人は捕まってるってないし、目撃情報もない（当たり前だよな）

「お前！いいかげんにしろ！」

梶村さんがニュースや噂でその話を聞くたびに、字室に向かって鬼のように怒鳴りつけるんだ。字室の奴、梶村さんの前では、すみませんすみませんって、それこそ泣きそうな顔で謝ってるんだ。こんな状態でさまよってるのが苦しくてしょうがない、ついやってしまっんです、なんて言う。その瞬間だけ、本当に深く反省しているように見える。

でもまたやるんだよ、数日たつと。同じことを。もう癖になってるんだろうなあ。

周遊中の遊覧船の上で大の字になって寝転んでいる字室を横目で見つつ、人を殴る力が自分になくてよかったと思う。でも退屈だなきっとみんな退屈なんだろうなあ。

「そういえばサミは、昼間は眠ってるんだっけ？」

「まあね、あいつはほんとに一人ぼっちだからな、起きてたつていいことないだろ」

「でも昼間に出たほうが人は来るだろ。この遊覧船とか、ボートとか」

「そうだなあ、でも昼間には出れねえんだよ。出れたらとっくに出てるだろ」

「そうだね」

遊覧船の乗客は少ない。夏休みはいつもの十倍は来てたんだけど、それでも観光シーズンの行楽地とは思えない少なさだった。中を見ても、席はほとんどあいていてガランとしてる。

まるで、生きている人間がみんなここを避けているみたいだ。

図書館に行ってみた。町の図書館のロビーには、その日の新聞が

数誌貼り出されている。僕でも読めるわけだ。あと、たぶん幸平が来てるんじゃないかと思つて。先月までは町中で人間観察にいそしんでいたけど、最近は活字が恋しくなつたと言つていた。だったらアクロバット飛行はやめて、読書に専念してくれよ、全く。

ものが動かせるつていいよな。僕もそういう能力がほしかった。暑いとか寒いとか感じてても役に立たない。かえつて不快だ。

幸平は新聞の縮刷版のコーナーにいた。本棚の前に立っている幸平は、ふつうに生きている中学生にしか見えない。でも死んでいるんだよな。

「何を調べてんの？」

「別に」本から目を離さずに幸平が返事した「ただ見てるだけ。面白いんだよ。これさ、自殺の記事なんだけど」

覗いてみると、内容はだいたい次の通り。

『札幌市の高校三年生、田中昭義君（１８）が、自宅の倉庫にて首をつつて死んでいるのが発見された。昭義君は大学受験に失敗しており、それを苦にした自殺とみられる』

「これがどうかした？」

「じゃ次、こつち」

本棚から別な縮刷版が飛び出してきた。空中ではらばらとページがめくられていく。これやてみたいなあ。かつこいいじゃないか、本を操る男。

「ここ、やっぱり自殺」

幸平が指差した記事はだいたいこんな内容だ。

『札幌市内の高校三年生（１８）が、自宅近くのマンションから飛び降りて死んでいるのを、近所の主婦が発見した。大学受験に失敗した、申し訳ないとの遺書が発見されたことから、受験の失敗を苦にした自殺とみられている』

「……これが何？」

幸平が何を言いたいかさっぱりわからなかった。

「名前、出てるのと出てないのと、だよ、本名と匿名。どうして違

うと思う？同じ受験を苦しめた自殺だよ？札幌の」

空中に浮かんだ二つの記事を見比べる。片方は1965年、もう片方は1999年だ。

「年代が違う？」

「ま、そうだね」幸平が満足げに笑った「昔はね、感電自殺だろうが未成年の首吊りだろうが、エキセントリックな焼身自殺だろうが、実名で新聞に載ってたんだよ。普通の交通事故みたいに。それが、八十年代後半になると、自殺だけ名前が伏せられるようになるんだ。ま、いじめとか、事件性の高い、いかにも他殺って場合には大々的に名前が出るけど」

「何で変わった？」

「知らない。プライバシー意識が高まったからか、いじめ自殺が増えたからじゃない。でも、僕が思うに、昔は自殺も単なるありふれた死だったんだよ。病気や事故で死ぬのと同じくらい自然な。だから僕は自殺で実名出してもいいと思うんだけどね」

「自殺と事故は違うだろ」

「うっん、大して変わんないと思うよ」

「でも」

「あのう」

横からかばそい声がしたので、僕と幸平がそっちを向くと、そこには、あの葛西アイカが立って、こちらをじっと見つめていた。

「それ、私も気づいてました。自殺の記事の名前」

僕は何と返答していいかわからなかった。幸平と顔を見合わせてしまう。だって、僕らは生きている人間には見えないはずだ。なのに。

「僕らが見えるの？」

「はい、あの、あなたは見えます」幸平の質問に答えた声は、今にも消えてしまいそうなほど小さい「あの、昨日も、湖の上飛んでるの、見ました」

そつえば昨日、砂浜で湖を見ていたな、あれは幸平が見えてい

たのか！

「ちよつと待つて」僕は葛西アイカと幸平の間に割つて入った「僕は見えてないのか？」

「ここにいる人は見える？」

幸平が僕を指差した。葛西アイカはこちらを、正確に言うと、幸平の指のあたりを見て、首を横に振った。

……み、見えてない！僕は！

「ただ、誰かとお話をしているなと思って」

「不思議だなあ」

幸平が例の口癖を發した。

シヨックだ。なんでスダみたいなそばかす男には僕が見えるのに、よりによつてこんなかわいい子に見えないんだ！不公平だ！

「あの、あなたは、何ですか？」

アイカが幸平を見ながら、少し怯えたような顔で言った。

「うーん、ユーレイだね？」

幸平！わかりきったことでこっちに同意を求めるんじゃない！

「ユーレイ、死んだんですね」

「うん。ダンプでドーンと」

「はあ、ダンプですか」

「それでヒマだからここにいる」

「ヒマですか？私もヒマです。お名前は？」

「幸平って呼ばれてるよ」

淡々と続く会話。なんだかとても間抜けに聞こえるのはなぜだろう。イライラしてきた。

「でも今、まだ授業中のはずだね。中学校」

幸平の言葉で思い出した。今日は火曜日、午後一時だ。中学生が町の図書館にいるわけがない。そういえばアイカは制服を着ていない。地味な灰色のスカートに、青いシャツという格好だ。それでも綺麗な足はすごく目立ってる……いや、そこしか見てないわけじゃないが。

アイカが黙り込んでしまった。返答に困っているようだ。目が横向きに泳いでいる。

「サボリ？僕は別にどうでもいいんだけどね、アハハ」

幸平が笑った。同時に、空中に浮かんでいた縮刷版がボタンと音を立てて閉じ、もとの本棚に収まった。アイカが驚いて目を丸くした。

「岩本君、帰ろう」

「えっ」

幸平は近くの窓に向かって飛んでいった。何だよ突然。

「あの！」葛西アイカが叫んだ、なんだかせっぱつまった顔で「またここに来てください」

「そんなことより、学校行ったほうがいいと思うよ、葛西アイカさん？」

「何で名前……」

驚いているアイカに返答せずに、幸平は窓から出て行った。迷ったが、僕も幸平のあとを追った。去り際に名前知ってますっていうのは、なんかあやしくないか？幸平。気を引いてるみたいじゃないか。

いや、別に嫉妬してるわけじゃない、そんなことは絶対ない。でも。

第五章 葛西アイカ 2 それは恋だわ

幸平の奴、そのまま湖に直行して、空中十七回転をやりはじめた（十七回が限界なんだって！くだらないと思いつつ、やってみたい気もしてくるから怖い）絶対機嫌がいい、これは。

「何喜んでるんだよ」

僕の声は自然に低くなる。体がないのにどういことだろうと思う。

「喜んでなんかいないよ。岩本君こそ何さ、機嫌悪そうな顔して」

「別に機嫌悪いわけじゃない」

「たまにいるんだよね。僕が見える人」

「どうして幸平しか見えないんだよ」

「さあ、同じ記事を見てたからかもしれない。わかんない。きつとたいした意味はないんだよ。岩本君がスダ君にとりついちゃったのと同じ。理由はない」

どうせなら、美少女に見える無意味に遭遇したかった。納得がない。

「でもさあ」飛ぶ動作をやめて、幸平が僕の前に止まった「自殺の記事ばかり見てたってことは、自殺志願者なのかもね」

「えっ？」

「だって、ふつつ自殺の記事なんて熱心に掘り出さないでしょう。よほど興味があるか、ヒマじゃないと」

葛西アイカが自殺志願者？

湖に立っていたアイカのうつろな目つきを思い出す。彼女に自殺なんて言葉は似合わない。でも、映画だったらきれいな画面になるかもしれない……って、そんなの嫌だって！

「止めるよ！もしそうだったら！」

「止められるようだったら止めるけど、まあ、まだ推測だからね、あまり気にしないんだよ！岩本君！」

幸平はそう叫びながら、湖の上を高速で飛び回った。人間飛行シヨ！。不気味だ。小型飛行機なんか人間を吊り下げて、そのまま高速で空中回転したらああいふふうになるんじゃないかと思わせる不自然な飛び方。空中首吊りシヨ！だ。幸平の顔が半笑いだからよけいに怖いんだよ。

自分が飛んでいる姿を一度幸平にみせてやりたい。無理だけど。僕は町に帰ることにした。葛西アイカを探そうと思った。気にするなと言われても無理だ。

夕方になった。アイカは見つからなかった。家に帰ったんだろうと思っただけ、彼女の家なんてどこにあるかわからないし、一軒一軒家を覗くのも気が引ける。諦めて商店に戻ってきた。

中に入ったとたん、横目で梶村さんがこつちを睨んだ。最近機嫌が悪い。たぶんテレビに映っている政治家のせいだろうな。最近国会中継が入っているらしい、昼間は。

「アメリカはいつまで他国を侵略する気なんだ！」

僕に向かってそんなことを言われても。軍人に怒鳴られると怖い。たとえ死んだ人でも。

「僕に聞かれても困るんですけど」

「隊長。最近の若い奴は何も知りませんって」横に座っている字室がせせら笑った「たぶん、なんで米軍基地が日本にあるかも知らねえだろ？」

「それくらい知ってるよ、戦争のせいだろ？」

そう答えたら、字室が鼻先でヘッ、と笑った。明らかに人を馬鹿にした笑い方だ。

最近この二人は話が合うらしい（もちろん、字室が暴行事件を起こさなければだ）話題はたいていアメリカや、その他強国の悪口だ。梶村さんは未だに『日本を守る』というスタンスで話をしているらしい。問題は字室だ。過激なんだよな。発展途上国（この言葉今使っていていいんだっけ？）が貧しいのは怠け者が多いからだとか、暴動

を起こす奴らなんか死んでもしょうがないとか、世界は所詮強いものが勝つんだとか、そんなことばかりしゃべっている。

「要するにお前、弱いものが嫌いなんだな」

梶村さんがため息のような声をだした。

「怠けてる奴が嫌いなんだよ。援助しろなんて叫んでるヒマがあったら働けっての」

「だから、働くところがないんだろ」

僕がそういうと、鋭い視線がこっちを刺した。今は日本だって働くところがないんだぜ、と言いつうになっただが、やめた。

「また抽象的な話してる……」

幸平が帰ってきた。

「なあ、まさか、今までずっと特殊飛行してたんじゃないだろうな」
昼間に幸平と別れてから、もう六時間近くたっている。

「まさか、葛西さんの家を覗きに」

「何っ!？」

葛西アイカの家を覗いていた……犯罪だぞ! ずるいぞ幸平!

「おい、俺らの話のどこが抽象的なんだよ」

字室が幸平をにらんだ。

「強国とか怠けてるとかそういう話が嫌いなだけ、僕は」

「なあ幸平、葛西さんの家ってどこに……」

「何だよ、単に嫌いなだけかよ」字室がヘッ、と馬鹿にした声で言った。「お前どうせ何も考えてないだろうが」

「少なくとも、字室君みたいに汚いことは考えてないね」

幸平も字室をにらみ返した、軽蔑の顔で。

「なあ、葛西アイカの……」

「何だと! この!」

「字室、怒るな」幸平にとびかかろうとした字室の前を、梶村さんの銃がさえぎった。「それより、岩本がさっきから何か聞きたがっているが」

三人の視線が僕に集まった。部屋には、フデさんがお茶をすす

音だけが妙に響いた。

「……何でもありません」

僕はいたたまれなくなつてその場を退散した。真面目に戦争の話してるところで、女の子の家の住所なんか恥ずかしくて聞けないじゃないか。

「それは、恋だわ、恋なのだわ」

僕が昼間の出来事を話すと、サミがうつとりした顔で月を見ながらつぶやいた。船の先端に立っていた僕は、あやうく湖に落ちるところだった。浮けるから落ちるわけないんだけど。

「きつとその子は幸平に恋をしてしまったのだわ。そして自殺を考えているのだわ。そのうち湖に浮かんで発見されるのよ。そしてめでたく私たちの仲間入り」

「おいおいおい、縁起でもないことを言うなつて、単に葛西さんに幸平が見えただけなんだつて！」

「いいえ、恋です！」サミが強く断言した「じゃなきゃつまんないじゃないの！」

つままないとかそういう問題じゃないと思うが。サミはすっかり仲間が増えたような顔をして、最近の女の子は何を話したがるのかしら、ミカちゃんにもっと流行を聞いておけばよかったわ、とか言いながら、船の上をつま先立ちでくると回った。スカートがひらひらと揺れる。そういえばサミのことをあまりじっくり見たことがなかったな。

サミもけっこう綺麗な足をしてるけど、葛西アイカにはかなわない。

第五章、葛西アイカ 3 気になる？

次の日、幸平が見当たらないので町内を探し回っていると、町外れの道端でしゃがみこんでいる葛西アイカを発見した。近寄ってみると、いつかのようにぼんやりした目で遠くを眺めているようだ。制服を着ているところを見ると学校帰りだろうか。でもまだ昼なんだよな。

いったい何を考えているのだろうか？僕はアイカが眺めているであろう景色と、彼女の顔を交互に見た。山側だから家もほとんどない山と林と空き地（昔は畑だったんじゃないかと思われる草ぼうぼうのくぼ地）だけだ。

しばらく彼女の横に座って考え事をしていた。ときどき顔をのぞきこんでみても、彼女には僕が見えてない。アイカはいつまでたっても動かなかった。僕は幸平を探しに、再び町へ戻った。人に気づいてもらえないことがこんなに悲しいことだとは思わなかった。

学校に向かう。図書室にいるかもしれない。いなかったらもう一人の友達に会いに行けばいい。

中学校には一応コンピューター室がある。でも授業中しか使わせてもらえないらしい。（休み時間くらい開放しろ！全く）自由に使えるのは理科室にある二台のウィンドウズ、一台の古いマッキントッシュ、それだけだ。たいがいの生徒はウィンドウズを使いたがるので、スダに付き合うときはむりやりマッキントッシュを使わせる。他の二台とは席が離れてるから、ぶつぶつしゃべっていても問題ない。だいいち、どうしてみんなウィンドウズに惹かれるんだろうなあ。あんな欠陥だらけのOSにさ。

「授業でどこまで習う？」

「エクセルの使い方は習った。あとは、文字入力 of 課題の提出。去年はペイントで絵を描いて提出だったよ」

「そんなの何の役に立つんだよ……」

「だよ。やっぱインターネットが見れないと」

スダがニコニコしながら見ているのは何かという、アイドルの写真が集まっているサイト。しかも露出度超高め。

「いっつもそこじゃん。ほかに見たいものないのかよ」

「しょうがないじゃん。チャットもアクセス禁止だし、学校の掲示板にしか書き込みできないし。つままないだろ？」

「つままない……」

聞き覚えのあるセリフだ。

それならプログラミングでもやったらどうだと言いたかったが、説明するのがめんどくさいのでやめた。僕だつてたいして知ってるわけじゃない。葛西アイカのことを聞こうと思ったが、それもからかわれそうだからやめた。

それにしても、この学校のパソコンはおかしい。アイドルのサイトは見れるくせに、個人のサイトやブログには一切書き込み禁止だ。どういう設定だよ？

午後の授業で、体育館の天井の鉄骨の上から、バレーのシュートを六回連続で失敗したスダを眺めていると、視界に見慣れた人物が入ってきた。字室だ。

「岩本、なにしてんだよこんなところで」

「友達の観察」まさか殴る標的を探してるんじゃないだろうな「字室こそ何やってんの」

「ヒマだからうつってただけだよ。友達つてどれ？」

「右側のコートの、一番動きが変な奴」

具体的には教えないことにした。暴行のターゲットにされては困る。

「みんな変な動きに見えるな」字室がまた鼻先で笑って見せた「こんな授業真面目にやっただけでどうせみんな死ぬのになあ、あほらしくならないのかね」

「あの中には、自分が死ぬと思ってる人はいないだろうね」

コートの中で跳ね回っているジャージ姿を見る。僕だって、中学のときにはそんなことは考えてもみなかった。PSやパソコンゲームの中では人はよく死んでいたけど。

「さあどうかなあ」字室が凶悪な笑いを浮かべた「案外明日あたり、あの中の誰かが車にはねられるかもしれないねえよ」

不吉な予言に固まってる僕を置いて、字室は消えた。被害者が出ないことを祈るしかない。

コートに目を戻すと、ちょうどスダがボールを受けようとしてつまずいてこけたところだった。体育館に笑い声が響く。スダも、立ち上がってよろめきながら薄笑いを浮かべた。その表情は、はたから見ていてもかなり痛々しい。

「日本も軍隊を持つべきだ！自衛隊なんて生ぬるい！」

元日本軍二等兵が叫んでいる。

「隊長、自衛隊だって軍隊ですって。だいいち日本で徴兵したってまともな男が集まらない」

字室がまた意地悪な笑い方をした。なぜか僕は昼間のスダを思い出した。あいつが軍隊に入ったら三日で死にそうだった。

幸平は二人を無視してテレビをじっと見ている。ユーレイたちの会話なんか知らないフデさんは、食後のべこ餅を口に運びながら帳簿をつけている。いまだにソロバン派。

「幸平さ、昼間どこ行ってたの？」

「あれ、もしかして探してた」

幸平が僕のほうを見てニヤリと笑った。

「別にそうじゃないけどさ」探してた、というのが嫌なのでさっさと本題に入ろう「葛西さんが、道端に座り込んでるのを見たんだよね」

「それ何時ごろ？」

「ちょうど昼。そのあと学校に行ったら昼休みだったから」

「ふーん」幸平はテレビに目を戻した。二宮由希が有能なテレビキヤスター役で出ているドラマだ「葛西さんね、もう一週間くらい、学校に行ってないらしいよ」

「そうなの？」

「お母さんも気がついてないみたい。朝はちゃんと制服着て8時には家を出て行くから」

二宮由希が恋人役の俳優と抱き合った。幸平の顔が少しだけゆがんだ。

「つまり、サボってる」

「登校拒否だね。それも親には言えない理由だ」

「なんで？」

「わからない」幸平がまたこっちを向いた。こんどは笑ってなかった「明日聞きに行ってみる？そんなに気になるんなら」

「別に気にしてるわけじゃないけど」

「じゃ、行かない」

幸平がまたテレビのほうを向いた。……からかわれている気がする。

「わかった、気になる。凄く気になる。だから聞きに行こう、明日！」

「はじめからそう言いなよ」

幸平が含み笑いの声でつぶやいた。テレビの画面では、二宮由希が俳優を平手打ちにしたところだった。幸平がアハハと声をあげた。僕は幸平を蹴飛ばしたい気分だった。

第五章 葛西アイカ 4 死にたいと思うのっていけないことですか

次の日。幸平が葛西アイカの家に案内してくれた。家といっても、長屋みたいな汚いアパートの一室、今にも崩れ落ちそうだ。部屋は二つあって、そのうちのひとつはアイカの部屋になっている。

「……なんていうのかな、個性的な部屋だね」

部屋の中はすぐく散らかっていた。部屋中に本が散らばっている。本棚があるのに、なぜか本ではなく人形が並んでいた。しかもその人形が、腕がなかったり足がなかったり、体の一部が必ず欠けている。一つ一つよく見たが、五体満足なものはひとつもなかった。窓際には握り拳よりひとまわり大きい球根が水耕栽培されている。

「これは去年衝動買いしたアマリリスだねえ」

幸平！なんでそんな事まで知っているんだ！？

「それより岩本君、この部屋に散らばってる本を見て、何か気がつきませんかあ」

明らかにからかっている口調の幸平。頭にきたが、言われたとおりに本を一つ一つ見て回る。

「えーと、『自殺者の時代』『現代自殺事情』『井島ちづるはなぜ死んだか』『計られた太陽・夭折詩人の遺稿集』『さようなら十七歳』……」

自殺の本ばかりだ！

「それにね、極めつけは、このノートだね」

本棚の裏からありきたりなノートが飛んできて、空中でばらばらとめくれた。幸平って、本当にプライバシーの侵害が好きなんだな。ノートの中を覗く。読むうちに気分が悪くなってくる。内容はこんな感じ。

『1979 道新

水野明人 十三歳 飛び降り 「俺はもう死ぬけど、どう気持ち表現していいのかわからない、さようなら」との遺書あり。

多田健一 十四歳 電気コードを胸に当てて死亡。電気スタンドのコードを切って、胸にセロハンテープを貼ってタイマーをセットした。成績が落ちたことを苦にしたらしい。

1980

片野瑞穂 十六歳 部屋で火だるまになっているのを母親に発見された。焼死。遺書はなく、自殺と見られるが原因は不明。特に変わった様子はなかった』

…… っで感じて、年代ごとに自殺者リスト（しかも実名だ！）を作ってるんだよ。大学ノート一冊分。遺書の内容、自殺の手口、いろいろ書いてある。1960年に始まり、1987年でとりあえず終わっている。

「見覚えのある記事だなあ、これ。きつと縮刷版から書き写したんだね」

幸平が感心したようにため息混じりに言った。

「何でこんな怖いことするんだよ」

怖いといいつつ僕はまたそのノートを見てしまった。『吸水塔わきの木の、地上4メートルの枝にロープをかけて首を……』何なんだこの具体的な記述は！想像してしまうじゃないか！

「興味深いデータだね。これ本にしたら売れるんじゃないかな」

「そういう問題じゃないだろ！こんなノート書いてる奴絶対まともじゃないぞ」

やっぱり葛西アイカは自殺志願者なのか？それとただ自殺に興味があるだけなのか？

とにかく、こんな不健康な趣味はやめさせたい。やめさせないといけない。でもどうやって？

「幸平、何とかならない？」

「何を？こういう人っているんだよ。生まれつき死に惹かれてくよな、考え事せずにいられないタイプってさ。別に止めようとは思わない。ちよつと僕に似てるかもね」

「どこがだ！どこもかしこも似てないぞ！僕は認めないぞ！

「じゃ何だよ？死んでもいいっての？葛西さんが！」

「落ち着いてよ。だって、僕らだってもう死んでるじゃない」幸平が平然と言い返した「大丈夫だって。ちよつと甘美な夢見てるだけだよ。きつとそのうち収まる」

「だいたいけど」

僕は本棚に入ってる手足のない人形を見た。これはいったい何だ？自殺と何か関係があるのか？

「幸平、この人形なんだけど」

「ああ、それ、僕もよく知らないよ。でも、ゴミ捨て場から壊れた人形を拾ってるのを見たことはあるな」

「全部拾った人形なのか？」

「知らない。最初に来たときにはもういっぱいあったから」

「最初に来たときっていつ？」

「さあ……死んでからかなりたった頃」幸平はノートを本棚の裏に戻した「本人を探そう。話してみようか」

僕らは不気味な部屋をあとにして、図書館へ向かった。

「あ、来てくれたんですね」

図書館の奥、薄暗い本棚の前で、幸平の顔を見るなり葛西アイ力がぱつと顔を輝かせた。きれいだ。でも、僕の姿は見えてないだろうな。悔しすぎる。

「敬語使わなくていい。学校は？」

「……行っていない」

アイ力は消え入りそうな声を出して下を向いた。

「あ、そう。何見てたの？」

「昔の新聞。ちよつと調べたいことがあって」

「自殺の記事？」

数秒の沈黙ののち、アイ力が無言でうなずいた。

「あの」また消え入りそうな声がした「死んだ人なんだよね」

「僕？そうだけど」

「死ぬのってどんな感じですか」

アイカが好奇心に満ちた顔で幸平を見ていた。どんな感じっていわれても。幸平は本棚を見つめながら何か考えているようだったが、そのうち、何でもないことのように淡々と答え始めた。

「たいていの人は消えてしまっんだよ。僕は例外。感覚がほとんどなくなつて、ただ世の中をぼんやり見てるだけ」そしてアイカのほうを向く「じゃ、今度は僕が聞くけどさ、生きてるってどんな感じ」「つまんない」

アイカが即答した。かなりはつきりした声で。なんか最近この単語よく聞くな。『つまんない』ってさ。

「そーかもね。でも死んでるのもつまんないよ。それだけは覚えといてね」

そう言うが早いか、幸平はなんと窓から飛んでいつてしまった！

「あ、待って！」

アイカが窓にかけよつた。僕も慌てて窓から外に飛び出したが、幸平の姿が見当たらない。図書館の別な階にいるかもしれないと思つて館内を飛び回つたら、外国文学のコーナーにいた。クライゾーネンだか何だか、むずかしい名前の本を見ていた。脚本のようだ。「人形のこととか聞くんじゃないの？」

「僕忙しいから」幸平が空中に浮かんだ脚本を見たままつぶやいた「彼女をつけるんだつたら一人でやってよね」

「何を突然怒り出してんだよ！」

「怒ってないよ。急に気が進まなくなつただけ」

「なんだそれは！？」

幸平はそれ以上僕を相手にしようとしなかった。むかついたが、言われたとおりに一人で葛西アイカをマークすることにした。ストーカーじゃないぞ。どうせヒマなんだからいいだろ？

それから数日。僕はできるだけ彼女を見てることにしたのだが、

学校に行く気配が全くない。制服を着て家を出て、図書館へ行つて、夕方帰る。毎日これだ。毎日新聞の縮刷版や、自殺した人や夭折した作家の本ばかり読んでいる。一体何を考えているんだろう？

「岩本君。最近凄く気味悪い」

本棚の裏からいきなり幸平が出てきた。驚いた僕は天井まで飛び上がってしまった。

「おどかさなつて！」

「だって気持ち悪いんだもん。そんなに葛西さん好きなの？」

「大声で言つな！お前の声は聞こえるだろうが！」

「で、どうなの？」

ニヤニヤした幸平が小声で尋ねた。

「悪かったな！心配なんだよ！」

うつかり開き直ってしまった。しまった！と思ったときにはもう遅かった。

「へーえ」幸平がますますにやけた顔をした。「なんなら僕が言つてあげようか？友達が君を心配してつけまわしてますけどって」

「幸平！」

ああ、死んだから血なんて通つてないはずなのに、たぶん今僕の顔は真っ赤だ。

「あ、また来てる」葛西アイカが幸平に気づいたようだ。「いつも何を読んでいるの」

「舞台の脚本」

「脚本好きなの？」

「昔演劇をやつてたんだ。生きていた頃」

「そう」

そのまま二人は黙っていた。幸平は何もなかったかのように、別な本を取り出して読み始めてしまったし、アイカは本を読むフリをしながら、ときどきちらちらと幸平を見ている。・・・やっぱりそうなのか、サミが言つたとおり、恋なのか？

「幸平、さん？」

アイカがちよつと頬を赤らめて幸平を呼んだ。さんなんてつけるんじゃない！こんなのに！

「さんつけなくていいよ。何？」

「死にたいと思うのって、いけないことですか？」

僕と幸平が同時にアイカの顔を見た。アイカは真剣な目で幸平をみつめていた。どこか狂気じみていて、それでいてとてもきれいな目で。

「そう思ってる人はたくさんいると思うよ」幸平はやはり平然と言った「悪いことではないよ」

「そうですよね」

「死にたいの？」

「ていうか、生きていても何も面白いことがないし」

「死んでもないよ、面白いことは」

「でも幸平、楽しそう」

「ぜんぜん楽しくない」

幸平がそう言って顔を伏せた。見ていた本が閉じて、本棚に勝手に納まった。

第五章 葛西アイカ5 窓ガラスがいつせいに

図書館から出てきたところで、アイカのまわりを制服姿の女子が五人、取り囲んだ。

見たところ上級生っぽいが、みんな髪が茶色っぽくてばさばさで、目つきが凶悪だ。

「ちよつと来てくれる？」

一番怖い顔の女がアイカをにらみつけた。

「でも……」

戸惑っているアイカの腕をもう一人の女がつかみ、無理やり引っぱっていく。アイカはこちらを見て、口だけ『助けて』と動かした。「幸平！」

「追いかけよう」幸平の表情が険しくなった「あの連中が登校拒否の原因だよ」

何と答えていいかわからない。

「来ればわかるよ。こんなのかな町でもクズがいるってこと」

アイカが連れて行かれたのは、放課後の空き教室だ。校舎全体が静まり返っている時間だ。何をする気だろう？

突然、女の一人がアイカを壁に向かって突き飛ばした。アイカの体が壁に跳ね返って床に落ちた。

「何してる！」

「岩本君、我慢して」

「誰？」上級生が叫んで一斉にこっちを向いた「その二人！ちよつとこっち来な！」

二人？僕と幸平は顔を見合わせた。この不良には二人とも見えているのか？

「何をやってるんですか？」幸平はぜんぜん驚いた様子を見せずに平然と言った「見たところかなり乱暴そうだけど」

「うるさいね。こいつが生意気だから悪いんだよ」

髪の長い女がアイカの腹をおもいきり蹴った。うつうつめく声がした。

「何するんだよ！」

「やめなよ！」

僕ら二人が同時に叫ぶ。

「だったらあんたたちがこっちに来れば？」

「そんな必要ないね」幸平が冷たく言い放った。とにかく、暴力はやめて帰りなよ」

「幸平、そんな言葉聞くような相手じゃないって」

上級生たちはキャハハハと笑って、手元の椅子をこちらに向かって投げてきた。椅子は外れてドアのふちに当たった。怖いな。生きていたらこれだけで十分ひるんで逃げ出したかも。

「何が目的なんだよ」僕は震えそうになりながらなんとか言葉を発した。「葛西さんをいじめて何かいいことあるか？」

「むかつくからいたぶってんじゃん。悪い？」

ダメだこいつら。最低だ。でも、相手はたかが中学生なのにすごく怖い。何とかしないと。

一人で焦って黙り込んでいると、幸平が数歩前に出て、今までに聞いた中で一番冷たい声でこう言った。

「……口で言っただけでわからない手合いなんだ。それじゃしょうがないね」

「幸平？」

僕が幸平のそばによつて、その敵意に満ちた顔を見たのと、教室の窓ガラスがいつせいに音を立てて割れたのは、ほぼ同時だった。「キャアアアアアア！」

窓の近くにいて、もろに破片を浴びた五人が悲鳴を上げた。続いて空気が振動するような気配、ガラスの破片が落ちて床に当たる音。窓ガラスは見事に砕けていた。全部だ。外の冷たい空気が入ってくるのがわかった。僕はあわてて倒れていたアイカに近づいた。す

ると、破片は見事に彼女の周りを避けて落ちていた。怪我はしていないようだ。上級生たちが血まみれになってのたうちまわっている隙に、アイカは立ち上がり、よろめきながら幸平の近くへ向かっていった。

「早く帰りなよ」

幸平が声を発した。アイカがびくつと体を震わせた。幸平は凍りついたような残酷な目つきをしていた。上級生のほうをじっと見て目を離さない。

「でも」

「いいから！」

怯えた顔のアイカは、幸平と上級生たちを交互に見て、ちよつとの間迷っていたが、廊下に出てそのまま走っていった。

改めて教室内を見る。僕は全身が動かなくなるのを感じた。まるで教室全体がセメントで固められたみたいに、誰も、何も動いていない。上級生たちはへたりこんで頭をおさえてうめいている。幸平はぼやけたような色の目で彼女らを見ていた。

「幸平……？」

「はつきり言うけどね、僕は力をもてあましているみたいだ」幸平が独り言のようにつぶやいた。それから上級生たちにむかつてはつきりと言う「言っとくけどね、これだけで済むと思わないでくれる？」

パキ、と音がしたかと思うと、教室内のパイプでできた机と椅子が、いつせいにガラガラと崩れた。ねじが取れて分解しちゃったみたいに、ばらばらに。音に反応して上級生たちの体がビクツと脈打ったのが見ててわかった。もちろん幸平は指ひとつ動かしちゃいない。

「おい……」

嘘だろう。僕はそう言いたかった。机が崩れたことじゃない。目の前にいる冷淡な少年は、いつもの幸平じゃない。少なくとも僕が知ってる、字室とケンカしてた平和主義者じゃない。明確な意思

を持って他人を脅迫しているんだ。犯罪者みたいに。

「この町くらい簡単にふつとばせるんだからね。手始めに君たちの家一軒一軒つぶしてあげてもいいんだけど、それがお望み？それが嫌だったら、こういうバカなこと起こさないでくれる？今後一生とりついて見張っててあげるからさ」

こんな陰湿な声は聞いたことがない。

上級生たち、逃げるかと思ったが全く動けないようだ。哀れなほど震えていて、誰も顔を上げて幸平を見ることができないようだ。た。すすり泣く声が聞こえてくる。

なあ、幸平、もうやめろ。確かにこいつら最低だけど、やりすぎだろう？

そう言いたいのに声が出ない。でも、伝わったのだろう。幸平が僕のほうを向いた。思わずこっちまでびくつと驚いてしまう。

「帰ろう、岩本君」

幸平は無表情のまま、自分が割った窓から飛んでいった。僕は後を追いつながら。割れた窓を空中から振り返る。明日誰かが見つけたら大変なことになるぞ。どうやったのか知らないけど、机まで壊してさあ……。

幸平の後姿を見ながら、さっきの『力をもてあましているみたいだ』という言葉思い出す。全く動かずに窓ガラスを全部割って机と椅子を分解した幸平。『クズ』の上級生に向かっていった幸平の恐ろしいまでに冷たい顔つきと声……。

どうやら幸平は湖に向かって飛んでいるな、と思ったとき、砂浜に人の姿が見えた。

アイカだ。

「帰りなつて言ったのに」声がいつものものんな幸平に戻っている「何してるのさ」

砂浜に降りた幸平を、アイカはさぐるような目つきで見ていた。

「ここにいれば来ると思って」

そう言つて少し笑った。その顔がすごくかわいらしかった。

「今日が最初で最後だからね、僕が助けるの。ちょっとやりすぎたしね」

ちよつとどころじゃないだろう、と僕は思ったが、

「そうだね、ごめんね」

あつさりとアイカがそう言つて、二人とも沈黙。ああ、いい景色だなあ。年頃の男女が二人……僕はむなしくなってきたので、邪魔になる前に撤退しようと思つて二人に背を向けた。

でも、後ろから聞こえてきた声に、思わず動きが止まってしまった。

「私、死にたいの。そしたら一緒にいてくれる？」

第五章 葛西アイカ6 私が眠るまで

……てつきり冗談で言ってるのかと思った。でも本気だった。アイカは立ち上がって湖に向かって歩き出した。波をかきわけて暗闇の中を、何もためらわずにまっすぐに。

「ちよつと！ダメだよ！アイカ！」

幸平が、たぶん無意識にやってるんだろう、手を伸ばしてアイカをつかもうとした。でも、幸平は人に触ることはできないんだ。

幸平の声なんか聞こえないみたいに、アイカは水の中を突き進む。もう腰くらいまで水に浸かっている。

まずい。僕は以前暇つぶしに湖にもぐったことがあるが、あと数メートルで深さが変わる。このまま進んだら深いところに落ちてしまふ。

「どうしてダメなの？」

アイカが立ち止まって幸平を振り返る。泣いていた。涙が頬を伝って湖面に落ちていく。何てきれいなんだろう！……いや、そんなこと言ってる場合じゃない！

「何やってんだよお前ら」

上空から声、字室だ！

「字室、早く来て！この子水に入って死ぬ気だ！」

僕はめいっばい大声で叫んだが、返ってきたのは奴らしい言葉だった。

「死なしとけそんな奴」

「字室！」

こうしている間に、アイカは幸平に向かってわめきだした。

「どうして止めるの？幸平ならわかってくれると思ってたのに。もう私生きてたって何もいいことなんかないよ。もう生きていたくないよ」

「アイカ！死んだら消えるだけなんだ、みんなそうなんだ。僕のそ

ばになんか絶対に来れないんだよ！」

「なんで断言できるの？可能性はあるでしょう？仲間がいるって言ったじゃない！私が仲間になれない理由なんてない」

「仲間になれる理由だってないんだよ！」

「どうしてよ！」

アイカが悲鳴のような声で叫んだ。さっき上級生に囲まれたときよりもっと追い詰められてる表情だった。死に取り付かれてる人間。今のアイカはまさにそれだ。

どうすればいい？

僕にできることと言ったら……僕は町に飛んで、スダの部屋に飛び込んだ。机に向かって、英語の教科書の上に突っ伏して寝ていたスダがびっくりして飛び上がったが、そんなことには構っていられない！

「お前のクラスの葛西さんが湖に入って死のうとしてる！」

「は？」寝ぼけ眼が僕を見た「何？」

「あとで説明するからとにかく湖に行ってくれよ！自殺しようとしてるんだって！砂浜だ！」

スダは一瞬目をしばたかせて止まっていたが、次の瞬間には部屋を飛び出していった。僕はそのあとを上空から追いかけた。

スダと僕が砂浜に到着したとき、葛西アイカが砂浜に横たわって目を閉じていた。幸平と字室がしゃがみこんでアイカの顔を眺めている。

「うわ！葛西！しっかりしろって！」

二人が見えないスダがあわててアイカの肩を両手でゆさぶった。

「なあ」嫌な予感がしたので聞いてみた「何したの？気を失ってるみたいだけど」

「字室君が殴った」

「は？」

「みぞおちに一発食らわせてやったの。感謝しろよな」

字室が立ち上がり、腕を組んでニタニタと笑った。何て乱暴な。

「そんなことする必要ないだろ！？腕をつかんで岸に引き戻せばいいじゃないか！」

「そんなことしたってムダだろ、また入っていくんだからよ」

「岩本君」幸平が呆れ顔で言った「人を呼ぶっていう考えはすばらしいんだけどさ、人に知られると大事になるんだよ？」

「そんな冷静に考えてる場合か！」

「幸平が生きてる奴にかまうからこういうことになるんだろ？」僕が叫ぶのと同時に字室が怒り出した「甘いことばっか言ってるからこういう奴が出てくるんだよ！もう二度と生きてる奴らに構うなよ！わかったか？」

字室がまくしたてるように幸平を責め始めた。幸平は黙ってうつむいてしまった。

「ああああもう！起きないよ！警察呼んでくるよ！」

そばで説教しているユーレイがいるとも知らず、スダがそう叫んで町のほうへ走っていった。僕は一応助かったらしいアイカの顔を見た。青白くなっているし、暗いからよく見えないけど、とてもきれいだっただ。こんな子なら、生きていればきつと幸せになれると思うんだけど、それも気休めにすぎないんだろうか？

結局自殺騒ぎは町中の知るところとなった。葛西アイカはしばらく病院で静養したのち、母親の判断で、違う町へ引っ越すことになった。つまり、町から出られない僕らは彼女とはお別れってわけだ。その最後の日の夜、もう絶対会わないと言っていたはずの幸平が、アイカの家へ様子を見に行くと言い出した。僕はもちろん一緒についていった。できれば彼女にはこの町にとどまってほしかった。もう無理だろうけど。

アイカは部屋のベッドに横になっていたけど、まだ起きていた。「アイカ……葛西さん」幸平が妙に丁寧な口調で窓に向かって言った「入っていいですか？」

返事をする代わりに、アイカはベッドから跳ね起きて窓を開けた。

「幸平……」

表情がみるみるやわらいで笑顔になった。ああ、いいなあ、この顔。

「調子はどう？もう大丈夫」

「うん、大丈夫」アイカの笑い方が少しさびしげになった「もう会えないと思ってた」

「今日で最後だよ」幸平もさみしそうに笑って答える「なんだか僕、君にすごい悪影響を与えちゃったような気がする」

「そんなことない！」ものすごく大きな声で叫んだので僕らはびっくりした「私は昔から死にたかったの。生きていく目的なんてない死にたい。でも吹っ切れなかった。わからない。私は生きていていいのかわからない。みじめだよ。こんなことになって」

言いながら涙声になっていつて、しまいにはアイカが泣き出してしまった。きれいな泣き顔だと思っていたつ、どこかついていけないな、とも思った。現実生きていて近くにこんな人がいたら、気になるけれど近寄りたいたろうな、とも。

でも言いたいことはなんとなくわかる。みんな多少は思ってることだ。

生きていても『つまらない』んだ。それが理由だ。たぶん。

「それは僕にもわからない。どうしてここにこんな形でいるのか」幸平が窓から離れた「でも君はまだ生きているから、これからわかるかもしれないよ……元気だね」

そのまま、僕は部屋を離れようとした。

「待つて」アイカが幸平を呼び止めた「今日で最後なんですよ？だつたら、私が眠るまでここにいて！」

「でも」

幸平はためらっているようだった。

「今日だけでいいの、眠つたら忘れるから……」

すぐるような目で幸平を見つめるアイカ。ああ、一秒でいいから、そのきれいな目でこっちも見てほしいもんだと思う。無理だけど。

「……眠るまでね」

断るかと思っていたが、幸平は夜明け近くまで彼女と一緒にいた。僕も近くにずっと立っていたけど、ほとんど存在を忘れられていた。部屋は静まり返っていて暗いし、幸平とアイカはお互いを見つめていて、僕なんか眼中にないって感じだし、ああ、イライラする！何だかんだ言って、幸平も相当彼女が好きなんじゃないだろうか？

二人を見ていると、頭にくるような、悲しいような、むなしいような、複雑な感情の波に襲われた。

引越しの日に僕は彼女の家に行ったけど、アイカの姿はもうなかった。部屋もからっぽになっていて、あの不吉な人形の棚もなくなっている。あの人形やノート、まだ彼女は持っているだろうか？いたい何を考えて暮らしていくんだろう？まだ自殺を諦めてなかったらどうしよう。もう彼女に会えないだろうか。僕は辛かった。死んで体がないはずなのに、血管が締め上げられているような妙な痛みを感じた。

それにしても、どうしてこの町で起こることって、中途半端な解決しかできないんだろうか？スダのことといい、ミカちゃんのことといい。やっぱりユーレイが生きた人間にかかわるのがいけないのか？

「岩本君」しばらくして、商店の居間に戻って座り込んでいると、幸平がやってきた。「気晴らしに空中二十回転に挑戦しない？」

幸平はニタニタ笑っているけど、ここ数日落ち込んでいたのを僕は知っている。

「そういう気分じゃない」

「だろうね。だからこそやるんだよ。行動だけでも楽しくしようよ。楽しいというより狂ってるんじゃないかと思えないんだよ、幸平の飛び方は。」

そう言っただけでやりたかったがやめた。ちょっとだけ空中を飛び回ってみたい気がした。何もかも忘れて。

「いいよ。行こう」

僕は幸平と一緒に湖まで飛んで行って、一日中飛び回った、というより踊り狂った。

けっこう楽しかった。でも、とうとう自分も狂い始めてきたかなあと考えると、情けなくて余計に顔が笑ってしまふ。

きつと僕の今の姿は、誰が見ても飛行機ショーの首吊りにしか見えないだろうな。

ちなみに、幸平が割った窓ガラスと壊した机は。怪奇現象としてしばらく地元の新聞を賑わしていた。この町は犯罪の検挙率が低いと町長が嘆いている。かわいそうに。

第六章 幸平 1 十月病

幸平の様子が変だ。

いつもなら町を回ってプライバシーの侵害に励むか、図書館で本を読めるか、湖の上空を不気味に回転飛行してるんだけど、最近はずっと、商店の奥の仏壇のある部屋にこもって、隅っこにうずくまるようにしてブツブツと何かつぶやいている。声が小さすぎて、近寄っても何をしゃべってるのかさっぱりわからない。

悪霊にでも取り付かれたように見えるが、ユーレイが取り付かれるなんて変だよな。

「幸平、ヒマだから湖に行かない？」

「一人で行ってよ」

不機嫌な声はいつもより3オクターブは低い。変声期か？死んだのに。

「なあ、大丈夫か？気晴らしに空中飛行付き合うか？」

「ほつといて」

こんな感じだ。ぜんぜん話に乗ってこない。

「ああ、もう十月か」梶村さんがカレンダーを見て何か納得したようにうだ「じゃ、しょうがないな」

「十月って何かあるんですか」

「幸平は十月になるとうつ病にかかる。毎年のことだ。気にするな」五月病ならぬ十月病というものらしい。何なんだいったい。

字室も今日は見かけない。サミも昨日は機嫌が悪かった。昨日の会話なんかこうだ。

「岩本って、どうして毎日この船に来るの？」

うつろな目つきでそんな質問をされた。

「え？そりゃ、サミに会いに、暇だし」

「何？ヒマなだけ？私が心配だからじゃないの？」

「え？いや、それもあるけど」

「もういいわよ！」

いきなり怒り出して、そのまま船ごと湖に潜ってしまった。何だよ！？

しょうがないので、学校に一人で行ってみることにする。でも最近は学校も面白くないんだよ。なにせ、スダに友達ができちゃって、僕と話してる暇なんかないんだよ。ここで僕が出て行って、『おれ、ユーレイが見えるんだ』なんて、スダがああ顔で言ってみろ、ただでさえ少ない友人が消えていくぞ？だから、学校ではなるべくスダに話しかけないことにしてる。

だからよけいに最近ヒマなんだ。

ヒマになるとどうなるかって？落ち込むんだよ。

今の自分の状態に目を向けないといけなくなる。今死んでいる。ユーレイになってさまよっていて誰にも見えない。未来はない。なのに今の状態はいつまでも続く……そんなことを頭の中で何度も何度も念仏のように唱えるはめになる。そのうち気が変になるんじゃないかと怖くてしょうがないんだ。

何がどうなるうと、狂うのだけは嫌だ！

そんな十月も後半になった。僕は幸平と一緒にずっと部屋に座っていることにした。毎年うつ病にかかっているということは、毎年治ってるってことだろ？その様子を観察してたら、今の自分の精神的不安定を打破する参考になるかもしれないと思って。

幸平はうずくまってひざを抱えたまま動かない。顔もよく見ええない。僕が部屋に残っていることに気がついていないのかいないのか、見ただけではわからない。話しかけても反応がない。ブツブツぶやいている声が聞こえるのに内容がわからない。近寄って耳をそばだててみる。寝言みたいにごによごによつぶやいている言葉の間に、明確に聞き取れる単語がひとつだけあった。

『ゆき……』

だった。

僕は幸平から離れて、向かい側、つまり部屋の反対側の壁に座りなおした。幸平をじっと見つめながら考える。

『ゆき』って、二宮由希のことじゃないだろうなあ。十月病と何の関係があるんだ？それとも何の関係もない言葉か？

最近夫の新橋五月いつきとの離婚騒動が、最近テレビで放送されていた。本人たちは否定している。たぶん幸平も見ていたと思うんだけど。考えれば考えるほどわからない。僕は三時ごろに座り込みをギブアップ。図書館へ新聞を読みに行ってしまった。部屋にじっと座ってるなんてとてもじゃないが耐えられない！

夜になって、サミのところへ行った。機嫌がよくなってることを祈りながら。

湖面に浮かんでいる錆びた幽霊船の上で、いつも通りに月を見上げているサミを見つけた。今日は天気がいいから、月がはつきり見える。ちょうど十三夜だって朝のニュースで言ってたな。そんな季節感ずつと忘れていた。

「あら、岩本。字室がさつき来たわよ。もう十月だったのね。幸平は来れないわね」

「そうだね」僕はほつとしながら船に降りていった「どうして十月になるとああなるのかな？ほんとに病人だぞ、あれじゃ」

「そういうときもあるのよ、長いこと一人でいたら」

「おーい」字室が飛んできた「今日はケンカが少なくてつまんねえよ」

字室は最近趣味を変えた。ケンカしている男を捜して、どさくさにまぎれて殴ることにしたらしい。こんな小さい町でそんなにケンカがあるもんだろうか？まあ、女の人を狙うよりはマシだけど。

「幸平も最近からかいがいがないんだよ。何だっただよ。十月が何なんだよ」

どうやら字室にも幸平の十月病は理解できないらしい。

「岩本って釧路から来たのよね」

「え？ああ、そうだけど？何を突然？」

「私、金沢でしょ、ちよつと思ひ出したのよ。犀川と浅野川」

「はあ」

「そういう川があるのよ」月を見上げたままサミが独り言のように言った「最近恋しくてしょうがないのよ。生きているときはなんとも思っていないかったけど、男川と女川って呼ばれていたわね……」

「そう」

「釧路、恋しくならない？」

「うーん」そういえば、あまり家のことも釧路のもとと思ひ出さなかったな、どうしてだろう？「幣舞橋っていうのがあるんだよね。たしか、春夏秋冬を表した女性像が立ってる」

一応そんな説明はしたが、実際よく見たことはないんだよね。橋はよく通っていたはずんだけど。地元のことって案外よく覚えていないものらしい。

「ふーん」

「お前らな、そういうことばっか考えてるから落ち込むんだよ」

字室が文句を言った。字室は思ひ出さないのだろうか？と思ったが、聞かなかった。

「いいじゃない、たまに思ひ出したって、ねえ？」

「まあね」

湖は静かだった。夜の湖なんかに出てくる人はいない。いつかのあのミカちゃんの暴拳がなんだかすごく懐かしい。湖面は真つ暗で月以外何も映らない。釧路は今どんな感じだろう。またうちのアホな姉が祈祷でもしているのだろうか……思考停止。

……ああ、だめだ、また落ち込みそうだ！

次の朝。起きたら幸平がどこにもいなかった。いつもなら屋根の上か部屋で寝てるはずなんだけど。仏壇の部屋にもいないし、梶村さんも今朝は会っていないという。湖に行ってみたら、向こう岸の上空に人影が見えた。

あんなところを飛べるのは幸平しかない！僕は後を追っていくことにした。

幸平は隣町との境界線まで飛んでいつて止まった。いつか壁をやぶろうとしてパントマイムして失敗した地点だ。壁に手をあてるようなくさしている。何をしてるんだ？

と、幸平の手から突然、白い線が放射状に散った。

「幸平？」

声をかけた瞬間、幸平がこちらを向いたのと同時に、手元の線がまるでガラスの亀裂が崩壊したみたいにばらばらに分解して、雪が降るみたいに落ちていった。白いかけらがはるか下の地上に向かって消えていく。

「岩本君」幸平の顔は明らかに動揺している「いつからそこに」

「今の何？」

「今のは……しょうがないや！ついてきて！」

「ついてきてって？」

幸平はその割れたところから、町の境目を飛び越えて隣町へ飛んでいく……つまり、町から出て行ったのだ！信じられない思いながら、僕もその割れ目らしきところを通過した。隣町の上空を飛んで幸平を追いかける。

追いかけながら僕は怒鳴った。

「なあ！どういうこと？今の何だよ！？」

「見てりやわかるでしょ！壁を壊して外に出れるってこと！僕の能力なの！」

「何だつてええええええ！」

そんなことは、この町に来てから半年になるが、一度も聞いたことがない！

「ちよつとスピード上げるから、ついてきてよ！」

幸平はいきなり超高速ではるか向こうに消えていく、僕もあわててスピードを上げるが、こっちは気温を肌で感じてるから、高速で飛ぶと寒くてなかなか追いつけない。十月の北海道の、しかもかな

り上空だ。もしかしたら零度近くまで下がっているかもしれない。

だいいち、町の外に出れるって何だよ？最初僕がこの町に来たときには、わざわざ透明な壁に激突させて『外には出れない』って信じ込ませたんじゃないか！それが、それが……。

「何でこういう大事なことを黙ってるんだよ！」僕は怒りに任せておもいきり怒鳴った「今までどれだけ悩んだと思ってんだ！外に出れるならさっさとみんなに教えるよ！」

「わかったって！悪かったって！」幸平が怒鳴り返してきた「でも、他の三人は僕より行動範囲が狭いでしょ！どうせ出られないんだよ！だったら黙ってたほうがいいじゃない！うらやましがられてぶつぶつ言われるの嫌だもん」

「お前本当に性悪だよな！秘密多いよな！あああむかつく！」
「うるさいったら！」

幸平はものすごいスピードで飛んでいく。景色はだんだん、山から畑、畑から住宅地、さらにはビルが立ち並ぶ都会へと変化していった。一体どこへ向かってるんだ？

「なあ、幸平！どこまで飛んでいく気？」

「札幌！」幸平が前を向いたまま叫んだ「今日は僕の命日だよ！だから、自分の墓に行く」

僕は思わず空中で止まってしまった。自分の墓へ行く？

気がついたのか、幸平も飛ぶのをやめて、こちらへ戻ってきた。

軽口を叩けるような顔じゃなかった。蒼白で、何か真剣な表情で、こちらをじつと見つめて、こう言った。

「……怖かったら一人で帰って。僕も毎年怖いんだ。自分の墓を見るのって」

第六章 幸平 2 幸平の墓

今、僕の眼下には、無数の墓石が並んでいるのが見える。地平線をうめつくすほどにたくさん灰色の石だ。

広大な墓場。『真駒内滝野霊園』だそうだ。なぜか知らないが、モアイ像とかストーンサークルとか、変なギリシャ風の遺跡などを再現した石像まで配置してある。どういう趣味だ？

「毎年来るたびに敷地が広がって、墓が増えてるよ。死人が増えてる証拠だね」

「……そういうことをさらっと言うなよ、幸平」

幸平はしばらくあたりをキョロキョロと見回していたが、やがて狙いを定めたかのようにまっすぐと、ある方向に向かって飛んできた。そして地上に降りる。追いかけてある墓石の前に降り立つ。

藤沢家之墓。

そうかかれた、周りの石と全く同じ、個性のない墓石。誰も手入れしていないのだろう、植木が枯れて、雑草がやたらに生えている。その横には、死んだ人間の名前が刻まれた石版が立ててある。藤沢喜一、藤沢幸平、藤沢和文の順番で名前は並んでいる。

藤沢幸平。これが幸平だ。昭和五十八年十月二十五日死亡とある。

「し、昭和五十八年？」

「岩本君って平成生まれでしょ？」

「うん」

「アハハ。じゃ生まれてないね。僕が死んだのは1983年なんだもん。驚いた？」

「驚いた……」

幸平って、もっと近い年代の人間だと思っていた。違っても五歳か六歳くらいだと勝手に思い込んでいた。それが、僕が生まれる前に死んでいた……。

「本来なら絶対に会ってない人間なんだよ、僕らって」

幸平が笑ったが、どこかさびしそうな笑いだった。僕はというと、今までには感じたことのない種類の寒気を覚えた。だって、墓が目の前にあるんだ。実際に幸平の名前が刻んであるんだ。

墓石がこっちに向かって念仏を唱えているような気がする。お前は死んだ、お前は死んだ、お前は死んだ……。そうやって、現実には死を突きつけられる気がする。これは自分のじゃなくなっちゃって怖い。幸平を見ると、墓石ではなく、やはり自分の名前が刻まれた石版をじっと見つめていた。とても真剣な目つきで。恐怖や悲しさが顔から消えていた。何かに立ち向かっているような顔だ。きっと幸平は今、自分の死に再び直面している。きっと毎年ここに来て自分の死を確認しているのだろう。でも、それってどんな気分だ？

墓参りのシーズンではないせいか、周りには全く人が見当たらない。見回したところで見えるのは墓石ばかりだが。

「待とう。今日中に来る」幸平が石版の前にしゃがみこんでつぶやいた「絶対来る」

「来るって誰が？家族？」

「残念ながら家族じゃない」幸平が綿のように軽くふわりと浮かび上がって、墓石の上に腰かけた「僕の家族の辞書には、心配とか親切とか吊いっていう文字はないんだよね」

「はあ」とげのある声だった。何と返答していいかわからない「じゃ、誰？」

「来たらわかるよ。きっと驚くだろうなあ。フフフ」

幸平がいたずらっぽい笑い方をしたが、自分の墓の上でそんなことされても不気味なだけだ。僕は幸平から目をそむけて、また石版を見た。

「あのさ、こっちの和文って人は？死んだの平成十年だからけっこう最近じゃないの？」

「おじいさん。いいんだよ死んだって。ろくな人じゃなかったんだから」

幸平はそっぴいながらそっぽを向く。あまり話したくないらしい。

僕はスダの家のじいさんを思い出した。針のようにやせていたじいさんは、あのばあさんと元気に暮らしているのだろうか？それともやはり消極的に黙っているのだろうか？

人影が遠くからこちらに歩いてきた。グレーの、ちょっとださい柄のスーツの男と、白いブラウスにロングスカートの女性だ。並んで歩いてくるから夫婦だろう。男のほうの手には手桶とひしゃくを持っていた。

「来たね」

幸平が二人のほうを向いた。どうやら待っていたのはあの夫婦らしい……が、ぼくはその女性の顔が識別できた瞬間、思わず飛び上がって、そのまま彼女に近寄ってじつと顔を覗き込んでしまった。

……二宮由希だ！

しかも、隣の男性にも見覚えがある。コメディ俳優の新橋五月だ。本業は舞台俳優だけどコメディのほうが有名だと聞いた。テレビではトーク番組やバラエティにしか出ないからそう思われるんだろう。新橋は二宮由希の夫だから、一緒にいてもおかしくない、でも……

「こ、幸平！」僕はまた幸平のほうに飛んで戻った「どういうこと？」

「アハハハハ！ものすごく驚いてるね！岩本君！」

幸平が大声を上げて笑った。楽しそうだけど、わざとくさい笑い方だった。

「驚くに決まってるだろうが！二宮由希だぞ！」

二宮由希の人気は半端じゃない。女優のトップだ。たしかまだ僕が小さいころ、二宮由希が新橋五月と結婚したときには、怒り狂ったファンから爆発物が大量に送られ、そのうちひとつは新橋の車を吹っ飛ばした。幸い車には誰も乗ってなかったが、それくらい人気のある女優なんだ。こんな札幌の町外れの墓地に現れるなんてありえない。普通は。

「幼馴染だったの！中学も一緒だったんだよ。演劇部もね」

幼馴染？中学が一緒？それだけで墓参りに来るか？死んでから何十年経ってるんだ？

困惑している僕を無視して、幸平は墓の前に立っている二宮由希をじつと見つめている。二宮由希はなんだか、とろんとした目で墓石を見つめている。ドラマで見る顔つきとはずいぶん違う。何ていうか……迫力がない。魂が抜けた人形のような印象だ。とくに四十代か、へたしたら五十代になっているはずなのに、十代の高校生に見える。

「由希、水がかかるからどいて」墓石の横に座り込んだ二宮由希に向かって、新橋が言った。手桶とひしゃくを持って「ご家族はどうして来ないのかな？すっかり汚れてしまってるけど」

「あの家族は絶対に来ない」二宮由希が冷たい声で言った「いつものことじゃない」

この声に聞き覚えがあるなと思って考えたら、いつか、中学校で葛西アイ力をいじめていた上級生を脅していたときの、幸平の声を思い出した。軽蔑のこもった氷のような声だ。

二宮由希、全く動く気配なし。

新橋五月が黙々と、墓石に水をかけて持参したタオルで拭いたり、雑草を抜いたりという作業をしていた。二宮由希は何もしない。ただ、墓石と、石版の幸平の名前のあたりを交互に見ていた。新橋は、花をいけるときに花瓶をひっくり返したり、線香やろうそくを取り出して並べるのにてこずったり、ろうそくに火をつけようとしてもすぐ風に消されてしまうのに苦労しているのだが、手伝う気配も全くない。表情にも変化が見られない。

「なあ」僕はなんだかたまらなくなってきた幸平に声をかけた「二宮由希って毎年ここに来るの？幸平の命日に」

「毎年、二人で来るよ。この夫婦」

「二人とも？」

「二人とも」幸平がぼんやりした目で二人を眺めている「新橋君は

高校が由希と一緒にだったんだ。それからずっと一緒に来るよ」

幸平が新橋五月を指差した。

「僕に似てると思わない？新橋君って」

新橋五月の顔を見る。「おじさん」と「おじいさん」の中間の顔だけど、どこか幼く見える。さつきから作業にてこずっていて間抜けそうに見えるのと、コメディアンみたいなイメージがあるからかもしれない。よく二人を見比べると、確かに、顔の輪郭線の形や目つきがよく似ている。

「似てるけど、それが何？」

「高校のときの新橋君ね、僕と全く同じ顔をしていたんだよ。だから由希と知り合えたんだ」

幸平は新橋五月の顔を見て、少し口元を歪めたようだった。そしてすぐに二宮由希に視線を戻した。

「由希は、変わっていない、いつ見ても変わらない」

俳優夫婦は、墓にそなえものをして手を合わせると、言葉を交わすことなくゆつくりと墓地を去っていった。てっきり二人のあとを追いかけるのだと思ってたのに、幸平は二人が墓を離れたあとも、備えられた花や線香を見つめながら、石段のふちにぼんやりと座っていた。話しかけても『ほつとして』以外何も言わないので、僕は軽く辺りを飛んで、周りの墓石を見てきた。お参りする人はちらほらいたが、ユーレイは一人もないようだった。

墓場にユーレイなし。新発見だ。

「追いかけなかったの？」

戻ってきたら幸平はまだぼんやりしていた。話しかけてみる。

「たぶんまっすぐ東京に帰るはずだよ。いつもそう」幸平がぼやいた。「墓参りなんて誰が考えたんだろうね。死んだ人間はみんな消えてどこにもいないのに。祈ったって届きやしないのに……」独り言のようにぼやいている幸平は、まるで自分の世界に入ったまま出て来れないようだ。「あの二人、何しにここに来てるんだと思う？」

「は？えーと」いきなり質問されてもわかるわけがない「幸平の、えーと」

情けないことに答えられなかった。墓参りって何しに行くんだっ
たっけ？死んだ人を思い出す、弔う、そんなところか？前に誰かが『
死んだ人を思い出してあげるのが供養だ』って言ってた気がするな。
それを幸平に言うと、

「僕はその『思い出す』に苦しめられてるんだけど、わかんない？」
と言ってこちらを睨んできた。声も神経質にとがっていた。

「そう言われてもなあ……」僕は幸平の隣に座った。今日は朝から
びっくりしてばかりで頭がぐらぐらする。死んでるのに「誰も来な
いよ！いいんじゃない？だいいち、あの二人に会いに来たんでしょ、
幸平は」

「そうだけど、違う」

「どういう意味？」

「僕がもし生きていたら、新橋君になつていたはずなんだ。生きて
いる自分を見ているようなものなんだよ」

「は？」

「二人ともそのことをわかってる。それで、ここに来る。でも、僕
がまだここにるのがわからない」

幸平が急に空に浮かんた。あわてて後を追う。来たときの超ハイ
スピードと違って、ゆっくりと、お寺のような屋根の建物に向かっ
ていくのがわかった。

「幸平、どういうこと？生きてたら新橋って？」

「新橋君は」向こうを向いたまま幸平が言う「僕が生きてたら進む
はずだった道にそのまま乗っただけなんだ」

「だから、それ、どういうことだよ？」

寺の屋根の上に僕らは降りた。寺だと思ったらただの集会所だっ
た。窓から見える建物の中は喫茶店になっているようだ。テーブル
と椅子が並んでいて、お年寄りがコーヒーを飲んでいるのが見える。
「二宮由希がはじめて子役でテレビに出たの、いつか知ってる」

「知ってるわけないだろ、生まれてないんだぞ」

「一歳のとき。僕も子役はやってたけど、五歳からだから、かなり先輩なんだな、由希は」

まるで自分の彼女でも自慢しているような口ぶりだ。僕は少し怖くなってきた。

「幸平、役者やってたの？」

「十歳くらいまで子役やってたよ」幸平が笑った。「ていうか、生まれてから、それこそ、死んだ今でも、ずっと演技しっぱなしだね」

どこか自虐的な響きのある言い方だった。僕は黙って次の言葉を待った。

「物心ついたときから演技に夢中だったんだよ。自分自身でいるより空想の役になりきっていることのほうが多かった。自分の人生より、演技した台本の内容のほうが記憶に残ってるくらいでさ。」

由希は近くに住んでいて、いっしょによく遊んでたし、親が二人とも子供を役者にしたがってたからね、会う機会も多かったんだよ。由希のいとこのお兄さんと遊んだこともあったね。ただ、このいとこのお兄さんが自殺したんだ」

「何で？」

「知らない。前からひねくれてたらしいよ。小さかったからわからなかった。僕らの前ではただの優しい兄ちゃんだった。でも、僕が大きくなって子役を辞めた頃から、少しずつわかってきたんだ」

「何が？」

「そのお兄さんがどうして自殺したか」幸平は無表情で話し続ける。「友達はいない。由希はずっと役者を続けているからめったに会わない。一日中ヒマで本を読んでた。だんだん、僕は何で生きてるんだろう、何で兄ちゃんは死んだんだろうって考え込むようになった。ほとんど人とは話さないで考え事ばかりしていた。親が様子がおかしいって言い出して、よく病院につれていかれるようになったけど、体はどこも悪くないんだよね。そのうち親にもほっとかれるようになった。人と話す気も全くなかった。きつと兄ちゃんもこ

んな生活してたんだなあって思った。

それでも由希とはけっこう話はしてたんだ。由希のお母さんは、娘を女優にするために全人生を注ぎ込むような人だったから、由希は役者が続けないといけない。でも本当は嫌だったんだよ。よく泣きながら電話してきて、僕がのんびりしているのを羨ましがっていた。僕としては逆に由希が羨ましかったんだけどね」

「うまくいかないもんだね、世の中」

「そうそう。中学に入ってから僕は演劇部に入ってたんだ。そこで、それこそ演劇に命かけてるようなへんな友人ができた。そいつは今では演出家になってるよ。由希も仕事の合間に参加しに来てた。面白かったね。僕、十四年しか生きていないけど、あの部活動が一番楽しかったな」

「あのさ、さっき言ってた、新橋の話は？」

懐かしそうに話し続ける幸平には悪いが、僕はあまり子供の話は好きじゃないので、核心を聞きたかった。一体何が言いたいんだ？幸平は。

「つまりね、僕が死なないで生きていたら、今、新橋五月っていう俳優は存在していなかったはずなんだ」

第三章 幸平 3 おしまい。

「毎日毎日、僕は何で生きてるんだろう、何で生きなきゃいけないんだろうって考えていたら、どんどん毎日がいやになっていった。どうしてって聞かれてもわからないんだけどね。底なし沼に頭だけはまったような感じだった。学校では一応、それなりにニコニコしてたらけっこう人間関係はやり過ごせたからいいけど、家ではもう全くしゃべらなくなってた。演劇部の活動だけだね、楽しいと思っ
てやってたのは。」

そのうちさ、似たようなことを考えてる人と知り合って、休み時間とか昼に話すようになったんだ。人間はなぜ生きなければいけないんだろうとか、どうして自殺しちゃいけないんだろうとか。あと、さつき話した自殺した兄ちゃんのことね。もう生きていても立たないんだから、僕らあまり長生きしたくないなあ、なんてことを話していたような気がする。

そしたらそいつが、睡眠薬くれてやるって言い出したんだよね」

「睡眠薬？」

「うん、その人の家が調剤薬局でさ、意味わかる？」

「……自宅から薬盗り放題？」

「ピンポン！」話している内容に合わない明るい声で幸平がおどけた「ほんの出来心だったような気がするけどでもないよ。でもそのときは本当に死ねるかもしれないと思って、もらった分一気に飲んだ」

「で、死んじやったわけ？」

「残念ながらまだ死んでません」幸平が空を見上げる「気がついたら病院にいました。親は一度も会いに来ませんでした。三日ほどで出られて一人で歩いて帰りました」

十月後半の冷たい空気が、生きていないはずの体に一気に染み込んでくるような気がした。辺りをよく見たら、もう夕方になってい

る。空が赤く染まり始めている。

「それからもう学校に行く気もしなくて、家で寝てたんだよね。親も何も言わなかった。もともと子供に興味がない親だったんだよ。僕さ、死んでからいろんなところで、子供の誕生日を祝ってる親とか、小さい子をかかえて笑ってるお母さんとか見かけて、なんであんなにうれしそうなんだろって不思議だった。今でもよくわからない」

「…誕生日祝うの、僕はあんまり好きじゃないんだけどな」

「うちは平和な核家族だ。何度でも言うが、正常な家族だ（ただし姉以外は）ただ、母親が異常なほど誕生日にこだわる人だったんだ。一度父親が母の誕生日に急に夜勤になった。医者なんだから急患が出たらしかないだろって、それから半年ほど二人は口をきかなかった。ちょうどその半年後が僕の誕生日で、その日によく仲直りだ。誰の誕生日だよってくらい、子供を無視して二人で仲直りを盛大に祝っていたのがとても印象的というか、不愉快だった。そのとき僕は小学生。たぶん三年生か四年生だったかな、正確には覚えていない。」

「それ以来誕生日と言うものがあほらしくなってしまった。でも、親たちは勝手に祝おうとするから、親孝行の一環だと思ってほっとくことにしている。」

「ま、それはいいんだけどさ」僕がうちのことを思い出してボケーっとしていると、幸平が仕切りなおすように声を大きくした「とにかく本格的にノイローゼだって言われるようになって、通院して薬を飲む生活してたんだよね。由希と演劇部の友達をよく様子見に来てくれた。台本書いてた友達が、配役ももう決めたから、ちゃんと部活に来て講演会に出てくれって言うてくれた。だから部活動だけは行ってたよ。学校に。すごく居心地悪かったけどさ。」

「それで、公演は上手くいった？」

「うん、上出来」幸平が本当に満足したような笑みを浮かべた「そのときに、一緒に演劇やってたみんなと約束したんだ。このままだ」

んなで役者を目指そうじゃないかって。由希も入ってたな。もう本物の役者になってたのにね。みんなに付き合ってた笑ってた。

でも、その公演が終わってから、僕ね、家から出られなくなっちゃったんだよね」

「家から出られない？」

「やりたいことがなくなっちゃったっていうのかな、公演が終わってほっとして力抜いたら、そのまま体に力が入らなくなった。ずうっと家で横になってた。いくらでも眠れるんだ。それで、真夜中に目が覚めても体がぜんぜん動かない。ああ、だめだ、もう生きられない、死ぬって思ってた。そのまま三ヶ月過ごした」

「そのままって、親は？」

「だから、子供に興味のない親なんだって」

「興味なくなつて子供が寝込んでたら動くだろうが普通は！」

「精神科の診療費と、保険証だけもらってた」

「それだけ？」

信じられない。一体何を考えているんだこいつの親は。

「それだけ。でもそのあと精神科に行くことはなかったよ。死んじやったから」

「ちよつと待て」僕は幸平に最初に会ったとき言われたことを思い出した「幸平さ、たしか、ダンプに轢かれたって言ってたなかったわけ？」

「その通りだよ。三ヶ月目に、いい加減学校に行かなきゃと思ってさ、ふらふらと家から出て行っただよ。やめとけばいいのに」

「そんな、他人事のように言っただよ」

「昔の話だもん。とにかく学校に向かったわけ。通学路の途中に、交通量の多い道路があるんだよね。信号無視して渡ったら絶対はねられるような」

「まさか幸平……」

「たぶん、想像しているとおり」幸平は笑っていたが、顔を下に向けていた「これで死ぬ。これで全部終わる。そのままふらつと車

道に飛び出して……おしまい」

第六章 幸平 4 死んでから可能性に気がついた

人生って残酷だ。いや、偶然って残酷、と言ったほうがいいのかな？ほとんどの人の人生は死んだら終わるのに、よりによって、終わらせたいはずの幸平の人生は終わらなかった。

「地面に落ちたところで意識がいったんなくなったんだけど、また、目が開いたんだ。そしたら、ビックリするよ。僕は空に浮かんでいて、血まみれの僕を見下ろしてるんだ。しかも、歩道から見ている人の群れの中に、由希がいた。はつきり見えた。顔が真っ青だった。動けないみたいだった。しばらくそこに凍りついたように立ち尽くしてたんだよ」

今、僕と幸平は、その事故現場の車道の真ん中に立っている。車が僕らをすり抜けていく。次から次に、しかもほとんどがダンプカーやトラック、大型車だ。交通量も多い。速度はみんなスピード違反だ。たしかに人がここに侵入したらまず命はないだろう。

「ねえ、落ち着かないから歩道に出ない？」

「いいよ」幸平は無表情のまま歩道に向かって飛んでいった「そのあと、しばらく僕はこの札幌にいて、いろいろ眺めてたんだ。自分の葬式とか、遺体を焼くところとか」

「……自分が燃やされるところ見たの？」

「うん」

どういふ神経をしてるんだろう。幸平はまるで『別にどうつてことないよ』という顔で返事をした。僕は遺体が燃えていく様を想像して吐き気がした。吐くものなんてもうないはずなのに。

「僕が死んだ後の人の反応とか、暮らしぶりを、ずっと見てた」

「辛くなかった？」

「ぜんぜん、むしろ楽だった」

「楽？」

聞き間違いかと思っただが、幸平は今確かに『楽』と言った。死ぬ

のが楽？

「自分はもう死んでるから、何もしなくていいじゃない。ただ、どつかの神様みたいに、気に入った人や町の様子をぼんやりと眺めていればいいんだ。僕さ、生きている頃からそんなところがあつたんだよ。自分の人生も他人事のようにだった。だからよけいに生きている心地がしなかったのかもしれないね」幸平が口元だけで笑った「もともと苦手なんだよ。自分で何かするっていうことが」

「でも役者は？演劇は？楽しかったんじゃないの？」

僕は少々むきになってそう言い返した。だって、死んでるほうが楽しいなんて、僕はどうしても認めたくないんだ。理由はわからないけど、なんとなく。

「まあ、仲間がいたから。それに、演劇ってみんな他人の話でしょ？他人を演じてるからうまくいったんだと思うよ」

「……それから？」

「親は予想どおり、顔色ひとつ変えずに生活していたし、悲しんでくれた友達もそのうち忘れたように自分の生活に戻っていった。でもね、二人、戻れない奴がいたんだよ」

「二宮由希」

「そう、それと、もう一人は新井君っていつて、演劇部の部長兼脚本家。今でも脚本書いてるはずだよ、劇団を持ってるから」

「新井って、まさか新井一志じゃないだろうな」

新井一志は売れっ子の脚本家で、週に一本は彼の書いたドラマがテレビで流れるし、新橋や二宮の出演する映画はほとんど新井の脚本・監督のはずだ。

「その通り」

幸平が誇らしげに笑った。僕はどう反応していいかわからない。

「この二人だけだったのかもしれないね、僕が死んだとき本当に悲しんでくれたのは。二人は同じ高校に行って、演劇部を立ち上げた。そして、すごい執念と言うか偶然と言うか、僕にそっくりな人を見つけて、無理やり演劇部に引きずり込んだ……」

小説のあらすじでも朗読するような声が響く。

「それが新橋五月」

「そう。新橋君、顔は僕と全く同じ。背格好も一緒。僕も初めて見たとき、自分が生き返ったんじゃないかと思つて震え上がったくらい、似てたんだ。ただ、演劇なんてやったことがないどころか、芸術全体を軽蔑してるようなところがあつたんだよね。学生は勉強だけすればいい、芸術なんて時間と金のムダだつてね。そう言つてるのを実際に聞いたことがある。なのに、急に演劇に興味を持った。その原因は僕なんだ」

幸平の表情が苦しげに変わつてきていた。何か悪いことがあつたんだと僕は思つた。

「由希と新井が、新橋に僕の話をしたんだよ。顔がそっくりな役者がいた、だから変わりに同じ役をやってくれないかつてね。中学のときに僕が演じたのと同じ劇、同じ配役、それを新橋君が演じた。そしてそのまま、成功したんだよ。役者としてさ」

幸平がこつちを向いて、僕の目をまっすぐに見た。僕は目をそらしてしまつた。

怖かつたんだ。幸平の目つきが。恨みのこもつた目をしていたから。

「だから、新橋君は僕が通るはずだった道にそのまま収まつただけなんだよ。僕が生きてたら、ただの平凡な優等生で終わつてたはずの人間なんだ。たぶん由希は未だに、新橋君の中に僕を見てる。でも、由希のとなりにいるのは、本当は僕だつたはずなんだ」

「幸平……」

「哀れでしょ？死んでから自分の可能性に気がついた。生きてたらこつなつてたんだつて、自分そっくりの人間が実践しているのを見ながらさまよつていなきゃいけないんだよ、僕は。こんな残酷なこつてある？」

あはははは、と乾いた笑い声が耳についた。声は涙でぐぐもつたようになつていた。

「由希たちが高校を卒業したときに、僕は札幌を離れたんだ。耐えられなかったんだよ。狂いそうだった。叫びたくなっただけ、叫んだって誰にも聞こえないでしょ？だから、頭が混乱したまま、上空を闇雲に飛び回った。もう夢中で。お願いだからもう死なせて、いや、もう死んだはずなんだから、早く僕を消して、もう耐えられない、早く消えさせて……で」

幸平の顔から怒りや悲しみが消えて、急にいつものおどけた顔に戻った。

「気がついたら、どこにいたと思う？」

「……町の湖？」

「そう！しかも夜中。幽霊船の上のサミとご対面ってわけ。アハハハ」

中学生のままの声で笑う幸平。僕にはもうかけ言葉も見当たらない。つられて僕の口元も笑ってたかもしれないが、それはどうしたらしいのか、わからなかったからなんだ。

すっかり暗くなった札幌の上空を飛んで僕らがたどり着いたのは、札幌市中心部の塔、テレビ塔だ。その上部についているデジタル時計の上に幸平が座った。僕も隣に座ったが、下を向くと高すぎてめまいがしそうだ。人も植木もなにもかも小さく見える。死んでても怖くてしょうがない。生きて落ちたら確実に即死だ。

「見てよこの夜景！人がたくさんいる証拠！」

幸平が立ち上がって両腕を広げた。なにかの舞台の演技みたいだと思った。でもここは舞台じゃなくて、札幌の上空だ。目の前に公園の明かりが一直線に伸びる。夜になっても人は多いし、明るさも半端じゃない。小さな町の暗い夜になれてしまったせいか、札幌の夜景がよけいにまぶしく見えた。

「僕が死んだときは、たしか百万都市札幌って言われてた。それが今じゃどう？人口は増えに増えて百九十万人を超えた。倍だよ。でも発展しただけじゃない。人が増えたって、昼間やることなく

ふらふらする人が増えただけかもしれない。活気があるようでないんだよ。人だけ増えたってしょうがないんだ。やることがないんだから」

幸平が何を言いたいのかわからなかった。灯りを見下ろしている幸平はまだ生きているように見えた。まるでこれからこの塔から飛び降りて、命を絶とうとしているみたいだ。もしかしたら幸平の演技なのかもしれない。

いや、今までの僕が知ってる幸平も、もしかして全部演技なんじゃないか？

「生きてるときも、死んでからも、街の中に希望の影も形も見出せないんだよね、僕は」

幸平がつばやいた。きつとこの言葉は演技じゃないと思う。

「でもさ、何かをがんばろうとして一生懸命な人もいるだろ、あの小さい町にしたって、町おこししてる人だっているし、札幌にだって懸命な人はいる。希望を持ってる人はいるんだよ、きつと」

僕は自分の当たり障りのない言葉が、むなく冷たい（寒いんだ！札幌の上空は！）空気の中に消えていくのを感じて空々しい気分になった。本当は僕だって何の希望も持っていないんだ。だってもう死んでるんだから。もし生きていたとしたら……それでも、わからない。

「わかってるよ、わかってる……」幸平が独り言のような声で返答した「でも、僕はもうみんなの行きつく先を知っているからね」

「行き着く先？」

「どうせみんな死ぬってこと」

幸平は時計から降りてゆっくりと下降し始めた。僕は何も言い返せなかった。

札幌から、来たときはうつてかわってゆっくりと上空を飛び、見慣れた湖の上空にたどり着いたのは、もう真夜中だった。サミの船が湖面に黒い影を作っている。

「あら幸平。十月病は治ったの？」

サミが妙に明るい声で叫びながら、こっちに手を振った。

「六割くらいはねー」

幸平もそこその元気で叫び返した。そしてこっちを向いた。

顔は笑ってなかった。真面目だった。

「岩本君、たぶんまだ生きてるんだから、人生放棄しちゃ駄目だよ」

「は？」

僕に聞き返す間を与えず、幸平は船に向かって飛んでいって、サミとおしゃべりを始めた。

「今日の幸平、初めてここに来た時と同じ顔してるわよ。どこか物悲しそうな雰囲気ね。何かあったんならお話なさいな。困ってあげるから」

サミがお姉さんぶった口調で笑った。幸平は、なんでもない、とつぶやいて、熱心に見ているドラマ（もちろん二宮由希主演だ）の話を始めた。

『困ってあげる』ってどういう意味？って僕が聞いたら、サミは、
「内緒」

と言って、微笑みながら唇に人差し指を当てた。

第七章 シベリアの夢 1 寒い！

僕は死んでいる。ユーレイというものである。何も感じない。物に触れない、風も雨も僕をすり抜けていく。

なのにだ、寒い。

ここは北海道の小さい町だ。しかも季節は十二月だ。寒いのは当然だ。問題なのは、僕がユーレイなのに温度を感じ取ることと、生きている人間と違って、コートを着ることもマフラーを巻くこともできないということだ！ものはみんなすり抜けていくんだから。

だから僕は最近、梶村商店の古ぼけた石炭ストーブの前から離れることができない。

時々スダの部屋のガスストーブの前にも行くが、あまりあたたかくない上に、じっとしている僕を見てスダが文句を言うのであまり行かないことにしている。

「気持ち悪いよ岩本。座ったまま動かないで黙ってんだもん。自縛霊じゃん」

寒い。とにかく最近の僕はこれしか頭に浮かばない。寒い。

「冬か…」

梶村さんが金庫に座ったまま外を眺めて、なにやら感慨深げにつぶやいた。たぶん昔を思い出してるんだろう。

「梶村さんは寒くないですよね、何も感じないですもんね」僕は半ばヤケクソに喋った「どうして僕だけ気温を感じなきゃいけないんですかね？ものに触れるほうがよっぽど役に立つ能力だってのに。だいいち僕ってまだ生きてんでしょ？なんでこんな中途半端な感覚を持ったまま凍えてなきゃいけないんですかね！？」

「そう言われても私にはわからん。それに」梶村さんはちらつとこちらを見たが、すぐに窓に視線を戻した「お前、シベリアに行ったことはあるか？」

「ありませんよ！あるわきやないでしょうが！」

「まあ、そうだろうな」梶村さんがこちらを見ずにつぶやくような声で言った「あの寒さよりはマシだろう。我慢しろ」

「ええええええー！？」

僕は石炭ストーブの前に突っ伏した。頭がストーブの前面のガラスをすり抜けた。生きていたら頭を打ったか、頭に火がついていただろう。でも今の僕にはただ熱いだけだ！

「アチチチチチ！」

「ハハハハハ」

「笑い事じゃないでしょうが！」

心底愉快そうに、地鳴りのような笑い声を上げた元日本軍に、僕は思い切り怒鳴りつけた。

その夜のことだ。消えてしまったストーブの代わりに、夜冷えないように設置されているパネルヒーターにへばりついてうとうとしていると、なにやら人の行列のような影が無数に見えてきた。

ああ、夢なんだ、眠いなあ、と最初は思っていたが、そのうち、ぼんやりしていた人影が、カメラのピントを合わすみたいに徐々にはっきりと見え始めた。並んで歩く暗い人影、あたりは一面に真っ白で、木々も暗い色合いをしている。そして身を切るように冷たい風。

僕も行列の中にまじって歩いている。手足はもう寒さで感覚がない、指を動かそうとする。動かない。錆びた金属の部品のつながり目みたいに、かすかにぎしぎしと震えるだけだ。

立ち止まる。誰かが近づいてくる。そいつは手に何か持っていて、しきりに何か怒鳴っている。僕にはわからない言葉だ。どうやら外国人らしい。

僕は疲れきっている。もう何時間歩いたのか。どうしてこんなに寒いのか。しかし、そんな考えをすることは許されていないようだ。

さっき近づいてきた人間（どうやら男のようだ）が持っていたの

は、小型の銃だった。彼は僕に銃を突きつけ、さっきと同じ調子でひたすら怒鳴っている。

彼が何を言っているのか、僕はそれが突然理解できた。

『早く歩け』

僕はそこで跳ね起きた。目の前には代わり映えしない梶村フデ宅の寢室の壁。横には僕がへばりついていたパネルヒーターがあり、かすかに温かみを感じられた。でも、そんな微かなぬくもりなんて粉碎するほど、僕は冷え切っていた。ただ寒いからじゃない。凍りかけの指の感覚や、銃をつきつけてきた男の声が、直に聞いたもののように耳について離れなかった。

さっきのは本当に夢だったのか？本当に僕は雪の中を行列に混じって歩いていたんじゃないか？本当に誰かに銃を突きつけられたんじゃないか？

そんな気がしてならなかった。誰かに話したくて居間に向かってみたが、梶村さんは金庫に座ったまま眠っているから、起こすのも悪い気がしたし、字室と幸平は最近別なところで眠っているらしい。あいつらは何も感じないから雪の中でも熟睡できるだろうな。

寒いので寢室のパネルヒーターの横に戻った。となりには布団がひいてあって、僕の存在なんて露ほども知らないフデさんが、すやすやと寝息をたてていた。

第七章 シベリアの夢 1 寒い！（後書き）

* 作者多忙につき、更新が長く滞ってました。週に一度は更新したいと思いますが、多忙につき遅れることも、あるいはいきなり続けて更新ということもあるかもしれません。ご了承ください。

シベリアの夢 2 それはシベリアだ

次の日、裏山の雪山にもぐって、頭だけ出したまま熟睡している幸平を見つけた。いいよな、寒さを感じないんだから、きっと雪の中でも気分は良好なんだろうな（死んでるけど）

「あ、岩本君、おはよう」

「商店に入ろう、寒い」

僕はそれだけ言って、雪山に背を向けて、全速力で梶村商店まで飛んでいった。フデさんが店先に出ているので、居間には梶村さんしかないが、ストーブは弱めにつけられている。

幸平が遅れて部屋に入ってきた。

「やっぱり寒いのか？外」

「当たり前だろ！天気予報見なかったのか？マイナス10度だぞ！」

「いいなあ、寒さを感じられるって」

「良くねえよ！……！」

のんきな声の幸平に向かって怒鳴りつける。

「落ち着け、岩本」

相変わらず金庫の上に座っている梶村さんが、無表情のまま、低い声で言った。ぼくはその声を無視して、ストーブの前に座る。幸平が一瞬ニヤリと愉快そうな、馬鹿にしたような笑いを浮かべる。腹が立つ！

「そういえば、きのう変な夢を見たんですよ」幸平も無視してやる！「雪の中をたくさんの方が行列してて、一面真っ白な雪で、死ぬほど寒かったんですよ」

梶村さんが怪訝そうな、それでいて興味があるような目つきでこちらを見た。

「それで、誰かが僕に向かって怒鳴ってるんです。聞いたことのない言葉だったから最初はわからなかったんですけど、どうも、早く歩けって言ってるみたいなんですよ。しかも銃を持っていて」

「マンドリンか？」

「は？」

「それはマンドリンだ」

梶村さんが低い声でつぶやくように言った。

「違いますよ。どうして雪の中で楽器をつきつけられなきゃいけないんですか？ 銃ですよ」

「ロシアの小型小銃だ。マンドリンは。楽器じゃない」無表情の梶村さんが言った「突きつけられたんだな」

「そうです」

「私も同じ夢をきのう見た」

「えっ？」

僕ではなくて、幸平が驚いて声をあげた。

「それはシベリアだ。毎年同じ夢を見る。この時期になるとな」

部屋に数秒の沈黙が訪れた。ストーブの前に座り込んでいるはずなのに、寒気がする。

「つまり、梶村さんと同じ夢を僕が見たんですか？」

「そういうことになるな」

「なんで？」

「わからん」

「不思議だねえ」

真面目な顔の梶村さんと、のんきな声の幸平はとても対照的だった。

「何でも『不思議だねえ』で片付けられちゃ困るんだよ」僕はいらしていた「どういうことなんでしょうね？」

「わからん。そもそも、私がどうして毎年シベリアの夢を見なければいけないのかわからないのだから」

「僕が毎年十月病にかかるのと同じじゃない」幸平がなぜか天井を見上げながらつぶやいた「つらい思い出とか、生きているときに起きた衝撃的なこととか、そういうのが、出てくるんじゃない」「そうかもしれない」

「でも、なんで僕が人の夢をいつしよに見なきゃいけないんだよ」

「不思議だねえ」

「だから不思議で片付けるなよ！」

幸平は他人事を面白がっているだけなのかもしれない。絶えず視線を天井や壁や、とにかく、梶村さんでも僕でもない方向に向けて、にやにやしているだけだ。一体何を考えているんだろう。

と、店先からすつとんきょうな声が聞こえてきた。

「まあああああ！よく来たねえええ」

フデさんらしくない、甲高い声だった。誰か来たようだ。耳を澄ますと、老年の男の声がぼそぼそと聞こえてくるが、何と言っているのかはわからない。

「見に行ってくる」

と幸平が言つて足を浮かせたが、その必要はなかった。

にこにこ顔のフデさんが部屋に入ってきたからだ、その声の主と一緒に。

第七章 シベリアの夢3 戦友谷川

その男は、おそらく八十歳を過ぎているだろうと思われる、しわだらけの高齢の顔をしていた。肌の色は青黒く、今すぐ死んでもおかしくないと思ってしまうくらいの顔色の悪さ。

それなのに、しわの下に埋まっているように見える細い目は、濡れたガラス玉のように光っていて、どこか異様な印象を受ける。

「ま、座ってくださいよ。散らかってるけどねえ」

フデさんが陽気な声を出しながら、台所へ飛んでいった。軽い足取りだ。よっぽどうれいんだろな。

「……昔の彼氏じゃないですね？」

半分冗談のつもりで僕は聞いてみたが、梶村さんは男をじつと見つめたまま黙っている。

「お父さんじゃない？」

幸平。フデさんのお父さんが生きてるわけじゃないか！百歳を超えて……あ、今は珍しくないのかな、百歳を超えるのは。

フデさんが姿を消してすぐ、男は隣の部屋、つまり、仏壇がある奥の部屋に入り、仏壇の前に座って手を合わせて目を閉じた。でもすぐその目は開いて、手を力が抜けたように畳の上におろすと、上を向いて、壁にかかっている梶村さんの遺影をじつと見つめていた。目はあいかわらず濡れたように光っていた。泣いているわけではないようだけど。

フデさんが戻ってくる気配がしたからか、男があわてたように立ち上がって、案内されたもとの座卓の前に座った。

「フデの父親は空襲で亡くなったと聞いているが」

男を見つめたまま、梶村さんが低い声を出した。幸平は、座ったまま座卓の上をその独特の目で見つめている男と、金庫にすわったまま男をじつと観察している梶村さんをくりかえし見ていた。きよるきよるしている。今にも『不思議だねえ』を口から発射しそうだ。

「谷川さんがここに来るなんて、ほんとにびっくりしちゃうわ」

フデさんが、お茶と羊羹を乗せたお盆を持って戻ってきた。やはりニコニコしている。

「谷川か！」

梶村さんが急に大声を出して上体を後ろにそらせた。相手が誰だかわかって驚いたようだ。

「誰？友達？」

幸平がなぜか不機嫌な顔と声で言った。どうしたんだろう？

「戦友だ」半ば呆然とした声が返ってきた。「気がつかなかった。ずいぶん変わった」

「そりゃ、何十年も経ってるでしょうからね……」

どうしたんだろう、幸平が嫌味だ。むっとした目で、まだ驚いた顔のままの梶村さんをにらんでいる。

フデさんがお茶と羊羹を男の前において、向かい側の座布団に「おいしょ」と妙な声を出して座ると、男……谷川が突然、フデさんをまっすぐに見て、こう言った。

「俺は今年死ぬようだ。だからここに来た。最後にあんたと話したかったな。それに」

谷川は視線を、奥にある仏壇（ふすまが開いていて、奥の部屋が見えるようになっていた）のほうを見て、もともと細い目をますます細くした。

「梶村にも挨拶がしたかったしな。まあ、もうじきあの世で会えるだろうが」

どうも、この谷川という男は、長野県時代（戦前戦後の話だ）の梶村夫婦の友人であり、梶村さんにとっては、学生時代から戦地へ赴くまでほとんど一緒の進路をたどった親友であつたらしい。二人はともにシベリアへ抑留されたが、谷川は生き延び、梶村さんは死んだ。

これは、谷川がフデさんと話している内容からわかったことだ。

谷川はフデさんと昔の思い出を語っていたが、話が戦争に及ぶと、ほとんど一方的に一人でしゃべり始めた。梶村さんは一言もしゃべらずにその話を聞いていて、僕らが近くにすることは忘れてしまったようだった。

「おれは運がよかったんだ。ああ、良かったんだなあ」しみじみとした声で谷川が言ったが、その声の調子は、逆に不運を嘆いているようにも聞こえた。「日本に帰還することが決まった。病人だけ先に国へ返すことになった。だがな、病人だけ輸送したんじゃ着く前に死んじゃうし、世話係が必要だってな。だから、病人何人か……数十人単位だったと思うが正確には覚えてねえよ……体の悪い奴何人かにつき、健康な奴を世話係としてつけたってわけだ。それが俺だよ。今にも死にそうな連中と一緒に帰ってきた。どうして選ばれたんだのかはわからん。運が良かったただけだろうなあ」

「でも、あなただつて戻ったときは健康ではなかったわね」

「当たり前だあ！」谷川が怒ったような呆れたような語気で言った。「あんなところで健康になんかなくてたまるか。食うものはない、何もかもが凍りつく寒さだあ。……この町も今は相当なもんだが、シベリアに比べりゃあったかいよ。ああ、そうだとも」

谷川が窓の外を見た。雪が降り始めていた。

「ああ、そうだとも……そうだとも」

言葉が弱弱しく繰り返される。僕はここの寒さにすでに参っていたので、これ以上寒いところの話は聞きたくなかったのだが、男の話には興味が出てきたので、黙って聞くことにした。

第七章 シベリアの夢 4 シベリアに……

「最近はものが値上がりしてるなあ。おたくの店はどうなんだ」

昔の話をはじめめるのかと思ったら、谷川は店のほうを見てそんなことを言い出した。

「うちは値段を変えてませんよ」フデさんが平然と言い放った「もとをたいては客も来ないしねえ」

「そんなに商売は大丈夫なのか」

「大丈夫も何も、年金暮らしだもの、ほほほ」フデさんが声をあげて笑った「谷川さん、今までどうやって暮らしていたの」

「どうやっても何も、働いていたに決まってるあ」

おどけたような声で谷川が小さな目を大きく開くと、なんだかマングに出てくる怪物のように見える。

「県庁をやめてすぐに札幌に移った、そこで石炭屋を始めた」

「札幌？北海道にいたの？どうして今まで連絡してこなかったのよ」

「連絡も何も、あんたがここにいるのを知らねえもの」谷川が大声で言った「てつきり長野で暮らしてるもんだと思っていたよ。村瀬って覚えてるか」

「もちろん覚えてますよ」

「あいつに去年会ってな、ここを教えてくれたよ」

「村瀬って誰？」

幸平がいきなり質問した。表情はまだ険しい。

「たしか、陸軍病院でフデと一緒に働いていた女性だと思うが、よくは知らない」

梶村さんが谷川のほうから目を離さずにそう答えた。

「きくちゃんにもしばらく会ってないわねえ、そういえば」フデさんがつぶやいた「この年になると移動も面倒なのよね」

「あんたはまだ元気そうじゃないか」

「昔から健康だけがとりえですよ」

そこで沈黙が訪れた。時々二人がお茶をすする音が響くほか、何も音が聞こえない。店にも誰も来ないし、梶村さんも幸平も、もちろん僕も、何もしゃべらなかつた。谷川はあいかわらず、薄い目をぎらぎらとひからせて、目の前のフデさんを、何かを問いかけるような目つきで見ていた。何かを話そうとして、ためらっているようだった。

「今でも石炭を売ってるわけじゃないでしょうね」

突然フデさんが口を開いた。顔にはさびしげな微笑を浮かべていて、それが今まで見たことのない表情だったので僕は思わずじっと見つめてしまった。何か、長い間切望していたものを諦めたような、あるいは、何か悲しみの中で、その重さに耐えようとするために笑っているような、そんな感じだった。

「最初はよかったがな、そのうち気づいたよ。これからは灯油の時代だつてな。ある日朝起きて、突然悟った。石炭の時代は終わる。

根拠があつたわけじゃない。今みたいにだれもがバカみたいに灯油だ値上がりだと騒いでる時代じゃない。ニュースも経済状況も関係ない。ただ、商売をやっていて、夜寝て、朝起きて、気づいたのさ。

俺は売り物の石炭をぜんぶ、店の裏の花壇に、空き地に、捨てたんだ。穴を掘って、まるで死体でも埋めるようにな、生めて、混ぜ込んだ。そして商売は灯油とガスに切り替えた。大当たりだったよ。今では息子が店をやっている。まあ、灯油の時代ももうすぐ終わるな。エコだのクリーンだのの時代になったんだ。おれもこの前公園に木を植えたよ」

「素敵じゃないの」フデさんが大げさに驚いてみせた。ほんとうに感心しているというよりは、目の前の男の話にのってあげているという感じだった「何を植えたの」

「桜だよ」

「咲くの？」

「ああ、咲いたよ。冬が終わったらまた咲くだろう」

谷川がまた茶を口に運んだ。そして、ぼんやりと空中をみたまま

黙り込んだ。

「どうしたの」

「いや……孫が、女の子なんだが」

「いくつ？」今度は心底興味津々という様子でフデさんが尋ねた。「かわいいでしょう」

「かわいいとも」それまで暗い表情だった谷川が急ににこにこし始めた。「上の孫はもう大学を出たからもう音信不通だけども、『ちっちゃいマリちゃん』は小学生になったばかりなのさ。いやあ、あんなにかわいいものはないよ」

それからしばらく、『ちっちゃいマリちゃん』はいかにかわいいか、いかに好奇心があつて、いかにこの老人宅のものをひっくり返したり、興味を持って眺めたり、壊したりしたかを、うきうきとした表情で話し続けた。フデさんも、たまに相槌を打ったり、ミカちゃんのちっちゃいころの話をしたりして、一時間くらい盛り上がっていた。

僕はそんな二人を見ながら、夏にミカちゃんが来たときの、梶村さんのはしゃいだ様子を思い出していた。

「……孫バカが多すぎるんだよ」

となりの幸平が不機嫌な顔でぼやいた。やっぱりミカちゃんを思い出したんだろう。

「幸平、さつきから機嫌悪そうだけど、なんで？」

「別に」

幸平がふくれっつらのままそっぽを向いた。うわあ、ガキくさい、ミカちゃんを笑えないぞ！

梶村さんは二人の話を聞きながら、たまに「おい、それは言いすぎだろう、ミカはそんなにひどくないぞ」とか「それはお前に似たんだろう、お前だって昔同じことをしてたぞ」とか、聞こえない相手にしゃべり続けていた。まるで、二人ではなく、三人でしゃべってるみたいだった。

「いいこと教えてやろうじゃないか」

「うわあ！」

突然横から低い声がしたのでビックリして飛びのくと、そこには意地悪なニヤケ顔の字室が、上半身をかがめて半分礼をしたような格好で、顔だけこちらに向けていた。

「びつくりした！脅かすなよ！」

「まあまあ。幸平が機嫌が悪いのは、目の前のこの三人には語るに十分な人生があるのに、自分には何にもないからさ、ろくな体験もせずにさっさと死んじまったからな」

「はあ？」

「今の幸平を構成する三分の一は、妬みだぜ。ぬくぬくと生きている連中へのさ」

幸平のほうを見る……いなくなっていた。

「逃げたな」字室が勝ち誇ったような笑いを浮かべた「追いかけてくる」

「ほつといてやれば」

「やだ」

字室が窓から外へ飛んで行った。梶村さんは二人の会話に夢中でこちら三人のことは忘れてるように見える。

こうして見ると、梶村さんだけが青年のままで、残りの二人はもう、しわしわと言っていい年齢と容姿だ。フデさんはまだきれいにしているほうだと思うけど、谷川はもう、生きていて会ったらぜったい近づきたくないタイプに見える。

「ある日、聞かれたんだよ『おじいちゃん、シベリアに行ったって本当？』」

それまでなごやかだった部屋の空気が急に凍りついた。『シベリア』という単語に、谷村は、さも口にしたくないというようなゆっくりにした抑揚をつけていた。梶村さんの表情も急に険しくなった。聞きたくもない言葉を聞いてしまったとでも言うように。

僕は夢で見た人の列と、銃を持った男、それに、シベリアで死んだという梶村さんの話を思い出した。

第7章 シベリアの夢 5 なぜ？

「小学一年生で歴史の授業なんてあるもんかなあと不思議に思ったがね、どこからか聞きつけてきたらしい。お宅のおじいちゃんは昔戦争に行つたと、シベリアに抑留された、まあ、抑留なんて言葉はわからないかつたんだろうな、『つれていかれたの？』と言われたんだつたかな。とにかく、聞かれたわけだ。『まあ、そうだな』と答えた。それ以上は聞いてこないだろうと思つたんだ。

でも『おじいちゃんが豆嫌いなので、シベリアで山ほど食べさせられたからなんでしょう』って言うんだ」

「そうなの？」

「んなわけないだろう。さつきも言つたけど、食い物なんてなかったんだよ。スープ、出るだろ」手で鍋の形を作るように輪を描きながら、興奮した口ぶりで谷川が言つた「お湯なんだよ。何もはいっちゃいねえんだよ。豆の一粒入つてたら大喜びさ」

「そうなのかい」

フデさんは目を伏せて手元を見つめていた。何か考えに沈んでいるように見えた。

「それどころか、誰かがしたうんち、あるだろ、排泄物だよ。あの中に豆がまるまる残ってるんだよ。消化できなかったんだな。みんな弱つてたから。まるまるとした豆を見て、一瞬迷うんだよ、まだ食べるんじゃないかと、一緒に歩いてた奴と顔を見合せてね、どうする？とな。俺は食わなかったよ。でも、次に同じところを通つたら、ないんだよ、排泄物だろうと豆は豆なんだ、食い物なんだよ。だれかが食つちまつたんだ。

死に際になつてもみんな食い物のことしか頭にないのさ。天皇万歳なんて言わない、母ちゃんに会いたいとも言わない。何か食いたい、食いたいと言いながら死んでいく……」

谷川がふと、梶村さんの遺影に目を向け、はつとしたようにその

濡れたような目をぐつと開いた。

そんな谷川を、前にいるフデさんはじっと、厳しい目で凝視している。何かを問いかけているような目だ。何を？それは僕にもなんとなくわかった。

「梶村は何もしやべらなかつたよ」

「正直に言っ方がいいのよ。情けないなんて言わないから」フデさんが低い声でつぶやくように言った「戦争だったのよ、何が起きても……」

「いや、ほんとに何も言わないで死んだんだよ」遺影から目を離し、フデさんをなだめるように、困った顔で手を振り回しながらしゃべり始めた「寒さにも飢えにも、何も言わなかつたんだ、知ってるだろう、恐ろしいほど無口なんだ、戦場で、敵の鉄砲の前にいたってそうなんだ……衰弱だよ。どうしてあんな強い人間がやられて、俺がここにこうしているのか、未だにわからない……」

沈黙。本当なのか誤魔化したのかわからない谷川の返答に、フデさんは何も言い返さなかつた。二人とも何かを思い出すように遠い目をしている。梶村さんはそんな二人をじっと見つめて、黙っている。今までになく寂しげな顔で。何かを失って、それを思い出しているような顔つきで。

「何の話をしてたんだったかな……ああ、豆だ、そうだ、俺は好き嫌いはいらないんだ。息子たちにはそれは厳しくしたもんだ。言うことを聞かないと木刀で殴って倉庫に放り込んだりしてな。今それをやったら犯罪にされるだろう、窮屈な世の中だよ」

「マリちゃんの話は？」

「ああ、そうだった」谷川が何かを払いのけるように手を振った「きつと、あのちっちゃい頭の中にあるのは、座っている俺の前に敵兵が豆を山のように盛って、食べ、食えって脅してる姿なんだろうなあ。腹がちぎれるくらい豆を食わされたと思ってるんだ。だから『豆嫌いな？』なんて無邪気に聞けるんだ。そうじゃない、何も食べ物がなかつたんだ。豆一粒どころか、パン屑、小麦の粉ひとつ、

ない。……そう言ったところで、ちっちゃい子に何がわかるんだい？」

「なんて答えたの？」

「ああ、そудだよって、だから豆が嫌いなんだってね」

「正直に教えてあげればよかったのに」

「だめだ！」谷川が大声を上げた。「俺はシベリアで起きたことは、女房にも話してないんだ。だれにも話さない、話せない。正直、マリーにそんな話をしたのは誰か、突き止めてぶんなぐってやりたいくらいなんだよ。」

女房は、オレがシベリアに行つて、人が変わったという。県庁の仕事を手放して、無理やり家族を連れてこんな北国にやってきたんだからな。しかも石炭屋をやりにな。親戚縁者には気が狂ったと言われてな。何があつたのか話してくれと、何度も言われたが、絶対に話したくない。あんたにも、これ以上、話せないんだ」

ボーン、ボーンという音がした。置時計が鳴つたらしい。

僕は驚いて壁を見た。古びたねじまき時計がかかつていて、振子が揺れているのが見えた。僕は怖くなった。この家にそんなものあつたのだろうかと思つた。少なくともいままでこんな鐘の音は聞いたことがない。

時計の鐘は、あたり一帯に響いてるんじゃないかと思うくらいの音をたてて鳴っていた。

二人とも、夢から覚めたような目で、鳴り続ける時計を見つめていた。その顔は、八十を過ぎた老人と言うより、まだ幼い子供のように見えた。

「時間が経つのは早いものね」

フデさんが決まり文句のような言葉を、感情のない声で口にした。「いや、長いさ」谷川がつぶやいた。いまにも消え入りそうな声で「驚くほど長い」

……もうすぐ日本に帰るのだ。空襲で街が焼けたというが、善光寺は無事だろうか、あそこが無事なら母もフデも無事なはずだ。列車は海に向かっていて。その海をわたれば帰れるのだ！海が見えた！

だれかが日本海が見えると叫んだ。

歓声が上がった。帰れるぞ！

でも、だんだんおかしいことに気がつく。

あれは海じゃない。湖だ。列車は反対方向に進んでいたのだ。それはバイカル湖だった。着いたのは極寒の地だった。

騙された。

日本に帰るのではなかった。

列になり、道を歩かされる。

マンドリンを持ったソ連兵が時々叫ぶ。

早く歩け、早く歩け、銃口を突き付けて。

たどり着いたのは極寒の地だ。

騙されたのだ！

「死ぬ前に梶村に会えてよかったよ。ま、もうすぐあの世で会うことになるがな」

日が落ちたころ、谷川が玄関でこんなことを言った。暗い眼をしていたが、やはり目玉がぎらぎらと濡れたように光って、不気味なくらいだ。

「またそんな弱気を言って」フデさんが調子のいい大声を出した「そんなことばかり言っていると、あの人も怒りますよ」

「別に怒りはしない」

梶村さんが今のドアから玄関を覗いて、そう言った。もちろん生きていて二人には聞こえなかっただろう。

僕は最近よく見ていたシベリアの夢を思い出していた。あれは梶

村さんが体験したことなのだろうか？きっとそうだろう。日本へ帰るはずの列車がなぜかシベリアの奥地に辿り着き、そこにはろくな食料の支給もない。極寒の地での重労働でつぎつぎと仲間が死んでいく。それから……。

「世の中はどうなっちまうんだろうな」

谷川がつぶやいた。心底心配そうに下を向いていた。

「なるようになるしかないわよ」

「なるようになる、なら、いいんだけどな。どうせ俺はもうじき死んじゃうし、息子夫婦ははやく死んでくれてなもんだから、いいけどな。でも孫が心配だ。まだ小さいのに、世の中はめちゃくちゃになっっているじゃないか」

「めちゃくちゃにはなっていないですよ」フデさんが笑った「ただ、生き方も迷い方も、時代が変わると相当違うというだけです」

「そうかい？」

「そうですよ」

この二人のやり取りはまるで親子のようだと思った。

谷川が出て行った。

「岩本」梶村さんが玄関をみつめたまま言った「送ってやってくれ」「は？」

「谷川がちゃんと駅までたどり着けるか」

「いいですけど、子供じゃあるまいし、だいいち僕が言っただけで気がつかないでしょ……」

「駅までもたない」

「はあ！？」

梶村さんの顔を改めてみると、今までに見たことがないような苦痛の顔をしていた。

「私にはわかる。もう助からない。最後まで見守ってくれ」

僕がそのとき思い出したのは、テレビで行方不明の報道を見て『この子は無事だ』『だめだ、この子はもう殺されている』と、画面に映った人間の生死を予想していた梶村さんの姿、そして、その予

想は100%当たるということだった。

僕は玄関から（ドアを突き抜けて）飛び出した。でも、飛び出した瞬間怖くなって、空中で止まった。はるか前方に、とぼと歩く谷川の後ろ姿が見えた。

これから、人が死ぬ瞬間に立ち会わなきゃいけないのか？

動けなかった。怖かった。なんで僕が？と思った。

いや、でも行かなくちゃ、梶村さんがあんなに苦痛の顔をして頼んできたんだから。

でも。

悩んでいる間に、弱々しい背中が遠ざかっていく。

腹が減った。

最後に白い飯を食ったのはいつだったろう。

凍傷がひどくなってきた。これからますます寒くなるというのに、靴が、底がやられた。

これで凍土の、雪の中で働けるか。

谷川がなにか遠くでわめいている。

雪が強くなってきた。

前が見えない。だれかがおれのからだを揺さぶっている。大声でわめいている。

黙れ谷川。

黙れと言っているのがわからんか。

そう言おうとしたが声が出ない。

誰かが俺のからだを起こした。数人でどこかへ運んで行く。ふたたび雪の上に下ろされる。

俺の服をだれかがはぎ取っている。何をするんだ。

谷川がわめいている。

とらないでくれ、こんな寒いところではだかで埋められちゃかわいそうだ。服を取らないでやってくれ。大声でわめいている。

だれもそんな声は聞かない。ここでは何もかもが貴重品だ。
体が空中に浮いた。誰かが放り投げたのだ。

穴の底に落とされる。

まだ埋めないでくれ。叫ぼうとする。

声が出ない。

声が出ない。

まだ俺は意識がある。こうして考えている、叫ぼうとしている。
埋めないでくれ。

声が出ない。

目の前が真っ暗になる。

谷川の背中が、ゆっくりと地面に向かって落ちて行った。

僕はあわてて飛んで行った。

地面にうつぶせに倒れた谷川は、土を両手の爪でひっかくように
してもがいていた。うぎぎぎぎ、という、どう考えても普通じゃ
ないうめき声をあげながら。

「谷川さん！」

僕が思わず叫んだ。すると、おどろいたことに、谷川が首をぐる
っと曲げて、覗き込んでいた僕を見た、目が合った。

僕はその視線に捕えられたように固まってしまった。動くことも
声を上げることもできなかった。谷川はうめきながらも僕の目から
視線をそらすとしなかった。濡れたような不気味な目。

「……全部、知ってたさ、見えた。梶村も、おまえも、となりのガ
キも」

何だって？

谷川がまたうめき声をあげた。地面をえぐる指にはさつき以上の
力が入っていたんだろ、手全体が土の中にのめりこみそうなくら
いだった。

「きゃあ！どうしたんですか！しっかりして！救急車！！」

偶然通りがかった中年の女性が声をあげて、どこかへ走って行った。

「先に、行ってるから、早く来い、と、言っておけ」

「えっ？」

女性に気を取られていた僕は、その声で視線を谷川に戻したが、そのときにはもう、うめき声も、濡れたような眼光も、そこにはなかった。

長い人生を終えた、やせこけた男の遺体が、横たわっているだけだった。

どのくらい時間が経っただろう？

暗闇の端に光が、かすかに見える。

海だ。

薄暗い海と、明るい空だ。

船に乗っているのだ。

これは、日本海に違いない。

帰るのだ！

とうとう帰るのだ！

港が見える。帰ってきたのだ。あれは日本だ。

いつのまにか、どこかの街中にたどりつく。

おや、店先の値段がおかしい。

どうしてみかんがこんなに高いんだ？ いや、みかんだけじゃない。

何もかも高い。

建物もすっかりなくなっている。やはり攻撃されたのだ。

家があった場所には、新しい建物が建っている。

あれはフデだ。

帰ってきたぞ！

おい！ 聞こえないのか？

どうして泣いているんだ？

手に握っているのは何だ？

おい！

聞こえないのか？

寄り添っている男は誰だ？

大きくなった息子は、なぜ下を向いて黙っているんだ？

どうしてこっちに気がつかない？

何が起きたのだ？

なぜこんなことに？

なぜ？

なぜ？

なぜ？

僕は今、雪の中に埋もれながらいろいろな映像を頭の中で反芻している。

僕は生きているらしい。だからかどうかは知らないが、今、寒い。なんぜ雪の中にシャツ一枚で横たわっているわけだから。きつい寒さを感じる。

でも、こんなのシベリアの極寒というやつにくらべたら、きっと大したことじゃない。

日本に帰った、その夢以降、ぼくはシベリアや梶村さんの夢を見なくなった。夢を見ない、ただのユーレイの眠りに戻った。体を休めるためでもないだろうに、なぜか眠くなるユーレイの僕ら。

どうして僕はここに？

『先に、行ってるから、早く来い』

そう言い残して谷川は死んだ。ユーレイにはならなかった。だってここにいないのだから。

天国にでも行ったのか、単に消えてしまったのか。

死ぬとはそういうことなのか？

なぜ梶村さんはここにとどまり続けているのか？

なぜ僕らはここにいるのか。

なぜ？

たくさんの『なぜ』が僕の頭の中をぐるぐると回っていた。答えなんか出ない。でも、しばらく考えていたかった。

なぜ？

「どうしたの岩本君」空中に幸平が現れた「ストーブの独占はあきらめたの？」

「誰も独占なんかしてない！……ちょっと頭を冷やしたい気分なんだよ」

「ふうん」幸平が子供っぽい不満の声を上げた「なら、教えてあげない。せっかくだろいい情報を教えてあげようと思ったのにな」

「何だよ」

とても冗談につきあってやれる気分じゃなかった。でも一応聞いてみる。

「ここからちょっと北に行くとね、フルーツの温室があるんだよ」「だから？」

フルーツの話なんて聞く気分じゃない。とはいえ、そろそろ寒さが我慢の限界に近付いてきた。そろそろストーブ探しに……ん？

「幸平」僕は跳ね起きて、空中に浮かぶ友人をにらみつけた「温室って言った？」

「うん。年中室内の温度は一定に保たれていて、それは真冬の今でも例外ではないってわけ」

「……お前、それ、いつから知ってたんだ？」

自分の声が凶悪になっていくのがわかる。今まで暖を取るために、スダの家に入り浸ったり、パネルヒーターにくっついたり、知らない家の暖房を勝手に使ったり、いろいろ苦心してきたんだぞ……。

「いつから何も、ずーっと前から知ってるよ。ぼくはこの住民だからね」

「もつと早く言えよ！」

僕は怒りで飛び上がった幸平につかみかかろうとしたが、よけられた（まあ、ユーレイだからつかめないんだけどね、字室じゃないし）

「もう冬が半分以上終わっちゃっただろうが！！今までどれだけ苦労してストーブを……」

「まあ、まあ、落ち着いてったら。いいじゃない、これからあったかいところで過ごせるんだから。それよりさ」楽しそうな顔で幸平が言う「梶村さんが呼んでるよ」

二人で梶村商店に帰る。

雪の舞う空中を飛びながら、最近見た、たぶん梶村さんの夢、そして、搬送先の病院で死亡が確認されたあの、谷村のことを考えた。どうしてあの二人がシベリアに抑留されたのか。

どうして梶村さんが死んで、谷川は生き残れたのか。

どうして梶村さんだけがユーレイになってここにいるのか。

どうして？

考え出すときりがない。たぶんいくら考えても答えは出ない。でも、考え続けずにはいられなかった。

居間では、梶村さんが一人、電気の消えた暗い室内で、金庫に座っていた。

「電気くらいつけましようよ」

幸平がスイッチのほうを向くと、部屋の蛍光灯がぱつと光を放った。やっぱりいいな、この超能力みたいなの。

「いや、フデがいけないのに、電気代があがるといけない」

フデさんは急遽、喪服をかかえて札幌方面へ向かった。数日は帰ってこないだろう。

「蛍光灯じゃちょっとしかあがらないから大丈夫ですって」

「そのちよつとというのが気になるのだ」

「だれも気付かないから大丈夫ですってば」

「しかし昨今は何でも値上がりしている、ムダ使いはよくない」

「僕らが使ってるんだからムダじゃないですってば！」

「あの、話って？」 割り込まないと永久に電気でもめ続けそうだが、何ですか？」

「岩本」 梶村さんがこちらを向きなおして、なんだかあらたまったような風情になった。「釧路に行つてこい」

「はい？」

何か人生訓か思い出話でもするのかと思っていた僕は、出てきた地名が一瞬理解できなかった。

「おまえはまだ生きておる。だから、釧路に確認に行つてこい」

「確認つて」僕はあわてた。「でも、この町からは出れないんですけど、例の壁が」

「幸平が壁を割れるはずだ」

僕は幸平のほうを見た。幸平もびっくりした顔をしていた。

「知つてたの？」

「お前、毎年札幌に行つてるだろう？」

「幸平、梶村さんには話してなかったのか？ 墓のこと」

「話してない」幸平が呆然とした顔で、呟くように言った。「でも、どうやって」

「それくらいわからないとでも思ったか」 あきれた声でそう言ったあと、梶村さんがまたぼくのほうをまっすぐ見た。「釧路に行つてこい。まだ生きている自分に会えるはずだ」

自分に会える？

「そうだ、行こう。岩本君」幸平がはつと我に返ったように言った
「どうして今まで気がつかなかったんだろう？行けばわかるよ。生きていれば本人に会えるし、死んでたら……」

墓がある。

そう言いたかったんだろう。でも、なぜか三人ともそこで沈黙してしまった。

釧路へ行く？

自分に会える？

もしくは……自分の墓参りをする羽目になる？

いつか見た、幸平の墓を思い出した。

体がないのに背筋がぞつとした。

「いや、いいよ、いい」ぼくはやつとのことで声をしぼりだした。

頭が痛い「行かない」

「だめだ、行つてこい！」

「そうだよ、僕も行くからさ、一緒に」

「いやだ！」

僕はその場を飛び出した。窓をすり抜けて、雪が舞う村の上空を飛んだ。雪の量がすごくて、下を向いても街の様子はほとんど見えなかった。寒さがないはずのからだに突き刺さってくる。でも、そんなことにかまっている余裕はなかった。

釧路に行く？自分が生きているか死んでいるか、確かめる。

怖かった。正直に言つて。怖かった。

第8章 字室の最期 1 ぐるぐるという音が

みんなが僕は生きているという。

温度しか感じない状態で、生きていた頃には来たこともない湖の上空に浮かんで『ユーレイしてる』のに、それでも生きているという。

幸平は「人生放棄しちゃ駄目だよ」と僕に言った。梶村さんも似たようなことを言った。二人とも完全に死んでしまっていて、どうやら生きていた頃の人生に未練があるらしい。でもな、だからって僕に何をしろって言うんだよ？

「釧路、行かないの？」

このところ幸平が毎日のように聞いてくる。

「今日はいいい」

「今日はいいいって、いつ行くの」

「まだ行くなって決めたわけじゃない」

「でも、一回行って確かめたほうがいいよ。自分のお墓があるかもしれないし」

「だから今日はいいいんだって！」

怒鳴りながら空中を飛んで逃げる。自分の墓？そういえば幸平の墓が札幌にあったつけ。

釧路に行つて、「岩本祐一」って書いてある墓を発見して、『あ、やつぱり死んでたね』ということになるんだろうか？それとも、病院かどこかで生きている自分を発見したりするのか？生命維持装置につながれて植物状態だったりして。

毎日そんな想像をする。そして、怖くなる。

そうだ、怖いんだ。現実を見るのが、確かめるのが。

今のこんな状態だったまらないのに、これ以上不安になるようなことをしたくないんだ。

湖のはるか上空に浮かんで、あたりを眺める。

町の建物が小さく見える。湖に浮かぶ遊覧船も。

そういえば、最近サミの姿を見ていない。今夜会いに行ってみよう。きつとさみしがっているだろう。

いや、もしかしたら猛烈に怒っているかも。前もたしか「私が心配じゃないの!？」って怒りだして、そのまま船ごと湖の下に潜ってしまったし。

そういえば、サミは昼間、湖の底で何をしているんだっけ？

「岩本」

「うわあああ!」

うしろで突然声がしたのですごく驚いた。字室だった。

「そんなにビビってんじゃないよ」

「驚くに決まってるだろが!こんなところで突然声がしたら!」

「あそこの山な」僕の言葉は無視して、字室が湖の反対側にある山を指差した「最近、変な音がする。地面から」

「変な音?」

「ぐるぐるっていう、変な声みたいな。動物でも埋まってんじゃないかなと思って」

お前が埋めたんじゃないだろうなと言いたくなったが、やめた。

こいつなら本当にやりかねない。

「冬眠してるんじゃない、カエルとか」

「冬眠してる動物が鳴くか?しかも雪が積もってんだぜ、けっこう厚く」

「まあ、そうだよな」

「ちよつと来い」

字室が手招きするようなしぐさをしながら、山の方向に飛んで行った。

無視して別方向に行こうかとも思ったけど、ついていくことにした。ほかにやることはないし、一人できるとろくなことが浮かばないし、幸平に会ったら『釧路に行こう』って言い始めるし。

ぐるぐるぐるぐるぐる……。

舗装されていない道（といっても雪に埋まってるからよくわからないけど）の横にある急斜面の、ちょうど道の真ん中、僕らの背丈のあたりから、確かに聞こえる。

「やっぱりカエルとか、小動物じゃない？」

「そうだよなあ。取り出してみるか」

「やめとけて、せつかく安らかに寝てるのに」

「安らかに寝てたらこんな声出すか？」

「そういう習性の動物かもしれないじゃないか。だいいち、字室って動物にも触れんの？」

「あ、そうだった。試してみるか」

おい、試すなよ。

僕が言う前に、字室は雪の中に手を入れた。もちろんすり抜ける。

「何にもねえなあ」

何もつかめないらしい。

字室が不満そうに中を探っている最中も、ぐるぐるぐるぐるという奇妙な声が聞こえていた。なんだか不気味だ。

「ねえ、やっぱりやめて帰ったほうが」

「やべえ」

字室の顔が青ざめてきた。もう死んでるのに血の気が引いているみたいだ。

「何が？」

「人の手だ、これ」

「はあ！？」

「人が埋まってる」

「は。はやく引つ張れよ！救助しろよ！」

土の中に人の手。

もしかして……死体か？殺人事件か？

「つかまれた」

「は？いいからはやく引つ張れよ」

「そうじゃなくて！向こうがこつちを引つ張ってんだよ！」

「はあ？」

「はあとか言っでないで何とかしろ！」

「何とかしろって言われても」

僕は字室を引つ張ろうとしたが、僕はあいにく何にも触れない能力の持ち主だ。役に立たない。

「こ、幸平！呼んでくる！」

「あいつ呼んだって無駄だが！ものしかつかめない」

「いや、地面ごと吹っ飛ばしてもらうとか」

「できるか！」

雪の中に引き込まれそうになりながら字室が叫んでいる。僕はとにかく助けを呼ぼうと思って飛び去ろうとした、すると、突然字室が後ろ向きに吹っ飛んだ。そして、それを追いかけるように、雪の中からしわくちやの手が伸びているのが見えた……しわくちやの、半ば腐敗したような、人間の手。

そして、雪の中から顔を出したそれは、老婆のような顔をした人間だった。

両目は、目玉が半分飛び出したように大きく開き、眼はギラギラと光を放っている。腕と同じく、体全体がしわだらけで、腐敗しているように見える。何か布の塊のような服を着ているが、やはりぼろぼろ。まるでホラー映画のお化けのようだ。

「逃げる！」

字室の声を聞くまでもなく、僕は逃げ出していた。いままで出したことのないようなスピードで飛んだ。

梶村商店の近くまで来たとき、ここまでは来ないだろうと思って後ろを振り向いた。

目の前に老女がいた。ニヤリと笑みさえ浮かべ、こちらに手を差し伸べてきた。

「うわああああ！」

商店の窓に飛び込む。中には梶村さんと幸平がいた。

「梶村さん！あれ！」

僕が窓を指差すと梶村さんがそちらを向いた。

老婆の姿が窓から見えたのだろつ。すぐに顔色を変えて素早く銃を構えた。

バン！

外にいた人影が、もんどりうつて後ろに倒れ、そのまま空中に溶けるように消えていくのが見えた。

「今の、何」

幸平が呆然とした顔で窓を見つめてながら言った。

「銃がまだ使えてよかった」梶村さんが銃を下ろした「何があった？」

第8章 字室の最期2 悪霊の母

梶村さんと幸平に、僕は起きたことを説明しようとしたけど、自分でも何が起きたかわからなかったし、ひどく動揺していたから、わけのわからないしゃべり方になっていたと思う。

なんとか二人に理解してもらえた頃には、外は暗くなっていた。フデさんが夕食を終えて、お茶を飲みながらテレビを見始めた。

「字室はどこへ行ったかわかるか」

しばらく考え込んでいた様子の梶村さんが、窓の外を見ながら言った。

「わかりません。『逃げろ！』って声が聞こえただけです」

「こわがってどっかに逃げちゃったんでしょ」幸平がいやみな口調で言った「きつといつも通りに街中をふらふらしてるだけだよ。どこにいるかわかんないなんていつものことじゃない」

「しかし、あいつは何かあったら必ずここに来るだろう」

「まあ、そうだね」幸平が興味なさそうに言った「臆病だからね」

いかにも軽蔑しているような口調で幸平が言った。

臆病。

僕はいつか、サミの船で先生のガイコツが見つかったときの字室の様子を思い出した。確かに、異様におびえていたような気がする。人のことは言えないけど。

「サミのところに行つてきます」

僕は窓から外に出た。突き刺さるような寒さだ。でも最近慣れてきた。生き返ったらヒマラヤとはいかなくても、富士山くらいなら平気で雪の中を登っていけるんじゃないか……なんて、どうでもいいことを考えてしまう。

空中で一度静止して、あたりを見回す。何の気配もしない。

あの怪物のような老婆は何だったんだろう？ 梶村さんに撃たれて空中に消えていったけど、あれでもう出てこないんだろうか？ それ

とも……。

考え出すと怖くなってきた。さつさとサミのところへ行ってしまうおう。

町にはぼつぼつと明かりが見える。あの一つ一つのもとに人が住んでいて、生活があつて、人生があるんだ。ずいぶん長くここにいるのに、町の人の暮らしなんてあまり考えたことがなかった。

「感傷的になつてゐるみたいだね」

後ろから声がしたので驚いた。幸平だ。

「まだ釧路に行く気になれない？」

「その話はあとにしてくれない？」

僕は湖に向かつて進み始めた。幸平もついてきた。

湖には黒っぽい船の影、その上に、ぼんやりとした目で空を見上げるサミの顔があつた。

「ずいぶん長く来なかつたわね」

顔つきを変えず、抑揚のない声でサミが言った。怒っているのだろうか？

「ごめん、いろいろあつたんだよ」

「隊長の友達が亡くなつたんでしょ？」

隊長……ああ、梶村さんか、久しぶりに聞いたから一瞬わからなかった。

「字室が中にいるわ」

サミが、船のさびついたドアを指差した。

「中に？」

まさかガイコツのある部屋じゃないだろうな。

「ドアをあけたら、いるわよ。通路に座り込んだまま一言もしゃべらない」サミがやつと月を眺めるのをやめて、こつちを向いた「シヨックだつたんでしょね。お母様があんな姿で出てきたら」

「お母様？」

僕と幸平が同時に叫んだ。

「そうよ。前に言つたでしょ」月に照らされたサミの顔は青白くて、

本当にユーレイらしく見えた「お母さんを殺して、自分は自殺したって」

「ちょ、ちょっと待って」幸平がサミのほうへぐっと身を乗り出した「字室のお母さん？あの化け物が？どうしてサミにそんなことわかる？」

「本人がそう言ったのよ」

サミはすつと後ろに身を引いて、踊るようになってくると回り始めた。頭上の青白い月を見上げながらだ。

なんだか本当に幽霊ができそうな月模様……あ、ぼくらがユーレイなのか。

僕は船のドアの前まで行き、一瞬迷って ドアをすり抜けた。

字室は例の骸骨があつた部屋のドアの前に座り込んでいた。体育座りみたいにして顔を膝の中に伏せていたから表情は見えなかったけど、その暗い雰囲気はまるで、幽霊船の壁と一体化しまった化石みたいに見えてちよつと怖い。

「大丈夫？」

おそろおそろ声をかけてみる。ぴくりとも動かない。

「サミが、お母さんがどうか言ってたけど、化けて出ちゃった？」
うしろからのききな大声が響いた。

びっくりして振り向くと、幸平が興味のなさそうなぼんやりした顔で、僕のすぐ後ろに立っていた。

おい幸平、いきなりストレートにそんなこと聞くなよ！

「化けもんだ」

低い声がした。

「は？なに？聞こえない！」

幸平が大声を上げた。

「幸平、なんでそんなケンカ腰なんだよ？」

「あれは生きてた頃から化けもなんだよ」

はつきりとした、低い声。字室が顔をあげてこっちを見ていた。

背筋がぞつとした。生きてないのに。

何の生氣もない（いや、死んでるから当たり前なんだけど、いつもと比べるとさらにひどい）魚の干物のような目の、どす黒い顔つき
の男がこっちを見ていた。

「だから、殺したんだ」

いつかの骸骨騒ぎのときより、さらに船内の空気が冷え込んだように感じた。

地獄に落ちたらこんな感じだろうか、と僕は思った。

第8章 字室の最期3 だから殺したんだ

「毎日、部屋を覗くんだよ」

「は？」

あまりにも低い声だったので、聞き取れなかった。

「部屋を覗くんだよ、あのババアが」字室が心底憎々しい声で呟き始めた「学校終わって、家に帰って、机に向かって、本を読む。人の視線を感じる。ふと部屋のドアをみると、開いてるんだ。

ババアが覗き見してるんだよ。勉強してるかどうか監視してるんだ」

「部屋に力ギは？」

「ねえよそんなもん」

にらまれた、かなり怖い。白眼がむき出しのつりあがった目つきだ。

「そんな理由で殺しちゃったわけ？」幸平が馬鹿にしたような声で言った「ああ、だから恨みが募ってあんなお化けになっちゃったわけだ……わっ！」

字室が飛びあがって幸平につかみかかった。そう、字室は幸平をつかめるんだ。

「おまえにわかる話じゃねえんだよ！黙れクソガキ！」

「おい、やめろって！」

「誰にもわからない話でしょ？どうせ！」

幸平がつかまれながらも負けずに食ってかかる。

「幸平も！やめろって！」

「何やってんのあんたたち」

サミが入ってきた。三人の動きがピタツと止まった。

「人の船でケンカするのやめていただけ？」

低い声。目が平らになってる。これは怒ってるぞ。

「それとも、みんなと一緒に、船ごと湖の底へ沈みましようか？」

サミがニヤツと、楽しそうな、残忍な笑みを浮かべた。

……超怖い。

「いや、やめます！遠慮します！」幸平が叫んだ。

「右に同じく」

字室はチツと舌打ちをしたが、幸平から手を離れた。

「それでよろしい」サミが偉そうに言った。なんだか年上ぶった話し方だ「で、お話の続きは？」

字室が弱り切った目つきでサミを見た。

毎日覗くんだよ。つきまとうてくるんだ。あのババアの視線が。部屋にいるといつも、勉強しているかどうか監視するために、覗きに来る。机に向かっているのを確認すると安心して離れる。とにかく息子を一流の高校へ、大学へ、それだけがうちの親の目的だったんだ。

俺は小さいころから成績優秀だった。少なくとも高校まではな、ずつと一番だった。それが、俺にとっても、あのババアにとっても当たり前だったんだ。

一流の進学校に受かった。でも、一流の学校っていうのは、全国から優秀なやつが集まってくるだろう？俺は初めて落ちこぼれた。今まで一番しか知らなかったのに、真ん中にすら届かない、普通のやつになった。

その辺の普通の馬鹿ならな、一流校に受かっただけで自分はえらいと思うだろうが、俺は違う。自分が一番どころか、中の上にすら届かない。そんなのは耐え難い。勉強は変わらず必死でやったさ、なんせあのババアが毎日毎日監視してるからな、他のことなんて何もできやしない。塾にも通った。ん？岩本、何をおかしな顔をしているんだ？俺の時代にだって塾はあったんだ。1979年だぞ？俺の時代こそ塾の全盛期さ。受かるか死ぬかって感じた。おまえらみたいに存在自体がお遊びな奴はいなかった。いや、いたかもな、下流のくだらない学校にな。……おい、幸平、今不満げな顔をしたな？まあいいさ。その下流の学校にすら行けないうちに死にしまったかわいそうな奴だからな。

ある日、古本屋で面白い本を見つけた。何の本かは忘れたが、部屋で読んでいたら、ババアが飛んできて俺の手から本をひったくった。「勉強しろ！」だ。受験に関係ないことは一切させない方針なんだ。

ババアだけじゃない、周りにいるのは馬鹿ばかりだ。

電車に乗って単語帳を見ていると、サラリーマンが覗いてくる。でも、すぐに目をそらすさ。俺が見ていたのはフランス語の単語なんだ。そいつ、きっと英語だと思ったんだろうな。「どれ、バカな学生が何か見ている、そんなの俺だってわかるぞ」ってな。それなのに見たこともない言語が目に入っただからあわてて退散だ。

「馬鹿なのはその人じゃなくて字室でしょ？」

幸平が甲高い声で割って入った。

僕もそう思ったけど、黙っていた。

「うるせえ、黙って聞いてろ」

字室が低い声で唸った。

とにかく、ババアがどこまでもつきまとうてくるんだ。俺は気が変になりそうだった……いや、実際変になったんだ。ある日、塾の帰りに、思いついたんだ。『あのババアを殺してやる』ってな。

まずノートを一冊買った。家に帰ってから、数学の勉強をするふりをして、計画を立てた。いや、正確に言うと、どういつふうにババアを殺すか空想した。包丁で刺すか？血が飛び散るから面倒だ。首を絞めるか？いや、完全に死に切らなかつたら面倒なことになる。高いところから突き落とすか？いや、高いところまでババアを連れていくなんて容易じゃない。今と違って高層ビルも少なかったんだね。近所のビルから突き落としてもよかったんだが、勝手に入って怪しまれるのが目に見えているからな。とりあえず、後ろから鈍器で殴るのが一番やりやすいと思って、角材とレンガを拾ってきて部屋に隠しておいた。

「なんだか気味の悪い想像だわ」サミがよそ見をしながらつぶやいた「青酸ストリキニーネでも飲ませてあげればよかったんじゃないの」

「何それ？」

「毒」幸平が急に關心があるような声になった「アガサ・クリステイの小説でしょ？」

「読んだことないわ」

「じゃあなんでそんな単語知ってるの？」

「知ってちゃ悪いかしら？」

「サミ、頼むから黙っててくれ」

字室が困り果てたような声を出した。字室はサミが相手だと怒鳴らない

半年かけて、完璧な計画を立てた。俺はどうかしてたんだろうな、テープに犯行声明まで吹き込んだよ。いかにババアが狂っているか、いかに俺は正しいことをしようとしているかってな。

でも、計画は無駄だったんだ。

あの日、成績が落ちたとババアが怒りだした。そりゃそうだ。犯行計画をノートに書くのに夢中で、まともに勉強していなかったからな。それで言い合いになった。

俺は一度部屋に戻った。そして、レンガと角材が目に入ったその瞬間、俺は正気を完全に失ったよ。気がついたら居間に立っていた。手に角材を持ってな。

ババアが足もとに倒れていた。とっくに死んでたよ。

「せっかく計画たてたのに、発作的に殺しちゃったわけ？」幸平が嫌そうな声を上げた「意味ないじゃない」

おい、そういう問題じゃないだろう幸平！

「そのあと、あなたが自殺したんでしょう？」

サミがものすごくストレートな質問をした。

字室は怖い目でサミをにらんだが、なにも反論せずに話を続けた。ババアを殺してから始めて気がついた。俺は殺す方法ばかり考えていた。計画も立てていた。でも、殺した後のことはなにも考えてなかったんだ。

家を飛び出した。とにかくあそこにいちゃいけないと思った。どこに向かつてるかなんて自分でもわからない。そんなこと考えられない、なにも考えちゃいなかった。

気がついたら、近所で一番高層のマンションの階段を、必死で登ってた。

「飛び降りたんでしよう」幸平が低い声で言った「新聞の縮刷版で見た。1979年だ」

字室は何も答えなかった、急に黙り込んでしまった。

「何も殺すことはないのに」サミが言った「学校を出てしまえば一人で暮らせるじゃないの」

「おまえらには絶対わかんねえよ」

字室が聞こえるか聞こえないかの小さい声で呟いた。下を向いて。「何がさ。短絡的すぎるよ。何もかもね。思想も何もあったもんじやない」

「ノイローゼで自殺した奴に思想云々言う権利があるか？」字室が幸平につかみかかった「あのままババアを生かしておいたらなあ、一生付きまとわれたぞ、大学に行っても就職してもそのあともずつとだ！永遠に！あいつは狂ってんだよ！」

「狂ってるのは字室くんでしょ！」

「ちよつと！二人とも黙りなさいよ！」サミが怒鳴った、そして、怖い顔で僕を見た「岩本！男だったら何とかしなさい！」

「そんなこと言われても……！」

視界に何か動くものが入った。使見合いをしている二人の後ろ、

上空から、何かがこちらに向かって飛んでくる……あれは！

「二人とも逃げろ！！」

僕が叫んで空中に飛ぶのと、あの老婆が船に突っ込んできたのは、ほぼ同時だった。

見下ろすと、船が大きく揺れて、周りの水が動いたのがわかった。老婆の頭で髪が揺れているのも見える。

でも、サミも幸平も字室も見えなかった。

第8章 字室の最期 4 逃げられないんだよ

「サミ！？幸平！？」僕はありつたけの声で叫んだ「どこだ！字室！？」

と、老婆が上を向いた……つまり、僕と目が合った。

体は朽ち果てているのに、眼だけが生きた人間のようにキラリと光っていた。

僕は反射的に逃げ出した。梶村商店に向かって。

「梶村さん！」

窓（もちろん開いてない）から部屋の中に飛び込むと、金庫に座っている梶村さんがぴくつと動いた。どうやら眠っていたらしい。

「何の騒ぎだ」

「出たんですよ！例の化け物が！」

「……字室は？」

梶村さんが立ち上がって窓に向かって歩いて行った。

「わからない。船に突っ込んできて、三人ともいなくなった」

「いなくなった？」

「だから！化け物が突っ込んできたからあわてて上に飛びあがったら、三人とももういなかったんです！それからこっちを向いて飛んできて逃げて」

「岩本、落ち着け」

「無理です！」

「字室君、もう終わりだね」

いきなり後ろから声がしたので飛び上がった。幸平だった。

「脅かすな！」

「まあ、自業自得だよ」幸平は無表情だった「自分が殺したお母さんが、化け物になって襲いかかってくるわけだから」

「なんで自分の子を襲うんだ？」

梶村さんが不思議そうな顔をした。

「そういう時代なの、今は」幸平が冷やかな声で言った「人はみんな、自分勝手に夢見たり空想したり、自分の世界を作ったりしてて、他人がその通りに動かないと不安になったり不満に思ったり、八つ当たりしたり、無理やり何かを強要したりするんだ。それで、自分の世界にそぐわない相手は、たとえ親だろうと自分の子だろうと、邪魔ものつてわけ。うん。僕の家と同じだな」

「幸平が生きていたのは80年代だろ？今じゃない」

「あつそう？何が違うの？」幸平が馬鹿にしたような顔で僕のほうに迫ってきた「もう半年以上家族に会ってないでしょ？岩本君は？心配じゃないんですか？そんなに自分の死を確認するのが怖いですか？家族がどうしてるかとか、心配してるんじゃないかとか、悲しんでるんじゃないかとか、考えたことないんじゃないですかあ？」幸平のしゃべり方があまりにも劇画じみているというか、狂気じみているので僕は怖くなった。

「考えてるよ」

「何を？どんなふうに？」

「いや、うちの家族は平和な核家族で」

「二人とも、そのくらいにしておけ」梶村さんが窓の外に向かって銃を構えていた「来たぞ」

パン！

銃声が響いた。ものすごくリアルな音だ。

そのあとパン！パン！と何度も聞こえた。

梶村さんはいつか「この銃も死んでいる」って言ってたような気がするけど。

これって生きている人には本当に聞こえていないのか？

「湖に落ちたぞ」梶村さんがこっちを向いた「見に行つて来い」
「え？」

幸平が目を丸くした。

「いやです！」

僕は叫んだ。

「字室も一緒に落ちたぞ」梶村さんが少し悲しげな顔をした。「行つてやれ」

僕がどうしようかと考えているうちに、幸平が窓の外に飛んで行った。

戻ってくるまで待つてようと思っただけ、梶村さんが怖い目でこちらをにらんだので……おそろおそろ窓の外に出て、湖へ向かった。はるか向こうに幸平の姿が見える。

幸平にやつと追い付いた。でも、何もない。幸平も水面を見下ろして、手を顎に当てて何か考えているようなポーズをしていた。

「何もない。見つからない」

僕が近づくと、幸平が独り言を言った。

「湖の底は？」

僕は湖にもぐつてみた。冷たい！今は真冬だった！忘れてた。刺すような寒さに耐えながら湖のヘドロやごみだめを見まわしてみる。特にそれらしきものは見えない。正直言つてあまり見つけたものもない。

しばらく湖底をうろついていたが、あまりの寒さに耐えきれずに飛び出した。

「冷てえええええええ！！」

ありつたけの声で叫んだ。そして気付いた。幸平がいない。周りを見回しても、薄暗い湖面が揺れているだけだ。

「幸平！！おい！」

叫んでみたが、返事がない。

もしかして幸平も湖の中に潜ったのか？

そう思って水面に近付いて中を覗こうとした時、突然伸びてきた

手がぼくの胸ぐらをつかんだ！

「うわあああああ！」

「馬鹿、叫ぶな」聞き覚えのある声がした「俺だ」

それは、字室だった。半目で薄笑いを浮かべた字室が、顔と腕を湖面から出していた。

「脅かすなって！何やってんだよ！」僕は手を振り払おうとしたが、字室の力が強すぎて無理だった。「離せて！とっとと出てこい！」

「無理だ」

字室が妙に優しい、今までに見たことがないような穏やかな顔で言った。

僕の背中に戦慄が走った。嫌な予感がした。

「なんで……」

「ババアに足をつかまれてる」字室が言った「湖の底に引きずり下ろす気だ。今これでも必死で抵抗してるんだぜ」

「何……？」

「俺がちよつとでも気を抜いたら」字室の顔がゆがんだ「おまえも道連れだぞ」

僕は何も言えなかった。ただ怖かった。体が震える。もう死んでるのに。

どうすればいい？

「幸平……」

周りを見回したけど、やっぱり幸平はいない。

「あんなやつ何の役にも立たねえって」

字室が優しく笑った。怖すぎる。

「悪いけど、終わりだよ」

「は？何が？」

しゃべろうとしても、ほとんど声が出なかった。怖くてたまらなかった。こんな恐怖を感じたことは、今まで一度もない。

「俺は失敗したんだよ。親の言うとおりに進学したのも失敗、ババ

アを殺したのも失敗、しかも自分まで殺して、死んだあとまでババアにつきまとわれてる」

「だから？」

字室が何を言いたいのか、さっぱりわからなかった。

「おまえにやわかんねえよ。幸平と伍長が勝手にいろいろ解釈するんだろうな。考えただけで胸クソ悪イや。サミだけだ、まともに悲しむのは……そうだ、サミに会えたのだけは失敗じゃなかった。でもな、生きて会ってたらババアと大して変んねえ口だけのバアサンだったかもな」

「サミに言ったら殺されるよ」

「だろうな。でももう俺たちは死んでるんだ」

胸をつかんでいる手の力が強まった、首を絞められているような気がする。もう呼吸をしていないのに苦しい。

「お前は生きてんだろ？」

「は？」

「おまえは生きてるんだよ」

「だから何？」

「とつとと帰れって言ってるんだよ」字室が急に凶悪な顔になった
「ここはお前のいる場所じゃない。幸平みたいな頭でっかちのノイローゼバカになったらおしまいだ。隊長は戦争だ、サミは事故だ。俺はババアだ。でもお前にそんな障害があるか？何をばかみたいにかんな下らねえ町をさまよってんだよ」

「でも僕は交通事故」

「うるせえよ！」

目の前で怒鳴られたので耳が痛くなった。どうしてだろう、死んでいるのに。いや、生きてるのか。でも体ないし、いや、そんなことを考えている場合じゃない。

「岩本君！」

後ろから幸平の叫ぶ声がした。そして、その瞬間、

字室の手が、僕の胸から離れた。

がはははははという声がした。

字室は、笑っていた。狂ったように笑っていた。

「大丈夫？今の字室君でしょ？あの怪物は……！」

僕は湖に飛び込んだ。湖底まで潜った。

寒さなんてどうでもよかった。字室がそこにいるかすらどうでもよかった。

探さずにいらなかった。

でも何も見つからなかった。

幸平に説得されて梶村商店に戻った時には、もうあたりは真っ暗で、日付が変わっていた。

第8章 字室の最期5 観念だけの存在だ

サミが船の上をくるくる回りながら、何か古い歌謡曲を歌っている。

聞いたことがあるような気がするけど、誰の歌か思い出せない。

「字室君、ほんとにいなかったのかな」幸平が船の先端に座った
「そのうちひよっこり出てきたりして。あのババアさんみたいな姿
になってさ。それで僕たちを食らいに来るんだ」

「怖い想像するなっつて」

「でもさあ、結局字室君は字室君だったね」

幸平が軽い口調で言った。空中に向かって叫んでいるみたいに。
「どういう意味？」

「生きているころと変わらないってこと」幸平がやつぱり独り言の
ように言った「ま、字室君だけじゃないよね。僕らつてさ、主観の
中を堂々めぐりしてるような存在じゃない、人と相談できるわけ
もない、生きてないから、社会とかかわって何かやるとか、役に立
つというわけでもない……一人でああだこうだ、ああだったこうだ
つた、それだけ。そういう考えだけが延々と続くだけ」

沈黙。サミが歌うのをやめてこちらを見ている。湖面は不気味な
ほど静まり返っている。

「字室君さ、何年も考える時間があつたはずなのに、結局何も変わ
らなかつたんだ、逃げるだけ。やつかいなババアさんから逃げるだ
け。生きていたところとやることは同じ。でも結局最後にはつかまっ
ちやつた……」

「字室、どうなったのかしらね」

サミがまじめな声で言った。顔を見たが、表情がなく青ざめてい
て、いかにもユーレイって感じた。

「同じ考えを堂々巡り……」幸平にはサミの声が聞こえてないみた
いだ「そんなことやってる限り、人は成長できないんだよ。そうい

えはばくも同じだな、生きてる頃もノイローゼで考え事ばかりしてたし、今も考えてばかりいる、人間死んだくらいじゃないんにも変わんない……」

またしても沈黙。僕もサミもなにと言わなかった、いや、言えなかった。

字室はどうなったんだ？

ほんとうに成仏したのか？それとも、怪物になった母親に地獄に引きずり込まれたのか？

そもそも成仏だの地獄だのって言葉の意味は？何だ？

なにより、僕たちはなんでここにいるんだ？

「岩本君」

幸平が急に口を開いたので、ビックリして１メートルくらい飛び上がってしまった。

「な、何？」

「岩本君は違うでしょ」

「何が？」

「僕らは堂々巡りの観念から、一生抜けさせない、永遠に。でも岩本君は、違うよ」

「何で？」

「生きてるから」幸平がものすごく深刻な顔で言った「元の生活に戻って、人生を続けられる。ほんとうの人生を」

僕は何も言い返せなかった。

字室も同じことを言っただけだったか？

『ここはお前のいるところじゃねえよ』

そんなことを言っていたような気がする。でも、ほんとうにそうだろうか？全部夢だったんじゃないか？字室も、怪物も、生きていた僕も、今までのことも全部。

急に、周りのすべてが幻想のような気がしていた。もともと地に足が付いていないし（浮かんてるから）自分自身までまるで幻で、

今にも消えてしまいそうな気がした。

「無理に戻ることはないじゃない、ここにいたっていいのよ」

サミが慰めるように言った。

「もちろん本人が決めることだけだよ」幸平がサミにそう言って、それからこちらをむいてこう言った「本当にいいの？このまんまで」

僕は何も言わず、その場を離れて、明かりの少ない町のほうへ飛んで行った。

商店の電気は消えていて、フデさんはとくに眠っていた。
金庫の上の梶村さんも目を閉じていた。眠っているだろう。

眠っている時ですら、背筋がぴんと伸びている。

たぶん、生きているところからこうだったんだろう。

何気ない行動に、その人の人生が現れる……。

僕の人生は、じゃあ、何に表れてるんだ？

少し迷ったが、今話すことにした。

「梶村さん……」

梶村さんがゆっくりと眼を開けた。

「何だ？」

「僕、明日、釧路に行こうと思うんです」

眠たげだった目が急にカツと開いた。そして、僕の目を射るようなまなざしでじつと見た。まるで、本気がどうか、覚悟ができているのか、念入りに確かめているみたいに。

「……それがいい」

梶村さんはかすかに笑うと、また眼を閉じた。

僕も眠ることにした。

第九章 死んでない！1 釧路へ

隣町との境目の、はるか上空。

透明な壁の前、幸平が手をかざすようにして何かぶつぶつ言っている。

「そのぶつぶつ言ってるのは、何か必要なの？呪文？」

「気分」

「はあ？」

「いいじゃない、特別な日なんだから」

「どうでもいいから早く通せ！」

幸平が子供っぽいふくれっ面を向けた。空間に白い亀裂が走る。

いつか、札幌へ行った時みたいに、見えない壁は無数の白い破片になっておちていく。

その、最後の一つが見えなくなるまで、僕はじっと下を見つめていた。

前にこれを見たとき、札幌で幸平の墓を見た。

自分の名前が墓に掘られているっていうのはどういつ気分だろうと思った。

今、同じことが僕に起ころうとしている。

あるいは、生きているのかもしれないけど……僕自身がここにユレイになっているっていうことは、肉体は、本体はどうなってるんだ？病院で仮死状態か？それとも……。

「岩本君」前を向くと、幸平がはるか向こうから叫んでいた「行くよ！釧路は札幌と同じくらい遠いよ！しかも方角が正しいかわからないから早めに出ないとさ！」

「わかってるって！」

叫んだ。でも内心まだ迷っていた。本当に行っているんだろうか？「いーわーもーとーくん！……！」

幸平が怒っている。

僕はため息をついて（ユーレイだから呼吸してないけど）動き出した。釧路へ。

『道がわからない』と言っていた通り、適当に進んだらしい。まずはどり着いたのはなんと、旭川だ。

「ぜんぜん違うだろうが道が！逆だろうが！」

「怒らないでよ、そっちだってだまってついて来たじゃない、文句も言わずにさ」

「それにしたって道が違いすぎるだろうが！」

「やっぱりさ、上空を飛ぶのはよくないんだよね」幸平が独り言のように言った「ちゃんと地上を、標識を見ながら飛んだほうがよさそうだね。それなら迷わない。どっかで地図を見ようよ」

幸平が駅の中へ飛んでいく。ついていって大丈夫なんだろうか。

町を見回す、大都市のはずなのに、どこか、寂れているような雰囲気がある。

釧路もそうだ。

あの湖の街だけじゃない。北海道はどこも元気がないのかもしれない。

「岩本君、わかった」幸平が嬉しそうな顔で出てきた「電車に乗ろう」

「は？」

「僕乗ったことないんだよ」

「はあ？」

「まず札幌行きに乗って2時間くらいでしょ、それから釧路行きが……4、5時間かな？それなら絶対迷わないよ。今日の夜には到着できるから」

「はあああ！？」

こっちが大声で呆れているのを無視して、幸平ははしゃいだ様子で駅の中に戻って行ってしまった。

電車に4、5時間って……絶対飛んでった方が早いだろ!?

2時間後。スーパーおおぞらの中に僕らはいた。

「なんかさ、電車の窓から見ると町の景色が違うよね。フッフ」

幸平が勝手に空いた席に座って、窓の外を見てはしゃいでいる。

旭川からずっとこんな調子だ。やれ牛がいる、やれ建物が見えた、やれ煙突の煙がどうのこうの、もううるさくてしょうがない。

「頼むから黙っててくれない」

僕は人生で一番、最高にいらいらしていた。

「何怒ってるのさ」

「こっちはこれから自分の生死を確かめに行くんだぞ!?!」声が神経質にキーキーしているのは自覚していたが、どうしてもやめられなかった。「はしゃぐ気になれるわけないだろうが!」

「気持ちはわかるけどさ」幸平が不満そうに言った。「ここで心配したって結果が変わるわけじゃないし、わめいたって早く到着するわけじゃないんだから、楽しもうよ、列車の旅」

「っていうかさ」僕は突然思いついた。「とつとここから脱出して、線路をたどって飛んでたほうが絶対早く到着するって!」

「早く到着してどうするのさ?」

「早いほうがいいに決まってるだろうが!」

「岩本君さ、さっきからずいぶん落ち着きがないけど」幸平がニヤニヤしはじめた。「本当に覚悟、できてるの?できてないんじゃないありませんかあ?」

明らかにからかい口調だ。

「できてなかったらここにいない」

そう言っではみたものの、実はまだ迷っていた。

ほんとうに行っているのか?

行かないほうがいいんじゃないのか?

「だからさ、こうやってゆっくり列車の旅をしながら、決意を固め

たほうがいいんだって」

「……単に自分がこれに乗りたかったただけだろうか」

「ま、それもあるよね」幸平が窓の外に目を向けた「おお、雪景色！すごいね」

「雪なんか見あきてるよ」

「でもさ、ここ林の中だよ。湖の雪景色とはちよつと違うじゃない、まだ内陸でしょ？」

「釧路行きが内陸を走ってるわけないだろ？海が近いよ」

「あー言えばこう言う」

幸平が笑った。僕は通路側に顔をそむけた。サラリーマン風の、スーツケースを持った男が何人か乗っていた。ビジネスだろうか。そういえば帯広行きにはビジネスマンが多いとか、誰かが前言ってたな？誰だったっけ？

しばらく考えて思い出した。うちのヤブ医者、つまり父だ。

仕事で札幌へ行った帰りに、父がこの列車に乗った。

周りはサラリーマンだらけで、みんな帯広で降りて行った。釧路まで行ったのはほんの数人だけだった。

そんな話をだいぶ前にしていたような気がする。

そうだ、僕はこれから家族のところへ帰るんだ。

今まで見事なほど、うちのアホ家族のことを思い出さなかった。

他に思いだせることはないか、記憶を探ってみた。

姉が祈祷……いや、これは思いださないほうがいいか。

父と母は医療関係者だからほとんど家にいない。それから……。それから？

僕は記憶の中で立ち止まってしまった。

何も思い出せない。

どうしてだろう？

「岩本君のご両親ってどういう人？」

「うわっ！」

突然幸平が話しかけてきたので、椅子から落ちそうになった。

「うわって何さ」

「いきなり話かけるな！」

「いちいち怒らないでよ」

「親父はヤブ医者。母さんも似たようなもん」

「医者なんだ。便利だね。病気になったらすぐ診てもらえる」

「新薬の実験台にされるぞ」

「ほんと？」

幸平の目が輝いた。

「んなわけないだろうが！」

「だからなんでいちいち怒るのさ？」

「頼むから黙っててくれえ」

列車はどんどん東へ進んでいく……。

第九章 死んでない！2 あれは僕だ

ほとんどの客は帯広で降りて行って、残り少ない客もちらほらと別な街で降りていく。

池田町を過ぎて残っているのは、白髪の老夫婦と、一人旅風の黒い帽子の女と、僕らだけ。

正確に言つと、僕らはユーレイだから、ここに存在している人間は3人だけだ。

「もうすぐ着くね」幸平は目いっぱい何かを期待している様子だ「着いたらすぐに岩本君の家に行こう」

「すぐ？」

迷った。5時間近く列車に乗ってたのに、まだ心の準備ができていなかった。

「すぐ！」幸平が叫んだ「せっかくついたから街を歩こうなんて思っちゃだめだよ。うろろろしているうちにどんどん迷って、やっぱりどこにも行かずに帰るってことになっちゃう」

「おまえは何で人の心を読むんだよ？」

「やっぱりそうしようと思っただんだ？ん？」

幸平がからかうように生意気な声を出した。

「そうじゃないけど」目を合わせなくなかったので通路側に顔をそむけた「ちよつとくらい駅前をうろついたっていいだろ、久しぶりなんだから」

「だめ！だめ！絶対だめ！家に帰ってから！」

幸平はかなり興奮した様子だ。そのうち飛び跳ねるんじゃないかと思うくらい。

飛び跳ねる……いつかの霊能ババアと字室の戦いを思い出した。

「字室はどこに行ったんだろうな」

「知らない」幸平が急に冷めた口調になった「お母さんと一緒に地

獄行きか、他の死人と同じように消え去ったか、どっちかじゃない？」

「幸平、冷たいな」

「何で？ もともと僕と字室君は仲悪かったし」

「たしかに嫌な奴だったけどさ」

僕が思いだしたのは、別れ際に胸ぐらを掴まれた時のことだ。

『おまえは生きてるんだよ』

『とつとと帰れって言ってるんだよ』

あの性格の悪い字室が、いったいどういう気持ちでこんなことを言っただろう？

『長い間の乗車お疲れ様でした。3分で釧路、釧路です。お手回り品、お忘れ物のないよう、お支度してお待ちください。降り口、右側、一番線路到着です。お降りの際、足もとにご注意ください……』

「とうとう着いたね」また幸平がわくわくした声で言った「緊張してる？」

「まーね」

幸平のはしゃぎようを見てるうちに、こっちは気分が冷めてきた。妙にどうでもいい気分だ。

窓の外にうつる景色も、生まれ育った街なのに、どうもよそよそしい。

それでも、歩道橋が見えた時には胸が高鳴った。

よく上で考え事をしていたから。

おかしいよな、死んでるから体ないのに、胸が高鳴るなんてさ。

「駅の周りに高い建物がない」

「どうせさびれた地方都市だよ」

「札幌だって地方都市だよ」幸平が駅前を見回している。ほとんど人がいない「でも、こっちのほうがいいな。札幌はやっぱり人が多すぎるよ」

「ここは少なすぎるけどな！」

「また怒ってる」

「怒ってない」

「せっかく生まれ故郷に帰ってきたのに何さ、その顔は」

「生まれ故郷って……」

そうだ、ここは僕が生まれてから車に轢かれて死ぬまで、ずっと住んでいた場所のはずだ。

なのにどうしてだろう？

「なんか、頭がぼんやりするんだよな……」

きつと人が少ないせいだ、だから街に現実味がないんだ。
気がつくと僕は空中を飛んでいた。

「岩本君！どこ行くの！？」

歩道橋の上から、街を見渡す。

そうだ、生きているころもここでこうやって街を見てた。

「こうして見るとさ、ますます高い建物がない。フラットだね」
いつのまにか幸平が隣にいた「ぼく、ここに住みたかったなあ」

「どうしてお前は高い建物にこだわるんだよ」

「高層ビルが大嫌いだから」

「なんで？」

「わかんない。文明の象徴だから？」

「いつの時代だよそれは」僕は右側を指差した「僕の家はあっちだ」
「一軒家？マンション？」

「あのへんにマンションは存在してない」

「早く行こうよ」

「……やっぱり駅前を歩いてからにしよう」

僕はふたたび駅に向かって飛んだ。

「ちよつと！岩本君！そういうのダメだって！」

後ろから幸平の叫び声が聞こえた。一人で来るんだった。強烈にウザいぞ。

「そんなことしたらやっぱ帰るとか言い出すって絶対！！」

「お前さつきからうるさいんだよ！少しは黙っててくれ！」

「だからなんで怒ってるのさ……！」

駅の前に着陸しようとしたとき、幸平の声が消えた。

ふりかえると、目をものすごい大きさに見開いて、口を大きく開けていた。うわあ、アホ面だ！

「何の真似？」

「あ……あ」幸平の開いた口から変な声が漏れた「あれ、あれ！！」

「あれって何？」

僕は後ろを振り向いた。

駅に向かって、一人の学生が歩いていた。

茶色い髪に、真冬なのにコートも着ないでブレザーのまま、ケータイをいじりながら早足で歩いている。顔は果てしなく無愛想だが、そこそこかっこいい顔だ。

僕はそいつに見覚えがあった。いや、よく知っていた。世界のだれよりもそいつを知っている自信がある。

奴が持っているケータイには容量いっぱいアプリが入っていて、そのほとんどはRPGだ。

奴はMAC以外のパソコンを使わない。Windowsなんて認めない。

これから家に帰って新しいアプリを自分で開発する気だ。ただしその気があるだけで実行はせず、オンラインゲームに一直線だ。

奴には奇怪な姉と、医療関係者の父母がいる。

今、目の前を歩いている高校生。

それは、僕だった。

まぎれもなく、他の誰でもない、岩本祐一だった。

第9章 死んでない！3 岩本家

あまりのことに茫然と突っ立っていると、幸平が目の前に回り込んできた。

「追いかけよう！」

幸平が『岩本祐一』の後を追いつめた。

僕はそれでも動けなかった。

今、目の前を通り過ぎた奴は、確実に、僕だ。岩本祐一だ。

死んだわけでも、病院で昏睡状態でもなく、普通に街を歩いてた。

でも、それじゃあ、今ここにいる僕は何だ？

「岩本くんつてば！！」

はるか向こうから幸平の声がした。見ると、駅に入ろうとしている自分が見えた。

そう、ここから電車に乗って、20分もすれば家に到着する。

動くしかない。駅のほうへ向かって飛び始める。でも何かがひっかかる。

「やっぱり生きたんだね！」幸平が興奮気味に叫んだ。「でもなんで起きて活動してるんだろう？魂抜けてるようには見えないよね」

「そっくりの別人かもな」

「まさか」

もちろん僕にはわかってた、目の前を歩いているのは自分に間違いないと。

でも、それじゃ今ここにいる僕は……。

「岩本君！立ち止まらないで！」

気がつくと、もう一人の僕と幸平が、改札の向こうにいた。

僕は、何か、裁きの門でもくぐるような気持ちで、改札を抜けた。

自宅。フツの一軒家。

自分の家のはずなのに何の感慨もわかない。
生まれてからずっと同じ、ここで暮らしてたはずなのに。

僕がぼんやりしているうちに、生きているもう一人と幸平は、と
つと中に入っていく。

「岩本君！」幸平がイライラしている、珍しい「さつきから何をば
けーっとしてるのさ！」

しかたなく、嫌々ながら、自分の家に入る。玄関に造花のバラが
ある（ほんとはブリザーブドなんとかって言う本物のバラらしいが、
よく知らない。うちの母がどこから持ってきた）玄関の横にすぐ
階段があるから、上に上がると、右が僕の部屋、左が姉の部屋。

もう一人の僕はもちろん右の部屋に入り、入るなり……ベッドに
倒れこんで寝てしまった。

幸平がそんな「もう一人」を見てボー然としていた。

「ふつう、帰ってきた途端寝ないよね」

「夜中にオンラインゲームするからだ」僕は机のMACに向かった

「6人でチームを組んでる。ゲーム内3位の協力なパーティーだ」

「不健康だよそれ」

「うるさい」僕はMACを触ろうとしたが……手がすりぬけた。

「幸平」

「わかってますって。どこを押すの？」

「押すって……」昭和50年代に死んだ人にどうやってMACを説
明すればいいんだろう？「とりあえずFirefoxをクリックし
てよ」

「クリックって何？」

椅子から落ちそうになった（いや、ユーレイだから落ちない、そ
もそも椅子に座れないんだけど、ビックリしたって意味だ！）

「お前！毎日テレビ見てるくせにそんなことも知らないのか！？ス
ダ以下だな！」

「怒らないでどこをどうすればいいか教えてよ！」

「クリック以上に簡単な説明があるか！」

二人でしばらくこんなばかげた口論をしていると、突然隣の部屋から、

『キエエエエエエエエエッ』

という奇声が聞こえ始めた。

頭が痛くなってきた。あれはうちの馬鹿サチコ（姉）だ！

幸平が部屋を飛び出していった。僕も嫌々後を追う。

隣の部屋、妙に女の子っぽいレースだらけの装飾を施した部屋で、安っぽい、段ボール箱に布をかけただけの祭壇に枯れ葉を飾って、バカ女が祈祷という名の奇声をあげている。

『キヨオオオオオッオオオッ』

手に持った変な木（神社でみかけるやつ）を振り回しながら叫んでいる馬鹿サチコ！

「岩本君」幸平が茫然と馬鹿を見ている「これ何？」

『誰』と聞かないあたりが、事態の異様さを語っているな……。

「うちの馬鹿サチコ、残念ながら姉」

「何してんのこの人？」

「知らねえよ！」

うちの姉は去年、宗教がかった変な男と付き合い始めた。それ以来、何を思ったか毎晩のようにこんな祈祷（と称した馬鹿騒ぎ）をする。

そんな説明をしようとした時、

「うるせーよ！馬鹿サチコ！」

隣の生きている岩本祐一が壁をガンガン蹴りながら怒鳴った。

「お黙り！」

バカも怒鳴り返す。そしてまた元通り奇声を上げ始める。

「岩本君、やっぱり性格きついね」

「毎晩となりで騒がれてみる！誰だって怒鳴るだろ！」

「そんなことより」幸平が両手で頭を抱えてうずくまった「この声、頭に刺さる」

「は？」

「僕もう駄目だ！ごめん」

そう言うやいなや、幸平は窓から外へ飛び出して行ってしまった。

「お、おい、待てって！」

僕も窓から飛び出そうとして、ふと、後ろの姉を見る。

久しぶりの再会だっていうのに、どうしてこうも何も感じないんだ？

遠くへ逃げたのかと思ったら、幸平の奴、一階の居間でテレビを見ていた。

「何やってんだよ！？」

「いいじゃない、ここなら声聞こえないし。それにしてもさ」幸平が天井を見上げた「お姉さんって、靈感強いのかな？ほんとに悪魔払いみたいだった。頭ががんがんして」

「僕らは悪魔じゃないだろ」

「岩本家ってみんな靈感強いんじゃない、だから岩本君もユーレイにさ」

「そんなことはない」僕は強く否定した「それより、これってどういうことなんだろう？」

「岩本君はユーレイになってるのに、本体は何事もなかったかのよう」に動いてる」

「そう、そんなことありうるか？」

「さあ」幸平がテレビに目を向けた「理由なんてないんじゃない。僕らが死んだあとどうしてさまよい続けているのか、字室君のお母さんは何であんな姿で出てきたのか、サミはどうして遊覧船といっしょに知らない町の湖にいるのか……何もかも理由なく起きてるよ」

「でも僕は現にここにいるんだぞ！？なのにはもう一人」

「落ち着きなよ！」幸平があきれたように言った「テレビでも見て」「ニュースなんか見てる場合か！」

「少し休憩するだけだって！ほら、もうすぐオリンピックだって！」
「そんなことはどうでもいい」

「いやだなあ、僕スポーツに興味ないんだよね。競技が始まったらほかの番組がつぶれちゃうじゃない」

画面には、バンクーバーオリンピックの特集（というかTV曲が自分の放送の宣伝をしているだけの様な気がする）をしている。
『とうとうあと2カ月ですね！』

タレントのはしやぎ方がわざとらしい……あれ？

何かが変だ。でも何だ？

「バンクーバーオリンピックなんて、とっくに終わっただろ」

幸平がこちらを向いた、かなり不思議そうな顔だ

「何言ってるのさ、来年の2月だよ、来年の」

画面に浅田真央とキム・ヨナが映っている。どちらが勝つか。

「キム・ヨナが金メダル。浅田は思いつきりミスったのに銀だよ。

あの審査おかしいよ。他に失敗しなかったもつと上手い奴がいくらでもいるのに」

「アハハ、珍しいね、岩本君がそういうの予想するの」幸平がケタケタと笑った「字室君と梶村さんはよくやってたけどね、意味のない予想」

「予想じゃなくて、実際に見たんだよ！」

何か話がかみ合っていない。

頭がまたぐらぐらし始めた。

「幸平……」

「何？」

「今は、何年の何月だ？」

「2009年の12月」幸平がなんでもないとこのように言った。
2009年。

……2009年？

「そうか……そうか！」

とつぜん霧が晴れて前が見えたような気がした。

全部の謎が一瞬で解けた。

「どうしたの、変な顔して」幸平がまたテレビを見始めた。「そういえば、もうすぐクリスマスなんだよね。僕らにはあまり関係ないけどさ。そういえばサンタって本当はユーレイだって知っ……」

「僕が車にはねられたのは、2010年の3月だ！」

僕の声は半分、いや、ほとんど、悲鳴だったと思う。

幸平が振り返った。目を見開いて。

「今はまだ2009年なんだろう？僕がはねられたのは2010年の3月の終わりだ！だから！まだ、僕は死んでない！」

しばらく沈黙があたりを支配した。幸平は表情を変えず、何を言えればいいか考えているようだった。

やがて、あきれたような困ったような笑いを浮かべて、

「……梶村さんの言ったとおりだったね」

静かな声でささやいた。

第9章 死んでない！4 岩本祐一

茫然としたまま、僕は階段を上った。自分の部屋に行くためだ。たぶん生きている『岩本祐一』はまだ眠っている。そして、数カ月後に自分が車にはねられてユーレイになるなんて夢にも思っていない。

だれがそんなこと予想できる？

部屋に戻った。

間抜けな顔で寝てる男をじっと見た。

……醜いな。

そう思った。

僕は今まで、自分はどちらかというと、いや、かなり、かつこいほうだと思ってた。

太ってもいないしがりがりでもないし、スダみたいな救いような不細工でもない。

でも、今日の前で、自分の姿を見ていると、どうにも……気持ち悪い。

「何やってんの、すごく嫌そうな顔してるけど」

幸平が閉じたままのドアから上半身だけ、生えたようにぬっと出てきてこっちを見た。

……ああ、ユーレイにしかできないよな、そんな芸当。

「なんか、醜いと思つて」

「は？」幸平が耳に手を当てて『聞こえない』というジェスチャーをした「何？」

「自分がすごく醜く見える」僕は正直に言つた「なんだよ、この間抜け面で寝てるのは。ユーレイが二人も覗きこんでるのに気付きもしない」

「別に醜くはないと思うけど」幸平が言つた「かつこよくないことは確かだね」

……なんか、針で突つつかれたような気分だ。やっぱり僕は自分をかつこいいと思っていたい。

「こんな風に自分を外から見たことなんてなかったから」

「だろうね」。僕が初めて自分を見たときは、血まみれだったし死んでたしそれに……」

「その話やめて」一瞬、血まみれの幸平のイメージが浮かんだのであわてて止めた「パソコンなしでこんなに長い間過ごしたこともなかった」

「いつから使ってるの」

「パソコン？生まれた時から使ってたよ。それこそ『物心ついたときから』って感じ」

「信じられない」

「平成生まれだから」

「あつそ」幸平が拗ねたような顔をした「僕とりあえず町に戻るよ。梶村さんに報告したいし、最近サミにも会ってないから、きっと寂しがつてるよ」

「そうだね」

字室がいなくなったあと一度サミのところに行ったが、ショックを受けていたのかほとんど話しができないみたいだった。

「僕も帰る」

「だめだって！岩本君はここにいないと」

「いたって戻るわけじゃない」

「試してみれば」幸平が全身をドアから出した「体に入れるかもよ、ちようどいま寝てるし」

少し迷ったけど、思い切って寝ている自分に近づいて、思い切って飛び込んでみた……自分に向かって。

……見事にすり抜けて、ベッドの下に落ちた。

「いわもとくーん？」

幸平の間抜けな声が響いた。

「ベッドの下に落ちただけだ！」僕はベッドの下に倒れたまま叫ん

だ「やっぱり無理なんだって！帰る！」

「はいはい、帰るのね。帰ろうね。でももう終電は行っちゃった……」

「飛んで帰ればいいだろうが……！」

「いちいち怒らないでってば……！」

言い合いをしながら外に飛び出した……が、真っ暗で、どちらへ行けばいいのかさっぱりわからない。

駅に戻って、線路をたどることにしたが、どこがなんだかわからなくて、さんざん迷った。

それでもなんとか湖の街にたどり着けたが、次の日の夕方までかかって、しかも、一日中言い合いをしたのでひどく疲れていた。

「やっぱり生きていたか」

梶村さんは平然と、眉一つ動かさずにそう言った。

「はい」

「しかも動いてたよね、ふつうに生活してたんだよね！」

疲れ果てた僕とは対照的に、幸平はやたらに興奮しているようだ。

「そういう例は聞いたことがないが、要するに岩本は死霊ではなくて、生霊だったということだな」

「いつかのスダ君みたいだね」

おい幸平、僕をあんなのと一緒にするんじゃない！

「……僕はどうすればいいんですか」

「3月になれば何か起こるかもしれない」梶村さんが言った「事故に逢って、そのあと目覚めるか、あるいは……」

「そこで死ぬかもしれませんよね？」

「まあな」梶村さんがあごに手を当てた「でも、それはその時にならないとわからないことだ。今から心配してもどうしようもない」

湖の真ん中、幽霊船。

サミが船の先っちょでぼーっと座り込んでいるのが上空から見え

た。

「幸平！岩本！」僕らを見つけると、立ちあがって叫んだ「何やってたのよ！？何日も一人でぼっとくなんてひどいじゃないの！」

「僕ら釧路に言っただよ！」幸平が叫んだ「岩本君は生きてたんだよ！」

サミの顔に動揺の色が浮かんだ。

「本当？」僕が近くまで降りると、サミがちかよってきて不安そうな目で僕を見た「本当に？」

「うん。普通に歩いてた」

「歩いてた？」

「岩本君が事故に逢ったのが、来年の3月なんだって」

幸平が、芸能人のスクープでもあったみたいに、はしゃいだ声を出した。

「何ですって？」

「今は2009年の12月で」僕は、理解してもらえらるうかと疑いながら、説明した「僕が車にはねられたのは、2010年の3月なんだ。つまり、まだ僕は事故に逢っていなくて、当然まだ生きていて、普通に学校に行ってる。梶村さんは、3月になれば何か起きるって言うてるけど、何が起きるかはわからないし、その時に僕がどうなるかもわからない。目が覚めるかもしれないし、あるいは本当に死ぬのかもしれない」

サミはしばらく、何の事かわからないという顔で僕をじっと見ていた。

「でもさ、少なくとも今は生きてるんだよ！」幸平が叫んだ「今からなら、事故を止めることだってできるかもしれないし、もしかしたら、そんなにひどいけがしなかったのかもしれないじゃない？可能性があるんだよ、可能性が！」

嬉しそうな幸平と、茫然としているサミは、あまりにも対照的だ。「じゃあ」サミが消え入るような声を出した「岩本も、いなくなっちゃうの？」

サミがまっすぐに僕の目を見て、さみしそうな顔をしたので、僕は何を言えいいのかからなくなった。生きている体のある僕だったら、女の子にそんな顔されただけで心臓が爆発するかもしれない。

「字室みたいに？」

母親の悪霊と一緒に消えていった字室を思い出した。怖くなる。もし事故にあった日に、ほんとうに死んだら？

「やだ」サミがそばによってきて、抱きしめるみたいに両手を首にまわした「どこにも行かないで」

お互いに触れないけど、ほとんど抱きしめられたように見えただろうな。

「サミ……」

「みんなどこかに行ってしまうの？ 私はずっとここでひとりぼっちなのに？ どこにも行けないのに？」

「サミ！ 落ち着いてよ」幸平がよってきた「僕と梶村さんがいるじゃない」

「でも、いつかなくなっちゃうかもしれないじゃない！！」

サミが地面にくずおれた。泣いていた。声を押し殺そうとしているみたいだったけど、うまくいかないみたいだった。

僕はますますどうすればいいかわからなくなった。

「字室くんがいなくなったのが、相当ショックだったんだろうね」

梶村商店に帰る途中の上空で、幸平が言った。

「あの二人、仲良かったもんな」

「生まれた時代も近いしね」幸平が嫌味な口調になった「60年代と70年代でしょ。そりゃ話も合いますって」

「お前だって80年代だろうが」

「僕は時代というものが何たるかわからないうちに死んでるの！」
幸平が空中で止まった「岩本君」

「何？」

「絶対岩本君は、生き返るよ」

幸平が妙に確信のこもった声で言った。文句を言おうと思って振り返ると、ものすごく怖い顔でこっちをじっと見つめていたので、声が出なくなってしまった。

「きつと、ばかみたいに、何事もなかったように目が覚めるんだ。家に帰って、高校に行って、しばらくすれば事故のことこの町のことも忘れるよ。それで、大学に行って、就職して結婚して、子供ができて、年寄りになって年金で暮らしながらゲームで遊んでるときに、突然『そういえば、昔ユーレイだったような気がするのう』なんてつぶやくんだよ」

何の物語だそれは、と僕は思ったが、悪くない人生だと思った（年金暮らしでゲームという部分が特に）

「……なんでわかるんだよ？」

「いいじゃない。そのほうがおもしろいんだから」

幸平がまた飛び始めた。あわててあとを追った。商店の明かりが見えてきた。

「それにさー岩本君」

「何だよ」

「葛西アイカさんに逢いたくありません？」幸平が振り返ってニヤリと笑った「生きていれば、どこかで会えるかもよ？年もそんなに離れてないし？」

「……アホか！」

「何さ、今ちよつときめいたくせに」

「何がときめいただ！？」

文句を言いながらも、僕はアイカのきれいな足や、別れ際の様子を思い出していた。

生きていれば会える。

……確かに、悪くはないかもしれない。

第10章 残り時間 1 フデさんの体調不良

「マジ！マジで！？」そばかすだらけのぶさいくな男が驚いている
「生きてんの？」

「しかも目の前を普通に通り過ぎてった」僕は出来るだけ神妙な顔
で言った「自分が」

「ええ」

スダが興奮したのか何なのか、ベッドの上でバタバタ暴れながら
大笑いを始めた。

「笑い事じゃない」

僕は冷めた顔をしたが、内心自分もおかしくて笑いそうだった。
何がおだかわからないが、とにかく僕は生きている！

「じゃあさー、生き返れたらまず俺にメールしてよ。アドレス覚え
て」

「何で？」

「何でって何だよ。そのほうが楽しいって！あ、それよりまずさ、
俺に会いに来てよ。実際に生きてる岩本が見たい」

……なんで生き返ってまでこの町に来なきゃならんのだ！？

おバカのスダはほつというて商店に帰ると、真昼間なのにフデさん
が布団で寝ていた。

昨日の夜あたりから調子が悪そうだった。今日確か病院に行つて
たはずだが。

「ついていったんだけどさ、あんまりよくないみたい」枕元に幸平
が座りこんでいた「重い病気ではないみたいなんだけど」

「風邪？」

「血圧が高いって」

幸平が座っているのとは反対側の枕元に、梶村さんが座り込んで
いた。フデさんの顔をのぞきこんで、難しい顔をして黙っている。

「血圧？それだけ？」

「まあ、お年寄りだし、前にも血管の手術してるよね？」

幸平が梶村さんのほうを見たけど、梶村さんはまったく何も答えなかった。表情が暗い。

フデさん本人は、普通に、ただすやすやと寝息を立てているだけのように見える。

「そんなに時間が経っていたのね……人間が一人寿命を終えるほどに」

サミが月を見上げてしんみりとつぶやいた。

「フデさんはまだ死んでない」

「でももうかなりお年を召しているのでしょうか？戦争中にもう大人だったのだから、今は……80歳以上よね」

……まあ、夫が軍服なんか着てるくらいだからね……と僕はつぶやきそうになったけど、やめた。

梶村さんの死後、つまり戦後、フデさんが過ごした60数年の膨大な時間は、いったい何だったんだろう？

子供は2人いるみたいだけど、今は一人きりだし。

そばに夫のユーレイがいるのに、見えてないし。

「みんな変わっていくのに、私はずっとこの船と一緒に湖にいる」

サミが白い月を見上げたまま言った「フデさんが死んだら、梶村さんってどうなるのかしら」

「どうなるって？」

「一緒に成仏できるのかしら、それとも、一人だけ取り残されるんじゃないかしら。私は心配だわ」

「取り残されるって……とにかく」僕はむきになって言った、あまり考えたくなかったから「フデさんはまだ死んでない」

「いずれ死ぬわよ。お年寄りでしょう」サミがこつちをにらむように見た「若くても死ぬ時は死ぬのだから。幸平や字室や私みたいに」
どうも機嫌が悪いみたいだ。字室がいなくなってからずっとこん

な感じた。笑わなくなつて、ときどき人のことをキツと怖い顔でにらむ。

僕はサミから目をそらして湖の向こうを見る……といつても、真つ暗で何も見えない。山も見えないし、月以外に星も出ていないし、町の灯りもはるか彼方にかすかに点々と見えるだけだ。

いじけても無理ないよな。こんな真つ暗なところで、何十年も一人つきりでいたんだから。

「ミカちゃんのお母さんもだいぶ年だからね。遅くに出来た子だつて言つてたしね」商店の屋根の上で幸平が寝転がつていた「あのお父さんだつて60近いんじゃない？死んだつて、だれも驚かないだろうね。ましてやフデさんは……」

「人を勝手に殺すな」

サミといい幸平といい、もうフデさんは死ぬものと決め付けているように見える。

「2、3日寝てれば治るかもしれない」

「そうかなあ……もしそうだったら、梶村さんがあんな顔で黙るかな」

「どういう意味？」

幸平が起き上がつてこつちを向いた。

「梶村さんつて、人の生死がわかるじゃない？こないだ来た友達……何て言つたつけ？ま、いいや、あの人が死んだ時もさ『もう助からない』つて言つてたじゃない」

確かに、谷川が死んだ時そう言っていた。

僕はそれを、この目で見た。

「きのうからずーつと黙り込んでるんだよ？聞いても何も返事しないし。だから僕は思ったんだ。もしかしたら、梶村さんには、もうフデさんが助からないつてことがわかつてるのかもしれないつて。でも、相手はフデさんでしょ？最愛の妻じゃない？口に出したくな

いんじゃない？『もう死ぬ』なんて」

「そうだけど……」

確かに、梶村さんの様子を見ているとそういう感じがするけど、でも僕は、もう少しフデさんには生きていてほしいと思った。

別に世話になったわけじゃないし、商店に勝手に出入りしてるからでもない。

ただ、そう思うだけだ。

「でもどういふことなんだろう？」

次の日、また幸平と二人で釧路に向かう上空で（今回はJRには乗らないぞ！）どうしても解けない疑問に直面していた。

「事故に会った瞬間にタイムスリップしたってこと？」

「そうなのかなあ」前方の背中から力の抜けた声がした、かなりのスピードで飛んでいるのに幸平はやっぱりのんきだ「全然わかんないよ。何度も言うようにさ、僕らに起こっていることに理由なんてないよ」

幸平がスピードを落としてこちらを向いた。急に顔つきが大人びて見たのでびつくりした。

「なんなら、事故に会う前に止められるよ。事故の日は朝から生きている岩本君にはりついてさ、事故現場に行けないように何か起こせばいいんだからさ、アッハハ」

おい、いったい僕に何をする気だ？笑い方が怖すぎるぞ。

「事故が起きたら、僕は戻れる？」

「じゃないかと思うんだけど、もしかしたらほんとに死ぬかも。その日になってみないとわかんないよ」

「ホントに死ぬ……」

「字室君みたいにさ」幸平がまた顔を前に向けてスピードを上げた「普通に死んだ人と同じように、存在が消える。ユーレイにいるよりずっといいよ」

ホントに死ぬ……。

ユーレイになって上空を飛びながら考えるようなことじゃないけど……ホントに消える、それはどういう状態なんだ？ いや、そもそも状態なんてものがなくなるってことか？

本当に無になるってことか？

無って何だ？

完全に僕の理解を超えてる。

怖くなってきた。

「岩本君、まだ日にちがあるよ。あまり思い詰めないほうがいいよ」「そう言われてもなあ」

「それよりさ」幸平が空中で止まってにつこりと笑った「どうして僕ら、海の上を飛んでるのかな？ 釧路まで行くのに海を渡る必要はないよね？」

「えっ」

足元を見ると……青黒い海が広がっていた、はるか後方に陸（らしき影）が見える。

「……何やってんだお前は！ 道間違っ以前の問題だろ……！」

「岩本君だって気がつかなかったくせに……！」

「うるせー……！」

二人のユーレイは互いに罪をなすりつけながら陸に向かった……。

第10章 残り時間 2 両親

ケンカをしながらなんとか釧路にたどり着いたのはいいけど、またあのバカ姉が祈祷をしているせいで、幸平が家に近付けない。僕は一人で部屋に入った。まだ『生きている僕』は帰ってきていない。いまのうちにMACをいじろうと思ったが、僕は物に触れない。あきらめて今に戻ると、めずらしくうちの夫婦二人がのんきにテレビを見ているじゃないか！

びつくりして思わず後退したけど、よく考えたら僕の姿は見ええないのだ。

親の前で手をひらひらさせてみたり、大声をあげてみたりしたけど、全く気付いてくれない。

親子のつながりなんてはかないものだ。

でも、多忙な医者ヤブだけどのくせに、なんで二人揃って家にいるんだ？

「あの奇声はなんとかならないのか」

「どうにもなりませんよ」

父親の質問に母親が即答……って、少しは何とかしようとしろよ！親なんだから。

「祐一は？」

「毎日怒鳴ってるけど。でもやめる気配はすこしもない」

「はあ」ヤブ医者がため息をついた「少しは俺に似た静かな人間になってほしいもんだ」

「何を言ってるんだ」

「何を言ってるの」母が僕と同時に声をあげたのでびつくりした「あなたのどこが静かなんですか。テレビを見始めたと思ったらあの芸人の服は変だのあいつは最近キレがないだの、ずっとしゃべりっぱなしじゃないですか。おかげでテレビの音声が聞こえないでしょ」

「まあまあ、静かにテレビを見ようじゃないか」

「だからそう言ってるじゃない」

「まあまあ」

アホな夫婦が黙ってテレビを見始めた……が、すぐにまたヤブ医者
者が口を開く。母が止める。しばらく黙っている。

でもやっぱりしばらくするとおしゃべりが再開する。

こんなパターンが自分の親にあったとは、知らなかった。

そういえば、前にこの二人と一緒に何か話したのはいつだったろう？

思い出せない。

「祐一はどこいった？」

ヤブ医者がぼそつと呟いた。自分の名前が出てきたので少しのけぞった。

「部屋でネットでもやってるんじゃないですか」母親があきれたように言った「少しは外に出るとか、部活をやるとか、活動してくれればいいのに、学校から直帰で部屋にこもってるなんて」

そういえば、ネットゲームばかりやるなって注意された記憶がある。無視したけど。

「まあいいさ。あいつらの世代は、俺たちと同じようには生きられんよ」ヤブ医者テレビの画面を見つめながら、うわごとのように言った「俺らの時代はまだ、のんびりと生きてればそれなりになんとかになったかもしれないが、最近の世の中の変わり方は、早いよ。俺たちの十倍、いや、もっと早い。二十年前に今の日本や世界をこんなふうに想像できたやつはいないだろう。インターネットなんて言葉もなかったんだからな。」

俺らみたいに、ただ学校を出て、部活やって、就職して、なんてふうには、今の子たちは生きられんよ。そんなのんびりした古い生活してる奴は間違いなく淘汰されて消えていく、これは断言してもいい。俺は祐一にはそうなってほしくない。時代についていくためにネットゲームが必要なら全然構わん。あいつらにはあいつらのス皮ードがある」

僕はビククリした。このいつもバカそうなしゃべり方をする父が、

こんなことを考えていたとは。

「あなたらしくない真面目な意見ね」

母親もテレビ画面を見つめたままつぶやいた。画面では芸人が何かコントらしきものを披露しているが、全然おもしろくない。

「俺は時代についていけなかったからな」

ヤブ医者が独り言のように呟いた。

「サチコはこれからどうするのかしらね」母が言った「大学を休学してるけど、まさかこのままやめたりはしないでしょうね？」

「それは本人しか決められんよ」

父が興味なさそうに言った。

僕はしばらくその場で両親を見つめていたが、もうしゃべりだす気配がなかったので、外に出た。

父親がこういう考えを持っていた。

そんなこと聞いたことがなかった。

僕は生きていたころ、両親の何を見ていたんだろうか？

外に出ると、幸平がちょうど上空から降りてきたところだった。

「綺麗だね、橋のあたり」機嫌がよさそうだ「あれが幣舞橋なのかな？サミに見せたいね。金沢とは違っただろうけど。でも僕らカメラ持ってないからね」

そういえば、サミが前に故郷の川の話をしていた。

きっと帰りたいだろうに、なぜかあの湖に縛られている。

「今度スタにでも借りるか？持つてるかわかんないけど」

「そうしよう」

僕らは帰ることにした。すっかり暗くなっていた。

上空から街の灯りが見える。橋に沿って光る街灯。車。

こんな景色、本当は見るはずじゃなかった。

やっぱり僕は生き返って、地上から街の景色を見たい。
ちゃんと肺で呼吸して、自分の足で歩きながら。

湖の町に帰る。サミの船に行くと、船の甲板でサミがうずくま
て下を向いていた。

「どうしたの？」

幸平の呼びかけに顔をあげた。今にも泣き出しそうな顔。

「字室が消えた」サミが消え入りそうな声で言った「ねえ、あんな
たちも消えちゃう？」

「は？」

「そしたら私、一人ぼっちになっちゃうわ」サミが立ちあがった「
もう40年以上ここにいるのよ？いつまでこんな暗い所で一人で耐
えていればいいの？いつか終わるの？誰かが迎えに来るの？それと
もずっとこのまんま？」

ものすごい早口だ。かなり追いつめられているんだ、精神的に。

でも、僕はなんと答えていいかわからない。

へたに『大丈夫だよ』なんて言っていていいんだろうか？

「僕は消えたりしないよ。もう死んでるし。自分でもここにどうし
ているかわかんないけどさ」幸平が妙に明るいんきな声で言った
「それに、まだだれか増えるかもしれないじゃない。岩本君が来た
みたいにさ」

「岩本は？」サミがこっちを向いた「いなくなったりしないよね？」

「えっ？」

僕は……生きてるから……もしかしたら……とは、言えなかった。
「ねえ？どうなの、やっぱりいなくなっちゃうの？」

詰め寄ってきた。どうしていいかわからない。

「岩本君は生きてるからね」

幸平がのんきな声で言った。おいおいおいおい、ここでそれを言
うか！？

「生きてる」サミがはつとしたように動きを止めた。「そうか、そうよね」

船がぐらりと揺れた。別に足ついてない（浮いてるから）のに、なぜか僕らまでぐらつと傾いた。

「じゃあ、死んだら、ずっとここにいられるの？」

サミの目が不気味な光を放った……、と、突然湖の水が噴水のように噴き出してきた！！

「岩本君！離れて！」

幸平の叫び声がした。僕はとっさに上空にのがれた。でも水がどこまでも這い上がって追ってくる！

第10章 残り時間 3

「とにかく離れて！」

幸平がすぐ横に飛んできてそう言つと、商店のほうに向かつてすごいスピードで飛んで行つた。

僕もあわててあとを追う。ちらつと後ろを見たけど、暗すぎてよく見えなかった。

「僕がここに初めて来たとき、サミはあんな感じだったんだよ！」
幸平の叫び声が聞こえた。

「は？」

「たぶん水で僕を飲み込もうとしたんだ」ようやく商店の前で幸平に追いついた「でも、相手が生きた人間じゃなくて、もう死んでるコーレイだつて気付いて、やめた」

「どうということ？」

「僕もわからないよ。でも、あんなところに何十年も一人でいたんだから。気が変になって人を襲つたつて無理もないと思わない？」

「つてことは、さっきのは僕を襲つてた？」

「そうだよ」幸平が顔をしかめた「でも、またあんなふうになるなんて思つてなかった。もう大丈夫だと思つてたのに」

商店の中に入る。フデさんは眠つていて、梶村さんはその横にじつとすわっている。

やっぱり表情が深刻だ。

「フデさん、ずっと眠つてるんですか？」

僕がそう聞くと、梶村さんは無言でうなずいた。

「実はさっきサミが……」

「岩本君」幸平が僕と梶村さんの間に割つて入つた「会わせたい人がいるんだけど」

「は？」

「今から札幌に行こう」

「はあ？」こんな時に何を言ってるんだ？「そんなことしてる場合じゃないだろうが！」

「それが、そんなことしてる場合なんだよ」幸平が真面目な顔で言った「知り合いで一人だけ、僕らが見えて、しかもまともな助言をくれそうな人がいるんだ」

「誰それ」

「うーん、顔を見たら確実にビックリすると思うよ」

幸平がニヤニヤし始めた。

「何をこんな時に笑ってんだよ！」

「行つて来い」

梶村さんがそう言ったので僕はビックリした。表情は動かないし、こちらを向いた気配もない。

「岩本くーん、早くして！」

気が早い幸平は、既に窓の外に出て僕を呼んだ。

はつきり言つて気が進まない。今頃サミは一人で狂ってるんだぞ？近づくのは怖いけど、確実にさみしいんだろうし、悲しいんだろう。

どうすればいいんだ？

札幌。街の灯りがまぶしい。湖の町や釧路とは比べ物にならない。

「たしか中心からちよつと西だったと思うけど……」

おい幸平、そんな大雑把な記憶でほんとにたどり着けるのか？

「どういう奴なの、そいつは」

「何て言うかな、かなりな難病を抱えててあまり家から出ないんだけど、頭はすごく良くて、ロボット工学をやってるんだよ。ロボット作つて研究するのが仕事？よくわかんないけど」

「へえ」

話を聞いたただけだとかかなりすごい奴だ。

「でももつと驚くことがあるんだよ……クククッ」

空中を飛びながら、幸平が怪しげな笑いを洩らした。何か企んでるな！

「幸平」僕は低い声で言った「何か悪いことを考えてるなら、いまのうちに白状しとけ」

「別にそんなこと考えてません……あ、ここ、ここ……どの部屋だったかな？」

かなり高層の、高そうなマンションの最上階の窓をのぞく幸平。だれかに見えてたら完全に泥棒だな。でも、この高さまで自力で登れるやつはいないだろう。浮いている僕でさえ、下を見るとその高さにぞっとする。生きててここから落ちたら確実に死ぬな。

「岩保く〜ん、います？起きてますかあ〜」

幸平が間抜けな声で叫んだ。

前から思ってたけど、こんな力の抜けた大声を出せるのは、この世でこいつ一人だろうな。

「外に出れないからそっちから入っておいで」

中から、若い男の声がした。学生みたいな声だと思った。

「おじゃまします〜」

幸平がベランダの窓をすりぬけたので、後を追った。

中には、パソコンとパソコンとパソコンと……なんだかよくわからない機械とか、基盤とか、とにかくパーツだらけだった。部屋の隅にはなんとMACの大群！！

なんて魅力的、いや、雑然とした部屋なんだろう。

「誰かと思ったら幸平か。ひさしぶりだね」デスクのモニターの影から声がした「前に来たのって、たしか僕が大学の時だから……ずいぶん前だね」

「僕らには時間はないも同然だから」

幸平がさびしそうな声で言った。僕は声の主を見ようとデスクに近づいて……おもいつき驚いて天井まで飛び上がった。

そこにいたのは、僕だった。

正確に言うと、僕と全く同じ顔をした男だった。

髪の色は黒いし、色つきのメガネをかけていたけど、それでも瓜二つだった。

「ドッペルゲンガー」

もう一人の僕が、やはり驚愕の顔でつぶやいた。

「だから驚くって言ったでしょ？」幸平が僕のほうを見て、楽しそうに笑った。「最初湖の上で岩本君を見たとき、岩保君が死んでユーレイになったのかと思ったんだ。だって同じ顔じゃない？まあ、雰囲気が違うな」とは思ったけどさ」

「ちょ、ちよつと待って」僕は何が何だかわからなくなってきた。「こないだ釧路で自分が歩いてるのを見つけたと思ったら、こんどはそっくりな奴が別な街にいる、どうなってんだ一体……」

「この世には同じ顔が3人いるって言う」

そっくりさんがつぶやいた。

「でもそれってたしか、会ったら死ぬんじゃないか？いや、待てよ？僕はもう死んでユーレイになってるから問題ないのか？でもまだ生きてるんだよね？ってことはやっぱり3月に」

「ごめん、岩本君が落ち着くまで待ってくれる？」

人がパニックになってるのに、幸平は楽しそうにもう一人と楽しそうに何かしゃべっている。どうやら、僕に会ってからのことを説明しているらしい。でもそんな僕は聞いている余裕はない。

何がどうなってるんだ？

「僕は太陽の光にあたると、5分くらいで倒れて死んでしまう」岩保という名の男が穏やかに話し始めた。「そういう病気なんだ、治療法はない。だからずっと家の中にいる。外に出るときは」

机の下から取り出したのは、ダースベーター？みたいな、黒いかぶりものだ。

「こんなのかぶって歩かないといけない」

「それは……大変だね」

映画の衣装みたいな格好の男に向かって、僕にはそれしか答えようがなかった。

「警察に職務質問されたこともあるしね」岩保が困ったように笑った。「でも、特殊技能がって」

「僕らが見えるし、他人の記憶とか思い出が読める」

幸平がなぜか得意げに言った。おい、お前の技能じゃないだろ、それは。

「で、さっきのサミ？だっけ？女の子だけど」岩保がメガネを直しながら言った「きつとさみしがっているだけだ。それはわかるよね？どうして暴走したのかはわからないけど、たぶん悪意はないし、僕が会ってきた怪物みたいに、人を食ったりはしないと思う」

「人を食う？」

「いるんだ、そういうのも」

僕は字室の母親を思い出した。あんなのが他にもいるのか？

「岩本君は生きている、だからいずれいなくなるかもしれない。同じように幸平や他のユーレイも消えてしまつて、自分だけになつてしまつ、一人ぼっちになる、それが彼女の一番恐れていることじゃない？そこをなんとかしてあげればいいのさ」

なんとかするって……。

「どうやって」

「たとえば、生き返つたら必ず戻ってくるって約束するとか」岩保が僕のほうをまっすぐ見た。真剣だ。自分そっくりの顔が真剣だとかかなり怖い「岩本君はユーレイじゃなくなるけど、実態は消えるわけじゃない。生き返るだけ。だから、戻ってきてまた話すことはできるでしょ？まあ、ユーレイがその時見えてればの話だけど」

「そうすれば友達は減らないね」

幸平が感心したように言った。

「支えてあげる人が必要だよ。可哀そうだ……」

ひどく同情した声だ。優しい男なのか、もともとこういう話し方なのか（そういえば、幸平と岩保は雰囲気がよく似ている。おっと

りというかぼんやりというか……)

「とりあえず、湖の水にのまれないように、距離を置いて呼びかけてみなよ」岩保が立ちあがった「せっかくだからこのPCいじつてく? 岩本君好きでしょう? このへん」

岩保が部屋の隅のMACを指差して笑った。

人の記憶を読むってこういうことか? それとも幸平が話したのか?

さんざんPCの話で盛り上がって、いいかげん帰ろうとしたら、

「岩本君、生き返ったらここにおいで」岩保がそんなことを言い出した「初島を探すのを手伝ってほしいな」

「は? 誰?」

「まだそんなこと言ってるの?」幸平が呆れたように大声をあげた「病気とは関係ないと思うけどなあ……とつくにそんなのやめたのかと思つたら」

「やめるわけがない」

そう言つた岩保の顔が、今までの穏やかな顔から一転して、憎しみにあふれていたので僕は驚いた、そして、怖くなった。

札幌の上空を飛ぶ。あいかわらず地上に星があふれてる。中島みゆきか?

「岩保が探してる奴って誰? 何したの?」

「別に何でもないよ。その人に会つた直後に病気が発症したから、その人のせいだと思つてる。変な思い込みなんだ。ほんととは先天的な病気だと思つよ」

「本人にそう言つた?」

「生き返つたら言つてあげなよ」幸平がめんどくさそうに言つた「ほんととはもうかわるつもりなかったんだ。生きてる人にかかわるとろくなことがないから、でもね」

「でも何だよ?」

「岩本君は生きてるから、たぶん知り合つておくと便利だろうと思

って。特殊技能は本物だし、怪奇現象にも詳しい。生き返ってからまた何かに遭遇したら……」

「おいおい、生き返ってまでそんなのは勘弁してくれ！……それよりサミだよ」

「そうだね」

それから無言で空中を飛んだ。

サミに呼びかける言葉を探しながら。でもいい言葉なんてちっとも浮かばなかった。

こちらは本気で心配だ。でもそれをどう伝えていいかわからない。生きてても死んでも同じだ。人の心はなんて難しんだろう？

第10章 残り時間 4 幽霊船

湖の町に戻った。

毎日、夜になると湖の上空に飛んで行った。でも幽霊船は出ていない。

おもいつきり叫んでサミを呼んでみたけど、反応がない。

湖の中にももぐってみたけど、真っ暗で何も見えない。

「こないだのが、シヨックだったのかな？ 殻にこもっちゃったのかも」

昼間、晴天の空の下で湖の浜辺に座って、幸平がつぶやくように言った。

「そういえば、怒ったり困ったりすると船ごとくぐってたよな、突然」

今までのサミの言動を思い出す。そして気付く。船の上で歌ったり踊ったり、無邪気に古風なお嬢様のような言葉でしゃべったり……あれは全部、さみしさとか苦しさを紛らわすのに必死だったからじゃないだろうか。

僕は今まで何も考えずにぼんやりサミを見ていたことを後悔し始めていた。

ただの弱気な、困ってる、人間だったんだ。

そしてそれはサミだけじゃなくて、僕も、字室も、幸平も、梶村さんも、同じだ。

今まで、あまりにも、人と真剣に向かい合おうとしなかったから、わからなかったただけだ。

「どうして、過ぎてから間違いに気づくんだろっなあ」

「は？」 幸平が目を丸くしてこっちを向いた「何を急に」

「いつも過ぎてから気づくんだよ」僕は突然思い出したことをそのまましゃべった「テストの間違いも、答案書いてるときは気付かない。あとで帰ってきたら」どうしてこんな当たり前のことを間違っ

てるんだ!？」って思う。友達としゃべって、家に帰って一人になつてから『なんかまずいことをしゃべったような気がする』と気付くけど、しゃべってる間は自分が暴言吐いてることに気付けない」

「岩本君、きついからねえ」

「それも、自分じゃ気付かない……って、僕のどこがきついんだよ!？」

「そうやって急にいきり立つところ？」

幸平がおもしろそうに笑った。くやしいが黙り込むしかない。

「とにかくさ」気を取り直して続けることにする「すべて終わって、手遅れになつてから気づくんだよ。どうしてだろうな。どうして肝心な時に気付けないんだろう？」

「それを言ったら、まさに僕の人生だよ」

幸平が湖の向こうを遠い目で見つめている。

『僕がもし生きていたら、新橋くんになつていた……』

そういえば、十月病のときにそんなことを聞いた。

死んでから可能性に気がついた。でも手遅れだった。

僕は何も言えなかった。だって幸平はもう死んでる。『これからできることもあるよ』なんて気休めにもならないだろ？

そして急に気がついた。

幸平は、こののんきな顔をした永遠の十四歳は、

辛くないのか？

「幸平……」

「さてと、僕は図書館に行くから」軽く空中に浮いて笑った幸平はまるでなにもかも見透かしたみたいにこう言った「それ以上は、僕に聞かないで」

空の向こうに飛んでいく幸平をぼんやり見つめながら、僕は、生きている人間として、ここのユーレイ達をなんとかしてあげなければいけないんじゃないかと、大それたことを考えていた。

岩保にまた会いに行こう。MAC好きに悪い奴はいないはずだ。きつと何か助言してくれるだろう。

それより今夜もサミを探しに行かなくては。
それまでスダの家にでも行こう。他に話し相手がない。僕も十分寂しい人間だ。

「女の子のユーレイが暴れてるの？それって興味深いって言うか、見てみたいなあ」

スダがのんきにそんなことを言った。

その顔で『女の子』とか言われると気持ち悪いが、あえて指摘しないほうがいいんだろうな。

「そんなのんきな話じゃない」

「でもさあ、俺も大して変わんないよね」

「は？」

「友達少ないし」スダがちょっとさみしそうに笑った「岩本のおかげでパソコン仲間みたいなのはできたけどさ、学校じゃほとんど浮いてるし」

なんだ、自覚してたのか。

「若いし生きてるんだから、これから自分を変えろよ」

「岩本さ、言うことがジジくさい」

「何イ！？」

何かサミを助ける方法が思いつかないかと思ったが、スダと一緒にでは無理そうだ。

夜。

湖の上をおそろおそろ飛んでみる。真っ暗で何も見えない。

幽霊船が出ていれば、うっすらと船体の影が見えるはずなんだけど。

「今日も出て来ないみたいだね」どこからか幸平の声がしたが、姿が見えない「やっぱりいじけちゃったのかな？」

「どこにいる？」

「こっち」

下のほうを見る。湖面すれすれのところからぼんやりと僕を見つめていた。

「岩本君、もしかしたら」幸平が僕の高さまで上がってきた「生き返るまで、サミには会わないほうがいいかもしれないよ」

「は？何で？」

「襲われるかもしれないし。ほんとに死んじやうかもしれないし」

「だからって挨拶もせずにならなか？それがまともな人間か？」

「岩本君、妙に『まとも』にこだわるよね」

「悪いか！」

「人に気を使うなんて岩本君らしくないし」

「何だと！？……あつ！」

湖面から何かとがったものが突き出してきて、僕らがいる高さまで水しぶきが飛んできた。

幽霊船だ！

「岩本くん！危ないよ！」

幸平の叫びが聞こえたが、僕はかまわず船に向かって飛んで行った。

サミ。

こんなところで、真つ暗な闇の中で、40年以上一人でいたんだろ？

おかしくなっただって当然だよ。

でも、一人じゃないだろ？

まだ幸平も、梶村さんも、僕だっているだろ？

みんな心配してるんだよ。

それに、生きていたころサミを知っていた人だって、ぜったいサミを忘れるわけがない。どこかで思っているはずだ。幸平のことを忘れていない二宮由希とか新井みたいに。梶村さんを忘れないフデさんや谷川みたいに。

だから、そんなあばれかたしないでくれよ。

悲しすぎるだろ。さみしいからってあんなばけものみたいになっ

たらさ。

「サミ！」

幽霊船の入り口から中に入る。船内が異様に揺れている。あちこちからだをぶつけたが痛くもなんともない。

どうせユーレイだからな！！

「サミ！」

大声で呼んでみたが、返答はない。

あの部屋か？

昔ミカちゃんが来たときに発見した『先生』の骸骨を思い出した。行ってみる。ドアはミカちゃんが破壊済みだから入れるはずだ。

「サミ！！」

骸骨は揺れのせいか、ばらばらになって部屋中に散乱していた。気持ち悪い。サミの姿もない。

すぐ廊下に出た。相変わらずすごい揺れ方だ。

「岩本君！！」

通路の向こうから声が。幸平だ。

「この船！沈んでるよ！！」

「は？」

言われた意味が一瞬分からなかった。沈んでる？

「湖の底に向かって沈んでる！！」幸平がかなりあわてた声で叫んだ。「ほら、サミって夜しか出て来ないじゃない？その間どこにいますんだろうつて」

確かに、昼間どこにいるんだろうつとはずーっと思ってたが。

「つまり？」

「昼間湖底を調べても、何もなかったじゃない？」

「だから？」

「別な世界に向かっているのかも」

「は？」幸平が何を言おうとしているのかさっぱり分からない「どういう意味」

「死後の世界とか、なんか、現世とはべつなところにいるのかも」

……寒気がした。いや、僕は温度を感じられるユーレイだけど、
そういうのじゃない。

悪寒だ。

船はあいかわらずひどく揺れている。ギシギシとなにかがきしむ
音がする。まるで嵐に巻き込まれた難破船みたいだ。

でも嵐って、何だ？ここは湖だろ？

第10章 5 必ず戻ってくる！

しばらく幸平と僕は、揺れる船内で茫然としていた。
何が起こってるか全く理解できない。

湖面にこの船が現れたってことは、少なくともサミは外に出たか
つたってことだろ？

僕らが入ってきた途端、沈むってどういうことだ？

「道連れにする気とか？」

思いつきで口にしてみたら、怖くなってきた。

「ありうるけどさ。でも僕もう死んでるんだけどな！」

幸平の口調にいつもののんきさが無い。

「どこかに連れていかれてるにしても、つれてってどうする気なん
だろう？」

「そもそも、かんたんに死ぬ……っていうか、他の普通に死んだ人
みたいに消えることができるんなら、とっくの昔にそうしてたはず
なんだよね。僕もサミも」

幸平が船内を見回している。

「じゃ、今のこの状態は何？」

「その質問さ、ぼくらが自分に向かって何十年も、何万回もしてる
質問だよ」

「そんなことを聞いてるんじゃない！」

僕は焦りでいらしていた。

「怒らないでよ。なんなら入口から船の外に出てみる？ 闇にのまれ
て一生戻れないかもよ？」

口調が嫌味だ。しかも幸平のくせにのんきでもないし笑ってもい
ない。

「黙って座っててもしょうがないから、もう一回船内を回るぞ」
入ったことのない部屋がまだたくさんあるはずだ。ドアが開くか
はわからないけど。

そういえば、どうしてこの船だけ、壁をすり抜けることができないんだ？

何もかもわからないことだらけだ。

「僕ここの下のほうに行ってみるよ」幸平が亀裂の入った床を指さした「たぶん、何層にもなってるんでしょ？船って。よく知らないけどね」

僕は別方向へ行った。廊下の一番奥に、屋根裏につながっているらしいはしごがあった。かなりさびていて、生きている人間が足をかけたら崩れ落ちそうだ。

でも僕は飛べるから問題ない。

ああ、何度できても嬉しくない技能だな！！『飛べるから問題ない』って何だ？問題だらけだぞ？

上の層。屋根が低い。さびた何かの塊と、箱。奥のほうで何かが光っている。

おそろおそろ、屋根にくっつくようにして近づいてみる。

「……サミ？」

見ると、箱にうずもれるようにして、サミが眠っていた。

仰向けに、手を胸の上で組んで。目を閉じていた。

眠っているのか？

その顔がとても安らかだったので、そっとしておきたい気がした。起きたところでもいいことはないだろうし。

光は、サミの体全体からほのかに発していた。

なんのゲームイベントだこれは。

いや、ゲームじゃない。現実だ。

『どうしてここに岩本がいるのかしら』

気取ったえらそうな声が聞こえた。部屋中に反響したので驚いたが、サミの顔を見ても目を閉じたまま、全く動く気配がない。

「サミ？」

『もしかして幸平も一緒？』

「幸平は下のほうを探してるよ」一応本人に向かって話しかけてみる「サミを探しに来たんだ。何日も現れなかっただろ？何してたんだよ？っていうかここは一体何だよ？」

『船の中に決まってるでしょ』

「そういう問題じゃなくて……」

『私はこの船から出られない』声からえらそうな響きが消えて、声が低くなった『夜になったら外に出て、月を見て、また沈んで、ここで眠る。それでも何十年経ったのかしら』

何て返答していいかわからない。

「幸平が言うには」何かしゃべらないといけない、と強烈に感じた「船ごと湖の底に沈んでるって。別な世界に引き込まれるんじゃないかって心配してたけど」

『どうして幸平が心配するのよ。もう死んでるじゃないの』

そんなこと言われても。

「あのさ」

『何？』

「サミは生きてたら大人だからさ、僕がこれから言うことは若い奴の戯言？とも思ってたほしいんだけど」

『何よ？私をおばあさん扱いする気！？』

船体が大きく揺れた！

なるほど、この揺れは本人の気分なのか！

「違うつて！とりあえず聞いてつて！」大声で叫んだら揺れは収まった「ねえ、サミが怒ったとたんこの船は揺れたろ？いままでも怒ったとたん湖に潜ったりしてただろ？これって、本当は載っていた遊覧船なんかじゃないんじゃない？これって、サミが作り出した何かなんじゃない？だからサミの気分しだいで動くんじゃないの？人に会いたくなったら出てきて、意識があるのがつらくなったら潜つてく」

返答がない。僕は話し続けることにする。

「サミ、幸平も梶村さんも、僕だって、本当にサミが心配なんだよ。」

生きてるかどうかなんて関係ない。僕は今まで人と真剣に向かい合ったことがなかった。自分のことばかりで周りの人間のこともなんて考えたことはなかった。そもそも周りにいるのが人間だとも思っ
てなかったよ」

やはり返事がない。サミの顔を見ても全く動きがない。眠ってるようにしか見えない。

「だけど……だけど、一回死んで、いや、死にかけてか？とにかくここにきて、初めて昨日、考えたんだよ。どうサミと向かい合ったらわかってもらえるんだろうかって。」

僕は確かにまだ生きてる、確実じゃないけど、ここからいなくなつて、釧路で目を覚ます可能性がある。でも、そうなったとしてもサミのことは忘れない。ずっと前にサミが生きていたころ、サミを知っていた人たちだって、きっとサミを忘れてなんかいない。ただ、ここにサミの魂がいるつてことを知らないから来られないだけ」

返事はない。もうどうでもいい。続ける。

「僕は絶対に戻ってくる。ここにサミや幸平や梶村さんや……こんな形でこの世にとどめられてる人がいるつてわかってる以上、ほつとけないだろう？一度出会ったんだから。そうしたつていいだろう？理由なんてそれで充分だろ？なあ、聞こえてる？」

何も起こらない。サミは眠ってるようにしか見えない。

揺れていた船内が静かになっていった。まるで時間が止まっているみたいに。音もしない。

静かすぎて不気味だ。

「サミ？」

サミの顔を覗き込んでみた。目がカッと開いたと思うと、また船内が大きく揺れて、箱が宙に飛んだ。

僕も驚いて一緒に後ろに飛んだ。

『やっぱり行ってしまう！いなくなってしまう……』

サミが空中に浮かんでいた。両手で顔を覆つて、顔を伏せて泣いてるんだ。

「サミ？」

『どうして私なの？どうしてこんな目に会ったの？どうして近づいてきた人はみんな行ってしまうの？字室だって、先生だって、みんな』
「サミ！」僕は箱をよけながらサミに近づいた「僕はどこにも行かない！」

船がきしむ音がする。部屋中の者が飛んでる。

これも全部、サミだ。サミ自身の嘆きだ。

そんな気がした。

「今僕はここにいる。事故に会った時間まではたぶんここにいられる。そのあとだって、釧路に戻るだけだ。いなくなるわけじゃない！またここに来る！絶対に戻ってくる！」

しゃべってる自分が空々しく思えてくる。

恋人同士じゃあるまいし。

以前の僕ならそう思っただろう。今でもちよっと思う。

でもそうじゃない。

一回関わってしまった人間には、相手をかまう義務があるんだ。

そんな気がする。ここに来て初めてわかった。

『近寄らないで！』

サミが叫んで後ずさりした。

『私、だめよ、殺してしまう。今までだって、そうだった、幸平以外、そうだった……』

うわごとのような声が部屋中に反響する。

今までだってそうだった？

どういうことだ？

「サミ」できるだけ優しい口調で（僕にとってはとても難しいことだ！）言った「そんな必要ない。だって僕ら仲間だろう？いっしょにここで、何て言うのかな？ユーレイになってひどい目に会った？……とにかく、襲って殺すとか、そんな必要、ない。また戻ってくる。幸平だって今頃サミが心配で船の下層を探しまわってるよ。無駄足だけだ」

『幸平のやることはいつだって無駄よ』

泣き笑いのような声がした。サミは笑っていた。でも涙が落ちていた。ユーレイでも泣くんだなと思った。

『ほんとうに戻ってくるのね？』

「戻ってくるよ」

船が大きく揺れた！

まるで垂直になったみたいに、サミがいる壁際が上に見えた。

「サミ?!」

『私じゃないわ!』

神経質な叫び声がした。私じゃない？

部屋中の箱が、物が、僕に向かって一斉に落ちてくる！

その後ろからサミがこちらに手を伸ばして飛んでくるのが見えた。でも木材のほうが早かった。頭にものすごい衝撃を感じた。

待てよ？ユーレイだからそういう感覚ないはずなのに。

「岩本君!？」

どこから幸平の叫びが聞こえるのと、目の前が真っ暗になったのがほぼ同時だ。

そのあとどうなったのかわなくて、知りたくてもわからない。もう誰にも聞きようがないから。

最終章 1 生き返った！

つまらない話なんだ。そのあとどうなったかっていうと、普通に寝てた人がただ起きただけ、みたいにさ、釧路市内の病院で目が覚めた。看護婦さんに『大丈夫ですか』って聞かれたけど、最初自分に話しかけてるんだってことがわからなかった。何回も聞かれて、あ、見えるんだ、と思ったら、口が勝手に動いて「はい」って言った。それがすごく奇妙な音に聞こえたし、喉から空気が出てくる感触がして、そのあといきなり息を吸い込みすぎてせき込んだ。せきをしたときに体に力が入りすぎて全身がきしんだ気がした。

ああ、体だ、感触がある！

感動なんて言葉じゃ表せない、この気持ちは。

目から涙がどわつと流れてきた、看護婦さんがあわてて『どこか痛むんですか？』と聞いてきた。でもどこも痛いわけじゃない、ただ感動してただけだ、ああ、生きてる、僕は生きてる！

そのあと、何かよくわからないが注射をされ、また眠ってしまい、気がつくと目の前に父と母とバカサチコがそろって、似合わない神妙な顔でこちらをじつと見ていた。

お前、車が歩道に突っ込んできてはねられたんだぞ、覚えてるか？と父に言われたような気がする。

僕は覚えてると答えた。そのあといろいろ話した（というか三人がすさまじい勢いで一斉にしゃべるのをぼんやりと聞いていた）けど、内容は全く覚えていない。ただ、動かそうとした右腕がすさまじく痛かったことを覚えている。

右腕と左足が折れていた。なんというアンバランス。

でもそんなことどうでもいい。

僕は生き返った！信じられないことに！それは間違いない！

目覚めた日の夕方、面会時間ぎりぎりに、僕を車ではねたという

男とその両親が、大きな包み（中身は和菓子）を持ってやってきた。悲壮な顔で平謝りする両親と、すんませんとぼやいたきり、全く反応を示さない息子。もとの僕なら「なんだその態度はあああ！」と怒鳴って和菓子を投げかねないんだけど、その日は生きていくということだけであまりにも幸せだったので、にこにこ顔で、

「別にいいですよ、貴重な体験も出来たし」

と答えたら、相手がポカーンとした顔をした。犯人ご一行が帰ったあとで、母に「嫌味なことを言うんじゃない」と怒られた。別に嫌味で言っただけじゃないのに。

でも、母にユレーイになった話なんかしたら、外科から精神科に移送されるかもしれない。両親が医療関係者だとそういうところが困る。

しばらく入院だ。歩けるようにリハビリというものもしないといけない。ベッドで横になっていると、湖のことを思い出した、梶村さんとか、そういえばフデさんは元気になったんだろうか？幸平は？サミはまた人が減ったからさみしがって、幸平をいじめてるかもしれない。

……でも、なぜだろう。なんだか遠い、架空の出来事のような気がしてきた。

はねられてから、僕は二週間も意識不明だったそうだ。でも、骨折以外に何の異常もなかった。目覚めてから一通り内臓の検査とかさせられたんだけど、全く異常なし。おかげで早く退院できることになった。父はいちおうヤブ医者だけど、骨折だけでそんなに長く眠るなんてありえんなあとぼやいていた。

もしかして、ぜんぶ夢だったのか？

あんな湖、あんな街、存在してなかったんじゃないのか？

そう思い始めたころ、病院のテレビをぼけーっとみていると、画

面に二宮由希が大きく映った。

思わず飛び起きてしまい、右腕がまた痛んだ。

二宮由希は優雅な笑顔で、最近流れているという新橋五月との離婚説を否定していた。

『あの人以上に私を理解してくれる人はいないんですから』

完璧な笑顔でそう言うと、報道陣から逃げるように建物の中に消えていった、ドアが閉まる前に、中に新橋五月がいるのがちらっと見てた。

やっぱり幸平に似てるよな、目つきとか。

ちゃんと生きて年取ったら、あんなふうになってたのかな。

『新橋君は、僕の通るはずだった道にそのまま収まっただけなんだ』
だれかの声が頭の中に響いた。

『たぶん由希は未だに、新橋君の中に僕を見てるんだ』

そう、幸平だ。幸平が生きていたらそのまま子役から俳優になって、今も二宮由希と一緒にいたかもしれないんだ。新橋五月じゃなくて、藤沢幸平が。

ちらっと見た不機嫌そうな新橋の顔と、幸平の顔がますますダブルで見えた。

夢じゃない。僕はたしかにあの湖の上で幸平に会ったんだ。

いや、夢なのかな？

芸能人が夢に出てくるのはべつにおかしいことじゃない。事故で頭打ったかもしれないし、一時的に混乱しているだけかもしれないじゃないか。

いや、でも。

考えれば考えるほどわからなくなった。

その日はずっとテレビを見ていた。レトロな特集を組んでいて。戦時中の、どこかの街から出征する青年たちと、日の丸を振って送る家族の映像が映った。梶村さんを思い出す。

そしてそのあと、なつかしの60年代だかの映像が映っていた。そして、なんと、「金沢の高校生が乗った遊覧船が沈んだ事件」が

映ったじゃないか。

ぼくは画面を食い入るように見た。古臭いあの時代の船、でも、シルエットに見覚えがある。

あの幽霊船だ！

サミがこれに乗ってるんだ！

画面に生徒が映るたびに顔をテレビに近付けてみたが、サミは見つからなかった。

そのあと画面に映ったことに僕は戦慄した。

同じ湖で、人が溺れ死ぬ事件が多発していること、おかげで今ではちよつとした心霊スポットになっていること……。

『事故で亡くなった生徒たちの亡霊が、生きている人間を水中に引きずり込むという噂です。ですが、湖底の調査を何度行っても沈んだ船も遺体も発見できず、40年以上経った今でも謎は深まるばかり』

妙に怪談がかったナレーションを聞きながら、僕は最後にサミが言っていたことを思い出した。

『殺してしまう。今までだってそうだった』

もしかして、サミが？

幸平も襲われたって言ってたよな？

もっとテレビを近くで見ようと思ったら、ベッドから落ちた。

足と腕が痛くてうなりながらバタバタと床に転がってたせいで、看護師に見つかった。

消灯時間が近かったのでむりやりテレビを消されてしまった。

それにしても、どうしてこう湖に関係のあることばかりテレビに映るんだ？

当然横になったって眠れない。事故のこととか、そういえばオンラインゲームはどうなってるんだろうとか、退院したらすぐ事情を説明してパーティに戻らないとか、急に現実的なことを（僕にとって）は！）を考えた。

でもそれよりも、だ。

自分に体があるってことが不思議でしようがなかったんだ。暗闇に手を突き出して手を握ったり開いたりしてみる。関節や、皮が、動いている感触がする。今までこんなこと意識したこともなかった。背中が痛いのはずっと横になっていたからなんだろう。横向きになってみたらこんどは下になっているほうの腕が強烈にしびれてきた。このまま動かなくなるんじゃないかと思った。かといってもう片方は折れてるから下になんかできないし。そういえば足も折れてたっけ、と思いだした瞬間にするどい痛みが走った。結局はもとの仰向けに戻るんだ。でも、そういう感触にいちいち反応してしまつて、一睡も出来なかった。

数日経つても、体をうごかすたびにへんな感触がした。

ほんとにこれは僕の体なのか？なんて思つてしまふ。スダに乗り移つた時みたいに。

そういえば、スダはどうしてるんだろう？アドレスは覚えているが電話番号を聞いてなかった。ま、いいか、あのお母さんが出てきたら嫌だし、カレーにはニンジンしか入ってないし。

五月中旬の退院予定日は延期になってしまった。階段から転げ落ちて、治りかけてた足がまた折れてしまったのだ。母親が飛んできてさんざん怒られた。

「あんた、いったいどこへ行くつもりだったの？」

「いや、売店に行こうと思つただけだつて」

「エレベーター使いなさいつて言つたでしょう！？ほんとにバカなんだから」

「バカとはなんだバカとは！……階段くらい大丈夫だと思つただけだなあ」

実は、ユーレイだったときの癖が抜けなくて、階段のところでものまますーっと空中を移動できるような気がした。それで、重力のまま落つこちたというわけだった。でも、そんなこと説明してもわからないだろう。それより、落ちた時の痛みがあまりにも強烈で、

しばらく生きた心地がしなかった。もちろん死んだ気もないけど。他にも、ドアに正面衝突したり（言いわけだけどさ、前はすり抜けられたんだ！）ベッドから浮かびあがろうとしてそのまま横に墜落したりした。歩く時もどうも体の動かし方を忘れたみたいで、足がギクシャクして上手く動かない。平衡感覚がおかしくなっているのかもしれないと言われて、また変な検査を受けさせられたが、もちろん異常なんてあるわけもない。

あと、窓から身を乗り出して、飛び降り自殺と勘違いされた（実際もう少しで落ちるところだった）前は窓から外に飛んで行けたのになあと思ってたが、そんなこと言ったら本当に精神科に送られると思って、黙っていた。そしたら落ち込んでいると思われて「6月には高校に戻るから、遅れた分もとりのどせるよ、大丈夫」と知らない人になぐさめられた。学校のことなんてそれまですっかり忘れていた。

僕は知らないうちに高校三年生になっているらしい。

骨折だけだから退院させると何度も言ってたが、そんな奇行のせいか、まだ検査したいことがあるとか何とか医者が承知してくれなかった。

「やっぱ精神のほうにも診てもらえ」

ヤブ医者（父）がやってきてそんなことを言いだした。親でも言うていいことと悪いことがあるぞ！

「全然正常。そんな心配ないって、見てわかんないの？ 医者のかせにさあ」

「おまえがそういう話し方をするから余計にこっちが心配になるんだ」

「話し方？ 変？」

「何かが憑いている……」父の後ろでバカサチコがぼやいた。それはお前だ！

「妙に明るくないか。目を覚ましたと思ったたらえらいハイテン

シヨンでにこにこ笑って」

「それじゃ前は暗かったみたいじゃないか」

「暗かった」父が即答した「パソコン以外のことをしてるのを最近見たことがない」

「あつそ。それは暗いね」

僕はてきとうに答えた。今どき誰だってパソコンに向かう時間は長いはずだろう？父の世代はまだアナログなのかもしれない、思考が。

そこで突然思い出した。ユーレイだったときに親父が言っていた。
『俺は時代についていけなかった』

「親父って何年生まれ？」

「は？」

「高校の時って、80年代とか？」

「80年代だ」親父が遠くを見るような目で窓の外を見た「それがどうかしたか？」

「何でもない」

よく考えたら、父とまともに会話したことが、これまで一度もなかったような気がする。

幸平が生きていたら、これくらいの年になっていたはずだ。

もしかしたら、普段考えていることはそんなに変わらないのか？
僕らと。

結局、退院できたのは5月の終わりごろだった。ただの骨折なのに……

退院の日、母親と一緒に病院から出た。晴れていた。光が、風が、ほこりっぽい道路の匂いが、いつぺんに僕の体に襲いかかってくる。思わず出口で立ち止まった。
「どうしたの？」

母が怪訝そうな顔をした。

「何でもない」歩きだす。まだ歩く感触にも慣れてない。なにもかも刺激的だった。空は青く。道を歩く人の顔がいちいちはっきりと見えた。歩道橋が見える。登ってみたかったが母が今日は急いでいるので、あとで一人で来ることにする。

通り道に桜が咲いていた。釧路は桜が遅い。でも今頃までまだ咲いてるなんて。

「他の木はみんな散ってるのに、ここだけおととい咲いたのよ」母が花を見上げながらぼやいた「綺麗だけど不思議」

花びらが飛んでくる。かすかに花のにおいがする。

いい風だ！

僕は生きてるぞ！生き返ったぞ！

「あらやだ、どうしたの」

母の声で我に返った。僕は泣いていた。こんなことは初めてだった。

「なんでもない、感動しただけ」

服の袖で涙をふいていると、母親が怪訝な顔で深刻な顔でつぶやいた。

「……やっぱり精神科に行く？」

……なんでそういう話になるんだ！？

最終章 2 ミカちゃん再び

自分の部屋に戻った。一年ぶりに戻ってきた。でも、実際は一ヶ月半くらいしか経っていないことになる。当然だが何も変わっていない。でも何か、自分の部屋じゃないような気がする。

いろいろ物をひっくり返したり、部屋にあるものにやたらに触りまくって、部屋中を指紋だらけにして回った。どうやらみんな存在していて、本物らしい。そして僕にも触れるらしい。

安心した。当たり前のことなんだけど。

携帯電話が充電したまま放置してあった。中を確認するとメールが二件と着信が……38件!?

何だこの異様な着信は、しかもみんな同じ番号だ。しかも留守電には何も入っていない。

待てよ。

確か去年から、甲高い女の子の声でいたずら電話がかかってきてなかったか? たしか最初にかかってきたのが夏休み……。

そこで僕は、湖で過ごした夏を思い出した。ミカちゃんがやってきて、たしか僕はケータイの番号を教えたはずだ……。

そうか、そういうことだったんだ。

僕は一瞬迷ったが、その番号にかけてみることにした。心臓が高鳴った。今度は気がするんじゃないやなくて、本当に心臓が脈打ってるのを感じられる。生き返ったからな!

……残念ながら話し中だ。メールも打てるが、しばらくほっとくことにする。

メールはオンラインゲームのリーダーからだった。どうして最近来ないんだ、と書いてあったので「車にはねられて入院してました」と返信したら「マジですか!？」と速攻で返事が来た。「今日皆を攻略します」とも書いてあった、一瞬何だっけと思った。操作手順を一度確認したほうがいいなと思った。MACを起動する、ああ、

なつかしい音がする。

デスクトップが表示されたたん、画面のど真ん中に「名称未設定」というフォルダがあるのに気がついた。もちろんそんなファイルを作った覚えなんてない。

なにげなくクリックすると、アップルワークス（あんまり使わない）が起動した。

『ご生還おめでとうございます。今後は車に気をつけるんだね』

という文字が。妙に大きなフォントで映し出された。

息をのんだ。本当に。誰が書きこんだかはすぐにわかった。

幸平だ。

どうしてMACの使いかたを知ってるんだろう？教えた覚えはないのに。

ファイルの作成日時を確認する。日付は一週間前だった。

幸平が、ここに來たんだ。

あの湖は、ユーレイ体験は、みんなほんとに起きたことだったんだ。

桜を見たときと同じような感動が僕を襲った。また涙が出てきた。しばらく机につつぶしていた。

そのうちはつとして部屋を見回した。だれもいない。でも、もしかしたら、見えないだけで幸平がそこにいるのかもしれない。にやにやと笑いながらこつちを見ているのかもしれない。

だってあいつは、どこにだって行けるだろ？透明な壁を打ち碎いて。

そのあとずっと誰かに見られているような気がして落ち着かなかった。

他にもファイルがないか探してみたが、ないようだった。まあ、パソコン嫌いそうだったし、そんな複雑なことはできないんだろうな。

今日はとりあえず眠ろう。もうゲームする気になれない。

ベッドに横になった。いつかユーレイとしてみた、生きている自分の醜い姿を思い出した。一気に気分が悪くなったが、眠れなかったので転がってシーツの感触を楽しんだり、枕を投げて遊んだりしていた。全部僕のものだ！

自然に口から笑い声が漏れた。なにもかもおかしくてしょうがなかった。

物に触れるってことに感動してただけだけど、傍から見たら狂っているように見えたかもしれない。

午前三時、眠る気が全く起きないので、ゲームにはあいさつ程度に顔を出して、すぐに別なことを調べ始めた。

湖の街の名前を入れたらすぐに引つかかった。でも、サイトのつくりが雑なんだよ。スダの親父が作ったんじゃないかと思うくらい僕のほうがぜったいいいものを作るし人も集められる。断言してもいい。北海道の中央より東、湖が観光資源。遊覧船の写真もあった。懐かしい。残念ながら知っている人の情報は得られない。というか、せつかく知らない町にずっといたのに、ちゃんと見て回ったりしなかったな。今さら遅いけど。

それから、サミが乗っていた船の事故とか、梶村さんとか藤沢幸平の名前とか、葛西アイカとか、探してみたけど、似たような名前の別人しか見つからなかった。

ふと思いついて。二宮由希の公式サイトを見た。もちろん幸平のことは載っていないかった。でも、ウィキペディアの文章に気になるところがあった。

『身内や友人に自殺者が多く、本人も学生時代から情緒不安定で奇行が目立ち、自殺するのではないかと関係者はずっと懸念していた』前からよく聞く話では、舞台裏では一言もしゃべらずにうつむいていることが多く、コミュニケーションに問題があるんだそうだ。演技力だけでもってるといいう人もいる。テレビで見るあの笑顔から

は想像ができない。

そんなうわさがあっても、本人の人気には何の影響もない。それどころか、精神病系の暗い人からは女神扱いされていたりするんだ。それがそのままあのカルト的な人気につながっている。

世の中はわからないもんだ。

目が疲れてきた。目の周りの筋肉が固まってきているのがわかる。パソコンの電源を落とした。これは慣れるのに何日かかるかなと思った。前は24時間ぶっ続けでも平気だったのに。それに、いろいろ考えることがありすぎて集中できない。湖のことを思い出そうとすると、今街の存在を確かめたばかりなのに、やっぱり夢だったようない気がする。

でも、夢じゃない。幸平のメッセージが残ってる。

そう自分に言い聞かせた。

明日は学校に行かないと。少しは寝たほうがいいんだろう。新年度早々一か月以上も休んでる。

次の日の朝、一階に降りたら、珍しく家族全員がそろっていた。たいてい一人か二人しかいないのに。

「今日は休みだ」

こちらの不審の目を察したのか、ヤブ医者が読んでいた新聞を下げて、こつちをかるく睨んだ。

「あらおはよう」母親がこつちを見て笑った。不気味な笑い方だ。「今日学校行くの？2、3日休んでもいいんじゃない」

「そんなサボりはたたりが落ちる……」

サチコがつぶやいた。この二人はほつところ。

「その祟りだなんだっていかがわしいのは、もう卒業できんのか？」父親が呆れたように言うと、オカルト女が頬をふくらませた。ガキくさい怒り方だ。

「いかがわしくないわ。だいいち、お母さんだって昔巫女さんをや

つていたでしょう?」

「えっ」

「あれはただのバイトよ、バイト」

母親がちよつと照れたように笑った。……もしかして、岩本家はほんとにオカルト一家なのか?

「まさか父さんはそんな過去ないよね?」

「巫女さんになったことはないなあ」ヤブ医者が真面目な顔で変なことを言い出した「俺は神も仏も共産党も信じない。金は信じる」

……こんな医者に診られている患者は大丈夫なのか!?

「祐一も今度集まりにいらっしやい。お払いしてもらえるから」

「はあ?」

「今回の事故、何かの呪いかもしれないでしょう」サチコが真面目な顔で言った「それに、もしかしたら団体内で仕事がいたただけるかもしれない。今は不況でしょう」

「アホか!」

「誰がアホだつて!?!」

「やめなさいって二人とも」母親が割って入ってきた。「祐一は大学に行つて普通に就職しなさい」

「は?」

「何だ、医者になるんじゃないのかあ」

ヤブ医者が新聞を見たままつつばやいた。

「私が医学部に入つたじゃないの。弟が事故にあつたからわざわざ帰つてきてあげてるのに」

「休学中のくせに何を言うか。お前は医学じゃなくて宗教に目覚めたんだろ? そんな奴にメスを持たせられるか!?!」父がこつちを向いた「あ、ちなみに、現代は医者になつても金は儲からんぞ」

「は?」

「だからもつと金になつて楽な仕事を探せ」

「ほんとお父さんは金の話ばかり、だから来世に魂の救済を……」

「いや、ちよつと待つて」

「だめだめ」母が今度は父とサチコの間に割って入った。「大学に行くのなら経済よ。MBAなんて素敵じゃない？何の事だかよくわからないけど」

三人は僕を無視して勝手に人の人生を創作して言い争っていた。なんだか腹が立ってきた。生き返ってから怒りたくなるのはこれが初めてかもしれない。頭に血が上ってるのを感じた。ほんとに、感触でわかるんだよ。

「……人の将来を勝手に決めるな！！」

バン！とテーブルに手をたたきつけた。三人とも黙り込んだ。気まづくなったので僕は朝食はほとんど食べないで家を出た。

それにしても、どうしてうちの家族は人の人生を勝手に決めるんだ！？

学校の門に入る前に校舎を見上げた。ここも一年ぶりのはずだ。全然そんな感じがしない。

このまま浮かんで、教室の窓から入れないかななんて考える。

「岩本お」

振り返ったらそこには砂糖が……いや、佐藤が立っていた。

甘いもの好きで、体の90%が砂糖でできているという、MAチューザーだ。

「生きてたんならメールくらいしろよ！一ヶ月も音信不通だから死んだかと思ったぞ。でも葬式の話は聞かないし」

「縁起でもないこと言っな」

明るいパソコンおたくがいつも以上に笑ってる。こちらもつられて笑う。

「実際死んでただけだね」

「は？」

「なんでもない」

こいつにユーレイの話をして大丈夫だろうか、と考えてみる。話題がなくなったら考えよう。

「それより、ノート貸して」

「それは無理だ」

「何で？」

「俺が真面目にノートなんか書くわけないだろ、ほら」

数学と書いてあるノートを開いてこちらに見せる……巨乳の美少女キャラでいっぱいだ。

……忘れてた、こいつは授業中はずーつと自分のゲーム制作のネタを書いてるんだった。しかもぜんぶ少女で巨乳だ、間違いない。

「それより、今日進路希望提出する日なんだから」

「えっ」

「ま、岩本は事故ったんだから遅れてもいいんじゃない」

その言い方だと、僕が事故を起こしたように聞こえるが……。

「何だよその顔は。岩本どうすんの、大学行くの？」

「なんでみんな大学って言うかなあ。今朝親にも言われた」

「行きたくないんだ」

「そういうわけじゃないけど」

進路希望なんて全く頭になかった。そんな事より今は生きている人生を楽しみたい。二、三日で進路を決める？そんなの無理だ。

進路希望を出しても、そのあと、三年だから講習とか模試もあるだろ？夏休み返上で勉強して、いや、その前に一学期中にもテストがある。ああ、考えただけで嫌だ。どんでもない過密スケジュールを背負わされた気分だ。

そういえば、湖ではほんとに何もせずに一年過ごしたっけ……。生きていると厄介なことがたくさんある。肺の底から深いいため息が出た。

特に感動もなく、友人には「よかったな」の一言で済まされて一日は終わった。授業はわけがわからなかったが、たぶん一ヶ月く

らい余計に勉強すれば取り戻せるだろう。勉強する気ないけど。

帰りに歩道橋の上に乗ってみた。街並みが見える。いつか幸平とここに来たっけ……と思っていたら、携帯が鳴った。良く知っているあの番号から！

しばらく出ようかどうかしようか考えた。着信は収まらない。

これがもしミカちゃんだったら。

湖の出来事はすべて本当だったと完全に証明される！

心臓ががんがんと鳴った。本当に、胸から飛び出してきそうだった。ゆつくりと耳元に携帯をもっていく。

『もっしもしいゝ。イワモトおゝ？』

この半分カタカナの発音……間違いない！！

「ミカちゃん？」

『え？あ、そうだよー！うわあああ！』鼓膜が破れそうなくらい大きな叫び声が出た。『アタシのことようやくわかるようになったかああ！？イワモト！生き返ったの？そうなの？』

「そうそう生き返った！」こっちまでノリノリの声になってしまう
「今釧路にいる！」

『クシロ？ああ、釧路の人だっけ？』

「そう！」

「キヤー」

あまり思い出したいくないんだけど、このあとずーっとこんな感じで『生き返ったぞ、わーい』って感じのはしゃぎトークに一時間も使った。さんざんはしゃいで電話切った後、歩道橋を渡る人が怪訝な顔で通り過ぎて、そのあと思い出すたびに赤面する羽目になった。まあ、それはいい。とにかく、あの湖での出来事が全部本当だって証明された！！そうでなきゃ、札幌に住んでいる金髪の中学生ミカちゃんとお知り合いになるはずがない、mixiで会ったわけでもないし。

家に帰った後、ミカちゃんからまた電話があった。

『イワモト！！札幌に来て！！』

出るなりそんなことを叫ばれたので、目が点になってしまった。

「何をいきなり」

『だってジツブツが見たいんだもん。それにせつかく生き返ってんだからさ。遊びに来いよ。一泊くらいなんとかなるだろッ』

「うーん、考えとく」

『カンガえないで今来るの！』かなり強引だ『じゃなきゃ、ホントに生きてるかわかんないじゃん』

電話で話すだけじゃ足りないってか。

「すぐには無理だ。週末ならなんとかなるかも」

『ゼツタイだぞ！』

電話はそこで唐突に切れた。

札幌か。

行きたいけど、どうやって親を説得しようか。費用は貯金（お年玉の蓄積）で何とかなると思っただけ。

土曜日。僕は札幌行きの特急あおぞらに乗っていた。いつか幸平と乗ったやつだ。親には佐藤の家に泊まると言っている。佐藤にもアリバイ工作を依頼した。

「外泊とはやりますなあ岩本君」明らかに何かを誤解している佐藤がにやけた声を出した「何？入院中に彼女出来たの？何やってたの？ぜひ詳しく聞きたいなあ」

「女の子じゃないって！真面目な用事だ！」

「じゃあ何の用事？俺に話せないんか？」

「それは……帰ってきてから説明するから、頼むって。おまえんここに泊ってることにして」

「わかった、一緒にゲーム開発をしていることにしてやろう。でもな、ゲームのネタになるような面白いネタを持ってこい。じゃなきゃバラす！」

「ええ」

まあ、そんなやりとりでアリバイ工作はできた。そして今、ミカちゃんにわかりやすいように、湖で着てたのと同じ制服の白いシャツを着て、札幌を目指しているわけだ。

窓の外を見る。幸平が景色を見てはしゃいでたなあ。最初のうちは僕もものめずらしく外を見ていた。なんせ一人で列車に乗ったのが実は始めてだった。でも、そのうち飽きてきて眠りこけてしまい、目を覚ました時には新札幌に入っていた。もうすぐ札幌駅に到着する。

札幌は駅自体が大きなショッピングモールになっているようだ。週末のせいか異様に人が多くてぶつからないようにするのが大変だった。何人がぶつかってきたけど謝ってきたのは一人だけだ。最近の大人はマナーが悪い。

とにかく人が多い。多すぎる。そういえば幸平が人口が倍増したとか言ってたなかったっけ？

あの、時計台の上から眺めた夜景と、幸平の狂ったような顔つきを思い出した。

今頃何をしているだろう？あいかわらず町民のプライバシーを侵害してるんだろうか？

ミカちゃんが指定した待ち合わせ場所は『大通りの三越の地下のヒロシ』だった。

「ヒロシって何？」

『行けばわかるよ。ポールタウンの入り口にでっかいスクリーンがある、それがヒロシ』

「ポールタウンの入り口に行けばいいんだな？」

『チガうよ、ヒロシ前！』

「だからそれがポールタウンの入り口にあるんだろ！？」

『それじゃ待ち合わせとしてタダしくない』

「はあ？」

結局何の事だかよくわからなかったが、まず地下鉄で大通りに向かった。この地下鉄も人だらけだ。こんなに混むのか？休みの日なのに？

大通駅のホームに、三越の方向を示す矢印があつたので、素直に従って進む。

確かに、待ち合わせらしき人がたくさんいる。そしてスクリーンも。

あとで聞いたが、札幌では待ち合わせ場所として普通に認知されているらしい。東京のハチ公か？

金髪の女の子を探して周りを見渡す……何人もいる。と、携帯が鳴った。

「イワモト〜今どこお〜」

「ポールタウンの入り口のスクリーンの前」

『ヒロシ前！』また耳をつんざくような叫びが聞こえた『じゃ、そこからポールタウンに入って、左の出口から地上に出たらマックがあるからさ〜ご飯食べよう。腹減った』

そして電話は唐突に切れた……っておい。

これは99%おごらされるぞ……。

ああ、本当は大通りより駅前のヨドバシとかビッグカメラに行きたかったし、旅費もゲームに使いたかった……いや、そんなことを考えてる場合じゃない。僕は今奇跡を体験しようとしているんだぞ。ユーレイとして会った女の子に生きた人間としてもまた会うんだ。

最終章 3 湖の町へ

地上に出ると確かにマクドナルドが見える。そして。両手を激しく振り回しながら超高速で走ってくる金髪の女の子が目に入った……かと思うと、そのまま体当たりしてきた！

「うわあ、うわあああああ！イワモトお！！生きてんじゃん！うわあ！！触っていい！！？」

ミカちゃんは僕を3メートルも吹っ飛ばしたことを謝りもせず、一人できやあきやあ騒ぎながら僕の胸や肩をなで回してきた。

「や、やめろって！変態か！」

反射的にミカちゃんを押しつけてしまう。手の感触がダイレクトに内臓に伝わってぞわつとした。

「やだあ、照れない照れない。イーカラダだ。ククククク」

ミカちゃんがいやらしいニヤケ笑いを浮かべた。

「よく来たなあ札幌に！さっそくオゴってくれ！」

美香ちゃんは夏休みに会ったときと全く変わっていないかった。不自然な金髪に、大してかわいくないけど元気だけはある女の子。相変わらず発音がカタカナに聞こえる。そして僕の腕をつかむと、無理やりマクドナルドに引きずり込もうとした。

「何でおごらなきゃいけないんだよ！！？」

予想はしていたが一応抵抗してみる。

「だってもう高校生じゃーん」

「高校生だって学生だ！余計な金はない！」

「この前はもういなかったんだよね、イワモト」

急に話題が変わったので、一瞬何の事だか分らなかった。

「この前？」

「二週間前くらい？あ、もしかして知らない？」

ミカちゃんが急に手を話してこちらを向いた。真面目な顔だ。
「な、何？」

べつにミカちゃんはかわいくないけど、まっすぐ見つめられると緊張する。

「そつだよね。こないだのオソウシキの時にはもう岩本いなかったもんね」

「お葬式？」

「おばあちゃん、死んだの」

オバアチャンシンダノ。

その文章を理解するのに、軽く1分以上はかかったと思う。

マクドナルド内。

どう考えても普通じゃない勢いでクォーターパウンダーを平らげながらしゃべりまくるミカちゃんを唖然と眺めながら聞いた話によると、二週間前に、ミカちゃんの夢の中に、梶村さんとフデさんが並んで現れたという。

「おじいちゃんはいつものあのグンブクで、おばあちゃんは何でか知らないけど着物でえ、二人で笑って立ってるの。どうしたのって聞いたら『一緒に逝く時が来た、お別れだ』って言って、すつと消えちゃった。それでがばつと飛び起きて、今のナンだろってぼけーつとしてたらあ、お父さんが部屋に入ってきてさあ、『田舎のばあちゃんが死んだ。葬式だから準備しろ』だよ？なんか言い方ツメたいと思わない？もう少し子供がシヨック受けない話し方とかさあ、親だったら考えろつつの」

ミカちゃんが僕のポテトに手を伸ばした。

「いらないんなら食っちゃうぞ」

「いいよ別に」お父さんの教育方針なんてどうでもいい「フデさん

は何で死んだの？確かに高血圧で病院に行つてたけど」

「心筋梗塞？ポックリ？きつとそんなに苦しまなかつたと思うよ。安心して」

「それで？」

「イワモトつてさあ、カノジョいたことある？」

「は？」

おい、話が變わつてゐるぞ。

「私さあ、男と付き合つても一週間持たないんだよね、飽きちゃつてさ」

「一週間？いくらなんでも短すぎ……つて、そんなことはどうでもいいから！フデさんが死んで、梶村さんもいなくなつたのか？幸平とサミは？」

「やつぱりさ、最近の男つてカルいつていうかバカっぽいっていかゝめつちや弱いんだよね、すぐグチグチ言つしさ。やつぱりもつとジツチヨクゴーケンつていうのがさあ」

実直剛健という漢字が頭に出るまで六秒かつた。

「……で、梶村さんの話はどうなつたの？」

「あ、ごめーん」そう言いながらミカちゃんはポテトに手を伸ばす「おばあちゃんの家に行つたけど、誰もいなかったんだ。部屋の真ん中にイタイがアンチされてて、金庫の上にはだれもいなかった。どこにも、おじいちゃんは、いなかったんだ。幸平が言つてたけど、おばあちゃんが居間で倒れて息を引き取つたのを見たあとで、金庫のほうを向いたら、もうおじいちゃんはいなくなつたつて。きつとおばあちゃんとあの世にいつちゃんつたんだ。それで私にお別れを言いに来たんだ」

二人ともそこで黙り込んだ。……ということは、今やあの町のユ―レイは幸平とサミだけつてことか？それはいくらなんでも寂しくないか？

そして、唯一の居場所だつた梶村商店はどうなるんだ？

幸平、そうだ、幸平は札幌に来るじゃないか。僕は急にあたりが

気になって、店内を見回した。それらしき人は見当たらない。制服を着てるのは僕くらいだ。人が多くて、この中に見えるユーレイが何人混じっていたってだれも気がつかないだろう。

「どーした？」

「何でもない」 生きている僕に幸平が見えるだろうか？「明日、朝一番で湖の町に行ってみようと思うんだ。やっぱりあの場所を生きたく目で見たい」

「そーなの？キグウ。アタシも行こうと思ってたんだよね」

「は？」

「だから、岩本を連れてサミと幸平に会いに行こうってずっと計画してたんだよね、あ、でも旅費がないなあ」

ミカちゃんが上目づかいで僕を見た。その意味するところが僕には一瞬でわかった。

『案内するから金を出せ』だ。

「……早朝の列車だから、起きれないんじゃない。ミカちゃん」

「バカにするんじゃない！五時だろうと六時だろうと札幌駅に出没してやる！」

僕は頭の中で貯金の残高を計算した。明日中に釧路に帰ればなんとかなるかもしれない。でも、二人分の運賃を払うのは痛い。

「じゃ、六時までに札幌駅の南口までこれたら一緒に行こう」

「やった！」

ミカちゃんはガッツポーズ（いまどきやる人がいるのか、しかも中学生で）を作って喜んでいたが、僕は心の中で『寝坊する』に一万円賭けていた。

最終章 4 誰もいない

次の日の早朝。

幸か不幸か、ミカちゃんは寝坊せずに札幌駅にやってきた。さすがに眠いのか言葉少なだったけど。

切符を二人分買い（あとで請求してやる！）一緒にあの町へ向かう電車に乗り込む。

窓の外をじつと見つめる。徐々に住宅がなくなっていつて、古びた工場や牧場が見えるようになる。でもそんなことはどうでもいい、あの町が本当にあれば、それでいい。

「イワモトお！駅弁買おうよ」

ミカちゃんが座席前についている駅弁のカタログを見て騒ぎ始めた。すっかり観光気分だな（自分は費用出してないくせに……）

「高校生は金ないの！往復の料金で手いっぱいなの！帰れなくなるぞー！」

「なんだよーケチ」

ぶくーとほつぺたを膨らませるその怒り方が小学生だ。まあ、中学生だからまだ小学生と大してかわんないよな。そういえばうちのサチコもほつぺた膨らましてたような……。

途中でローカル線に乗り換える。だんだん建物が少なく、低くなっていく。

「あ、湖が見えるよ！ホラ！」

ミカちゃんが反対側の席のほうを指差した。見ると、木陰から暗い色彩の湖面が、少しずつ大きくなって近づいてくる。見覚えのある街並みに、学校、あれはスタが通ってる中学だ！

ほんとうにあの町に来たんだ。すべては本当だったんだ！

湖の岸が少しずつ見えてきた。忘れもしない、あの商店の屋根が見える！

「おばあちゃん家見えてるよ」

ミカちゃんが言った。

間違いない。僕らがいたあの、梶村商店だ、湖には遊覧船は見えないけど、岸の形、対岸の陸の色。

間違いない。

幸平は、サミは？まだあそこにいるのか？字室がいなくなつて、梶村さんまでいなくなつて、サミはぜつたいに寂しがっているはずだ。幸平は？またあの気持ち悪いアクロバット飛行か？

僕は湖の周りを懸命に見た。人影を探した。飛んでいる人がいないかじつと見た。

人影はない。

生きている僕に彼らが見えるんだろうか？

町の駅に足を踏み入れた瞬間、言いようのない感覚に襲われて、僕は立ちつくしてしまった。

前、ミカちゃんを見送りにここに来た時、僕は宙に浮かんでいたんだ。空中から、この駅の、古びた路線や、いかげん作り直せと言いたくなるような古いベンチとか、見ていたんだ。駅の出口から見える街並みの向こうにはあの湖がかすかに見える。あの上を僕は飛んでいたんだ。

足が地面から離れない。まるで誰かに縫い付けられているみたいに。

僕は動けなかった。

「どーしたのイワモト？はやくう！」

ミカちゃんが駅の外で叫んでいる。

僕は考えていた、これは本当に現実なのか？それとも僕はまだ夢を見ているんじゃないか？本当はまだ意識不明で、病院で寝てるんじゃないか？ぜんぶ幻なんじゃないのか？列車から降りた瞬間、別な世界に迷い込んだんじゃないか？

「イーワームートおー！」

ミカちゃんが戻ってきて、僕の腕をがっしり掴んで、引きずるよ

うに駅の外に引つ張って行つた。

おかげで僕は町に入ることができた。

じゃなきゃ、一生あそこで立ちつくしていたかもしれない。

「今おじさんが来ててねえ、荷物の整理してるよ」ミカちゃんがニヤリと笑つた「店のお菓子はぜんぶもらつていいって」

「おじさん？」

「長男。シヨウシンショーメイおじいちゃんの息子。顔そっくりだからオドロクぞ」

僕はまだ夢にでも紛れ込んだ気分で、楽しそうなミカちゃんについていった。

かつて朝八時から開店していた梶村商店は、今や完全に閉店していた。シャッターが下りている。

「おじさ〜ん！入るよお〜」

ミカちゃんが叫びながらドアを乱暴に開けた。奥から足音が聞こえる。ああ、この家に玄関からちゃんと入ったのは今日が初めてだ。いつも窓から出入りしてたんだよな。

家の奥から、中年と老年の境目くらいの年の、色の黒い健康そうな男性が現れた。

「梶村さん！？」

僕はその人の顔を見た瞬間に叫んでしまった。全く同じ顔だった。あの目の細い、筋の通つた顔立ちだ。あの顔を一回りかふたまわり老けて見せたらこうなるだろうな、という顔をしている。それがミカちゃんの『おじさん』だった。

「そうだけど……ミカちゃん、この人は？」

おじさんは僕を怪訝そうな顔で見た。梶村さんが僕を最初に見た時も似たような顔をしていたような気がする。

「トモダチ。イワモトっていうの。ほらほら、入った入った！」

ミカちゃんが、たぶんあの居間であろうと思われる場所からこちらを見て手招きした。中に入る。こんなに緊張するとは思わなかつ

た。心臓がつぶれそうだ。

家具がほとんどなくなっていて、ダンボール箱が部屋中に積まれていた。でも、あの、梶村さんが座っていた金庫だけが、元の場所に置いてあった。

「この家、ケツキヨクどうなったの？」

「おじさんが住むことにした」梶村『おじさん』がミカちゃんに優しい声で言った「お母さんから何も聞いてないのか？」

「聞いたけどよくわかんなかったしいゝ。写真もらいに来たんだよ」
「ああゝそうだ、写真なあゝ」

おじさんがダンボール箱の中をごそごと探って取り出したのは、この前の夏に二階で梶村さんとミカちゃんが見ていたアルバムだ。

「こんなもん持ってたってどうするんだ？戦前の写真しか入ってないぞ。おじさんもお母さんも映ってないよ」

「おじさんなんか映ってなくてもいいもん」

「はは、ひどいなあ」

二人が楽しそうに笑っている。僕はミカちゃんの手に渡ったアルバムを見た。その視線に気がついたのか、ミカちゃんが僕のほうに寄ってきて、アルバムを開いて写真を指差した。

いつか見た、梶村さんとフデさんの、結婚写真だ。

「思い出した？」

ニコニコしながら尋ねるミカちゃんに、僕は無言で頷いた。というより、声が出なかったんだ。写真の青年を見る。僕はこの人と会話して、一緒に過ごして、夢まで一緒に見たんだ。あの恐ろしいシベリアの夢。

二人が消えたってことは、梶村さんがあの悪夢を見ることももうないんだろう。それはきつと喜んでいいことのはずだ。よくわからないけど。

きつと、梶村さんたちだけじゃなく、いろんな人の人生や死の上に、僕らは立っている。

そのあと、サミヤ字室や幸平の世代があつて、そして今があるん

だ。

そんなことに、今初めて気がついた。そしてそれはすごく重たい事実だった。

奥の部屋を覗いてみる。仏壇と金庫が前のまま、僕がいたところのまま置いてあった。化粧台がなくなっていて、かわりに段ボールが積んである。

「ここから湖がよく見えるんだよね」

ミカちゃんが窓を開けた。一緒に外を覗く。湖が見渡せる。天気が良い、湖面は静かだ。遊覧船が岸に停泊しているのが見える。近くの砂浜も見える。このあたりのことは僕は誰よりもよく知っているつもりなのに、実際に生きた体から眺めてみると、それも不確かな気がする。

「幸平が見たらない。湖の近くに行ってみよう。イワモト」

ミカちゃんがそう言うなり外に飛び出して行った。

湖岸の一部が砂浜になっている。僕は砂の上に立った。足もとが砂にうずもれるのを感じる。ここで葛西アイカが湖に入っているとしたんだっけ。あの子は今どうしているだろう？

いや、それより、幸平はどこへ行ったんだ？

ミカちゃんは砂浜に座って湖を見つめていた。さっきからずっと黙っている。僕も黙って湖面を眺めた。夜になればこの湖面には幽霊船が浮かんで、サミが月を見上げているんだ。

「あー！！あああああああ！！！！！！」

背後から男の絶叫が聞こえた。振り向くと、そこには、ブツブツだらけの顔の、どう考えてもかっこよくない、僕がよく知ってる奴が、目を丸くして立っていた。休日なのに制服を着ているのが気になるが。

「スダ！」

「岩本？マジ？本物？」スダは叫びながら駆け寄ってきた「生き返ったの？最近見かけないからとうとう地獄に落ちたかと……」

「誰が落ちるか！」

再会を喜んでいると、ミカちゃんが胡散臭い顔でこちらを睨んでいるのに気がついた。

「あ、ごめん、紹介する。死んでた時にも僕が見えてた友人で、スダ」

「ど、どうも」

急に態度が硬くなるスダ。ミカちゃんは興味がないという顔で、よろしくとか何とかつばやいて、そつぽを向いてしまった。

「岩本、家に来いよ！！とうとう買っちゃったからね！パソコン！」

「マジ？」

「マジ！」

さっそくスダの家に直行……と思ったが、ミカちゃんがとんでもなく冷たい視線をこちらに送っていることに気がついた。『そんなことしてる場合か！！』って。

「悪い、用事あるんだ。あとで行くから」

「なんだよー……ははーん」スダがミカちゃんを見てニヤケ笑いを浮かべた「がんばってね、岩本」

「は？」

「じゃ、家で待ってるよ！場所はわかるだろ？」

「わかってるよ！」

何か誤解されたような気がするが、まあいい。

「幸平がいらない」ミカちゃんが不機嫌そうな顔でつぶやいた「ソウシキの時はこの辺にいたのに」

「そうなの？」

「変なかつこうで空をトンでた」

アクロバット飛行だ。僕もやったことがある。僕はあの、幸平の空中首つり状態を思い出した。不気味で吐き気がする。ああ、体があると本当に吐きそうだ！自分でやってる最中は気がつかなかったけど、とんでもないことをしていたんだなあと思った。きつと、一

番しつかりしている梶村さんがいなくなったから、空中飛行でもないと言ってられない精神状態だったのかもしれない。

「この前来たとき、サミにも会えなかった」

美佳ちゃんが立ち上がった。僕はサミの船がいつも浮かんでいたあたりを見た。すると、白い遊覧船とは別に、何か黒い影が湖面上に、小さく浮かび上がっているのが見えた。

ちょうど、何か、船のような形の、黒い何か。

「ミカちゃん……」

「見えてる！」

ミカちゃんが飛び上がって、湖の真ん中に近い、コンクリートの岸の水辺すれすれのところまで走って行った。

最終章 5 さよなら

影を目でとらえたまま追いかける。影はどんどん大きくなって、完全に、一つの遊覧船の形を作り上げた。晴れた日の湖面の上に、幻のような黒い船が浮かび上がる。

息が止まるかと思った。

「何だ？」

声がした。振り返ると、町民が何人が集まっていた。

彼らにもあの船が見えるのか？

あれはサミの幽霊船だ。見えないけどあの上にはサミがいる。いや、あの船がきつとサミそのものなんだ。きつと幸平も一緒にいるでも、夜しか出て来れなかったのに、なぜ？

と、誰かに肩をつかまれた。振り返ったら、ミカちゃんが僕の方を手できつくつかんで震えていた。

「どうしたの？」

「行っちゃう」ミカちゃんの目から涙があふれだした「幸平も、サミも、消えちゃう。あの船と一緒に」

何を言ってるんだ？

そう言おうとしたが、ミカちゃんの顔が真っ青で、今にも倒れてしまっんじゃないかと思うくらい震えていたから、驚いて声が出せなくなった。

「わかるんだもん。説明できないけど、わかる。消えちゃう。どうしよう」

消えてしまう。

それは、本当に、死ぬってことだろうか？あの二人の存在がとうとう消えるということだろうか？

美佳ちゃんを片手で抱きかかえながら湖を、あの船を見ているうち、僕はこの湖で起こったことを次々と思い出していた。気がついたら湖に浮かんでいたこと。幸平に連れられて旧日本軍の兵士に会

「だったら「生きている」と言われたこと。スダに取りついてひどい目にあつたこと。テレビ局の幽霊番組をぶち壊したこと。美佳ちゃんが遊びに来た夏。葛西アイカのこと。幸平の自殺のこと。シベリアの夢。字室が消えた日のこと。釧路で生きている自分を見てぞつとしたこと……」

「僕だって、あの船の上にいたんだ。死んだ人間として、ついこの間までは。」

「そこまで考えて、僕ははつとした。」

「いや、だめだ、こんな思い出し方。死に際の走馬灯じゃないんだから。」

「生きているんだから。僕と、ここで震えているミカちゃんは。」

「湖の上の黒い船は、町じゅうがざわつくのも気にせず、次第に大きくなっていく。最初横向きだった船体がこちらに近づくにつれて向きを変え、正面を向いて近づいてきたとき、船の先端に人が二人いるのがはつきりと見えた。」

「人が乗ってる!」

「うしろで誰かが叫んだ。集まった人たちがさらに騒ぎだした。」

「船の上の人影は全身が黒っぽく見えて顔がわからない。でも、あの小柄な影が誰か、僕にはすぐわかった。」

「幸平だ!」

「名前を呼んでやりたいが、まわりの住民が気になる。集まった人数はもう数えきれないほどだ。まるで町じゅうの人が集まったみたい。」

「幸平、イヤだよ、行っちゃヤダ」ミカちゃんが聞こえるか聞かないかすれすれの声で言った「イヤだよあ……」

「ミカちゃん……」

「コウヘー……イ!!!!!!」

「ミカちゃんがいきなり船に向かって、いや、人影に向かって絶叫した。」

「幸平!聞こえるか!」

僕も叫んだ。もう人目を気にしてる場合じゃない！

「幸平！サミ！聞こえるか！！岩本だ！！！」

「コウヘーイ！！」

人影は動かない。顔の表情も見えない。聞こえているのか？

と、黒い船の影が動いた。少しずつ小さくなって……遠ざかって
いる！！

「やだ！イヤだってば！」

ミカちゃんが湖に落ちそうになった。腕をつかんで引っ張ると、
今度は僕の胸にしがみついて泣きだした。嗚咽が直接胸に響いてく
る。とても痛い感触だ。こんなときなのに、ああ、生きてるなあ、
なんて思ってしまう自分が嫌だ。

人影をじつと見つめる。聞こえたのか？なあ、幸平。本当に消え
てしまうのか？長い間さまよってたんだぞ？そのうちのたった一年
だけど、一緒に過ごした僕は心配なんだ。今度こそ『ちゃんと死ね
る』のか？前に死んだときに望んでいたように？でもそれってどう
いうことなんだ？

それでいいのか？お前は、サミも、いいのか？

と、消えかけていた人影が動いた。手をあげて……振っているよ
うに見える。

「ミカちゃん！見て！」

ミカちゃんがおそろおそろ顔をあげて船を見た。涙でぐしゃぐし
やの目がカツと開いた。

「幸平」

僕は思った。きつと、幸平は手を振りながら笑っている。あの平
和な、子供っぽい永遠の十四歳の訳者の顔で、最期の時を演出しよ
うとしているんだ。見えないけど、サミも一緒にいるに決まってる。
きつと一緒に笑っている。あるいは歌っているかもしれない。とに
かく二人はあそこにいるんだ。

そして今、やっと、本当の意味で人生を終わろうとしている。

人影は、手を振りながら、少しずつ小さくなって、ある地点、ち

ようど、夜になるとサミが船とともに現れたり消えたりした地点……のあたりで、ふっと、何かのスイッチを切ったかのように、消えた。町民のどよめきに包まれた気がしたけど、そんなことはどうでもよかったんだ。僕は船が消えた湖面からしばらく目が離せなかったし、ミカちゃんもずっと、泣きながら湖面を見つめていた。何人か、町民が話しかけてきたけど、しばらくは何も聞く耳が持てなかった。

あっさりしすぎていた。あっけなさすぎた。ユーレイ達の終わりは。啞然とするしかないくらい、あざりと、消えてしまった、たぶん『何の理由もなく』

きつと、あの二人はあのボロくさい船に乗って、死人がいるべき場所へちゃんと行けたんだ。天国でもあの世でもなんでもいい。何もないのかもしれない。とにかく、長い間苦しんだけど、ようやく、死んだ人間のあるべきところへようやくたどり着いたんだ。

僕は、そう思っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976c/>

ぼくらは死んだ

2010年10月8日13時36分発行